

皇學館大学大学院

博士（文学）学位請求論文

加藤楸邨研究―作品の形成と俳句観の推移―

神田 ひろみ

平成二十六年十二月六日

加藤楸邨研究

―作品の生成と俳句観の推移―

目次

序章 研究史と時代区分

第一節 加藤楸邨先行研究史…………… 四

第二節 楸邨作品の時代区分…………… 一一九

第一章 初期作品の考察

第一句集『寒雷』の研究

―「翺雲人に告ぐべきことならず」を軸に―…………… 一二七

はじめに…………… 一二七

(一) 俳句への出発…………… 一二七

(二) 師秋櫻子と第一句集『寒雷』…………… 一二九

(三) 「翺雲」の句の先行論…………… 一三四

第二章 中期作品の考察

(四) 人に告ぐべきことならず…………… 一四二
おわりに…………… 一四九

楸邨における「父」の存在

―「冬の浅間は胸を張れよと父のごと」をめぐって― 一五三

はじめに…………… 一五三

(一) 父について…………… 一五三四

(二) 父健吉と楸邨の受洗…………… 一五五

(三) 戦後の批判に対して…………… 一六二

(四) 旅と本棚…………… 一六五

(五) 冬の浅間は…………… 一六八

おわりに…………… 一七〇

第三章 後期作品の考察

第一節 楸邨の「真実感合」と北村透谷の「内部生命論」

―「灯の寒きこのしら骨が波郷かな」との関連―…………… 一七五

はじめに……一七五

(一) 「北方型」の楸邨……一七六

(二) 藤村と透谷と一関……一七七

(三) 透谷への関心……一七八

(四) 「内部生命論」と「真実感合」……一八〇

おわりに……一八二

第二節 楸邨と正岡子規

―「ぽこぽここと暗渠出てきし茄子の馬」の背景―……一八七

はじめに……一八七

(一) 楸邨の子規句再吟味……一八七

(二) その感興の共通……一八九

おわりに……一九五

第三節 楸邨における幻想的作品の解釈

―「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の句意―……一九八

はじめに……一九八

(一) 先行解釈の検討……一九八

(二) 幻想の発端……二〇〇

(三) 経験その儘を詠む……二〇一

(四) 受身の形……二〇二

(五) 真紅の手毬……二〇四

おわりに……二〇六

終章

加藤楸邨の俳句作品の生成と俳句観の推移……二一一

はじめに……二一一

(一) 『寒雷』の時代……二一一

(二) 『野哭』の時代……二一八

(三) 『吹越』の時代……二二四

おわりに……二三二

付章 年譜と文献

第一節 加藤楸邨年譜……二三七

第二節 参考文献……二七四

(一) 書籍……二七四

(二) 雑誌・新聞……二七七

(三) その他……二七九

序章

研究史と時代区分

序章 研究史と時代区分

第一節 加藤楸邨先行研究史

第二節 楸邨作品の時代区分

第一節 加藤楸邨先行研究史

研究対象の加藤楸邨（かとう しゅうそん）についての先行研究をその初出、初版の時期を基準にした時間順において纏めた。

引用文中の旧漢字は大略、現行漢字に置換している。また斜線／は改行箇所である。引用文中の「／」「・」「、」「：」等の記号は一部省略した箇所がある。引用文中の傍点、○印、振り仮名は原文どおりである。（*）内は稿者の補足である。

一：「加藤楸邨氏に問う」篠原梵

「俳句研究」昭和十一年（一九三六）二月号。改造社刊。

七四―七九頁。

昭和一〇年「俳句研究」六月号に載った楸邨の「「俳句性」の諸要素」に駁論的に記した文である。楸邨が「歴史的には十七音詩型の文学であることが俳句として必須の条件」と述べていることに対して、そう「とは言へなくなる」という。また「季節によらないで一句を充足させることは殆ど不可能」と楸邨がいうのは、

「早計すぎる断定だ」と反論している。楸邨はこれに対して同号「梵氏に答ふ」に梵氏の質問を以下の「（一）歴史的究明に於ける把握の態度並びに把握の実際について、（二）十七音量性について、（三）季について」の三点に要約し

「物の進展を「その流動発展の相の只中」で把へる文化史学の態度でなければいけない」（同、七九頁より引用。）と梵氏がいうのは「反対すべきことではな」い、という。

二：対談「純粹への思慕」加藤楸邨・石橋辰之助

『加藤楸邨初期評論集成』第四卷。平成四年（一九九二）

四月、邑書林刊。（以下、同集についての邑書林刊は略。）

一五―二二頁。「初出」「馬酔木」昭和十一年六月号。

辰之助氏の対談中の発言「今日やって来たのは、石田君の提案で貴兄と二人して何かしゃべって欲しいと言うのだ」、から分かるように「馬酔木」の編集をしていた石田波郷氏の提案で粕壁の楸邨居で行われたもの。この『加藤楸邨初期評論集成』第四卷の「解題」によれば、楸邨はこの年の前年昭和十一年一月から「馬酔木」同人に推挙されて自選句を発表しており、石橋辰之助氏は昭和七年に第一回馬酔木賞を受賞し、「昭和十二年に「馬酔木」を離れたのちも、新興俳句の作家として活躍した」という。

対談の中で楸邨が「俳句に純粹になろうとすればするほどその純粹性の根柢を衝かなくては行かない」、「僕の眼は僕の裏側を見ているのだ。完成された静止した永遠の安らぎの上にある」行動なき純粹」の魅力なんだね」「僕の眼が外側を見ることと内側を見ることをやるのは、僕の年代の者だけに与えられた「冷静さ」で一面天恵で一面刑罰だ。僕は勇ましく前進しようとする右脚と躊躇する左脚とを持っている。僕の作品はどっちにもなりきれないんだ。二つの世界に片脚づつかけた悲哀だね。しかしそれだけにどっちかになりきれた暁こそ自分でも大いに期待するんだが」という発言に対して辰之助氏は「純粹への思慕を二つにして考えるなんて貴兄らしいな」「純粹への思慕は貴兄の場合は既にでき上がっているものへの思慕だ。」「僕らははまだ掴まえられない未来にあるものなんだ」「貴兄は二つに足を入れて悩むというのが中途半端さはいけないと思う。二大別されていていいのだから、遠慮なく一つを選ぶべきだな。今までの俳句のよさはそれとして、僕らは僕らの純粹への思慕に突進するね」という。楸邨の「眼が外側から見ることと内側から見ることを同時に行っているという発言に、楸邨俳句の生成の局面が窺われる。これに対して辰之助氏の「遠慮なく一つを選ぶべき」という見解は後に楸邨に生かされてくるのではなからうか。後年の楸邨俳句の豊かさは「前進

する」「右脚」に信を置いた結果のように稿者には思われる。

四：「新鋭作家月旦」東京三（*）秋元不死男）

「俳句研究」昭和一三年（一九三八）八月号。二〇二―二〇三頁。改造社刊。

新興俳句が興った頃に楸邨が論じていた俳句の「十七音量」についての説や「俳句の求心的傾向と遠心的傾向」（*昭和九年「馬酔木」一〇号掲載の「生活表現運動の生誕とその二傾向」の論を指すか）を論じたものは「批評が公平である」と述べている。

また毎月、実作として発表している「都塵抄」には「直接的な生活のうたがある」という。楸邨の句は「本質的に誓子氏や秋櫻子氏の道をゆく俳句ではないやうに思ふ」と比較的早期から楸邨の「馬酔木」離脱を予感しているような見解が記されている。

五：「俳句愛憎」石田波郷

「馬酔木」昭和一四年（一九三九）二月号。四九―五一頁。

波郷氏は「楸邨氏は、僕などがもや／＼と感じてゐることをもすぐ見究めて理論的にはつきりとさせてくれる」と述べている。

その楸邨からの問いかけの「句の奥に何か一点まだわからないも

のが存してゐる」ということについて、波郷氏は「さういふことは確かにある」と応えている。

六：「『寒雷』序」水原秋櫻子

『加藤楸邨全集』第一巻。昭和五六年（一九八一）五月、講談社刊。（以下、同全集について講談社刊は略）九―一七頁。「初出」『寒雷』昭和一四年三月、交蘭社刊。

「加藤楸邨君の第一句集が出ることになり、題して『寒雷』といふことを聞いてそれは現在の君の強い句風を象徴し得て好い題名だと思つた。これが二三年前だと、『寒雷』ではその句風に比べて題の方がきつくなりすぎる。といふことは君の句風がその頃は典雅でやゝ弱いところがあつた為めで、更に五六年前に溯ると一層そんな感じがするのである。（中略）集全体を三つに分ち、句風の変遷がよくわかるやうな編輯法をとつてゐる。（中略）しかし、君はたゞ表面的の句風の変遷によつてかういふ編纂法をとつたのではあるまい。その間には環境並びに心境の変化が歴然としてゐて、無意味に句を並列する気になれなかつたのである。はじめ古利根抄と次の愛林抄との間はともかくつながるとして、愛林抄と都塵抄の間にははつきりした相違がある。さうして都塵抄に現は

れた傾向こそ、君が最も熱意を傾けたものであることは、私にもよくわかるのである。古利根抄、愛林抄の頃の君の句を知つてゐる者の中で、君が一転して都塵抄の句を創造することを予想し得たものが果して何人あつたらう？打明けていふならば、私も不明にしてそれを推察することの出来なかつた一人だ。君が今までに到り得た境地に満足することが出来ず、新しい研究をはじめることを予期したのは勿論だが、その志す方面の見当が予想出来なかつたのである。楸邨君の句が今のまゝで完成したものだとは私は見てゐない。（中略）言ひかへるならば都塵抄の句風もまた一つの試みの現れにすぎないものである。今後、君は種々なる研究を試みつゝ、その句風を広く大きく而も完全に育てあげてゆくにちがひない。（中略）私は（中略）分けられた三つの制作時代のことをいろ／＼思ひ出した。それは楸邨君ひとりにとつて意義のある三時代ではなく、私にとつても、また我々の馬酔木全体にとつても、それ／＼に意義のある時代であつた。だから私はこゝにそれ等の時代に関する思ひ出を語り、これを君の句風の変遷と結び付けてみたいと思ふ。」同、九―一頁より引用。

「まづ第一に古利根抄の時代―話は十年前に溯る。その頃私

は埼玉県の粕壁町にある安孫子白羽君の医院に月二回診療に出かけてゐた。(中略)私は東武線の電車に乗って粕壁町へ通ふうちに、越ヶ谷附近の元荒川の景が好きになり、ある日の帰途その堤を散歩したが、それが「或る風景」といふ文章になつてホトトギスに載つた。それを粕壁中学の先生達が読み、安孫子医院に来てゐる水原とは、秋櫻子のことだらうといふので、九月のはじめだつたと思ふが、診療の終る頃医院へ訪ねてくれた。(中略)楸邨君をはじめ、菊地烏江君、石井白村君、それに小島十牛、飯塚雨村先生も居られたかと思ふ。その日は十牛先生の鐘秀居で句会があつたが、それからといふものは、私の粕壁行は医用のためか俳句用のためかわからなくなつてしまつた。私は楸邨君、烏江君、白村君など、古利根川の岸を散歩したり、新川といふ小川の岸にある鰻屋でおそくまで俳句を論じ合つたり、ある時はまた閑宿の方まで出かけて行つたりした。その頃諸君は私を熱心なるホトトギスの作者として遇してゐたが、私自身は俳句の主張の上からホトトギスを離れ、自分のゆく道を考へはじめてゐた(中略)中でも楸邨君は国語を専攻する関係上、俳句も熱心であつたし、俳句の本質を考究することも真摯で(中略)随分勉強した。それに君が高師在学中は、私の家内の父であ

る吉田太古が受持であつたので、私達の間にはおのづから親しみが湧き、それが又信頼の念にまで進んで行つた。恰も馬酔木は独立することになり(中略)その後二三年の間は(中略)私は独り苦しまねばならぬ状態にあつた。さういふ時に粕壁にゆくと、楸邨君をつかまへてはその苦悩に就て語つた。(中略)楸邨君はさういふ時、必ず私を励まし力づけてくれた。(中略)古利根抄の句はかういふ時代に出来た」同、一一―一三頁より引用。

「時代は愛林抄に移る―馬酔木にもやがて幸運が廻つて来た。誓子君の参加、新進作家の輩出、相次ぐ同人家集の出版等(中略)しかし(中略)私は句会の席上で、次第に沈鬱になつてゆくその人の表情を見逃さなかつた。(中略)楸邨君はよく俳句の出来なくなつたことを訴へ、時には俳句を休みたいといふやうな口吻を洩らした。それは決して尋常の倦怠から来たものでなく、何か深い苦悩に根ざしてゐるらしく思へたので、私はいつも東京までの電車の中で、そのことを考へつゞけて来た。さうしてその苦悩には二つの原因があるのに思ひ到つた。その一つは楸邨君の俳句がある一定の段階に達し、そのまゝどうにも動きのつかぬ状態になつてゐること、もう一つは學問に熱心な君がその方面の勉強をする上に

俳句が邪魔をしてゐることであつた。(中略)さうして思ひついたことは楸邨君に上京遊学をすゝめることであつた。

(中略)かうした経緯を書くことは楸邨君にとつては迷惑なことゝ思はれるが、しかしこれを知つて愛林抄を読めば、その中にこもる作者の心持に深く触れることが出来るであらうと思ふ。即ち作者は、作句対象を求むることに苦しみつゝ、終にこゝにさまよつて来たのであるが、詠み進むにつれてその心には静かに寂しき光りがさし来り、次で上京遊学を決意するに及んで、馴れ親しんだ草木魚鳥に対する愛惜の情がひとしほ強く、遂には深い境にまで到達してゐる。私はこの愛林抄の中に、今まで誰も詠み得なかつた武蔵野特有の情趣を見出し、吟誦飽くことを知らぬ次第である。「同、一三一—一五頁より引用。

「都塵抄の時代—上京後の楸邨君は、非常な熱意と勤勉を以て学問に没頭すると共に、馬酔木の編輯にも参加してくれることになつた。波郷、楸邨—この二人のよき編輯者を得ることによつて、私は安心して発行所の事を托し、自分の勉強に専心することが出来るやうになつた。一方、都会の繁忙な生活は、自然の勢として楸邨君に新しい俳句の詩因を与へた。

(中略)即ち都塵抄の句は(中略)最もよき意味に於て清新

であり、而もあふるゝ熱情は強く読者の心をとらへずには置かなかつた。茲に於て作者加藤楸邨の名は終に動かすべからざる重さを加ふるに至つたのである。私は前に、この都塵抄の変化が、愛林抄につゞいて起ることを予期しなかつたと言つた。そのことをもう一度考へて見ると、君が今まで身に附いてゐた一切のものを思ひきりよく投げ捨てゝ、新しいスタートにつく自信と熱意とを持たうとは予期しなかつたといふことに帰着する。それは私自身がいまゝまでにさうした思ひ切りのよい転換をした経験がない事と、一つにはまた楸邨君の句風が私の句風によく似てゐるため、すべての変化が私と同じやうに眼に立たずに行はれてゆくものと考へてゐた為めである。私は愛林抄から都塵抄への推移をもつとよく研究して見たいと思ふが、とにかくこの変化によつて、楸邨君の将来への期待は今までよりも一層大きくなつたことは確かだ、大体見透しのついてゐた底が、今や深碧の波を濺はせて見透しがたくなつた感がある。「同、一五一—一六頁より引用。

「『寒雷』一卷は「都塵抄」に終つてゐる。これは坦々たる大道がたちまちに急峻な山道にさしかゝり、そこに記念塔が建てられたと同じ感じである。(中略)「都塵抄」の作者は、

今後いかなる詩因をさぐり、いかなる新表現を世に問はんとするか？これはたゞに馬酔木のみの期待ではなく、全俳壇の視聴をあつめることにちがひない。またこの一卷を熟読すれば、過去十年に於ける俳句の飛躍的進歩を知り、その進歩に貢献せる作者の努力を知り、併せて自己の道を照らす光りを求むることが出来るであらう。真摯なる念願を以て俳句道を進まんとする諸君。共に『寒雷』を熟読して著者のかゞやしき詩魂に触れたまへ。」同、一六一―一七頁より引用。

楸邨の句作開始当時の状況、師秋櫻子との邂逅や関係、秋櫻子師の徳憑によって楸邨が上京して進学することになった経緯、上京後の作風の変化を伝えている。楸邨は「『寒雷』後記」に「この句集は我ながら傷だらけの句集だと感じてゐる」と記す。

七：「『馬酔木』座談会」水原秋櫻子・加藤楸邨・篠田悌二郎

・瀧春一・木津柳芽・石田波郷

「馬酔木」昭和一四年（一九三九）七月号。四六一―五四頁。

この座談会で、師水原秋櫻子から「海越ゆる一心セルの街は知らず」「鰯雲人に告ぐべきことならず」の楸邨句や波郷氏の句は、難解と指摘される。それに対して楸邨は「日常的なもの、深層にあると思はれるその気持が、わかりよいといふだけの表現を

とるとどうも自分に危険だと思つてゐる」と言う。

八：座談会「新しい俳句の課題」石田波郷・加藤楸邨・中村草田男・篠原梵

「俳句研究」昭和一四年（一九三九）四月号。改造社刊。

この座談会は「人間の探究」の章の冒頭の

「記者 貴方がたの試みは結局人間の探究といふことになり
ますね。」

加藤 新しいか否かは人の見るところによつてちがひませうが、四人共通の傾向をいへば「俳句に於ける人間の探究」といふことになりませうか。」（同、二〇五頁より引用）

という問答から「人間探求派」の座談会として知られることになる。司会の「記者」は石橋貞吉（＝山本健吉）である。表記としては後に「探求」となり、しばらくは「探究」と混用されていた。『加藤楸邨初期評論集成』第四巻の「解題」には、この号の山本氏執筆と思われる「編集雑記」は「俳壇の最も新しい問題に就いて座談会を開きました。四氏は人も知る俳壇の中堅作家にして、作品の上に人間的誠実さを追求するのあまり、ややともすれば難解を以て目されてゐる人々です。けれどもそれが如何に内面

的な欲求からの止むに止まれぬものであるか、それが俳壇の新しい運動の萌芽を如何に豊かに孕んでゐるか」を、若い人達に読みとってほしい、と紹介されている。

俳句の上での「人間探求」という概念が初めて登場した座談会であつた。これ以後、本人が好むと好まざるによらず「人間探求派」の俳人という名称が楸邨に定着した。

九：「新しい俳句の課題」について——八月号座談会についての諸家回答——飯田蛇笏・前田普羅・松本たかし・井上白文地・石橋辰之助・林原未井・岩田潔・瀧春一・東京三・指宿沙丘・波止影夫・大野林火・西島麦南

『加藤楸邨初期評論集成』第四卷。（発刊年等は「二」に同じ。）二五三—二八五頁。「初出」「俳句研究」昭和一四年九月号。改造社刊。

「感想一束」前田普羅「大体解らない俳句とはどうしてできるか」という事は、四氏ことに中村草田男氏と加藤楸邨氏との間に残る所なく言い尽されていた。読後最も自分を動かした点は、草田男氏も楸邨氏もたいへんに謙虚な態度で自省して、その理由と見られる点を述べていることであつた。「同、二五六頁より引用。

「我もまたしかり、しからず」松本たかし「最後は人の問題になるが、先月の座談会に出席していた人々は草田男はもとより、他の三君も、信用していいと思われる。（中略）楸邨君は、今の所作品は弱々しいが、考え方は着実で危なげがない」同、二五九頁より引用。

「新興俳句精神」井上白文地「加藤氏は「俳壇の大勢が今までの方向において一種の飽和状態に達している。……そういう方向では言えなかつた『生活からの声』が盛り上がるようにしている」（中略）これはとりもなおさず、伝統俳句を否定して新しき俳句を建設すべきことを意味しているのである。もっとも加藤氏のいう俳壇の大勢の中にはあるいは新興俳壇をも含めているのかも知れないが、そうだとしてもそれは加藤氏の見た新興俳壇であつて本当の新興俳壇ではない。中略氏等の採るべき道は唯一つ。それは言うまでもなく自己の芸術精神に忠なることである。」同、二六一—二六三頁より引用。

「八月号座談会の印象」林原未井「楸邨氏には一度会つただけだけれども、その持ち味は今まで詠んだ句や文ではつきり分かつていくような気がする。地味に真つ当に、論理の糸をたぐっていくあの手口、あの謙遜な態度に親愛と信頼とが持

てる。」同、二六六頁より引用、

「新しい俳句精神」岩田潔「近来にない珍しく良い顔触れの揃った座談会であった。取り上げられている問題も、今日最も研究されねばならぬ事柄であるし、それらについて論じている此等の人達の態度も真剣であつて良いと思つた。ある意味で最も進歩的な句の実作者である此等の人達を一堂に集めたところに此の座談会の意義があつたと思う。(中略)四人共通の傾向を言えば「俳句における人間の探究」ということになる、楸邨氏がいつているが、座談会にとりあげられている問題を眺めてみても、結局そういうことになりそうである。(中略)俳句の中にそういう傾向があつてもいいだろうけれど、それを唯一の生きるべき途とするのであつたならば、そういう考え方も私など闘わねばならぬといったような気もする。」同、二六八―二六九頁より引用。

「難解な俳句」瀧春一「四人の座談会記事はまことに得る所多きものであつた。草田男氏も波郷、楸邨両氏も長く句作の道に苦労して来た人だけに、その言われることは一々切実にひびき、はげしく迫ってくるものがあつた。同じ陣営にある波郷、楸邨両氏とは相会う度に語り合つていた問題だが、総合雑誌の上に堂々と発表された意見としてみると、鬱々と吾

々の胸に籠つていたものが一度に吐き出されたような爽やかさを覚える。(中略)「難解な俳句」はわざと作られるものではないと信じている。」同、二七一―二七二頁より引用。

「ひとりごと」東京三(*||秋元不死男)「俳句で自分の生活感情を相当深いところまで表現できたら、俳句は詩歌の王様になれる。俳句の魅力を知ると、短歌や自由詩はまるでなくて仕方がない。(中略)俳句を捨てまいとして唇を固く噛み、俳句が詩歌の王座を獲る日をたのしみに行っている私だ。私は座談会の記事を読みながら、そんなことを思い独り言ちた。ところが何と皮肉にも、八十頁の「街頭言」を見ると、筆者は座談会の一人たる楸邨氏と私のことを「悲劇に終わるであろう」と予言してあつた。」同、二七二―二七三頁より引用。

「新興俳句に位置する者として」指宿沙丘「各派において最俊鋭と目される四人の作家の語っている所より抽出される所は、

俳句する要求が他の文学と共通の性質のものであること。ただその文学的方法が俳句の方法に依ること。

と四人が認めている点である。ところで、この明確正当な形式は新興俳句の所説と軌を一にしているのだ。(中略)すで

に四人の作家によって語られているように、俳句の中には「人生的要求」の価値追求が行われはじめた。人間の探究、人生への追求、人間性の真実尊重—こういうヒューマニスティックな文学的要求と俳句が真正面から取り組みだしたのだ。これを俳句の成長だと私は形容したい。(中略)俳句における新精神—これは四人の対話の間ではその存在が察せられるだけで、その内容形態は明確に指摘されていない。加藤楸邨氏の如きは、その存在の状態をカオスの状態だと告白しているくらいである。しかしその状態を各作家がいつまでも続けてはならない。(中略)「俳句における新精神」は、四人の語る程度では、また現今俳壇の状態では、まだ「新精神」と呼べるほど明確な意志と主張をもつ事なく、むしろ創作における真摯な自覚的態度として観察する方が相応しいようである。」同、二七三—二七五頁より引用。

「「新しい俳句の課題」を読む」波止影夫「「俳研」八月号で波郷、楸邨、草田男、梵氏等をして「新しい俳句の課題」について語らせたことは最近の興味ある試みであった。(中略)新しい俳句に対する種々の層からの積極的、消極的非難に対する草田男、楸邨両氏の覚悟もその分析も尤もなことであり、当然なことではなければならぬだろう。(中略)草田男、

楸邨俳句の知性を最も正直に理解しているのもまた新興俳句の内部であるように思う。此の座談会を通じた一種浪漫調は読者に一種の快感を与えたことであろう。殊に草田男、楸邨両氏の表白の中に。」同、二七六—二七七頁より引用。

「常に新しき道」大野林火「—俳句的な情趣の面白さでなく、人間が俳句に滲み出して来るために胸打たれたということとは大切な点ではないか。

—自ら自分の中で完結されていた今までのものを乗り越えて行かずにはおられぬ。

加藤氏のこの言葉は既成俳壇への警告である。(中略)要するに三氏(*楸邨・草田男・梵)共に叙べていることは己れに帰りそこを出発点として真実の句を求めるということである。」同、二七八—二七九頁より引用。

一三氏のアンケートの回答のうちの一部を引いた。これらの回答から楸邨が当時注目される俳句作家であったことが知られる。

一〇：「続俳句愛憎」石田波郷

「馬酔木」昭和一四年(一九三九)九月号。三〇—三四頁。波郷氏は「俳句的であるといふことはそこに筆者が生地を出すからであらう。個性とか何とかいふものでなく人間全体が出る」と

いう。そして俳句の場合は「愛憎」ということばが一番俳句的な重量と、生活の緊密性をもっている、と述べる。また近頃の草田男氏や楸邨氏の作品に「愛憎」を詠んだ句が多いのは面白い、ともいう。両者はこの「愛憎」などは出来るだけ俳句の表面から押しかくそうとしているのだがそこからはみ出している、という。

一一：「俳壇的人物論・加藤楸邨」八木絵馬

「俳句研究」昭和一四年（一九三九）一〇月号。改造社刊。

九七—一〇一頁。

昭和一四年「馬酔木」七月号に楸邨が書いた「氣息と陰翳」の冒頭に「俳句といふものが持つてゐる種々の困難が却つて効果を大にしてゐるので、作句慾が大きければ大きい程困難も大であるが、効果も大である」というのには同感である、という。けれども、例えば

鰯雲ひとに告ぐべきことならず

『寒雷』

墓誰かものいへ声かぎり

『颯風眼』

の如く「氏の句の難解さがかうした意味ありげなモニターデュに帰せられるべき場合」が多い、という。楸邨が句境打開のために苦悶するのは尊いが、未完成な句を発表するのは立場を考えて自重して欲しい、という。

一二：「十四年度俳壇の回顧」（抄）八木絵馬・嶋田洋一

『加藤楸邨初期評論集成』第四卷。（発刊年等は「二」に同じ。）二八二—二八五頁。「初出」「俳句研究」昭和一四年一二月号。改造社刊。

上記の題で「本年度最も物議を醸したのは「俳句研究」八月号の「新しい俳句の課題」と題する座談会であつた」という八木氏の論を引く。

「主として此の四人（*中村草田男・加藤楸邨・石田波郷・篠原梵）の作家が近来難解な句を作る、これ等の作家が従来の俳句から抜け出して何か新しい詩境を開拓せんとして模索しているためであつたろうというので、一体彼等は何を模索しているのか、何が彼等の俳句を解らなくしているのだろうか、という点について縦横に語らせたのであつた。結果は現代俳句に対する種々の不満を披瀝したり、新興俳句功罪論が出たりして、予期以上に充実した座談会となつたが、もともと此の座談会の動機である「難解」の俳句の問題は、生活と俳句を一枚にしようとする加藤楸邨氏の苦闘へ他の三人が道連れにされたに過ぎない。（中略）加藤楸邨氏の場合であるが、本誌十月号の「明暗覚え書」という氏の文章中によると、

日常的なものの割れ目に底知れぬ深さを見せて湛えている深淵を見出だし、それに直面して立つ自己を表現しようとするもののようなのである。つまり氏は我々の日々の生活を舞台としてそこに今まで誰も気が付かなかった真実相を見出だし表現しようというので、対象が常に日常性のカムフラージュを被っているために表現の上に特別の苦心が要るところから、自然に難解な形態を採って来たものと思われる。氏のこのような希求は極めて貴ぶべきであるが、さて実際に発表された作品に懲してみると、難解句というのは多く単なる表現の不備に基いていて、時には不自然な衝撃法による自己催眠とさえ見られるものもあった。併し、楸邨氏の苦恼は、よく考えるところ、俳句自身が現代に生きるか否かの問題を孕んでいるわけで、所詮は議論よりも実際創作で解決するより道はないと私は思うのであるが、なお今後の課題として遺されねばなるまい。」同、二八二―二八三頁より引用。

八木氏は楸邨の「明暗覚え書」の文章からの見解として「対象が常に日常性のカムフラージュを被っているために表現の上に特別の苦心が要る」と述べているが、「明暗覚え書」に楸邨は「日常的世界の執拗な凝視により」「目が深い深淵的な現実を掴み出してくれること」「これこそ最も尊いところである。何がとび

だそうと、とにかくそれを俳句にする。始めより計算思量して切り刻むのではない」「一句一句が、自分の身を置く日常の殻を多少なりとも突きぬけて、深淵の暗さをそれぞれの角度から照らし出すことができれば、それが私にとっての本望であって、何も孕むところなき表層の巧拙に至っては、只の糞下手と罵倒されても、それは私にはかかわりのないことに過ぎぬ」と述べていて、八木氏のいうような「表現の上に特別の苦心が要る」ということに関したことは述べていない。表現に関しては「始めより計算思量」していかないのが楸邨の句作の特徴であろうと思われるがそれが、八木氏のいうよう「不自然な衝撃法」と見られるのであろう。そう受けとられるところに当時の楸邨の問題もあったと考えられる論であった。次に同じく「十四年度俳壇の回顧」として掲載された文を引く。

「生活の探究」嶋田洋一「例の「わからぬ俳句」を作る人達として評判の草田男、楸邨、波郷、梵の諸氏によって行われた座談会「新しい俳句の課題」（「俳研」八月号）を読んでいただければ解ることなのだが

「一つの機運が孕まれていることはたしかです。俳壇の大勢が今までの方向において一種の飽和状態に達している。一面完成に近づいている。そういう方向で言えな

った『生活からの声』が盛り上がり上ろうとしている」

と言う楸邨氏の言葉の通りに、いわゆる「人間の探究」とでも言うか結局、俳句が自己中心的になってきた傾向を示すものである。また俳句が自己中心的になって、自己の生活を探究して行く文学として進んで行くか、それとも自己を離れ、自然や人生を客観的にながめるか、言わば芭蕉的と蕪村的の二つの方向に向かう潮流が、漸く表面化し衝突しているが、今日の俳壇の大きな問題もそこにあると思う。リアリズム俳句と言われるものの内部にしても、この二つの流れがあるのではないかと思う。」同、二八四頁より引用。

嶋田氏のこの文からも昭和一四年のこの座談会の頃から、「人間探求派」という俳人の登場をめぐって、俳句はどうあるべきかという問題が真剣に論議されるようになったと言える。

一三：鼎談「俳句性論議」林原未井・安騎東野・加藤楸邨

『加藤楸邨初期評論集成』第四卷。（発刊年等は「二」に同じ。）二〇八―二三九頁。「初出」「俳句研究」昭和一五年八月号。改造社刊。

句作に対する意見が林原・安騎両氏と楸邨とは全く違って、るので議論が次のように噛み合わない。

「安騎 「終に戦死一匹の蟻行けど／＼」といえれば瞬間とは感じないね。一匹の蟻がそこにおったというならば、瞬間と感ずるかも知れないけれども、「行けど／＼」というのが瞬間だというならば、どうかしていると思うナ。（略）

加藤 僕の言おうとする時間と、先生の言う時間との間に喰い違いがあるんじゃないかと思うんだが。先生のはあの句の中の時間、私のは言いとめるその時間です。（略）

林原 あなたの態度は判るけれども、季なら季を通じて行く方が間違いがなくて近道であるというだけのことです。

加藤 僕はそれだけじゃないと思うんです。先刻覚悟という思いきった言葉を使ったが、それに自分を賭けてみて、そこに初めて結果が、場合によっては、思いもかけない相貌を以てあらわれてくるという、そんなものでなく、は、季を計量できないと思う。季だけでなく、俳句がそういうものだ。（略）

安騎 加藤さんの俳句の態度は自らを悲壮にして、暗い所に立てこもって、誠心誠意でやれば俳句はできると思っている。それでは山本さんの言っているところの、「遊び」がないんだな。

加藤 何でも結構ですが、とにかく仕方がない。そうだと
思えるまではこうしてゆくほかはない。」同、二二五—
二三九頁より引用。

この鼎談の最後は楸邨のこの「何でも結構です」云々で打ち切
られ、楸邨は自分の考えについて去年（*「馬酔木」座談会・座
談会「新しい俳句の課題」以後を指すか）から充分に考えたいと
控えていたがやはり「言いたくないことを喋ってしまった」と「附
記」に書いている。

一四：「颱風眼・春雪・家」藤田初巳

「俳句研究」昭和一五年（一九四〇）八月号。改造社刊。
一四二—一四五頁。

楸邨の「品に対しては「すでに固定した評価が—いはゆる定評
ともいふべきものが出来上がつてゐる」という。楸邨の『颱風眼』
「自序」の「未だすべて暁闇を望むの感がある」を引いて「掛値
なしの感懐にちがひない」と述べ、「新しい展開」に期待できる、
という。また「難解」というジャーナリズムから擦された「奇態
な烙印」があるが、句集『颱風眼』の作品の中で、二物衝撃が正
し克的を貫いた句は「難解」の評を裏切るもの、と

蝸牛いつか哀歎を子はかくす 『台風眼』

つひに戦死一匹の蟻ゆけどゆけど 同
などをあげている。「楸邨氏の場合は物の状態と心の状態とを衝
撃させてることによつて、そこに第三の、心理上の動きを示さう
といふものであつて、そのへんのかねあひがただ一人のみこみに
終つてゐるかどうかといふ点に、難解か否かの秤がかけられるの
であらう」という。

一五：「加藤楸邨論」孝橋謙二

「俳句研究」昭和一六年（一九四一）一月号、改造社刊。
一八四—一九四頁。

孝橋氏は「俳句研究」の昨昭和一五年八月号の「俳句性論議」
座談会において、季の問題について論が噛み合わず林原、安騎の
二氏へ、楸邨が「何でも結構ですが、とにかく仕方がない。さう
だと思へるまではかうしてゆくほかはない。」と言つたことから
文を起こす。楸邨が「合理主義者達に押へ込まれながら、その結
論に同意する事が出来ず、而も自らの覚悟について、適当に演繹
する言葉を見失なつて、たゞ強情我慢に押し黙つてしまつた」こ
とをあげ、これに比べて「ホトトギス」に出た「甘やかさない座
談会」における中村草田男氏の「局面を転回させる広い才能に感
嘆した」という。そして「楸邨の人間探究とは、人間といふもの

ゝ実相は、生の危機、不安の自覚の上に於てのみ捉へ得ること、かゝるものを俳句によつて追求してゆくとするもの」という。そして「それならば、此の人間探究の実践過程であるべき俳句作品は何を示してゐるであらうか」と句集『寒雷』の「古利根抄」時代の秀吟は馬酔木調であるが「その中であつて

争後

対ひゐて言葉なければ雪を言ふ

「古利根抄」

の一句は、後の楸邨の生活派といはれるものの濫觴をなしてゐる」という。第二期の「愛林抄」の時代は「次第に楸邨自身の好みに従つて少しづつ性格化されて来る」という。第三期「都塵抄」以後、楸邨は、馬酔木の作家から、俳壇の楸邨に跳び上つてゐる」という。そして楸邨句に多く詠まれる「子」は「結局楸邨その人の姿ではないか。子の中に自己を見出し（中略）号泣し、つぶやいてゐる楸邨を見るべきである」という。「楸邨の俳句は自己をひたぶるに凝視する事から、自らの生活をあらためて四側から転回させ、自己の心意を見据ゑる事に成功したやうだ」と述べる。「しかしその深淵の相の凝視から氏は何を得たか」との疑義を呈し、「それにしても寒雷以後の氏は惨憺たる道をたどつてゐる」という。

一六：「気軽な感想」前田普羅

「俳句研究」中堅作家自選句集評「昭和一六年（一九四

一）五月号。改造社刊。一〇八―一〇九頁。

前田氏は「この人、今さら中堅と云はれても喜ぶのでもあるまい。モツと世に出てよいのだ。だが決して世の中に推し出る許りが能でない。殊に今後は自らをよく見極めて又深く掘り下げる必要がある。只、この人に「控へ目」な所の有るのが目につく。

翳雲人に告ぐべきことならず

これなぞは、或いは難解句とされるかも知れないが、難解句として推しやるべきでない。少しも難解ではない。之れが難解なら人心の深き所に根ざす文芸の理解が無いと云ふべきである。又この人のひかへ目そのものを現はした句であつた」という。

一七：「楸邨氏への手紙」中村草田男

「俳句研究」昭和二年（一九四六）七・八月合併号。目黒書店刊。（以下、目黒書店刊は略。）二〇―二三頁。

草田男氏のこの論は「俳句研究」編集部から「俳壇時評に匹敵するやうな内容のものを書くべく、需められた」というものである。手紙の第一点は「戦時中に於ける文芸人としての自己の行動に対する、今日に於ける責任の問題です。」「大東亜戦に入つて

の当初は時代の受難者であった筈の貴君が、その後半期に入つてからは、当時隆盛を極めた或る勢力層の専らな利用者に豹変したかの如くに私の眼には映つた」ということであつた。「寒雷」復刊後、以前の幅を少しも変へることなく、嘗ての勢力層内にあつた人を結社員として厚遇しつゞけ」たことを批判する。次に、「根源に立帰るといつても、実践面に於ては、私達は結局俳人と、いふ立場に立帰らなければならぬわけですが、——此今更口にするのも馬鹿げた程自明のこととして、一般人に漠然と観過されてゐる、「俳人といふ立場」を、貴君が、如何様に解釈して居られるかを、改めて問題として私は御訊ねしたいのです」という。

草田男氏の三点目の批難は「個我に執する事強ければ強い程、「真実」は其人をより強く見捨てます。単なる個我の「思ひ入れ」「思はせ振り」に眩惑されるのは、当人自身並びに、心なき大衆のみであります。（私が嘗ての日の貴君の「貧乏俳句」に、深い眞実感を認めない所以も亦、そこにあります。）」というものである。第四点は嘗て楸邨が「俳句は十分に物の言へない文芸である」と言つた言葉はいつしか「俳句に於ては十分に物が言へなかつたとしても致方がない」という錯覚を楸邨に与えてははしないか、「俳句は十七音の中で十分に明らかに言ひ切るべき」というもの。五点目は、「美」の問題について楸邨が「巧緻を排す」という言葉で美をも排してはいるのではないか、というものである。「文芸は「真」の一点張りでは、到底解決が付きません。「巧緻を排す」といふことが、一種の負け惜みの胡魔化しに終つてはなりません」という。草田男氏の手紙は最後に、俳句の特殊性を中心とする一切を「芸」、作者の内面界を中心とする普遍性の一切を「文学」といい、「貴君と波郷氏との、ここ最近何年かの業績を眺めて居るのに、貴君は、後者のみに傾き、其要素を「個我」で料理しようとして居られるやうに思へます」と述べる。

(中略) この戦を通じ傷つき、恥多く、如何にして新しく立ちあがり生きぬこうかとあがき求める人々と共に、少しずつでも歩みを進めたい、よし、過去に於て軍人であろうと、何であろうと、傷つき苦しみ真実を希んでやまぬ人なら、今までと同様に親しみ、力を協せて生きてゆきたい」(「俳句と人間に就いて」(一))と述べる。草田男氏の二点目以降の問いについては「俳句と人間に就いて(二)」に、次のように答える。楸邨は「自分には人間としての要請がある。これは何としても殺すことの出来ないものである。この要請を生かす表現として始めて俳句が考えられる」、

象の真実と自我の真実が一体になる外はなく、その場合の自我は、勿論単なる個我到終始してよいというのではない。私は私意やばかりいやを排し自己の自己たる根源的な真実を願うもの」と自身の「真実感合」論を説明する。草田男氏が四点目に「俳句は十分に物の言へない文芸である」という楸邨の言を取り上げた質問に對しては「俳句という短詩型の性格を端的に言いあらわそうとしたものであつて」楸邨は「むしろこの点では、自分の全力を尽くしてそうした結果にならぬように努めるつもりであるが、私の念願するところは、この短詩型の中にどうしても描写に伴う敘述だけではあらわにあらわしきれぬ自己内容をどう生かすかという点で、この短詩型の性格に生かされる表現を希いたいのだ」という。

「自己の表現が短詩型の抵抗や季の抵抗と相搏つて、みずからなる言外の重量感となつて沈潜し句の底から自らを返照して、私のいう「物言はぬ表現」として生きる場を求めるとも、私としては一層大切であると思つている」と補足する。五点目の「巧緻を排す」という問題について楸邨は「私の意図は決してあるべき美を排しているのではない。附け加えられた美を美とは思えないと言うまでのことである。単なる芸をあるべき芸と見たくないということ」と述べる。

そして楸邨は「私の要請に立つて見るならば、自分の高まるこ

とによって俳句も高まり、俳句の高まることによって人間も高まるといふことのみの念願であつて、自己の要請が重いために、俳句に美を結果として待つということになるわけである。私は新しき美は新しき人間構造によつてのみ可能であると信ずる。私の句にいつか私自身の人間的根柢から生まれ出る光をあせらずに待ちたい。」という。

一七：「作家の底」森澄雄

「風」昭和二二年（一九四七）二・三月合併号。一四―一五頁。

中村草田男氏の「楸邨氏への手紙」を読んで寄稿した作家論である。森氏はこう述べる。草田男氏の論点に「楸邨俳句或ひは波郷俳句の虚を衝いて余す所がなかつた」とし、「氏の確実無類の文章とその炯眼に感嘆したのだが、むしろ僕は此の公開状を読んで、作家といふものゝ、のつびきならぬ生き方といふ様なもの哀切さを感じてゐた」という。楸邨にしても「『愛林抄』から『雪後の天』に至る精進と、俳句面の著しい変貌に人は驚くかもしれないが、僕は「愛林抄」にひそむ彼の本質的な抒情といふものは其の後に至つても、本質的に少しも変質してをらぬとみてゐる。僕には人生の虚の深さといふものは、「芸」といふよりは、自己

犠牲といふのつびきならぬ作家の生き方といふ実践面に口を開いてゐるのだと思ふのだ。どうにもならぬ人間の生き方の哀切さだ」という。そして森氏は草田男氏の忠告は「むしろ僕たち若い世代への、或ひはもつと極言して云ふなら現在の俳壇に氾濫してゐる此等三大作家（*草田男・楸邨・波郷）の無反省なエピソードへの警告」という。そして「非凡な作家といふものは執拗無残な自己の心底の嘆きに殉ずるのだ。その果に「芸」といふものが、自己犠牲といふのつびきならぬ場所で生れて来る」と述べる。

一八：「芭蕉について」桑原武夫

「東北文学」昭和二二年（一九四七）四月号。河北新報社刊。九三―一〇五頁。

桑原氏は昭和二一年「世界」十一月号に「第二芸術―現代俳句について」を著したあと、この「芭蕉について」を発表し、「野ざらし紀行」の富士川のほとりの捨て子の句と芭蕉の文を引き、楸邨の芭蕉理解を批判する。「袂よりくひ物なげて通るに、／猿を聞く人捨子に秋の風いかに／いかにぞや、汝ちゝに憎まれたるか、母にうとまれたるか。父は汝を憎むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天にして、汝が性さがのつたなきを泣け（略）」これについて桑原氏は、もともと泣きさけぶ赤ん坊などどこに

もいなかつた、といい、芭蕉は「猿声・秋風」という支那詩文において、常に悲愁を感じさせるこの言葉の中へさらに「捨子」という悲惨な思いを呼ぶ言葉を投げ込んで「いかに」といつてみたにすぎない、という。そして「加藤楸邨氏が、現実の捨子に当面しての苦悩だとか、人生道と風雅道の対立とか、俳句的知性など」言っているのは「おかしい。こゝに人生などありはしない。一個の美文があるのみである」という。桑原氏は「野ざらし紀行」には、中国詩文独特の悲愁の味を持ちこんだ句が多く、ここに芭蕉の一生の芸風の基礎がおかれたのであって、この紀行を蕉風一変の書というならば、それは芭蕉が李杜や西行の古典の血脈をつぐものとしての自覚を少々強引に確認したところにある、として、楸邨のいう「身体を通じ、人間全体を通して」の「真実感合」などでは決してない、と指摘する。桑原氏の「第二芸術―現代俳句について」などに対して楸邨は「俳句は生き得るか」（「現代俳句」昭和二二年四月号。（『加藤楸邨全集』第五卷。三八七―四〇一頁。））の中で次のように答えている。（傍点は楸邨）まず

「局外から加えられた批判であるから、中には妥当でない言も認識の不足もある。然し、私は（中略）これが局外から加えられたというところに大きな意義を認めなければならぬ」という。「局外から俳句は第二芸術であるといわれ、今日以後存在の理由を失うものだといわれるその点を、俳句の中で反省してゆけば結局俳句は人間を喪失していたという点にあるのだ」、また俳句の「短い詩型とか季とかいうようなものは制約となり、抵抗となる」、この制約故に「俳句は自由なる人間の表現として否定せられるのである」が、そこに実は俳句の人間の要請を生かす手がかりがある、と楸邨はいう。なぜなら楸邨は、「写す」ことによつて文の表にあらわに出しきることだけが文学存在の理由とは思っていないからである。「平素の思考探究の堆積が肉体化され、ある不可測の勢いで発展し、どうかすると作家の考えるところ、予想したところのものをのりこえて氾濫することがあるのではあるまいか。私は俳句に於てはそれが一番凝縮して行われるものと思う」と楸邨は述べている。

一九：「俳句的眞実―加藤楸邨論―」田中久介

「短歌俳句研究」（新日本文学会短歌俳句委員会編）昭和二四年（一九四九）一月号。伊藤書店刊。六九―七七頁。田

中氏は、「眞実」を楸邨が自分の内部においてみてゆこうとするのは間違ひであるという。唯物史観に基づかない限り、「眞実」は眞の「眞実」として存在することを放棄する、という。

二〇：座談会「葉鶏頭問答」―鶏頭の十四五本・社会性について

・俳句の在り方・割切るといふこと・限界論―秋元不死男

・大野林火・加藤楸邨・(司会)古澤太穂

「寒雷」昭和二五年(一九五〇)一月号。作品社刊。三―
一一頁。

病中の楸邨居の庭の葉鶏頭を見ながらの座談会である。

「【林火】鶏頭の十四、五本といふが、それ以上ですかね。

【楸邨】さう、子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」とい

ふあの句、僕以前から好きですが、見てみると、十四五本

はやつぱりうごかない。」同、三―四頁より引用。

「【楸邨】俳句新聞があゝの頃行詰つてゐた。それを引受けて

雑誌に改編しないかといはれてゐたが、僕は渋つてゐた。そ

ばで「鶴」が出始め、波郷君や石塚君が苦勞してゐたのを見

てゐたんだね。寒雷に集つてゐるのは、今でもさうだが、やん

ちやなのが多くて、大体僕の言ふことをきかない。どん／＼

僕を引きずつてやれやれといふ。僕は臆病だからずい分迷つ

たが、そのうちお膳立の方が出来てしまつた。鶴丘が今度楸

邨が雑誌をやると新聞に書きちやつた。それで仕方なくやる

ことになつた。この連中はその後も始終僕の尻を叩いて来た。

僕のことを口では先生といふんだが、実質的には、どつちが

先生だかわかりはしない。この古澤君なんかでも自分が楸邨

を指導してゐるつもりなんだよ。」同、五頁より引用。

「【楸邨】僕の場合にしても、秋櫻子・誓子・草田男を見る

目は、半分自分の批判になる。半分自分を切ることになる。

だから自分を怒る気持が多いのです。三十代が我々に対する

批判も同様じゃないかと考へると、我々は出来るだけ素直に

ゆきたい。必要以上の感情を浪費したくない。」同、六頁よ

り引用。

二一：「加藤楸邨論」田川飛旅子

「現代俳句」昭和二五年(一九五〇)二月号。現代俳句社

刊。(以下、現代俳句社刊は略。)四五―五一頁。

「楸邨の美点としては、俳句型式を携げ苛烈な現実と世界に

立ち向ひ、之を表現せんと努力してゐる最も真摯な作家の一

人であるといふ点では一致した定評があるが、その反面に逆

に弱点として批判されてゐる点も少なくない。」同、四八頁

より引用。

田川氏は「楸邨俳句に対する戦後の批判の大略を整理し」「観

念的な作品が多く、概括的表現に終つてゐる」等の一七の批判を

具体的に列挙する。そして「これらの批判に対して、楸邨は又機

会ある毎に、実によく反批判を書いてゐる」、楸邨は「そうした

弱点を過渡期の止むを得ぬものとして自分でも認め、又その故にはげしく悩み闘ふのであるが、根本的な作句理念に対しては「不動の信念を以て終始してゐる」という。また「楸邨は俳句理論の祖述家として最も秀れた一人であると思ふ」が、それは「非常に大きいプラスであるとしても、秀れた俳句作家が秀れた俳句理論家と一身の中に同時に住つてゐることの悲劇を楸邨に於ても感ずる」という。楸邨への希望として「理論と実作との間のギャップ」を「科学的に検討」し、「原則から具体的に」「踏み出して欲しい」、「即物化」を「焼きつけるべき」であつて、「神秘的」な「一種の逃避に終つてはならぬ」という。また作品吟味での「妥協の検討」が鈍くはないか、といい「楸邨臭とも云はれる表現形式の繰り返しは余りにも多い」と述べる。こうした「念願より更に強い希望は楸邨の病氣克服の一事である。すべてはそれから後でも遅くはない」という。

二二：座談会「十六夜の月が出るまで」加藤楸邨・秋山牧車・福

田紀伊・山内文三・青池秀二・丸山一彦

「寒雷」昭和二五年（一九五〇）二月号。二二―二八頁。

病中の楸邨居に行われた座談会である。

「【楸邨】どうです、あの葉鶏頭は、―僕は一年半寝てゐる

中に、殆ど生れて始めてかういふものうごきがわかつて来た。

【文三】どういふところがわかつたんです？

【楸邨】自然のこまかいうごきといふやうなもの。

【文三】先生の以前の物の見方は、一応人間を通して見るといふ行方だつたと思ふのだが、それが例へば「起伏」に出てる、

炎天へまひるの炎つつつと 楸邨

の句なんかになると、人間が自然の方に入つて行つたといふ感じだ。さういふわかり方ですな。

【楸邨】さうです。（中略）理屈では前からわかつてゐたことだが、今度は実感でわかつて来た」同、二二頁より引用。

「【文三】子規の

鶏頭の十四五本もありぬべし

は先生の今の気持にどう映りますか。

【楸邨】あの句には昔から頭が下つてゐる。芭蕉にしても、

白菊の目に立てて見る塵もなし

の句、あゝいつたものがこわい。ところが自分では何としても意欲が先にたぎつて来てしまふので、自分の作るものとの間のギャップ、これが今まで随分苦しかつた。その点で今度

は把握の態度がいくら成長して、相手を見る眼が出来てきたと思ふのです。(中略)然し、相手を見るといふだけでは、正に写生と同じではないか、と言はれませうが、一句の中で、単体の対象の中にそのものの本質をひつつかんでくるのは、所謂客観写生では出来ることではない。対象に向ふとき、自分の人間としての在り方―人間基盤が成熟するにつれて、自分を見る眼が出来てくる。同時に対象が見えてくる。写生といふ言葉を使つてもいゝが、(中略)僕は把握といふわけです。把握には対象があり、それを掴む主体がある。その時主体の眼が対象と一つになり、対象を貫く。それは純粹に句の表には出ていない時でも、把握は主体としての人間があつて始めて出来るのだから、外から描くだけでない。描写は把握の中に包まれて初めて生きる。人間があつて描写を貫くので、描写だけに縋るのではない。」同、二二―二三頁より引用。

「【楸邨】その意味で、現在のアララギが果して短歌本来のあり方かどうか問題になるかもしれぬ。あれはもともと、子規一流のレアリズムでたたき上げた抒情をそのまま短歌に移植したところがあるので、むしろ俳句的な質を多分に持ったものだ。だから、アララギの人はきつと、俳句がよくわか

るのではないかと思ふ。僕などアララギのレアリズムにはやはり親近性を感じ易い。ところで、僕は若い頃から啄木や茂吉に耽溺し、つい最近までその影響を払拭するのに悩んできた。啄木風のうたひあげる気持で心の割目から噴上げてくるものを、そのままうたひあげようとする。―だから、僕の作句生活の前半は、今から見ると、俳句で短歌をやつてゐた様に思ふことがある。」同、二五頁より引用。

「【楸邨】俳句は形象化なしには成立しない、歌のやうに音楽化が利かない。歌と俳句の大きな違ひでせうね。」同、二六頁より引用。

二三：「楸邨論断片―「野哭」「起伏」を中心にして」金子兜太
「寒雷」昭和二五年(一九五〇)三月号。四―一五頁。

金子氏は『野哭』中の「飢」を詠んだ「飢すこし秋朝焼のペンありて」「飢せまる日もかぎりなき帰燕かな」「飢きざす鶏頭の丹を見たるとき」「飢ふかき一日藤は垂れにけり」「幾万の飢つる目ぞ燕」「飢餓地獄夏の障子のましろきを」などの九句をあげて「これらの作品は離れがたく自分を支配している「飢」の状態には忠実である」が「この「飢」は単に詠歎されているに過ぎない」、「こゝにこの作者の態度としての真剣さが、逆に自分を

現実から「飛躍」させて」しまうという欠点が見える、という。

楸邨は「作品において主張しすぎる」ため、「詠歎的になり、状態の「現実的な表現」とならぬ」のだという。『起伏』の中の句は『野哭』より「遙にすぐれた現実性をもつてきてはいる」が「なおアマイと思う」と述べる

二四：「加藤楸邨論」香西照雄

「俳句研究」昭和二六年（一九五二）一月号。六九―七七頁。

はじめに楸邨に「見る」ということが過度に強調されていると「貨車押して片目は枯野見つあり」「鶯の脚見えて野分の宙を掴む」の例句をあげていう。そして草田男と楸邨の句風の相違を人間の「にほひ」と「臭み」という。楸邨の難解は、浅く鈍く不正確に対象や自然にかかわる時、又更に感慨や観念のフラグメントを季題と感性面や観念面のつながりなしにくつつけたりする時に生ずるとし、「一言でいえば閉鎖的な私小説の悪伝統を完全に脱却していないことにも原因する」という。また「蕪村の俳句を芭蕉の俳句と同じように考え、主体と客体の統一されたものとして混同してしまう氏（*楸邨）はまだ／＼主体と客体の統一を腹の底から理解しているとは見えない」と述べる。

二五：「波郷と楸邨」金子兜太

「俳句研究」昭和二六年（一九五二）五月号。一五―二二頁。

波郷の俳句は形式の上に立って遍歴がおこなわれた姿であり、楸邨は人間的遍歴の後に形式を得たのだ、とする。「戦後、文学は―そして俳句も―その課題を「文学として」果す季節に立ち向った。加藤楸邨が突き当り追求した「人間」の生き方を支える「理念」の問題が大きく意味を持つ所以でもあった。楸邨はその哲学癖（奇妙な言葉だがそう言うしかないもの、例えば西田哲学や田邊元の哲学と同質の日本的な「過去」の形姿である）の故に、その追求の意志の正しさに拘わらず今まで敗北して来たのであるが、僕等はその作品を貶すことによつて、奥底にある彼の志向をも抹殺し、後に追い戻すことをしてはならない」という。そして「附」に、香西照雄氏の「加藤楸邨論」（「俳句研究」昭和二六年一月号）は「楸邨の表現態度（僕の言う方法）を突いて一應の成果を収めている」というが「しかし香西が（中略）ゲーテの言葉を、それがドイツ観念哲学に対する反措定の意味を認めつゝも、直ちに楸邨に適用し、『生き／＼した印象や直観を描写するという創作態度』追求を強調するあたりには、楸邨の俳句における―むしろ俳句外にまではみ出した―理念的な追求を見失わせ

る危険があつた」とし、「その他、草田男の表現をモデルとして楸邨を語り、人間のほひに共感し、人間の臭みに反撥するあたりにも、香西の「一流癖」を感じて、僕は異議を持った」と記す。「香西が、こうした論説をなす根拠―それは日本における「真の民主主義」の問題に連なる、人間及び文学の問題ではあるが―は分り、その意図を承認しつゝも、なお、そのやゝ「飛躍した」主張に僕は僕なりの疑義をはさんで置く」という。

二六：「楸邨句抄」山本健吉

「俳句研究」昭和二六年（一九五二）二月号。一一―二三頁。（この後「税吏汗し教師金なし笑ひあふ」「マンホールの底より声す秋の暮」「しづかなる力満ちゆき蟋蟀とぶ」の三句を加えて『現代俳句』（上）昭和二六年二月、（下）昭和二七年九月、『現代俳句』昭和三七年一二月、角川書店より刊。）

「行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ 加藤楸邨／楸邨の第一句集『寒雷』（昭和十三年）所収。埼玉県粕壁中学に教鞭を取つてゐたころの作である。「船戸」の前書がある。「江戸川と大利根をつなぐ運河がある。（中略）今はこの運河もすつかり荒れはてて、大利根川の船戸の船宿にわづかに古び

た俳をのこすのみである。」（古利根河畔吟）と彼自身解説してゐる。「行きゆきて」とはおそらく蕪村の「行々てこゝに行々夏野かな」に出てゐる。蕪村の句も元をたゞせば『和漢朗詠集』あたりの漢詩の訓読に発してゐるようが、蕪村が「行きゆく」を重ねることによつて一種の漢詩的な佶屈調を打出してゐるのに対して、楸邨のこの句は「深雪の船に逢ふ」となだらかに続けて、むしろ和歌的な詠歎調に近づいてゐる。句集『寒雷』の作品は昭和六年から始まつてゐるが、その前は彼はむしろ短歌に心惹かれてゐたのであつて、そのやうな素地が、やはり短歌から出て新風を開いた秋櫻子の「馬酔木」の作風に自然に近づけ、その抒情風・詠歎風を完全に自分のものとするのが出来たのだ。「行きゆきて」といひ「逢ふ」と結んだところ、若い作家の感傷と心のたかまりがおのづから表現されてゐる」同、一二頁より引用。

中 句 観 動
「かなしめば鵲金色の日を負ひ来 同／同集「愛禽抄」の一句。鵲・鵲・鷹・雀・鴉・鳩・雉子などが、彼の作の対象となつてゐる。「かなしめば」は直截且つ大胆な主観であり、また一羽の鵲の姿・動作にも滲透する主観である。豪華な色彩と強烈な主観とに彩られ、音律も大きく躍して重々しい。」同、一三頁より引用。

「道問へば路地に裸子充満す 同（中略）このやうなユーモアのある作品は、粕壁時代の句には見られない。都塵の中心に移つてから、彼は在来の抒情的な風景句から脱却して、人間への興味と追求とを掘下げて行くやうになつた。そのやうな興味が彼に滑稽の境地を開かせてきた。人間生活を頭に置いて比喩的にでも見ないかぎり、滑稽な風景といふものはあるわけがないのだ。」同、一五頁より引用。

「寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃 同／句集『寒雷』の巻尾に据ゑられた句。（中略）「寒雷」は彼が初めて立てた季の詞ではないが（乙字が死んだ日に寒雷が鳴つたといふので、同派の人々は乙字忌を寒雷忌とも言つてゐる）、彼によつて一般化された季題であることは確かだ。何か凜冽な感じを持つこの語を、彼は格別愛好してゐるのであらう。別に他言を要しない単純な句であるが、深夜の寒雷の感じを、神経に響くやうなガラス窓の振動によつて巧みに捕へてゐる。この句の前後、昭和十三・四年ごろは、彼の作風の転期をなし、草田男・波郷とともに、難解派或は人間探求派と言はれた時代である。「罌雲ひとに告ぐべきことならず」「外套の襟立てて世に容れられず」「海越ゆる一心セルの街は知らず」「墓誰かものいへ声かぎり」「白地着てこの郷愁のどこよりぞ」

「灯を消すやこころ崖なす月の前」等は問題となつた句である。季語と主観的感懐との強引な衝撃がこれらの句の特色をなしてゐる。和歌的・抒情的把握から出発した楸邨が、俳句固有の方法と目的とに目覚めての必死の苦闘がこゝに展開されてゐる。和歌的なものが先天的にも後天的にも身にしみこんでゐて一つの完成した世界を形成してゐただけに、この時代の楸邨の脱皮の苦しみは草田男・波郷の比ではなかつたであらう。「俳句は物が言へないところから出発する」とは、彼のその頃の偽らざる告白であつた。そしてこれらの句が概して不熟の作品であり、過渡期のもつ欠陥は誰の目にも明らかであつたので、難解派に対する攻撃も楸邨の一身に集中した感があつた。だがこのやうな過渡期も、楸邨の内的發展に取つては必然と言ふべきであつたのだ。少くともこの時期に、彼が自己の内部への沈潜を深めてゐるのは確かなことである。「同、一五―一六頁より引用。

「蚊帳出づる地獄の顔に秋の風 同／昭和十四年作。『颱風眼』所収。不思議な句である。（中略）「地獄の顔」とはもちろん自分の顔を客体として捉へたのであつて、女の顔ではない。「自分の中にひそんでゐるみにくい獣」をその時の顔に感じ取つたのである。（中略）蚊帳を出た彼の顔に秋風が

当る感触を捉へたことが、その自嘲を深めてゐる。自分の姿を客観的に表すことによつて、その句は一種とぼけたやうな表情を示してゐる。人間臭い句である。しかも俳句でなければ捉へられない情景である。」同、一六頁より引用。

「露の中万相うごく子の寢息 同／同、「穂高病む」の前置がある。子の病氣に対する不安を表現してゐるのである。「万相うごく」といふのが力強い。(中略)不安の象徴と言つてよい。三段に切れるようであつて、各句は不思議に有機的に繋がつてゐる。露と寢息との中に、秋の万相のうごきが在るのである。」同、一六頁より引用。

「春さむく海女にも問ふ渚かな 同／句集『雪後の天』には、昭和十六年初頭の隠岐紀行の一連の作品がある。「さえざえと雪後の天の怒濤かな」に始まり、この作者に取つて一つの頂点を形作る作品群である。これは「浦郷湾」と題する中の一句で、「春愁やくらりと海月くつがへる」も同時の作である。楸邨にしては珍しく大時代的なかな止俳句である。『馬酔木』をはじめ、新興俳句の人々は、や・かなのマンネリズムを嫌つて殆ど句に用ゐなかつたが、新興俳句に対するアンチ・テーゼとして出発した波郷・楸邨は、うち棄てられたや・かなを大胆に取上げて、もう一度

新しい生命を吹込まうとしたのである。それは新興俳句の運動が、近代的な抒情詩として自己を高めようとするあまり、ともすると敘述的・散文的に流れ、俳句的骨格の脆弱さを来たしたのに対して、もう一度俳句固有の目的と方法とを回復しようとする試みとなつて現れた。当時波郷は「猿蓑にかへれ」といふことを言つたが、それは決して単なる復古的な要求としてでなく、俳句様式の典型として『猿蓑』の諸作品を意識することによつて、詩とも短歌とも違つた地点に俳句の方法を打立てようとしたのである。波郷はまた当時「俳句は文学ではない」とも言つたが、彼をしてこのやうな不敵な言葉を吐かした裏には、純粹俳句への郷愁とも言ふべきものが彼の胸裡に胎まれてゐた筈である。／それに対して楸邨に於ては、もつと混沌とした欲求が彼の中に渦巻いてゐたやうである。彼にあつては、隠岐行のころからや・かなの使用が目立つて多くなつてきた。この隠岐行は、後鳥羽院配流の跡を尋ねようといふ懐古的な気持が彼に働いてゐたことは見逃せぬ。だがそれだけではない。楸邨は常に迷へる人である。それは何時も胸中に形をなさぬ混沌を育んでゐるといふことだ。芭蕉の正風開眼の歳に近づいたことへの一種のあせりの気持もあつたであら

う。そのやうな混沌に形を与へ、揺ぎない足場を築き上げたいといふ要求が、彼を隠岐へ誘つたのだと思はれる。言はばこれも「迷へることありて」である。伊豆の旅先から、矢もたても堪らない気持で、そのまま隠岐へ直行するのだ。その性急な欲求が、歴史への回帰と繋がつて、格律正しい一種の古調を彼に取らせたのだと思はれる。かなはもつともリュームのかかつた切字であり、一句の感動の重さを支へるに充分な貫禄が要請されるのだ。それはすぐ前に接する名詞を載せるばかりでなく、一句全体を載せて安定しなければならぬ。それは治定であり大断定であるとともに、感動であり詠歎である。(中略) 楸邨のこの句を覆つてゐるものは、一種の旅愁である。「海女にもの問ふ」に、それは素直に打出されてゐる。それはまた歴史の古い配流の島へ寄せる哀愁でもあつた。「うちそを麻積の王おほきみ海人あまなれや伊良いら真まの島の玉藻刈ります」(萬葉集)「わたのはら八十島やそしまかけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の釣舟」(小野篁)「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつ つわぶと答へよ」(在原行平)——これらの哀れな海人語りの伝承歌に通ずる感慨が、作者の胸裡にも動いてゐるやうである。」同、一六一—一七頁より引用。

「水みづぬる温むとも動くものなかるべし 同/隠岐紀行の作品群は、後鳥羽院御火葬塚を訪れての一連の作品に、集約的な感動の昂揚を見せてゐる。(中略) 楸邨はつねに「かなしび」といふことを言ひ、「ひとりごころ」といふことを言つてゐる。彼に「ひとりごころ」を言はせるものは、言ふまでもなく芭蕉の晩年の作、「此の道や行く人なしに秋の暮」「此の秋は何で年よる雲に鳥」「秋深き隣は何をする人ぞ」などにただよふ究極の孤独感への共感であつた。「雲に鳥」の句について、「遠い永遠にひかれて生きてゆく根源的なかなしみから来てゐる」と言つてゐる。さらにまた芭蕉が『柴門辞』の中で、後鳥羽院が俊成・西行の歌について、「歌に実ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ侍りし」ことを記してゐることが機縁となつて、隠岐に遠流された院の「ひとりごころ」を思ふことが深くなつた。もちろん当時保田与重郎の『後鳥羽院』などの言説に動かされなかつたとは言へない。だが作者の胸中に、「ひとりごころ」への切なるうながしが無かつたならば、彼が矢もたてもたまらず隠岐の孤島へ誘はれて行くやうなことは無かつたであらう。彼の隠岐行は、だから後鳥羽院追懐が機縁になつてゐる。それは彼の胸中にむすぼられた「かなし

び」であり、「ひとりごころ」のうながしであるとともに、戦時下の時流への「いきどほり」でもあった。「翺雲ひと言^{（告ぐ）}ふべきことならず」「墓誰かもの言へ声かぎり」——このやうな彼の作品、暗い孤独感のただよふ作品が、戦争非協力をもつて俗流の指弾を買った。人に言つても分ることはないといふ思ひが、ひしひしと胸をしめつける、同時にそれが、芭蕉への思慕となり、院への追懐となつて深まつてゆく。だから彼に触れた隠岐の風景は、つねに「かなしび」として、「いきどほり」として結晶せざるを得ないので。それはあたかも、芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天の川」の句の裏に、古来遠流された順徳院以下貴賤あまたの人への作者の断腸の思ひが蔵されてゐるのと、同じことである。「佐渡」といふ言葉の持つ意味内容の含みが、歴史感覚の衰退した現代人と芭蕉とでは、それだけの違ひがある。同様に隠岐の島山は、楸邨に取つて単なる孤島の風景ではなかつた。（中略）「水温む」のこの句は、もう働哭といふべきである。この句の裏にあるものは、院の「いきどほり」と「かなしび」とへの共感である。とくに「御火葬塚」と言ふのは、歴代の御陵において、火葬に附したといふ例が他にないからであらう。塚のほとりに池がある

のであらうが、その淀んだ水に、院の怨恨が凝つて生物を棲ましめない。もちろんこれは作者の主観であるが、永遠に霽れ、ほぐれることのないであらう院の「かなしび」への追懐が、早春の風物を介して、「動くものなかるべし」の大断定となつてほとばしつたのである。「同、一七一—八頁より引用。

「驚けば秋の鳥なる鳥骨鶏^{（うこつけい）} 同／昭和十六年作。をこつけい或はうこつけいは「雞の一種、冠は紫黒色にして低く簇生す、絹糸状の羽毛を有し、背脚共に黒し、容貌頗る奇異なり」（広辞林）とある。（中略）作者は何処かで鳥骨鶏を偶目して、その奇怪さ、滑稽さに驚いたのである。結果として驚いたのであるが、表現は冒頭「驚けば」と置いて故意に倒錯した表現を取り、驚きが強調されてゐる。「秋の鳥」とは例の半季語であるが、この怪奇な鳥をも秋の諸鳥（鶉・雁・鴨・鶡など）のなかに含めてゐるのである。滑稽なものへの一種の愛情が、そこにおのづからにじみ出てゐる。」同、一八頁より引用。

晩
『沙 漠の鶴』として上梓されたが、この時の行程は北支・中
「荳咲いて黄河をたのむ一屯^{（たむろ）} 同／昭和十九年夏から秋にかけて、彼は大陸紀行の途に上つた。その時の作品は

支・ 満蒙にわたり、歴大な作品量を収穫してゐる。内地から見れば桁違ひの大景を大掴みにつかんで感動を打だしてゐる句が多く、題材の奇と相俟つて興味を喚ぶが、その割に作者の内面的な心の鼓動は少く、単調をまぬがれない。また間々あちらの庶民の生活に触れた句は、彼の社会詩人的な面が現れて

みて、彼の作家としての間口の広さを思はせる。芭蕉の師杜甫への直接的な傾倒が彼の胸には渦巻いてゐるのだ。」同、一九頁より引用。

「火の奥に牡丹崩るるさまを見つ 同／同年作、「五月二十三日、深夜大編隊空襲、一夜弟を負ひ、二子を求めて火中彷徨」と前書がある。次いで「五月二十四日、我が家も焼失、雲の峰八方焦土とはなりぬ」「明易き櫻けやきにしるす生死かな」。豪華な句である。家が火で崩れ落ちるさまを、「牡丹崩るる」と形容したのである。だが単なる形容でなく、楸邨式に言へば作者の感情の昂揚が牡丹に「感合」したのである。蕪村には「閻王の口や牡丹を吐かんとす」「虹吐いてひらかんとする牡丹哉」「方百里雨雲よせぬぼたむ哉」等牡丹の豪華さを様々に言取つた句があるが、これに較べると楸邨のこの句は内面的に押出してくる迫力がずつと強烈である。比喻として

の牡丹であるが、作者はまざまざと大輪の牡丹の真紅の崩れ落ちる様に、目を見張つてゐるのだ。比喻の裏付けとしての作者の感動の大きなゆらぎを感じ取る事が出来るのだ。」同、二〇頁より引用。

「雉子の眸めのかうかうとして売られけり 同／同年作、『野哭』所収。やはりこれも慟哭の悲歌である。作者の「かなしび」が雉子の眸の輝きを捉へたのである。撃たれて売られる雉子であるから目は閉ぢられてゐることが多いのであるが、作者はその見開いた眸に驚きと哀愁とを感じてゐるのである。雉子は目の周囲に鮮かな赤色が露出してをり、その眸の輝きに満腔の恨を感じ取つた作者の強い主観に嘘はない筈である。「かうかうとして売られけり」は、裏をかへせば作者の憤りの情が籠められてゐる筈である。」同、二〇頁より引用。

「飴あめなめて流離りうり悴かじむこともなし 同／同年作、『野哭』所収。『野哭』はすべて戦後の作品を収めてある。「わが家なき露の大地ぞよこたはる」「飢せまる日もかぎりなき帰燕かな」「明日いかに焦土の野分起伏せり」「諸負うて相かへりみし顔は誰」「啄木鳥に佛も世もとどまらず」。すべて慟哭の悲歌である。野哭といふのは杜甫の詩「野哭千

家間^二戦伐^一」に出で、野に慟哭することであり、「戦乱の世に処した嘆きの語」である。「野哭は今、遠き異国のことではなくなつたのである。自分の今立つてゐるところの声なのだ」（野哭調）と言ひ、また「人間としての自分の人間悪、自己の身を置く社会の社会悪、さういふものの中で、本当の声をどうして生かしてゆくか、これが今の私の課題だ」（野哭、後記）とも言つてゐる。戦後の庶民生活の窮乏の上に社会秩序の混乱が加はり、さらに楸邨の上にも家を失つた者の流離の生活が始まるのである。この句、「仮寓を追はるゝ愈々切なり、遂に十二月二十七日一家を率て学校の一隅に移らんとす、荷を負うて巷に出づ」と前書した三句の一つで、「つゆじもの鳥がありく流離かな」「凧やかぎりしられぬ星の数」に続いてゐる。（中略）自分の上よりも、子供たちの上を思つての詠であらう。子供たちへも流離の憂目を見せてゐるわけであるが、ともかく悴むこともなく成長して行つてゐることへの感慨である。」同、二〇頁より引用。

「草^{くさ}蓬^{よもぎ}あまりにかろく骨^{こつ}置^おかる 同／昭和二十一年作。「義弟矢野梅五郎遺骨還る」と前書がある。義弟の遺骨と称するものが還つてきたのである。「あまりにかろく」に

作者の慟哭も憤りも籠められてゐる。草蓬の上に遺骨が置かれたのではない。遺骨が家に還つてきたとき、土には一かたまりの蓬が萌え出てゐたのである。」同、二一頁より引用。

「海霧^{しじり}の奥の知人^{しりとみ}岬^{みさき}を指ささる 同／海霧はジリまたはガスと言ひ、オホーツク海に面した北海道東海岸に夏よく生ずる。（中略）「海霧」は北海道の夏の季語である。／単純な表現で、解を要しない。「海霧の奥の知人岬」といふ句の調子が何とも言へず快い。知人岬は釧路港外の南方にあり、シレットと発音するのが正しく、礁の多いところである。楸邨の句には表現が佶屈難解な句も少くないが、あまり複雑に感情や思考が屈折した句よりも、単純明快大づかみに言下した句に佳作が多いのである。」同、二一頁より引用。

「死や霜の六尺の土あれば足る 同／『野哭』には戦争の悲惨、戦後の飢餓地獄に対する嘆きの歌が多い。彼の周囲からも数多くの犠牲者を出したし、「死」についての感慨も多く、の句に残してゐる。（中略）「身に沁みて死にき遣るは謗らるる」「死ねば野分生きてゐしかば争へり」「冬鷗生に家なし死に墓なし」「天の川怒濤のごとし人の死へ」

等。これらの句は、或は彼の個人的憤懣の吐け口として、或は社会的正義感の発露として、或は死そのものに対する彼の切実な感銘として成立してゐる。この句は死について極めて観念的な表現である。だが霜にいためられた片隅の六尺の土を実感してゐることも事実であらう。(中略)「霜の六尺の土」の実感が生々しく、人間の悲惨さ、空しさの感慨に結びつくのである。冒頭「死や霜」と破格の調子を以て直接的に主題に肉迫し、「あれば足る」の結句も力強い。」同、二一―二二頁より引用。

「虹消えて馬鹿らしきまで冬の鼻 同／昭和二十三年作、『起伏』(昭和二十四年)所収。私の好きな句である。「冬の鼻」とはもちろん例の半季語である。さきに「タンク過ぎ鼻悴^{かじか}みし我かへる」の句を挙げたが、楸邨は鼻を意識することが多いと見えて、鼻の句が非常に多い。「冴えかへるものひとつに夜の鼻(三月十六日)」これは空襲中の句。「冬の鼻胸に灯ともりさびしけれ」。また自分以外の人の鼻の句としては「吾子の鼻汗かきて蟬鳴かせぬ」「罐焚の目鼻模糊たる霧の中」。動物の鼻の句としては「柚子照りて牛の鼻よりしぐれけり」「犬の鼻大いにひかり年立ちぬ」「牛の鼻吹雪へ吹雪へ押し出され」等。芥川龍之介

の「自嘲」と題する句に「水^{みづ}涕^{ばな}や鼻の先だけ暮れ残る」といふのがあるが、楸邨のこの句にもこれに似た感銘があり、自嘲の句である。感情の襞はもつと荒いが、それだけ直截な表現の中にユーモアが漂つてゐる。「冬の鼻」にしろ「夜の鼻」にしろ、俳句的な強引な表現である。今日の俳句に於てはあまり濫用されてをり、「俗談平話を正す」といふ俳諧の理想から言つてもあまり讃めたことではない。(中略)とところでこの句に於て「冬の鼻」は大変利いてゐる。この尤もらしく、馬鹿々々しく、たどたどしい表現が、それゆゑに却つて効果的なのである。(中略)鼻への意識は、同時に意識する己れの愚かさ、滑稽さへの意識でもある。「馬鹿らしきまで」といふ稚拙な表現が、この場合ズバリと成功してゐるのである。」同、二二頁より引用。

「鮫^{あんかう}鱧^{かう}の骨まで凍^こててぶちきらる 同／この句も一種の諧謔味を湛へてゐる。『野哭』時代の声を引きしぼるやうな悲痛な調子が、『起伏』になると底にひそんで、諧謔調があらはに出てきてゐる。これは楸邨の人間味がいつそう豊かに、陰翳深く浮彫されてくるやうになつたことを物語るものであらう。『起伏』時代は多く病床に親しんでゐるのであるが、波郷の『惜命』に於けるやうな暗さの深まり

に対して、むしろ人間的なおほらかさを打出してきている。誓子に「蠮螋の目の中までも枯れつくす」といふ句があるが、それと比較しても、楸邨のこの句にはおほらかな親しさが感じられる。誓子を鋭利な剃刀の切れ味とすれば、楸邨のこの句は鈍刀の切れ味である。感覚的な鋭さはないが、人間的な重量はこの方にかかつてゐる。「骨まで凍ててぶちきらる」といふぶつきら棒な調子が、さながら楸邨の人の髪髻せしめるのだ。彼の代表作の一。「同、二二―二三頁より引用。

「交る^{さか} 蜥蜴^{としか}くるりくるりと音もなし 同／前に「炎天やくるりくるりと跳鬼^{ちやむ}の舞」といふ大陸紀行の句がある。別に特異な擬声音^{オノマトペ}といふわけではない。だが静かな夏の真昼、ふと目に止めた小動物のもつれ合った嬉戯^{オノマトペ}交歓^{オノマトペ}をその軽快な交歓のリズムを、巧みに言取つてゐる。」同、二二―二三頁より引用。

「木の葉^こふりやま^はずいそぐないそぐなよ 同／如何にも楸邨らしい句である。病床に倒れた彼は、あらゆる点で焦燥を感じてゐたであらう。「いそぐないそぐなよ」とは自分に言ひきかせてゐるつぶやきであるが、落葉を急ぐ木のたちに言ひきかせてゐるやうでもある。無慈悲な冬の季節の訪れに対して、ひそ

か 到自己的心の準備を整へやうとする気持を捕らへたのである。もちろん「いそぐないそぐなよ」は、作者の人生態度でそのものであり、何か微笑ましい感銘をさそふのである。「同、二二―二一―三頁より引用。『寒雷』から『起伏』までの三七句を制作年代順に取り上げて鑑賞している。

二七：「角川文庫版『加藤楸邨句集』解説」山本健吉

『加藤楸邨句集』昭和二七年（一九五二）六月、角川書店刊。一九二―二〇〇頁。

山本氏は人間探求派の作家のうちの、三人についてこう述べている。

「波郷は系統立つた論をやることはないが、主として酒を酌み交はしながら発する片言隻語の中に、打てば響くやうな言葉^{オノマトペ}を吐いた。草田男は、私が一語饒舌ると、縷々数百言を連ねて本質論を展開した。ところで楸邨は、この三人の中で、もつともカオスを含んでをり、話してゐるうちに新しい問題につき当り、考へこみ、さらに前進するといふ風であつた。」同、一九三頁より引用。

右の箇所はこの後、楸邨に関する作品論作家論を論ずる場合に、

多くの評家に引かれるようになった文である。そして山本氏は『起伏』の中に表れた「ユーモア」を指摘し、「虹消えて馬鹿らしきまで冬の鼻」の句についてこう述べる。「自嘲の影が深いにも拘わらず、苦渋の表情を止めず、もつともおほらかな諧謔をたたへてゐる。このやうな傾向は、『起伏』以後現在に到る作品の上に、継続して現れてゐる。彼の俳歴はまだ中道に在るわけである。」と。また「彼の俳句の魅力は、結局彼の人間的魅力に在る。」といい、次のように結ぶ。

「楸邨は、今日もつとも大成の期待される俳人であることに間違ひはない。そしてこれまでの楸邨の動きの跡を辿つてゆくことの出来るこの句集は、一人の求道者の半生の真摯な足跡そして、もつとも意義深い句集であると言へるであらう。」
同、二〇〇頁より引用。

二八：「人間への郷愁―加藤楸邨」小西甚一

『俳句―発生より現代まで』昭和二七年（一九五二）一月、研究社出版刊。二三六―二四三頁。

楸邨と東京文理科大の同級生である小西氏は、句に番号を付けて取り上げ、解説する。

「（二〇五）学問の黄昏さむくものをいはず 楸邨」の句には、

「うすぐらい破れ障子をあけて、何かぼんやり思案中らしい顔が出てくる。私もは、その顔に、生活の疲れと学問の疲れとを感じて、喉まで出かかった毒舌をひっこめたものである。」という。
「（二〇八）海越ゆる一心セルの街は知らず 楸邨」については、次のようにいう。

「念のため本人の解釈をきいてみると、次のごとくであった。『街にはセルの女の人がしきりに往來して、新鮮な爽やかさが溢れる。しかし、この街は、死に向つて海を越えゆく兵士の一心と、あまりにも関係のない爽やかさではないか』。（中略）『説明による補充がなくては通じないので、表現として失敗だと断ぜざるを得ない』と抗議した。楸邨はいさぎよく兜をぬいでくれた。（中略）しかし、この失敗作においてすら、楸邨の「誠実さ」を認めないわけにはゆかぬ。（中略）楸邨から誠実をぬいたら、あとには何も残らないのである。」
同、二四〇頁より引用。

また「（二〇九）幾人をこの火鉢より送りけむ 楸邨」、この句については、こう述べている。

「ふかい感慨をまっすぐに詠みきった名句である。「罌雲」（二〇六）や「海越ゆる」（二〇八）と比較して、ずっとわかりやすく、しかも把握は深い。このへんになると、難解俳

句の称号は、どこかへ返上すべきかもしれぬ。」同、二四一頁より引用。

「『沙漠の鶴』（昭和二十三年刊）や『火の記憶』（同年刊）にはいたるところ「死」の意識が影を曳く。その影が、現実の姿となって彼に迫ったのは、昭和二十五年五月二十三日夜の夜空襲であった。

（二一〇）火の奥に牡丹崩るるさまを見つ

楸邨

詞書（略）。彼はその三月六日、はじめて自分の家をもったのだが、百日に満たずして焼失したわけである。紅蓮の炎が座敷を包んだ。もう手がつけられない。すべてを放棄して身ひとつで逃れようとする眼に、ちらりと映ったのが、火の奥にのまれてゆく牡丹の花であった。まことに凄絶を極めた句で、この生死の境に在って、牡丹の色彩を眼底に把握した俳魂の強靱さはちよつと驚異である。家を失った楸邨には、悲痛な流寓の日が続く。『野哭』（昭和二十三年刊）と『起伏』（昭和二十四年刊）の時代である。（中略）荒れはてた街、すさんだ人心、生存をおびやかす飢、そのなかで生きてゆかねばならぬ（中略）この「かなしび」が

（二一一）鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる

楸邨

の暖かいペーソスとなる。（中略）この魚は、彼の風貌とと

もに、愛すべき庶民性を感じさせるのだが、それが全身凍てたのを、容赦もなくぶち切る刃の無表情——。この句が昭和二十三年の作であることを忘れないでください。困窮と社会悪に充ちた昭和二十三年の作であることを。」同、二四二—二四三頁より引用。

二九：「楸邨俳句覚書」沢木欣一

「俳句」昭和二八年（一九五三）三月号。角川書店刊。（以下、角川書店刊は略。）五六—六一頁。

編集部からの課題、「楸邨俳句の批判」として執筆している。

「楸邨俳句の意義は、俳句を日常生活の基盤の上に」しっかりと置いたことである、という。そして、現代人の生活と俳句を結合させ密着させようと、その努力を要する態度を、強直に楸邨は持ち続けて来た、と述べる。その上で次の四つの批判を加える。第一に「俳句としての骨格が弱い」という。「ああ蝸わがおもふとき声おこる」（『寒雷』）などの句の短歌的抒情性が、俳句の内に向かつて凝縮せず外に流れ出るところ、また「飴なめて流離悴むこともなし」（『野哭』）などに、一句としての独立性の希薄をあげる。第二に「飢せまる日もかぎりなき帰燕かな」（『野哭』）等の句を引いて「対象との結びつきが弱い」「燃焼度の不足」を

指摘する。この二点は実体の把握に弱いことに関して、第三点として、もつと感性を働かせて欲しいという。第四に「以上三つの弱点は相関連して観念を露出しやすい」と批判する。

三〇：「人間の大きさへ・加藤楸邨」山本健吉

「朝日新聞」昭和二八年（一九五三）十一月一日刊。

「人さまさま」のコラムの一つである。「志賀直哉は自分がこれまでに出会った三人のすぐれた人物として、内村鑑三と武者小路実篤と祖父の志賀直道とを挙げている。もし加藤楸邨（かとう・しゅうそん）が、同様にして三人を挙げるとすれば、師の水原秋桜子と能勢朝次を挙げるかどうかは別として、少なくとも父の加藤健吉だけは、絶対に挙げるにちがいないと思うのである」と述べる。「かくれた求道者であった父の姿は、またそのまま楸邨の姿でもあった」と、楸邨のこれまでの履歴を記す。そして「彼の俳句にフアンが多いことは、同時に彼の俳句の感傷過多を物語るものであり、その感傷性が、また求道的観念性ともなつて」「真実感合」の説教とともに、若い俳人への魅力となるのだ。彼の俳句的骨組みの弱さは、その短歌的な詠歎性に起因しているが、家を焼かれ、流離と病苦のはてに、／鮫鱈の骨まで凍ててぶちきら／など彼の近來の句は、弱さを強引に強さに転化し、意図せず

してその人間のおおらかさを現しはじめている。かつて「かなしび」に一辺倒した楸邨の句に「ユーモア」がただよい始めたのは、彼の大成を物語るものだ。カオスの中から、真の楸邨が誕生したといつてもよい」という。

三一：「楸邨私抄」神田秀夫

「俳句研究」昭和二九年（一九五四）五月号。一二―一五

頁。

「加藤楸邨が現代俳句の一柱石たるは恐らく何びとも異論のない所であらう。楸邨を除外して現代俳句を語ることはもはやできなくなつた」という。そして「ホトトギスの写生の中で育つた草田男」と違つて楸邨は「その意欲的な体当りで踏み込んで来る作風が、やゝもすればうはずつて、観念的になり感傷的になるのは馬酔木育ちの脆さ、弱さであらう」といい、一方、波郷は「一元的に俳句を観てゐるから、楸邨のやうに二律背反に苦しむことはない」ので「俳論は殆どやらす」「敵がない」が「楸邨は口に筆に俳句を論じ、且つ教へたから、それだけ自縄自縛にも陥り、敵も作つてゐると思う」と人間探求派といわれる三人の作家を比較する。楸邨の作品に関しては「火の中に死なざりしかば、野分満つ」「死ねば野分生きてゐしかば、争へり」の句のような「因果関係の

論理的表現」には好感が持てないとする。しかし今「寒雷」に発
表されている「顎に汗怠けてゐるも楽ならず」「鶺鴒は若き日の
妻寄り来るさま」などの「句には、もはや気負ひ立つて肩をこら
した楸邨はゐない」という。昭和二八年九月、角川「俳句」に寄
せた「遠き夜明け」三〇句の「壁に巨大な蟻螂の影基地ひろがる」
「基地一千さあ唐辛子赤くなるぞ」の作に、「句材の性質上、珍
しく若々しい激越ものぞいてゐたが、全体としては、雌伏して英
気を養つてゐるとでもいふやうな句境に見えた」という。

余談として「不思議に思ふのは楸邨とはどういふ構造をもつた
作家なのであらうか」と述べる。

三二：「師を語る 加藤楸邨」森澄雄

「俳句研究」昭和二九年（一九五四）五月号。五六―五七
頁。

楸邨の「讷に読みゆきつひにモーゼは荒野に死ぬ」の「讷に読
みゆき」とは又何と不器用な素っ気ない表現だろう、という。「楸
邨俳句の拙さ―だが俳句で一体巧いとか、拙いとか、どういふ事
なのか」ともいう。「ともかく、この一句は、彼が論文などで好
んで使ふ発想契機といふ論理的な言葉、そして具体的には何一つ
説明してくれぬこの明晰な言葉とは別に、楸邨俳句の生まれてく

るもつとはるかな、暗い人間的発想の源泉へ、また楸邨といふ人
間の根源の思想と云つたものへ僕を導いて行つて呉れる」という。

三三：「加藤楸邨」金子兜太

「俳句」昭和三〇年（一九五五）五月号。四九―五四頁。
第八句集『起伏』と、まだ句集にまとめられていない「寒雷」
誌上の「人間抄」の作品について鑑賞している。「冬鴟や怒りほ
とほと酔に似る」や「鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる」のよう
な句が楸邨の本質、という。そして西東三鬼と楸邨を比較して三鬼
は「論理を無視し、自分の体質だけで押し」、楸邨は「本来健康
で、必然を求める」「上向型の人で、三鬼はあるがまゝを押し
ゆく現在型の人」と述べる。楸邨の作品に露呈した庶民性、日常
性の解決の道は「雪に額近づけ曳くや肥櫓を」などの句の強力な
リアリズムにある、と述べる。

三四：「『山脈』を読む―加藤楸邨覚えがき―」志摩芳次郎

「俳句」昭和三十一年（一九五六）三月号。二三―二九頁。
『山脈』には「円光が遍満している感じだ」という。集中の屈
指の秀句は「落葉松はいつめぎめても雪降りをり」といい、この
句碑を落葉松林の一角に建てたい、と空想する。「あまり目立た

ぬ場所がよいであらう。その除幕式は、必ずしも雪の降つてゐない日がよい。落葉松が芽を吹きはじめ、浅間あたりに残雪のひかるころ、たぶん楸邨は、迷惑がつて、出席しないだらうから、本人の意志を無視して、この句を愛する数人のひとびとで、すべてを執り行ふのである。(中略)それくらゐ、この句が僕は好きである。他の数千句がなくても、僕はこの一句あるがために、かぎりなく楸邨に好意を感じ、終生敬意を払ふであらう」という。

三五：「楸邨俳句鑑賞(一)——(三〇)」矢島房利

「寒雷」昭和三二年(一九五七)一月号—九月号、一月号、昭和三三年(一九五八)三月号、五月号、八月号—十月号、一二月号、昭和三五年(一九六〇)五月号、七月号、九月号、一〇月号、昭和三七年(一九六二)一月号—三月号、五月号—七月号、九月号、十一月号、昭和三八年(一九六三)四月号、一月号。

『寒雷』から『隠岐紀行』、「大陸行まで」、『沙漠の鶴』、『山脈』までの楸邨句を鑑賞している。最終回の昭和三八年「寒雷」一月号に「ぼくはまず、ぼくにとつて未知の世界に属していた楸邨先生の姿やら、寒雷の動きやらを、確実に記録再現したい気持ちをもつとも強く抱いていた」と執筆の動機を記している。

楸邨の俳論「真実感合」についての、昭和三三年三月号「楸邨俳句鑑賞(一一)——『雪後の天』(2)——」中の次の一節を引く。

「(「真実感合」がそのような誤解(*草田男氏の「楸邨氏への手紙」中の「貴君の「真実感合」という言葉には「眼」(*||「写生」)がありません、と指摘されたこと)を招くおそれをもつていることは確かであり、それは敢えて「真実」というようなあまりに、文学的、なことを用いた造語の欠陥である。)」前出、七頁より引用。

三六：「加藤楸邨」木俣修

『現代俳句文学全集』月報「第四号」昭和三二年(一九五七)七月、角川書店刊。二五—二七頁。

『山脈』の作品の楸邨のヒューマンな息吹について語り、「自然をうたつても、それは外なる自然でなく、楸邨の人間的な精神によつてきりとられた内なる自然である。今日に生きる一人の人間のはげしい意志がこめられた自然である。俳句の新しく生きる場の発見がここに見られるのではないかと思はれる。楸邨以上でもなく、楸邨以下でもない。真実の楸邨の全身が投げだされている」という。

三七：「一漂泊者の像」志城柏（*||目崎徳衛）

「俳句」昭和三三年（一九五八）三月号。一〇五—一二九頁。

その「1序」に「彼を個性としてよりもむしろ一つの典型としてあつかふ方法」の論という。「性格」において島崎藤村を「触媒的に使ひながら楸邨を語ることが便宜だと思ふ。それ程種々な点で二者は自然に連想される資質を持つてゐる」という。楸邨の最初の俳号が「冬村」であつたことについて、こう述べる。

「かうして、第一名前からしてひどく藤村に似てゐるが、これは無論トウソンといふ語感に対する好みが藤、楸二家に共通してゐたといふことはいへるにせよ、先づ一つの偶然にすぎなからう。」同、一〇七頁より引用。

「藤村が木曾の馬籠の本陣の子として生れ、楸邨が鉄道員―駅長の子として生れたといふことも両者の後年の漂泊の思ひを培ふのにそれぞれ若干の共通な遠因になつたかもしれないが、これも又先づ偶然の一致といふべきであらう。両者の父がともに旅人の送迎を業としたことは偶然だが、両者の父が共に一種異様な一徹の求道的性格を持つてゐたことは単なる偶然とのみは済まされない」同前。

「彼（*楸邨の父）は漢学の素養から出発して外人宣教師に

従つて英語を学び、すすんでキリスト教に入り、尚そこに行き着くまでに「福翁自伝」や兆民、枯川からイプセン、バイロン（中略）等東西古今の古典を渉猟し、「四十代の半ばを過ぎてから、父は次第にキリスト教に内面的な心の落ちつきを求めていつたのだつた。そしてさういふ「典型的な明治初期の日本人の姿（*楸邨著「内村鑑三全集と父」『回想の内村鑑三』」を示した人物が生涯の遍歴の帰結を内村鑑三への傾倒に求めたことはすこしでも近代日本思想史に触れた人々をして膝をハタと打たせる位自然な成行であらう。実は私（*志城）は「回想の内村鑑三」の一頁に全く偶然に楸邨の右の一文を見出した時、楸邨についての私の視角がたちまち判然と定められた様に思つた位である。無論楸邨の父の信仰とストイシズムはどこまでも楸邨の父健吉のそれであつて、子たる楸邨のものではない。しかしそれは楸邨の生得の資質の上に相当深い影響を及ぼしてゐることは否定できない。」同前。

「楸邨の父健吉が傾倒した内村鑑三ほど明治の青年に深刻な影響を与へ思想家はゐない（中略）内村に学ぶことによつて自我に目覚めた明治の青年達は申し合せた様にある時期内村に反撥して（中略）内村の拒否した近代的悪徳の中へ内村か

ら享けた純粹な情感でまつしぐらに飛びこんで行った。正宗白鳥、小山内薫、志賀直哉などが、近代日本の思想的アナキーを自分の十字架とすることによつて各々の文学を完成し、次の時代の担当者となつた姿を私は思ひ浮かべてゐる」同前。

「かういふ筋道を念頭において考へると、楸邨が明治人の典型に近い彼の父から享けたものをやがてどの様に繼承的又は反逆的に發揮したかは（中略）興味深いところである。はたして楸邨は、

「小学校時代父に伴はれた教会通ひの後、私も洗礼を受けてゐる。しかし父の死後、中学校を出た年頃から、私の精神的な彷徨が始まつてゐる。（*楸邨著『現代俳句文学全集・加藤楸邨集』附記）」

と告白してゐる。これは私（*志城）にとつて至極当然な進歩と見える。それによつてはじめて彼（*楸邨）も又近代文学の中に一つの席を占める予約をした訳である。」同、一〇七—一〇八頁より引用。

「藤村の場合にも又楸邨の場合にも見逃しえないのは、彼らの父がともに彼等の自我が完全に目覚める以前に早く亡くなつたことであつた。彼等の父の早い死は（中略）父と父の具

現してゐる前代の倫理及び觀念に對して反逆する必要を失はせ、ごく自然にそれから離脱し移行することを可能ならしめた。新旧世代の間にしばしば免れえなかつた、そして事実たとへば正宗白鳥の「何処へ」や谷崎潤一郎の「異端者の悲しみ」などに苦渋に満ちて告白されてゐる、あの父への反逆闘争を彼らは体験する必要がなかつた。」同、一〇八頁より引用。

「その代りに藤村も楸邨も後年符節を合した様に彼等の父を懐かしく回想する。藤村はヨーロッパ紀行「海へ」のあの昂ぶつた呼びかけにおいて、又楸邨は紀行「隱岐」の中で。これらの回想は人の子たる我々の深い共感を誘ふが、しかし半面たとへば楸邨が昭和期を風靡した国粹的反近代的な世の動向と対決する場合において、それと徹底的におのが敵手として抵抗する立場をとりえなかつたことと若干の関連がないこととはないであらう。」同前。

「父の早い死が彼等（*藤村と楸邨）に及ぼしたもう一つの影響は彼等を早く世路の艱難の中へ投げこんだことである。（中略）年譜によれば大正十二年、楸邨十八歳の時である。その秋の大震災を機に時代はやうやく社会運動の全盛期を迎へ、学生の左傾する者が続出することになるのだが、この時

さういふいはゆる進歩的知識人の範疇に彼を加はらせるコースから彼は父の死によつて決定的に脱落したのである。金沢一中を出た同窓が四高の白線帽を冠つて闊歩する姿を眼にしながら松任小学校の代用教員にならなければならなくなつた彼が、二十数年後尚沢木欣一のかむつてゐた四高の制帽にはつとさせられたと告白してゐるのも、この余儀ない人生の挫折が彼に与へた意味の大きさを推察させる。楸邨がいはゆる知識人でなく庶民の側に立つといふ私（*志城）の観察はその大きな契機をここに見出すのだ。（中略）「かけがへのない青春」の数年をこのコースから離脱したことは決定的である。後年それが学識や履歴の上ではどんなに回復されようが、人間的類型の上において大差が生ずるのはやむをえない。」同、一〇八―一〇九頁より引用。

「最後に私（*志城柏）が藤村と楸邨の類似のもう一つの点として挙げたいのは彼等の重々しくひどく暗示的な表現であるが、それはこの体質のおのづからなる帰結なのだ。（中略）楸邨独特の重々しさを、山本健吉は「もつともカオスを含（*角川文庫『加藤楸邨句集』「解説」）」むと適切に形容してゐる。山本はこれを楸邨の長所としていつてゐるのだが、一方には草田男のやうに、これを「思ひ入れ」「思はせ振り」

だとして当人自身も心なき大衆をも眩惑すると排斥する観方（*草田男「楸邨氏への手紙」）さへあるのも、藤村のその面がしばしば人に嫌悪され非難されたことと共通である。

梅雨の雷何か忘れぬし胸さわぐ

（句略）

寒雷や踰えがたきもの巖とあり（寒雷）

言葉にすれば直ちに本来の重量を失つてしまふ云ひ様の内的鬱屈が彼（*楸邨）を支配してゐる。（中略）「何」の語を多く用ひたり、「踰えがたきもの」などといふ短詩型文学には致命的な持つて廻つた表現をあへて試みるのは、技法を犠牲として自身の内的な必然に作者が殉じた結果である。沈黙をモチーフとする句が一頃の楸邨に際立つて多いのも沈黙を強ひられた時局の圧力の結果と単純にみない方がいい。どんな自由のもとでも所詮言葉に纏めることの不可能なあるカオスが彼を「沈黙」せしめたのだ。」同、一〇九―一一〇頁より引用。

「駅長の父に従つて転々した生ひ立ちが彼（*楸邨）の腰を落ちつけなくしたことは全く否定できないが、しかし（中略）仮に彼が故郷を持つてゐたとしてもそこにぬく／＼と安住するはずはない。（中略）一入故郷を厭ひ呪ひあるひは敵視し

た多くの近代詩人たちと同様に、彼も又故郷を脱れるために一層はげしく動いたにちがひない。要するに秘密は彼の生ひ立ちなどでなく、彼の資質に帰する。一層病的にいへば楸邨が一個の「漂泊者」であることに帰するのであった。自己の内部に自己自身でもうまく制御しえない渾沌たるカオスをもち（中略）安住を人一倍希ひながらしかもたえず彷徨してゆかねばならぬ、さういふ星のもとに生まれた古来の多くの「漂泊者」の系譜に楸邨も又通つてゐる（中略）私（*志城）は藤村をあまたたび引き合ひに出したが、ここで又結論的に二者の類似はその漂泊的性格の類似であるといはねばならないのだ。」同、一一一頁より引用。

「私（*楸邨）は時折五人の子供の前で、私の家庭に属してゐるのではない、全く別の在り方をしてゐる五人の人間をみつめてゐる時がある。（中略）かういふ無力な自分を感じたとき却つて私の底の方から、どうにもとどめきれない詩の原型のやうなものがこみ上げるのを感じる。（*楸邨著「無力」『現代俳句文学全集・加藤楸邨集』）」

自作「霜夜子は泣く父母よりはるかなものを呼び」を自解しつつかう楸邨は語つてゐる。ここに語られた孤独は正に近代

のそれである。又安住を拒否せざるをえない漂泊者の姿である。この霜夜の句は後年のものだが、「寒雷」の「蟻殺すわれを三人の子に見られぬ」についての自註でも彼はそれが「日常生活のときどきに、言ひやうのない空虚な感じが湧くときがある」によつて詠まれたといつてゐる（*「都塵の中に」『現代俳句文学全集・加藤楸邨集』）。」同、一二二頁より引用。

三八：「加藤楸邨鑑賞」村野四郎

『現代俳句全集』第四卷。昭和三三年（一九五八）一月、みすず書房刊。五八―六三頁。

楸邨の自選百句に鑑賞と評を述べている。かつて山本健吉氏が楸邨・波郷・草田男を芭蕉的方法、秋櫻子・誓子を蕪村的方法と分類したが、村野氏はその内の波郷・草田男は蕪村的、楸邨は芭蕉的と分ける。「草田男の論理的演技性や波郷の抒情的演技性は、少なくとも芭蕉の方法的特質ではなくて、蕪村のものであり、そうした蕪村的性格が多分にこの二人を前衛的に際立たせているところがある。ところが楸邨には、この際立ちがない。あたかも演技というものを知らないかのようなのである。」という。この芸術的な「抜け目のなさ」から外れているところが芭蕉の特質であつた

と同様に、楸邨の特質の重要な部分を形成している、という。

「波郷、草田男は、存在をさまざまに配置することによって、新しい関係、新しい空間を造ろうとする。彼らの演技性とよばれる造型意識はそこから生まれてくるのだが、楸邨においては、存在を配置するのではなくて、一つの存在を断裁し、かくさされているものを開示することによって、あるがままの世界を示そうとする」という。つまり「楸邨の句の本質は、まったくこの存在論的な開示性にあるとっていい」と述べる。「いかなる場合でもこの存在論的な驚愕のどよめきが、楸邨の魅力の主題をなしている」という。

三九：「意地悪な加藤楸邨論―現代作家批判―」能村登四郎

「俳句」昭和三四年（一九五九）九月号。四七―五二頁。

初期から『山脈』以後の楸邨を（1）「巨匠への道」、（2）「自己への凝視」、（3）「学問と詩のあいだ」、（4）「観念的な皮相的な」、（5）「傷ついた楸邨」、（6）「詩のない「人間抄」」、（7）「生活感覚」、の六章に論じている。（5）において「『野哭』の題名の如く戦時に生きた一人の作家としての謙虚な反省と悲哀が色濃く流れているが同時にあまりにも自己を悲劇化した欠点も少なくなかった」という。最後に、「人間抄」

から最近「老牛抄」となった句の中から「雪が（*そ）い。そいで老牛の皮膚睡られず」などをあげて、こう述べる。

「ゆつたりとしてしかも重量感をもつて、自分の生きる姿をたしかめながら歩いている鈍牛楸邨の姿がみられたので何かしら安心した。こうして楸邨は巨匠への道をゆつたりと歩みつづけるだろう。」同、五二頁より引用。

四〇：「俳人訪問・加藤楸邨」細見綾子

「俳句研究」昭和三七年（一九六二）九月号。七八―七九頁。

都内高円寺の病院に二年ちかく居て退院した楸邨の、庭の石楠花の花を訪ねている。

「石楠花がお好きですか。」「ええ好きです。」先生は明快にそう答えられた。石楠花がお好きなことは、十数年前、金沢においでになった時、彦三と云う町の植木屋で、探された時から知っていた。しかし、たしかめて見て安心をした。石楠花はよい花だから。又そんなに長い間、この花に対する愛の変わらないことが、たのしかった。（中略）俳句の話は、しなかった。はじめから、しないつもりであった」同、七八―七九頁より引用。

四一：『加藤楸邨』（俳句シリーズ人と作品16）田川飛旅子

新訂二版、昭和五八年（一九八三）三月、桜楓社刊。「初版」昭和三八年三月刊。

田川氏は「まえがき」（―新訂版にあたって―）に「加藤楸邨先生（以下敬称略）は、昭和十五年に入門して以来私の俳句の恩師である。（中略）（*楸邨は）「人間探求派」といわれる行き方の旗手として世に出た。その主張は「俳句の中に如何にして人間を生かすか」ということで、文学運動として最も基本的な正しい方向性を持っていた。（中略）加藤楸邨の魅力は勿論作品自体の中にあることは云うまでもないが、その特殊な個性のあふれる強靱な人格そのものにもあることは疑う余地はない。楸邨のような単なる俳句作りの職人とは異なった大きな人間が、何処で形成され、またそれがどのようにして大木のように育ったかを、私どもはつぶさに知りたいと思う」と述べている。「作家研究篇」は「「寒雷」以前」からはじまり、第一句集『寒雷』から『山脈』それ以後（*新訂二版では「『吹越』の時代およびそれ以後」）までをそれぞれの句集の内容、時代背景などを詳述し、「鑑賞篇」は一句を一頁に鑑賞をしている。

「棉わたの実を摘みみてうたふこともなし 昭和六年作／句集「寒雷」（古利根抄）／この句は加藤楸邨の第一句集「寒雷」開卷第一の句である。いわば、楸邨の俳壇への第一声といつてよいかも知れない。」同、二三一頁より引用。

「草の露下りみてもみも摺すり了をへぬ（中略）前の句の解説をもう少し補足すると、この頃の句で棉を詠ったものに「摘みてわけてゐる棉の実に夕日影」「棉を撰る明るき月夜つづきけり」などがあるが、何れも作者の主情を抑えて、対象の美のみを俳句の形に結晶させようとしている。処が「棉の実を摘みみて」の句は「うたふこともなし」と対象の人間の中へ、作者の同情、生活のきびしさを共に嘆く気持を注ぎかけるようにしている。楸邨俳句の特色である俳句における人間関与がこの第一句から發揮されていることは興味ふかい。（中略）こんなに晩くなって漸くもみを摺る仕事が終りになるのである。上句の美しい叙景が下句のきびしい労働描写で受け止められ（中略）農生活に対する深い同情が句裏に溢れている。古利根の自然の中で楸邨の感動がこういう発露をしたことは面白い。」同、二三二頁より引用。

「船戸／行きゆきて深雪みゆきの利根とねの船に逢あふ 昭和七年作（中略）船戸は粕壁から東南へ二十軒、江戸川と利根川の間

の運河沿いの村である。「行きゆきて」という語調には、折からの大雪に膝まで没しながら、歩み悩んで船戸まで歩いた距離感がよく出ている。漸く辿りついた船戸の渡しで、利根川を航行してくる深雪の中の船に出遭ったという句である。大した内容の句ではないが、楸邨が水原秋桜子の作風を学んで、「馬酔木」の基本的な短歌調を全く身につけたことを示している。大きくたゆとうリズムの中で、若い日の楸邨が啄木の歌などから学んだ生をあわれむ感傷が息づいている。

「行きゆきて」というおらかなリズムの次に、「深雪の」「利根の」「船に」「逢ふ」とやや小刻みな息づかいのリズムが続いていることが、この句の一読した際の調子のよい恍惚感を与えていることも見逃せない。「降る雪にさめて羽ばたく鳴のあり」「山茶花さやなばなのこぼれつぐなり夜も見ゆ」「あはれなる寄生木さへや芽をかざす」「夏蚕なつぐさいまねむり足らひぬ透きとほり」など、このころの句は水原秋桜子の膝下にあつて従順にその作風に学んだ時代の作品である。こうした楸邨の揺籃時代ともいふべき古利根抄の時期は昭和六年から九年に及んでいる。」同、二二三頁より引用。

「かなしめば鴟とと金こん色じきの日を負おひ来く（中略）」「愛林抄」の後期に「愛禽抄」と題した作品を作り、鴟や鷹や鷺を詠った

ことがある。林から禽ととへという素材の転換は、林のような静的な対象から、禽のように動く素材へと眼を移したことを物語っている。楸邨は意志的に自分の作風を進展させることに努力した作家であるが、こうした処にもその一端がうかがわれる。心に悲しいことがあつて、うちしおれているとき、キキと鋭い声を立てて一匹の鴟が枝頭に現れた。見上げると、燦然と輝く日の光をうしろから受けて、鴟は金色に染っている。その威厳ある姿を見て、自分もはげまされるような気がしたというのである。「かなしめば」という言葉には日本語の複雑なニュアンスが含まれていて、必ずしも単純に「悲しめば」と解してよいかどうか分らない。この辺から楸邨の短歌調は全くぬけて、俳句のリズムを身につけている。「冬日没る金剛力に鴟鳴けり」「鷹たか翔たてば畦しんしんと従へり」「鷹すでに雲を凌げり雲ながる」「冬の鷺あな羽搏たんとしてやみぬ」など「愛禽抄」の作品はディオニゾスの男性らしい響きが備わっている。」同、二二六頁より引用。

「屋や上かみに見し朝あさ焼やきのながからず 昭和十二―十三年／句集「寒雷」（都塵抄）／粕壁中学で教鞭をとりながら、向学心に富み、研究の意欲に燃えた楸邨は、種々動揺し迷ったあとに、秋桜子先生の徳憑と妻のすすめに従って中学を辞

し、妻子を率いて上京、齡三十二歳にして東京文理科大学国文科に入学し。一周りも年の若い友人と共に勉学にいそむことになった。居を小石川護国寺裏にあたる坂下町四十番地に卜し、放課後は「馬酔木」の發行所につとめ、石田波郷と共に編集に従事した。古利根から愛林抄へと發展してきた自分の作風を、自然から都会へと一変させると同時に、作句の主体である人間の優先性を深く認識して人間の生活の歩々が俳句の中に強く生かされることを熱望した。この句は都塵抄と題された作品群の冒頭の一句である。(中略)屋上から一望される広い東京の地平に燃えたつ朝焼はもつと長かれと願う楸邨の氣持に反して、淡々と色彩が褪せて終つてしまふ。(中略)「ながからず」と否定的な表現で云いあらわした氣持の中に新しい生活に踏み出した楸邨の不安な表情もくみ取れる。」同、二三七頁より引用。

「がくもん学問のたそがれ黄昏さむく物を言はず(中略)あこがれ、あこがれして職まで抛げうって上京してきた学問ではあるが、いざ学問と対決してみると必ずしも学問が自分の心の中の満たされない部分を完全に埋めてくれはしない。(中略)寒い夕方、こんな嘆きをもって、机の前で学問について考え耽っている。(中略)この句は山口誓子の「学問の寂しさに耐へ

炭をつぐ」とよく対比して論ぜられるが、誓子の句はきちんと書き上げられた脚本のような外面性と筋書きがあるのに対して、楸邨の句はもやもやとした混沌と観念的な辺縁の拡張が感ぜられる。よかれあしかれ両作家の特色をそのままに示したものとして興味が深い。これも否定形終止法で止められている。」同、二二九頁より引用。

「かぜ風邪の床一本の冬木目を去らず(中略)風邪に臥した床でも考えることを止めない作者の目に窓越しの一本の冬木が映っている。冬木を見ることによって、自分の心を計ろうとする作者の目は執拗に冬木を離れない。しばらくすると今度は冬木の方が目を離れてくれない。冬木はさながら第三者の自分のような存在になって、じつと自分を見つめているように感ぜられてくる。作句が出来るときはこうした関係のときだ。混沌としている自分の詠いたいものが、突如過飽和の溶液が結晶を開始するときのように、突然凝結し、表現をとるのである。「相見ざる人ゐて冬木暮れきらず」「顔・顔の中冬木ありてうち揺られ」「風邪三日つくづくくと手を見ることあり」「朝焼の風の中なる一樹鳴り」「子を呼べり冬雲の下に一日ゐし」など、どの句を見ても、戦争へ一路傾斜を走りはじめた日本人の憂鬱を表現していない句はない。「冬

木」というのは枯木とは違って、常緑樹の黒ずんだ冬の姿を示すものと私は解釈したい。冬の大気の中に凝然として、黒い葉叢を密集させて立っている一本の樹は日本の運命を象徴する黒い喪章のように、ちらっと感覚されたのではなからうか。それを俳句は奥に秘めて「一本の冬木目を去らず」と表現しているが、暗い目つきは流石に隠せない。」同、二四〇頁より引用。

「月の前しばしば望^{のぞみ}よみがへる（中略）大体、暗い句の多いこの頃の楸邨の句としては「望よみがへる」というような明るさの漂っている句は珍しいようにも思える。然し、よく読んでみると「しばしば望よみがへる」という表現の中には、逆に背景の暗さが、よけい深淵のような深みをたたえて底知れぬ不気味さを示していると見る方が本当であろう。あらゆる無駄な夾雑物を取り除いてしまつて、最小必要の限界で表現する俳句の宿命が、この句のような明暗の複雑な対象を描いて散文では示せない境地を行かしている。短い詩型の中で物を云う困難と、その困難の道に挑む楸邨の昂然たる姿が目に見えようである。この俳句などは発表の当時は非常に難解とされたのである。」同、二四三頁より引用。

「鰯^{いわしぐも}雲ひとに告ぐべきことならず（中略）中村草田男、

石田波郷、加藤楸邨が並んで人間探求派と呼ばれ、難解派とも称えられた当時の、この句は楸邨の難解句の代表作のように云われた作品である。（中略）鰯雲だけは心あらば、今の自分の心を知っていてくれるであろうかという句意である。この思考の内容が何であるか勿論わかりはしない。（中略）その重大さと内容の質とが僅かに想像される。（中略）「天の川歩をかへすとき思ひ出づ」「柿食ふやかかるかなしき横顔と」（中略）「ふと思ふ深夜秋風に逢ひし顔」「ひとりごち炎天を歩きぬし乞食」など、このころの句には、どの句にもどの句にもはつきりと表現出来ない口ごもりのような表白が見える。難解派といわれた一つの原因である。」同、二四四頁より引用。

「その冬木誰^{たれ}もみつめては去りぬ（中略）こんな句を誰か他の人が作つたことがあるであろうか。否である。これはまぎれもなく楸邨の独擅場である。こんなに楸邨の体臭のいやというほど感せられる句はない。「その冬木」というのは、恐らく楸邨の家の窓からみえる「風邪の床一本の冬木目を去らず」の冬木であるかも知れない。悲しいこんな時代には、話すことよりも黙っているほうが充実するし、冬木を凝視することは更に救いである。（中略）そういう象徴として、冬

木を楸邨は心の中に育てる。「崖」とか「冬木」とかは楸邨の大切にした素材である。セザンヌの林檎に相当する。」同、二四五頁より引用。

「冬帽を脱ぐや蒼茫たる夜空（中略）「蒼茫たる」といった漢語の堅いリズムに託して楸邨は何を云おうとしたのであろうか。自然の偉大さと人間のみじめな小ささの対比感であつたかも知れない。帽―茫の同音繰返しのリズムも舌にのせると快い調べを発する。（中略）「冬帽をかぶるや深き瞳となりぬ」「鳴らしみるつひにひとりの凍靴を」「脚冷えて靴をひそかにうち鳴らす」なども、この句と地続きの処でうたわれた学問と生活のかなしびの声である。」同、二四七頁より引用。

寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃（中略）楸邨に「寒雷」という題の随筆があるが、その中に、「寒雷という語は実は私の造語である。十数年前、冬の雷というのでは言いきれない重苦しい自分の生活気分を詠みたいと思って、寒中の雷を寒雷と詠んでみた。」（中略）「そのころ晩学の私は三十歳を肥えて妻子をかかえて大学生にかえっていたが、ちょうど日本の社会情勢も次第に重苦しさを加えてきていたころだった。鬱屈している心中のものが、発しようとして発しきれ

ない感じが、寒雷というものでいくらか生かせたような気持ちがあった。（中略）その後気をつけて中国の古い詩などに前例がないかと探してみているが、今のところ見当らない。」とのべている。（中略）一種の爽快な開放感が漲った一句で楸邨の代表句の一つ」同、二四九頁より引用。

「海越ゆる一心セルの街は知らず 昭和十四年／句集「颯風眼」（中略）玄界灘を越えて戦地へ向かう（中略）兵士の一心を春から夏へうつり、軽いセルに衣替えした人の行きかう都会はすっかり忘れてしまっている、という句意であろう。都会の忙しい生活と戦争との間にある空白なへだたりを鋭く指摘しようとした九で、作者は自分の心をも、都会人の心理の中に加えて、痛切な自己反省をしているのであろう。

「街は」と主語の形をとっているので右のような解を試みた。「街を」なら勿論、異った解になってくる。「卒業期征きは今も還るなき」「ひとの遠さ雪後の天を仰ぐとき」「一日寒く辛うじて星煌めけり」「雉子鳴いて忘れうべしやひとの言」など同じころの作品である。楸邨は五尺八九寸もありそうな大兵で、骨格も逞しい。然し、兵役には服したことがなかった。幾人も戦地へ送った楸邨は、自分もいつかはという気持は勿論もっていたと思う。そういう心理の背景が

この句を成さしめている」同、二五〇頁より引用。

「蝸牛いつか哀歎を子はかくす（中略）」妻は、上京後、私の環境の変化からくる気分の不安を感じとって、私自身の中でも妻の気分の反映が明暗の波を惹き起していた。これが子供の世界に反映するのは、教室へ出て講義を聴いたり、自分の研究をしたりする緊張した世界の裏から、はつきり逃げようのない痛さになるのだった。『蝸牛いつか哀歎を子はかくす』『父と子と露明暗の一日かな』『物思へば風邪の子の目が我を追ふ』私は、こんな俳句を作った。」と楸邨は随筆「制服を脱ぐ」（隠岐所収）の中で述べている。蝸牛という、物に驚くとすぐ殻の中に柔い身を隠してしまうあの動物の特性を踏まえて、親に喜びや哀しみの感情をすぐに訴えないで、自分一人でそれを解決してしまおうとする、もう孤独を覚えはじめた幼い子供への親としての深い愛情を示そうとした句」。同、二五一頁より引用。

「つひに戦死一匹の蟻ゆけどゆけど（中略）」このような戦争を批判した俳句がよくも当時の検閲の目をのがれられて存在したものと驚く（中略）今、戦場では人間が、この蟻と同じように傷つき、這い、遂に戦死しているのではなからうか。こう思つて一瞬慄然とする。（中略）「つひに戦死」な

どと昆虫の世界の話をおどけていつているような口ぶりについて、これ程暗い、戦争の悲惨さを批判した句はないと云える。「世に遠きいかり兜虫ずりやまず」「兜虫視野をよこぎる戦死報」「蟻殺すひとはかへりし卓の前」「蠘螂に蠘螂のごとくわが手を立つ」「蟻地獄悔は人間にのみ残りぬ」など楸邨には、小動物に託して心を寄せた作品が少なくない。「同、二五二頁より引用。

「白地しろじ着てこの郷きょう愁しゅうのどこよりぞ（中略）」このころ楸邨は自分の自選した作品に「明暗抄」という題を付して「馬酔木」へ発表している。（中略）一体何故に、そして何処からこのような郷愁が湧いてくるのか、実に不思議だという句意である。非常に感覚的な心理の翳を鋭く捉えて作品化している。白地と郷愁など全く従来は無関係なもの（中略）その無関係のものを、心理の糸をたぐって結びつけた処に詩が発生したといえる。こういう詩的な発想と把握は当時の俳句には少なかったもので、楸邨の開拓したものといっても過言ではあるまい。楸邨は非常に不器用な作家といわれ、俳句に人間を生かすことというテーマの下に、鈍重にして執拗な試行錯誤を終始一貫くり返しているが、別の一面非常に俳句のうまい処がある。この句なども、その俳句の旨い面が発揮されて

成功した例」。同、二五四頁より引用。

「灯を消すや心崖なす月の前（中略）句集「颱風眼」の最後の句（中略）この頃住んでいた坂下町の家には裏に崖があり、一つの素材に執着する楸邨は、一ころ前は冬木に挑戦したように、この数年、崖の句を非常に沢山作っている。（中略）古利根抄、愛林抄には見当らず、都塵抄では「夜の桜うしろに暗き崖懸る」の一句。「颱風眼」ではこの句と他に「崖の木木寒き根を垂らし乾きたり」。「穂高」の中には、「目に崖の露しとすと戦場便」など五句がある。下代田へ転居以後は急に多くなり、「雪後の天」には実に二十六句を数える。崖が何故に楸邨の詩心をゆさぶるのかは、長年の私の疑問であるが（中略）この句の崖は、自分の心が崖をなしている（中略）自分に内蔵する崖である」。同、二五七頁より引用。

「さえざえと雪後の天の怒濤かな 昭和十六年／句集「雪後の天」／芭蕉の研究に力を入れていた楸邨は、芭蕉の俳句が旅を契機として内面的に変貌発展してゆく過程を興味ふかく見ていた。特にこのころ「芭蕉表現研究」が丁度「野晒」にさしかかって（中略）あの旅で、今まで外へ向っていた表現契機が一切内面化し、無化してゆく大へんな転換が行われ

たことを思っていた。ふと楸邨は（中略）隠岐のことを思い出し、この島に流された後鳥羽院が（中略）激しく生き抜き、秀れた作品をのこされた島の風土に接してみたいという旅心をかき立てられた。（中略）この句はこの旅で得た歴大な作品隠岐紀行の冒頭の句で、いわば序詞に当るものである。雪の降ったあとさえざえと空気の引き緊った空に日本海の怒濤が山のようにふくれて押しよせてくるという意味である。（中略）如何にも楸邨らしい体臭の濃い作品でスケールが大きい。」同、二六一頁より引用。

「荒東風の濤は没日にかぶさり落つ（中略）隠岐丸は暴風雨のあとの荒海を渡って知夫島を迂回して浦郷湾についた。「船酔の目に美しや吹雪中」「東風の濤谷なすときぞ隠岐見え来」（中略）「雪の湾幾千の海月流れたり」「春愁やくらりと海月くつがへる」「海月より小鳥賊は迅く流れすぎ」。この句は国賀に怒濤を見に行ったときの句（中略）「没日にかぶさり」という観察が豪宕で、いかにも隠岐の荒天の怒濤らしい。「春日没る岩礁まざと大薊」「巖・濤どこかに笹鳴してみたり」「野火走る巖の背濤がのびあがり」「暗に湧き木の芽に終る怒濤光」「草焼かむ隠岐の荒海よせかへせ」「濤・濤・濤かく眩きつ東風をかへる」「春怒濤少年の日に

何恋ひし」など、いずれもこの時の国賀の怒濤を詠んだ句である。「都塵抄」で時勢と生活の暗さを嘆いた楸邨の暗い影が、この句や隠岐の旅の句ではかき消えて、むしろ荒々しい自然の営みの中に一度還元して、すべて出直してみたいとも思うような作者の姿勢が感ぜられる」。同、二六三頁より引用。

「隠岐や今木の芽をかこむ怒濤かな（中略）後鳥羽院御火葬塚を訪れたときの作品（中略）木の芽と怒濤という二つのものみに、素材を切りつめてしまつて、その関係を「かこむ」という秀抜な措辞を以て見事に統一している。木の芽の若緑を中心にして、その周囲を怒濤の白と濃青を以て埋めてみただけで、色彩的の美しさに眩惑されそうである。上五の「隠岐や今」も、大景の時と処を五文字でもって表現して、ゆるぎのない重さをしめしている。「鳥の名を知らねば仰ぎ松の花」「炎だつ木の芽相喚ぶごとくなり」「木の芽ただ萌ゆべきものか萌えにけり」「その日萌え今日萌え隠岐の木の芽かな」「頬白や篋の秀は隠岐の海」「ひとは征きわれ隠岐にありつばくらめ」（中略）これの作品と比較しても、「隠岐や今」の句は単純化が一段と完全に行われて、句の密度が高く、格調においても秀れている」。同、二六四頁より引用。

「百霊廟／天の川鷹は飼はれて眠りをり（中略）人に「こへいらした機会に私と一緒にゴビの沙漠まで入りませんか」とすすめられ（中略）陰山山脈を越えて北上する道をトラックで出発したのは月明の晩であった。（中略）日没に近いころ百霊廟についた。（中略）戸外に出ると、天の川が驚くほど低く、耀いてかかっていた。滝のように中天に懸かっている。烈しい声があるので見ると、止まり木の上に一羽の大鷹が乗っていた。（中略）昼は寂として身動きもしないが、夜になると烈しく鳴く。野性がこの天の川によって呼びさまされるらしいと楸邨は「沙漠の鶴」の中に記している。」同、二七四頁より引用。

「燐寸摺りてゴビの沙漠の虫を見き（中略）日も傾いたころ、とうとうトラックは湿地帯に飛び込んで動かなくなつて（中略）トフミンまで約三十キロを徒歩でゆくほかはなく（中略）暗くなつてゆく沙漠を歩いた。（中略）歩きに歩いたが目的地は現れず、水筒の水も尽きた。「あれは灯らしいな」と思ったものの、やがて地上を離れて星であったことが分つた。「虫がいると誰かがおどろいたように言う。（中略）燐寸を摺る、ぱつと一間四方ほどの砂礫が照らされる。（中略）たしかに虫である。無限大ともいふべきこの砂礫の暗の

底にかすかな虫をききとめたことは、私達に異様な感動を誘ったのであった。(沙漠の鶴)やがて地平線から一条の火光が馳せてきて、五六騎の騎馬が迎えに来てくれて、楸邨の一行は無事にトフミンに到着する」。同、二七五頁より引用。

「炎天やくるりくるりと踏踏み鬼キの舞(中略)トフミン到着の翌日はトフミン廟の祭の日(中略)跳鬼は頭に獣や鬼の仮面をつけた舞踊で(中略)笛のボウボウという音と鉦のチャンチャンという音を伴奏として、舞が行われる。馬にのるしぐさ、落馬の様子など滑稽な身振りが繰返される。炎天の下でくるりくるりと廻って踊る異国の舞をみていると、(中略)楸邨はかつて能勢先生から伺った能の源流である呪師申楽の身振りのことなども思い出し懐かしがった。」同、二七六頁より引用。

「五月二十三日、深夜大編隊空襲。病臥中の弟を負ひ、妻と共に一夜道子と明雄を求めて火中彷徨／火の奥に牡丹崩ぼたんくづるるさまを見つ(中略)詩人の目は瞬間に現象を詩的につかんでしまう。これは宿業というべきものであろう。それが「牡丹崩るるさま」という表現である。「火の奥に」というのも、単純化と距離感の設定を短い五文字で的確に果している。」同、二八四頁より引用。

「五月二十四日、わが家も焼失す／明易あけやすき樗けにしるす生死せいじかな(中略)とうとうわが家も空襲によって焼失してしまった。(中略)家の傍に、焼けただれた樗の大樹の幹が立っている。(中略)とりあえず無事だった家族の名を記して立去るといふ意味の句である。(中略)失望のどん底にあつて、「かな」止めの古格に則り、感動を極度に抑えて、表面淡々と叙したこの一句の中に潜む無限の思いをきかねばならない。」同、二八五頁より引用。

「雉子きじの眸めのかうかうとして売られけり 昭和二十年／句集「野哭」／「野哭」は終戦後の作品を収めている。「富士の紺すでに八方露に伏す」と終戦の日本を詠った楸邨を迎えたのは住宅難、食糧難である。「わが家なき露の大地ぞよこたはる」「飢すこし秋朝焼のペンありて」「稻妻へ歩を向けしかば諸重たし」「飢せまる日もかぎりなき帰燕かな」などの諸作品がその感の事情を物語っている。(中略)「雉子の眸」の句は楸邨の代表作の一つで、色紙や短冊へよく書かれる(中略)吊るし売られている雉子の眼がぱっちり開き、その眼光はがこうこうと耀いて、さながら生けるが如き姿(中略)という句意である。楸邨好みのはっきり現れた素材で、いくらか誇張のある表現であるが、こう強く表現せねば

いられなかった切迫した作家の気持を十分に伝えるに足る黄金を打延べたような男性的な句である。」同、二八六頁より引用。

「飴なめて流離悴かむこともなし（中略）家を追い立てられて、家族で新しい住居を求めてさまよい歩くような見すばらしい姿だが、元気に励まし合って歩けば、いくら寒くても、かじかむこともありはしないという句意である。（中略）こんな中でも楸邨は若い弟子達とよく議論し、決して弱音は吐かなかった。」同、二八七頁より引用。

「死ねば野分生きてゐしかば争へり 昭和二十一年（中略）「述懐」という題のついた六句の一つである。「吹きめぐる野分に向けし喉仏」「身に沁みて死にき遺るは誇らるる」「秋夕焼に溺れんとするを叱咤せり」「霜の石踏まれどほしの朝いたる」「ある夜わが吐く息白く裏切らるる」などの句が並んでいる。このころ文学者の戦犯追求の問題が文壇にも起り、俳壇でも、戦後いち早く誕生した新興俳句の人々による俳句人連盟などを中心として俳人の戦争協力者の指摘が行われた。それとは別に中村草田男はこの年（中略）楸邨の戦時中の軍人利用を非難した。それらの非難に対して楸邨は夫々文章を以て答えたのであるが、戦争で死に今は物言え

ぬ友に對しての負目を切実に感じ、戦争の真相に暗かった自分を恥じ、これを「傷痕」という言葉で深く肝に銘じ、今後の生き方によって償う以外、ぬぐい去れぬものを感じた。

「述懐」はこうした気持を作品化したもので、この句は、死んでしまったものはもう物も云わず、ただ野分のような霊となって山野を吹きまくっている。生き残った自分は生きていくからこそ、非難に答え、争って生き抜かねばならないという大意である。」同、二八九頁より引用。

「夾竹桃しんかんたるに人をにくむ（中略）森閑と静まりかえって、咲き盛っているその花は非情で、血の噴出を想像させるようでもある。無気味で、執拗で、残虐的で、挑発的でもある。夾竹桃を視野におき乍ら、自分はしきりに或る人を憎む心をたぎらせているという句意である。どういう人を憎んでいるのか具体的には分からないが、生来妥協を好まない竹のような性格の楸邨には対立する人物も少なくない筈である。（中略）「Thou too Brutus! 今も冬虹消えやすく」「梅雨の月一骨片に負荷多し」などの句もある。この句、夾竹桃という季語の中に「人をにくむ」という下句をひき出してくるに最も適当した準備がなされちる。季語のもつ働きを重要視する楸邨は、実作品の中にこのようなよい働きのある

季語の使用の例が数限りなくある。この句と並んでいる「きりきりと紙切虫の昼ふかし」などにもそのことが窺われる。」同、二九三頁より引用。

「サタン生る汗の片目をつむるとき（中略）どんな善人でも、現身であるかぎり罪からはまぬがれない。そうした罪はサタンの働きによつて起るといわれている。（中略）汗の片目をつぶった、その瞬間に悪を意識したのである。その瞬間のとらえ方が機敏で面白く、そこに詩を見出している。楸邨には古格による大真面目の句の他に、この句のように軽く、幾分ユーモラスに遊んだ句も少くない。ある人はそうした面の楸邨の句に秀れたもののある事を指摘している。この句と並んで「ソーダ水言訳ばかりきかされぬ」「昼寝ざめ蛾の鱗粉と畳目背に」「朝露に拾ひて大や一銭貨」などがあるが、これもどちらかと云うと、後者の句に属している。」同、二九四頁より引用。

「パン種たねの生きてふくらむ夜の霜（中略）パン種というのは一種の発酵菌であつて、これを入れて練り上げたウドン粉の塊りは、一夜置いておくうちに、生きもののようにふくらんでくるのである。寒い霜の置く夜に、楸邨はそのパン種の働きをみて、逞しい生命力に感嘆の声を挙げたのである。すべ

ては灰燼からの出直しであつた。このころの俳壇に、深い傷痕を意識しつつも、その傷痕ゆえに、戦争で死んで行つた友人の代りに、俳句を通して今一度真実に迫ろうと誓つた楸邨が、困難の中にたゆまず伸びてゆく力をパン種の中に見出して感動したことは肯けるものがあると思う。この句は「野哭」の末尾を飾る一句で楸邨も相当の自信を以て世に問うた作品に違いない。」同、二九五頁より引用。

「鮫あな鱧かの骨まで凍いててぶちきらる（中略）鮫鱧という魚は大へん不格好で（中略）一見ユーモラスな魚であるが、それが骨まで氷つたままで、ブスリと両断される処は何かあわれがある。作者は見たのである。案外、鮫鱧の中に自分を移入して、ぶちきられる処を空想しているような節もある。「ぶちきらる」という受身のぶつきらばうな表現の中に、ふとそう感じさせるものがあると思う。山本健吉氏はこの句や「虹消えて馬鹿らしきまで冬の鼻」「猫と生れ人間と生れ露に歩す」「木の葉ふりやまざいそぐないそぐなよ」「仮死の蠅胸奥いつかうごくもの」などの作品はユーモアの漂つたものとして、これは楸邨の俳句の長い「かなしび」を求めての彷徨の果てに、また庶民的な感情に滲透することによつて獲得した新しい境地ではなからうかと述べている。」同、二九七頁

より引用。

「火事を見る胸裡に別の声あげて（中略）火事を見ながら、自分の心に別々の声が湧き起り、湧き起りしたという句の意味であろう。（中略）詩人らしい感覚の冴えと、自分の罪をはつきりと意識して、之を反省している善意の人間をつくづくこの句から感じとる。（中略）作者の人間が固定的な或る観念を強く読者に押しつける代りに、ナイーヴに震えるように自信なげな反省と悔恨を示しているのが、却って句を生かしていると見た。」同、二九八頁より引用。

「木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ（中略）病中の句である。（中略）急いではいけない、ゆっくり養生して再出発だと心に自戒の慰撫を与えているという句意である。下句は口語調の問いかけるような柔らかなリズムで言葉を重ね、自らにねんごろに言い聞かせる調子を出している。木の葉の散るいそがしいリズムと対応させて、「いそぐないそぐなよ」と畳みかけているので、却って下句のややユーモアを含めた余裕のある言い方が生きてきている。そう言っているかと思うと、直ぐこの句のあとに、「ねむりまで枯野の風に負けられず」といった句があって、楸邨一流の闘志を發揮する（中略）この句のように、いつも観念していてくれると、も

っと早く病気も良くなるのであろうが、本当はそう大人しくないのが楸邨である。」同、二九九頁より引用。

「霜夜子は泣く父母よりはるかなものを呼び（中略）どうさすつてやつても泣き止まない。あれはきつと（中略）父母よりももつとはるかな自分の生の根源のようなもの―神を呼んでいる声なのであろうという句意である。「父母よりはるかなもの」という把握は鋭い。」同、三〇〇頁より引用。

「^{かひ}黴の中言葉となればもう古し（中略）混沌として言いたいものが心の中に渦を巻いている。それが表現を求めて、傾斜をつくり、だんだんと位置のエネルギーを得てポテンシャルが高まってくる。突然、それが具体的な把握と結びついて言葉となってくる。しかしどうも（中略）言葉になつてしまふともう古ぼけてしまい、元の混沌とした自分の言いたかつたモチーフとは違つてしまふという句意である。「黴の中」という季語の中には「もう古し」と表現する伏線が張られているという点で、この二つの表現がやや即きすぎている嫌いはあるが（中略）表現をうるための血の滲むような苦心が句の中に語られている。前年からこの年にかけて、楸邨は歴大な量の「俳句覚え書」という俳句入門の稿を「寒雷」へ連載しているのので、こうした制作の難しさのことを句の形にした

のかとも考えられる。一步誤れば観念的な（中略）句を引きしめて秀れた句にしているのは、何といっても「黴の中」という季語の働きである。」同、三〇二頁より引用。

「鉛筆で指さす露の山脈を 昭和二十五年／句集「山脈」／「鉛筆で指さす」（中略）、この動作は正に作者の秀れた把握によるもの（中略）、「山脈抄」は、この一句を発端として、綿々と綴られ（中略）はじめのあたりにある山の句を二三挙げてみると「膨らむ風船遠山冬の相を帯び」「一燈を消せば雪ふる夜の国」「鯉うごく秤ははねて冬嶺へ」「塩買ひて春の雪嶺ちかかりき」（句略）などである。山への燃えるような憧れが感ぜられる。」同、三〇三頁より引用。

「冬の浅間は胸を張れよと父のごと（中略）若いころ死別した父加藤健吉は楸邨の尊敬措く能わぬ人物の一人である。父の若い楸邨への感化というものは、楸邨の一生を貫いて消すことが出来ない。負けすぎらいの、やや非妥協的の性格も、正義派で真正面から人生と取組む態度も、やや清教徒的な潔癖も（中略）、多くを父に受けていると思う。病臥から立ち上がって久しぶりに見る信濃の山河は楸邨に非常に大きな昂奮を与えたようで、「浅間の麓」数十句は素晴らしい傑作であった。この句は冬の浅間は「いつも胸を張って毅然と生き

なさい」と教えてくれた父のような偉容をもって自分に迫ったという句意であるが、父をなつかしむ心が旅情と溶け合つて、この作者らしい、漲った抒情を奏でている。この時の作品は他に、「信濃の川はどれも冬青し石奏で」「胡桃焼けば灯ともるごとく中が見ゆ」「冬山登ると下ると時計あはせをり」「落葉松はいつめざめても雪降りをり」「わが垂るるふぐりに枯野重畳す」などがある。」同、三〇四頁より引用。

「冬嶺に縋りあきらめざ徑 曲り曲る（中略）この句は句集「山脈」の表紙に大きく筆跡の印刷されてある句である。（中略）写生の句であると同時に、「あきらめざる徑」というあたりは、作者特有の観念を強引に托している。所謂、これが言いたいので俳句は止められないという楸邨の根性の発露である。破調でかなり字数の多い句であるが、それも牛のよだれのような粘汁質の句の内容を示している。「あきらめざる徑」というのは、自分の歩んで来た道であり、今後もこれを押しとおしてゆこうという道に違いない。努力型であり、何か抵抗があると、遂にその抵抗を排除しようとする力が湧いて、その動力によって進んでしまうといった生活態度を持してきた（中略）もつとも楸邨らしい個性に満ちた句」。同、三〇六頁より引用。

「クリスマス遠き木^{こがらし}枯の宙は覚^さめ（中略）」「クリスマスゆき交ひて船相照らす」と並んでいる九である。「楸邨自選句集」には「ゆき交ひて」の方をあげて、「遠き木枯」の句を削っている。私はこの（中略）句を非常に愛好する。クリスマスはキリストの生誕の祝日で、キリスト教の普及した外国では厳粛な祭日である。（中略）寒い木枯の風が強く空中で鳴って吹きすぎてゆくと、遠い先の空の方に、何か（中略）お祭騒ぎから醒めて、宇宙の根源を作った神のこの日を喜んでいるような厳粛な雰囲気が感ぜられるという程の意味であろう。楸邨は神のことに持ち出したのでは勿論ないので、ただ「宙は覚め」と漠然と表現して、そういうことを暗示している。若い頃、クリスマスチャンであった父親の感化で教会に通い、洗礼も受けたといわれる楸邨のことであるから、そういう宗教面の雰囲気をたしかに表現しようとしたに違いない。クリスマス句では抜群に良い句と私は思う。」同、三一〇頁より引用。

田川氏の著この『加藤楸邨』を贈られた楸邨は「田川飛旅子著『加藤楸邨』とどき 書裡の楸邨生^{なま}の楸邨と雪夜逢ふ」（『まぼろしの鹿』）と詠んでいる。

四二：「楸邨断簡―田川飛旅子『加藤楸邨を読む―』金子兜太

「俳句」昭和三八年（一九六三）六月号。四八―五四頁。

田川氏の『加藤楸邨』について楠本憲吉氏が、「師としての楸邨についてもつと書いてほしかった」と書評に書いていることを金子氏は取り上げる。田川氏は「まえがき」に「指導者としての楸邨は少なくとも私共門人から見ても天下一品である」と書き、恩師とは書いているが（師）という言葉を使っていないのに注目する。そして「この本は楸邨の、いわば（精神史）として書かれている」「楸邨辞典」という。「いかにも（精神的な）詩人の系譜にともなつて、（師）などという俗世的理解は何を意味するのか―といった反撥すら用意されているように思う」と述べる。「ぼくをして楸邨（先生）は、（師）ではなく（先輩）であるといわしめるもの―それが、師としての楸邨の（新しさ）ではないか」ともいう。

「俳壇のなかで、戦後しばらくは楸邨が孤独であった理由、あるいは戦時中親しくなつた軍人たちが、いまもなお楸邨の（弟子）として、友人以上に尽している理由も、そうした楸邨のタイプ―これを人間味といつては元も子もない―にあるのではないか」同、五〇頁より引用。

戦前の「人生派」（あるいは「人間探求派」）のなかで、その

後結社を持った中で楸邨だけが新しいタイプの人間で、「楸邨という結社の主を得て、結社制度はその本質を変えるにいたった——いや変えつつある——というのが、ぼくの率直な結論」という。戦後、桑原武夫が「芭蕉について」を書き、「第二芸術」論の裏づけのようなことを行ったとき、楸邨の芭蕉理解が槍玉にあがったのも、また二一年、中村草田男から戦争責任をつきつけられたのも、楸邨の「体験の論理が総て」という体質から、ではなかったか、いう。戦後いち早く「俳句を生み出す主体としての人間を根柢とし、理屈で割り切らず体験智によつて自ら納得のゆく俳句をつくつてゆく願いを確認している」（田川）「いわゆる「真実感合」を強調したのも、その路線に連なる」と述べる。芭蕉理解に關してはこういう。

「捨て子の句に、楸邨ほど体験的に対決した人はいなかったということでもある。桑原には自分の体験を芭蕉の体験のなかに投入して試そうとしている実存的な詩人のタイプがわからなかったのである。戦後の性急な〈合理希求〉が、桑原の志向と相俟つて、楸邨のようなタイプを不明のものとしてしまつたのかもしれない。」同、五二頁より引用。

そして「個人としての日常体験に対しては鋭くきびしくあり得たが、個人体験を超える体験の〈意味〉に対しては、鈍い反応し

か持ち得なかつた、ということである。戦争という、個人の体験的処理だけではどうにも仕末におえない体験に逢着したとき、楸邨は、その論理を知ることができず、自分の積極性を後退させて行くしかなかつたのは、そのため」という。また「楸邨のタイプは、美学的には安住できない型であつたが、それが原理の形成にいたらず、自己そのものを原理的存在に仕上げてゆく傾向をとつた」と理解し、いま、戦後の自覚を通じて楸邨は「詠歎と概括を脱し、論理と分析を加えてゆくほかはあるまい」という。

四三：「真実感合の美学——楸邨の芭蕉研究——」（二）（三）矢島房利

「寒雷」昭和四〇年（一九六五）一月号（一三—二二頁）、二月号（一五—二四頁）、三月号（一〇—二〇頁）。

論の（一）のはじめに矢島氏は「子規は蕪村を捉え再評価することによつて、俳句革新の目標を明確にし、その運動を成功へ導いた」が「楸邨の芭蕉への傾倒はそのことを通して作家的形成をなし遂げたと見られる跡が歴然としている」ものである、という。そして昭和三〇年六月の伊香保での「寒雷」の大会での楸邨の挨拶を引く。

「私は永い間一体お前は作家なのか研究家なのか評論家なの

かということをおいては、あくまで作家でありまして、ただ作りたくて仕様がなない。作って自分の情熱を傾けないわけにはゆかないのであります。そのために観念性があるといわれてきましたが、自分が作らうとする以上は、自分の方向を見つけないければならない、納得できなければならぬと思うのであります。そのためには根本的に自分を更正しなければならぬわけでありまして。それを研究とよぼうが学問とよぼうが評論とよぼうが、私には関わりないことでもあります。私は俳句というものは作りながら熱心に背負っている課題を解決してゆかないわけにはゆかない」同、一月号、一四頁より引用。

楸邨にとつての芭蕉研究を矢島氏は「学問と文学との相剋」の二律背反を止揚するものと位置づけ、こう述べる。

「十代後半から二十代にかけての楸邨については、なお多くの伝記的資料を欠き、推定でしかものを言えない点も多いのだが、父の死後、家族からの全き自由はついにあたえられなかつたという一事はかなりはつきりした事実である。青年期における楸邨の貧困が世帯苦の様相を帯びること、いちはやく家長としての桎梏を負いつづけたということ、この事実は楸邨の人間形成史で見落とすことはできない」同、一月号、一

六頁より引用。

このことについては、「いはゆる進歩的知識人の範疇に彼を加はらせるコースから彼は父の死によつて決定的に脱落した」（志城柏「一漂泊者の像―加藤楸邨論」昭和三年「俳句」三月号）という視角によつて楸邨像を組み立てようとする評家さえある、と説く。楸邨の「真実感合」の美学は、楸邨の芭蕉研究の一大成果であるがそれは楸邨が達した芭蕉理解のすがたを示すとともに、そのことを通しての俳句理念の確立を意味するものである、という。（二）に、「真実感合」という言葉が「寒雷」誌上にはじめて現れたのは昭和一六年七月号であるといい、（三）に、「自然滲透」、「主客滲透」、を経て「真実感合」に深化していったことを述べる。「真実感合」は真実との感合、もしくは真実への感合という語気をもつたもの、「感合」は把握・表現の一元化を意味していたと「真実感合」を明らかにする。そして昭和二年の草田男氏の「楸邨氏への手紙」における斎藤茂吉の「実相観入」は「写生」から発想された説であり、「真実感合」ということに楸邨が賭けたおもい、いわば〈信念〉、〈洞察〉、〈認識〉、そうした点について、草田男にはかなり理解不十分、むしろ誤解といつていい面があつたことは確かであろう」とし「この稿がはからずもその誤解された点をとにかくも書き明からめるかたちに

なっている」と述べる。さらに『赤冊子』の「松の事は松に習へ」に「真実感合」は親近性を持つものとして引き、楸邨が戦中に唱えていた「ひとりごころ」についての見解をこう示す。

「真実感合」は、その展開、実現において、さまざまな可能性をもつものであった。「ひとりごころ」は、その可能性の中の一つであつたというにとどまる。しかも、この道のみが、唯一の必然として立ち現れたということには、あらがいがたい時代の圧力があつた」同、三月号、一七頁より引用。

そして「戦後の楸邨は、「真実感合」ということばはほとんど口にしなくなっている。しかし楸邨の俳句観の根底を流れるものは、この精神からそれるものでないとおもっている」と九〇枚の「真実感合の美学」の論を結ぶ。

四四：「加藤楸邨」川崎展宏

吉田精一・楠本憲吉編『現代俳句評釈』六刷。昭和四二年（一九六七）二月、学燈社刊。三二二―三三七頁。

句集『寒雷』から『山脈』の中から一五句を選び、句の漢字にすべて振り仮名をほどこし、「解説」「通釈」「語釈」「文献」を付けたもの。

「枯れゆけばおのれ光りぬ冬木みな（『寒雷』）【解説】

『寒雷』（昭和一四年三月交蘭社刊）は作者の第一句集。「古

利根抄」「愛林抄」「都塵抄」よりなり、昭和六年より十三年にわたる五百四十句を収録。句は「愛林抄」（昭和一〇―一二年）所出。「愛林抄」は「馬酔木」に自選句を発表するようになつてから上京するまでの二年あまり、粕壁（現在、春日部）中学教師としての、終わりの時期の作品を収める。

（中略）【鑑賞】「枯れゆけばおのれ光りぬ」と読んでくると、初五で感じさせられる時間が、そのまま中七にもはたらいて、「おのれ」が静かな、ある力に促された「おのれ」であり、それがぼおっと光っているという感じである。「冬木みな」の「みな」というところではつとさせられるのだ。木々の命をささえているものの静かな意志に触れるような敬虔な念に打たれるのである。光はもはや視覚的なものではない。冬木は、どれもこれも、作者がそうありたいと願っているような姿で、内がわから静かに明らんでいるのである。水原秋桜子は、楸邨のこのころの句境を「詠み進むにつれてその心には静かに寂しき光がさし来り、次で上京遊学を決意するに及んで、慣れ親しんだ草木魚鳥に対する愛惜の情がひとしほ強く、遂には深い境にまで到達してゐる。」（『寒雷』序文より）と評している。」同、三二二―三二三頁より引用。

「かなしめば鴟もず金色こんじきの日ひを負おひ来く（『寒雷』）【解説】

『寒雷』（中略）の「愛林抄」の終わり近くの、「愛禽抄」

十六句の最初の句である。（中略）【鑑賞】「古利根河畔吟」

（二）（中略）で作者は「林が多いので小禽ことりも多い。私は禽が好きだ。自分の心に何か動かうとして動きえないものがあるとき、私は一層小禽に心を惹かれた。」と述べて、この句をあげている。この句に付した文であるとともに、「愛禽抄」

全体にわたって作者の小禽にむかう心を述べた文でもある。この句は、作者の鬱屈が裂け破れてほとぼり出た句である。金色の日は、多くの解の没日いりひととるにしても、秋の住んだ空気の中で、傾きながらも、まだ赤味を帯びていない文字どおり金色の日なのである。しいて夕日ととる必要はない。鴟は金色の日を払いながら、そのただなかから一文字に作者につきささるように飛んでくるのだ。k音を重ねながら「来く」という破裂音の一語で打ち止めたところにもそうした強い鑑賞を要求している。作者の悲しみは、一瞬金色の日を負う鴟に変容する。鴟は、その一瞬の作者自身の姿なのである。粕壁時代の終わりに近く、作者が実生活の面でも内面的にもいかに生きるかに苦しんでいたころの作である。「同、三二三―三二四より引用。

「鰯いわし雲人くもひとに告ぐべきことならず（『寒雷』）【解説】

和十三年作。『寒雷』（中略）の「都塵抄」所収。「自分の外に美の世界を築くことを止めて、自分の中に、自分と異なる姿の俳句を見よう」（『寒雷』跋）としたのが『寒雷』における作者の基本的な態度だが、その傾向は、「都塵抄」において、最もいちじるしい。異同、「鰯雲ひとに次ぐべき」（『加藤楸邨句集』昭和二七年六月角川文庫刊）。（中略）

【鑑賞】「人に告ぐべきこと」の内容がいかなるものであつたか、それを具体的に読みとることはできない。これを日中戦争の拡大による時代の息苦しさ、特に知識人たちの息苦しさ、当時の楸邨の他の句、たとえば「藁誰か物言へ声かぎり」（昭和一四年）などと思い合わせて、時代に対する批判の声を、ぐっと抑えざるを得なかったときの作とみられないこともないが想像の域を出ないだろう。この句はもつと楸邨個人の内面に関わりのあるものであつたかもしれない。作者は、この句に次の文章を付している。「この世に人の棲むかぎり、与へられた人としての心の動きのさまざまの可能性に従って心は動くはずだ。海のさなかにも日は昇り、日は沈み、夕焼は立ち、人知れず、その夕焼も消え去る。」（「都塵の中に」と。草田男・波郷とともに難解派とよばれた当時の作

である。」同、三二四―三二五頁より引用。

「寒雷かんらいやびりりびりりと真夜まよの玻璃はり（『寒雷』）【解説】

昭和十三年作。『寒雷』（中略）の「都塵抄」の最後の句。

したがって句集『寒雷』の末尾の句である。（中略）【鑑賞】

「十数年前、冬の雷といふのでは言ひ切れない重苦しい自分の生活気分を詠みたいと思つて、寒中の雷を寒雷と詠んでみた。」（昭和二八年二月五日北日本新聞）と作者はいう。「そ

のころ晩学の私は卅歳を越えて妻子をかかへて大学生にかへつてみたが、ちやうど日本の社会情勢も次第に重苦しさを加へてきてみたころだった。鬱屈してゐる心中のものが、発しやうとして発しきれない感じが、寒雷といふものでいくらか生かされたやうな気持がした。」（同じく）と作者は句の成立事情を説明している。しかし、「かんらい」という音感は内にこもつたものではないし、特に、「真夜の玻璃」という言い方は清冽ですらあつて、一句は成立事情とは必ずしも一致しないようである。この句は制作の過程でカタルシスを果たして、句として完成したときには、作者のいう鬱屈を句からほとんど拭い去つていのではないかと思われる。なお、寒雷という季語は、作者の句によつて広く使われるようになった。」同、三二五―三二六頁より引用。

「長ながき長ながき春しゅん 暁げうの貨車くわしやなつかしき（『穂高』）【解説】

昭和十五年作。第三句集『穂高』（昭和一五年一二月甲鳥書

林刊）は、『寒雷』（略）と『颱風眼』（昭和一五年三月三

省堂刊）に収録されなかつた作品と、昭和十五年の作品より

なる。（中略）【鑑賞】平地の貨物列車は、しばしば数十両

をつらねてゆつたりと走り続ける。（中略）楸邨の場合、「な

つかしき」は、特に汽車に縁の深かつた少年時代の鉄道官舎

の生活に通じ、「実に好き」（「回想の内村鑑三」）であつ

た駅長の父健吉に通じる、そういう「なつかしき」なのであ

る。ほとんど無意識のうちに「父恋い」の思いがあるのだ。

一句をすぐれたものにしてゐるほんとうの力は、その無意識

の思いであろう。父、加藤健吉は、作者の精神の父でもあつ

た。」同、三二六―三二七頁より引用。

「露つゆの中なか万ばん 相あひうごく子この寢息ねいき（『穂高』）【解説】「穂

高病む」と前書きのある二句の初めの句。昭和十五年作。『穂

高』（略）は、入院中の長男穂高のためにまとめられ、その

稿料が入院費にあてられた。一方の句は、「露深く下りたる

底の寢息かな」。（中略）【鑑賞】作者はじつと病児の寢息

をうかがつてゐる。その寢息に意識を集中すればするほど戸

外のしんしんたる夜気が身に迫る。しとどに露の降りた深い

秋の夜である。病児の呼吸と一体になって作者の体で感じるのは新羅万象の刻々に動く姿で、それは「露の中」で動くに違いないが、「子の寢息」とともに動くところが肝心なのである。山本健吉のいうように「三段に切れるやうでゐて、各句は不思議に有機的に繋がってゐる」が、万相の動きと子どもとの寢息との微妙な触れ合いを感じとる読み方としては中七の「うごく」を連体形とすべきで、矢島房利が、「露の中、万相うごく子の寢息」と、中七を明快に連体形と指摘したのは卓見といわなければならぬ。」同、三二七―三二八頁より引用。

「さえざえと雪後の天の怒濤かな（『雪後の天』）【解説】

「隠岐へ」と前書きのある一句。昭和十六念作。『雪後の天』（昭和一八年一月交蘭社刊）は作者の第四句集。「隠岐紀行」「十六年抄」「十七年抄」「佐渡紀行」「十八年抄」よりなる。句は『雪後の天』冒頭の一句である。（中略）【語釈】◇雪後 雪の降ったあと。岑^{しんじん}参の詩に、「長安雪後似二春ノ帰ルニ」（『唐詩選』）とある。【鑑賞】初五「さえざえと」は、中七・座五の十二字すべてにかかるのである。「雪後の」「天の」と押してきてそこにさか巻く怒濤が現われ、しかも、「さえざえと」という澄明な余韻は読者に残る。

作者の心は怒濤とともに高まり、ますます冴えてくるのである。感動とは本来そうしたものだが、これは、感動が「黄金を打ち延べた」ような句になったものである。作者が芭蕉の発想契機を探りつづけた「芭蕉表現考」（昭和二〇年五月の空襲で焼失）の原稿が『野晒紀行』まできたとき、一日、能勢朝次をたずね、語っているうちに隠岐への旅を思い立ったのである。」同、三二八―三二九頁より引用。

「隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな（『雪後の天』）【解説】昭和一六年作。『雪後の天』の「隠岐紀行」のうち、「後鳥羽院御火葬塚」三十三句の中の一句。（中略）【鑑賞】「隠

岐紀行」は、芭蕉の「野晒し」の心をもって後鳥羽院遠流^{おんる}の地を訪ね、みずからの運命に立ち向かわれた院の激しい姿を思い、実^まありてかなしびそふる歌を尊しとされた、その詩心につながるうとした旅であった。だから「隠岐やいま」の「いま」は、きびしい冬を耐え抜いた離島の春、そこにき合わせたという感動のもう一つの底に、後鳥羽院の精神の宿る島、その島に「いま」と、島によびかけ、同時に自分にもよびかけるような感動が秘められているのである。初五に続く「木の芽をかこむ怒濤かな」は、いかにも全島の木の芽と怒濤が競い立っているかのようだ。鬱^う勃^{ぼつ}たる力がこの句にみなぎる

のは、ただ景観を詠んだ句ではないからである。島が澎湃たる怒濤の中に、全島木の芽と化して生きていくように思われる句である。」同、三三〇―三三一頁より引用。

「雉子の眸のかうかうとして売られけり（『野哭』）」【解

説】昭和二十年作。「流離抄」所出。『野哭』（昭和二十三年二月松尾書房刊）は、作者の第七句集。「流離抄」「北海紀行」「野哭抄」より成る。「野哭、千家聞二戦伐一」により、とびらに「この書を今は亡き友に献げる。火の中に死なざりしかば野分満つ」とある。「雉子の眸」の「眸」は、「寒雷」複刊号（昭和二十一年八月）に「瞳」と置かれ、句集で「眸」に改められた。（中略）〈季語〉獲物の雉子（冬）獲物の雉子の季は「冬」。◇眸の「の」は主格を示す格助詞。◇かうかう 漢字をあてれば耿々。明らかに光るの意。◇けり 詠嘆の助動詞の終止形。【鑑賞】雉子は戦後の闇市の店頭につるされたものである。その目はかっと見開いていたのである。「雉子の目は鳥の中でも最も美しいものの一つではないかと思っているのだが、死んでからもきらきら光っているその目を瞑らないものがある。」（「雉子の目」、「寒雷」昭和三九年八月）とは、楸邨のいうところである。キジ・コウコウと初五・中七の頭に破裂音が置かれ、「売られけり」と

いう作者の慨嘆が強い切れ字「けり」で結ばれていて、おれが鋭角的なイメージと強い衝撃を読者に与えるのである。

「眸」のほうが「瞳」よりも鋭い。その眸は戦後の闇市に右往左往する人間どもよりは、はるかに純潔に美しく生きていたのである。その眸をもった雉子は、さか吊りにされながら作者の心の中で、そのままの姿で生きているのだ。「売られけり」が作者の慨嘆でありながら、雉子の眸がまた悲しみにきらきら光っているようにすら読めるのは、この句に作者の本質と願いがこめられているからである。」同、三三二―三三三頁より引用。

「鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる（『起伏』）」【解説】昭和二十三年作。『起伏』（昭和二十四年七月榛の木書房刊）は作者の第八句集。戦中戦後の心身の過労によって肋膜炎を起こし、病臥起伏の時期の作を集録。序に代えて「野の起伏ただ春寒き四十代」とあるが、深く内省・凝視された作品が多い。（中略）【鑑賞】本来の鮫鱧の備えているおかしみは一撃のもとに消え去り、この魚の宿命の悲しさのようなものが伝わってくる。これは一読一瞬のうちに感じられるので、読者は、「おかしみ」と「かなしみ」の重なりを同時に感じるのである。これはもう鮫鱧ではないぞと思ったとき、おの

ずから作者の像が浮かびあがるのである。この句は、楸邨のいう「真実感合」が最も楸邨的に成功した句といえよう。楸邨的というのは、楸邨の選ぶにふさわしい素材を通して、作者の太い肉声を聞くような句だからである。作者の鮫鱈への身の入れようがきわまって、作品の鮫鱈に変容した。自画像の意識などなかったのである。」同、三三三―三三四頁より引用。

「木の葉ふりやまざいそぐないそぐなよ（『起伏』）【解説】

【説】昭和二十三年作。（中略）作者は昭和二十三年三月、甲斐に飯田蛇笏をたずね、帰ってから発病、九月には小康を得たが十一月にはふたたび悪化、そのころの作である。（中略）

【鑑賞】この句の魅力は、第一にそのリズムにあるが、単にこの句を八・四・五と読んで、そこに魅力があるのではないのである。読者は、五・七・五、約束の音数律に合わせながらこの十七字を読むだろう。そのためらいがちな、いい聞かせるような複雑な味わいにこの句の魅力があるのだ。「いそぐないそぐなよ」というひらがなの流れが、ためらい、急ぐ木の葉に見えてこないだろうか。作者には生活のうえで焦燥があつて、自分にいい聞かせ、なだめているのだが、句中の木の葉が読者によく見えてくるので、この句には自己説得の

いやらしきなどさらさらないのである。一読、生涯忘れえない句だ。」同、三三四―三五頁より引用。

「しづかなる力満ちゆき蟻蛸とぶ（『山脈』）【解説】昭和二十六年作。『山脈』（昭和三〇年一〇月ユリイカ社刊）は作者の第九句集。「太白抄」「山脈抄」よりなり、一句は「山脈抄」所収。（中略）【鑑賞】蟻蛸をハタハタと読むか、バツタと読むか、「作者の付したとおもわれる『はたはた』というふりがなの例」によって読み方に決着をつけようとしたのは矢島房利である（「寒雷」昭和三八年一月）。矢島のひいた例は『日本の詩歌』四一三ページの二例だが、それらによって、やはりハタハタと読むべきであろう。「しづかなる力満ちゆき」とi音を中心にしだいに引きしぼられてくる初五・中七に満ち渡った力が、突然跳躍に変わる、そのみごとさは、バツタと読んでこそと思われるが、そうすると「とぶ」がいかに補足的になって力が抜けてしまうのである。作者は（中略）対象と一つになってその力を共有しているのだ（中略）その力はすぐ萎^なえてしまうようなものであるはずがない。座五は「はたはたとぶ」と読むべきであろう。「戦後私は胸をやられて四年程寝こんでしまった。私どもが病気にやられると、病苦そのものより生活苦の方がひどくなる。」

あせるなど我ながらいけないので、急ぐな、あせるなど自分をなだめる日々だった。『木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ』などといふ句もあった。晩秋の庭を歩けるやうになつて蟬蛸を見た。私の気配でちよつと居向きをかへる。そしてじつと動かない。明るい朝日がやうやくその羽や足をぬらしはじめ。動かないのは力が抜けてゐるのではない。しづかに全身に力がたまっていくといふ感じだ。私はいつかこの小さな蟬蛸の上に息をひそめて目をこらした。平凡だが病苦を克服したといふよろこびをえたときの作である。「この句には作者の完璧な自注がある。」同、三三六―三三七頁より引用。

四五：「加藤楸邨覚書―「まぼろしの鹿」への道―」草間時彦

「俳句」昭和四三年（一九六八）六月号。五六―六四頁。

楸邨の句集『寒雷』の句は「当時の第一級の“うまい俳句”」という。そして楸邨には「二度の大きな転換期がある」ともいう。一つは『寒雷』の「都塵抄」において「“うまさ”を捨て、短歌的な美から」去り、「俳句によつて自分の人間を表白することに専念した」時である。「その句作態度は、今回の受賞（*蛇笏賞）作『まぼろしの鹿』に至るまで続いている」という。もう一つの

転換期は昭和一六年から一九年までの芭蕉論執筆中の“物の言えなかつた”時期をさす。さらに第三の転換期は『まぼろしの鹿』の後半にあると次のように述べる。

「今までの楸邨独特の苦惱慟哭、重厚という地上的なものが昇華されて渾然一体となり、神韻縹渺たる心象の世界を築こうとしている点である。しきりに“見えぬもの”を恋い、うつつとまぼろしが交錯する。／春の吹雪に海あり見えぬ重たさよ／（句略）蟻のゆくてに蟻がゐるらし見えぬども（句略）

従来の系列に属する地上的な俳句のうちに右のような句が交つていて、いささかの違和感がないのは偉とするに足る。楸邨の身の奥のもつとも醇乎たるものの結晶だからだろう。それにしても、この系列の句は、今後、どう発展して行くのだろうか。」同、六三―六四頁より引用。

四六：「加藤楸邨の一句」村野四郎

「俳句研究」（加藤楸邨特集）昭和四七年（一九七二）一月号。一〇五頁。

楸邨の「あきかぜやわが胸中のさるをがせ」の句を取りあげて、いう。

「この句のように、即物性を何気なくのみこんだ完全な象徴

というものは、よほど成熟した腕力でないと出来るものではない。(中略) 楸邨の失敗は、いつも一つの句に、あんまり無理をして思想を詰めこもうとする処からおこるようだ。(中略) 楸邨は、じつはまだ若いのだ。好漢自戒せよ、とわたしは、この古い友に心からよびかけたいのだ。」同、一〇五頁より引用。

四七：「加藤楸邨の一句」矢島房利

「俳句研究」(発刊年等は「四六」に同じ。)一二〇頁。

「落葉松はいつめぎめても雪降りをり」をあげ、こういう。

「俳句というものは、自己発見ということでは疑いもなく強力な武器としてはたらくが、作家としての老い方を保証することにおいてははらくことは、また極めて稀である。—こんなおもいにとりつかれたことがある。(中略) 今年の正月(中略)二十年前の「浅間の麓」の旅中の、枯山を巻いた小径に沿って古碑が立ち並んでいた景のことに、ふいに話が飛んだ。あれはとうとう句にならなかつた、いわば自分が景に負けたのである、だから、その景が今もって目を去らないと(＊楸邨は)いうのであつた。これは、ひそかに感じつづけていた楸邨の発想の深部に触れるものであつた。(中略)もし、楸

邨の作風について、前期・後期ということを用いるなら、

雉子の眸のかうかうとして売られけり

は前期の到達点を示すものであり、そして、前掲の句は後期の出発を示すものである。落葉松の句は、

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる

木の葉ふりやまざいそぐないそぐなよ

などよりも一層自然な発想によって一つの達成を遂げていることにおいて、そのことがいわれてよいとおもう。／昭和二十五年暮、浅間山麓の星野温泉での作である。旅の一夜、幾度かめぎめては、硝子戸越しに落葉松の梢に雪が降りかかるのを見ての作であろう。しかし、この句はそうした句意として読みおわたところから、落葉松自身の深々とした眠りと、時あつての「めぎめ」を感じさせるごとくである。「めぎめては」の主体が、落葉松へと傾斜してゆく、そのことによつて、この句は、〈生のあわれさ〉から〈生のかなしみ〉への奥行をもちえているのであつて、その辺の微妙な味わいは、〈出発〉の名にふさわしいものであつた。」同、一二〇頁より引用。

四八：鼎談「短詩型との出会い」高柳重信・佐佐木幸綱・清水昶

「季刊俳句」昭和四九年（一九七四）一月号。七一―九九頁。

俳人高柳重信、歌人佐佐木幸綱、詩人清水昶の語る中から、楸邨に関わる箇所を引く。

「高柳 加藤楸邨と「寒雷」を批判することは、戦中から戦後の非常に長い期間の、俳句形式および俳壇の重要な問題の一つを論じることになるので、短い時間に簡単にいうことはできないけれど、ここ一二年、細々ながら批判の声があがりつつあるのは事実ですね。要するに、楸邨は、日常的な「まこと」を尽くしたわけで、いわゆる文学的な「まこと」は少しも尽くさなかったのではないかという批判です。これをも少し具体的にいいますと、新興俳句運動というのは、社会的な背景と密接につながっていたから、当然、社会的な批判を含んだ作品活動をしてきたわけですから、それを積極的に直接に出すか、もっと屈折したかたちで俳句形式に新しい磨きをかけようとしたか、そのどちらかなんですが、それが昭和一五年を境に次々と弾圧された……。弾圧というのは、ある個人個人が検挙されるということだけじゃなくて、そういう系統の雑誌はいつさい発行禁止になって、次々に発表の場が失われるということなんです。その昭和一五年に、「寒雷」

が創刊されたわけですから。そういう状況の中で、楸邨の選択は、特高警察に狙われるような、一切の社会的関心をみずから手で放棄してしまうこと、そして、ひとりだけの内側にこもるかたちでおれは苦しいというようなことだけを、まさに深刻そうな身振り口振りで行うということでした。ちがうことばでいえば、いわゆる社会性をまったく排除したかたちで俳句を考えていこうとした。だから、いちど意識的に欠落させてしまったものを、戦後になって、もう一度ひろいなおさなければいけなかった。戦後、「社会性俳句運動」というのが起きたとき、その中心となったのは、楸邨の弟子たちですよ。そういうようなことに疑問を抱きはじめて人たちの何人かが、楸邨や、「寒雷」の人たちの主張する「まこと」というのは、どうも文学的な「まこと」ではないようだという批判をするようになった。その「まこと」は、あるいは倫理的ですらないような気がするけれども、「寒雷」そだちの人たちの俳句論は、とかく倫理的な主張に終始してしまうことが多いんです。ま、然し、この「寒雷」そだちが社会性に熱中しているうちはよかったけれど、いわゆる前衛俳句運動をはじめると、いささか困ったことになったと思うんです。ひとつには、俳人はアマチュアの集団だから、追体験ということ

を、ほとんどしない。だから、自分が俳句をはじめた瞬間からあとのこと、しかも、自分の周辺のことしかわからない人が多いので、その社会性俳句運動のなかから、例の金子兜太などが旗頭になって、いわゆる前衛俳句運動を興すことになると、つねに、金子兜太から、あらゆることがはじまったという感じにごく自然になってしまおうですね。もちろん、詩人の仕事は、やがて、みんなの共有財産になってしまふ部分のあるのはあたりまえで、だから新興俳句の遺産は、いまの俳人が自由に使っていきたいけれども、金子のやり方を見ていると、その財産を自己流に換骨奪胎して相続しただけではなくて、それを生みだした新興俳句の名誉まで盗んじやったようなところが見えるわけです。」同、八五―八六頁より引用。

「高柳　ただ、俳人が文学の病いにとりつかれたときには、まず絶対といつていくらい、いい俳句は書けませんね。ぼくなど、その典型です。しかし、それを承知の上で、なおかつ俳句形式に挑戦しなければ、おもしろくない。それだけが俳句形式の歴史のなかに加わることになるんです。」同、九四頁より引用。

「佐佐木　短歌と俳句とちがうので、歌人は晩年にいいもの

を残すケースがありますね。」同、九五頁より引用。

四九：「「第二芸術」論争」白井吉見

筑摩叢書二一八『近代文学論争・下』初版第五刷。昭和六

〇年（一九八五）五月、筑摩書房刊。一八四―一八八頁。

「初版第一刷」昭和五〇年十一月刊。

「加藤楸邨の意見　桑原武夫の『第二芸術』は、直接俳句と俳人を相手とするものであっただけに、これが俳壇に一大衝動を及ぼしたことは、いうまでもない。（中略）こうしたなかで、傾聴すべき意見をはいたものは、前述の山本健吉のほかにも、俳人としては、先ず加藤楸邨を挙げなければならぬ。俳句に対する、局外批評家からの否定的もしくは懐疑的な批判に進んで身をさらすことによって、制作のよりどころをたしかめようとする点において、短歌の木俣修と多分に共通するものがある。『俳句は生き得るか』（『現代俳句』昭和二十二年四月号）という評論を、彼は次のような言葉ではじめている。

もはや私は俳句没落の不安を意識せずには、俳句を作りつづけてゆくことは出来なくなつた。

しかし、こういう意識は、中野好夫、桑原武夫、小田切秀雄、白井吉見など、局外批評家から加えられた短詩型への批判によって、はじめておこされたものではない。この不安は、俳句を自分という人間とのつながりにおいて意識したとき以来のものであり、すくなくとも、若い人間的意欲を捨てることなしに俳句にたちむかってきた人々の共通の課題であったはずだとも言っている。現在、局外からの俳句批判は、これまでのような俳壇部内の論議とちがって、俳句を一般文学とのつながり、俳句と人間との対決という点を表面におし出してきた。俳人たちにとっては、のっぴきならぬ時代の批判にさらされなくては、ならなくなったのである。だが、俳句型式の制約という点については、局外批判の再認識を要求しないわけにはいかない。そこで、前出の『短歌の運命について』という、『八雲』の座談会における、ぼくの言を引用している。

俳句はぱつと一場面だけは写せるわけです。だから苛烈な現実といふやうなことをいふと、例へばガードの下で餓死しかかっている人間もうつせませすけれども、それを写したところで、それは一つの点景として写せるだけのもので、さういふものがどういふところ

から起こってきてゐるか、それら幾つかの点景の繋がつてゐるところのものは何か、さういふものは決してあの型式では写せない。そこに現れた一場面、一点景は早取式に写せる。実際写してきてもゐるが、さういふものをさういふ写しかたしか出来ない、それらを悉く連ねたところのもの、その奥に潜んでそれらの点景を点景たらしめてゐるもの、つまり一口に言つて現実の動きですが、さういふものはあの型式では写せない。題材はいくらでもいはゆる苛烈なものが扱はれるにしても、ぱつぱつと早取写真式に写してゆくだけでは、どうもさういふ現実の受取り方では、今日のやうなこんな混乱してゐる現実を全面的に把握して行くといふやうなことには何としても限界があり、障害になるのぢやないか。」同、一八四—一八六頁より引用。

「**宗因の奔放な遊びに帰れ** 加藤楸邨によれば、右の意見

では、二つの点で注目すべきものがあるという。一つは、「俳句は一点を写せるだけのものである」という前提であり、一つは、その結論としての、「点景の奥に潜んで点景を点景たらしめるもの、すなわち現実の動きは写せない」ということである。この意見は論究のかぎりではまったく正しい。自分

は明治以来の俳句を念頭に思いうかべる。この批判は、そこを指すものとして、まったく同感である。」同、一八六頁より引用。

「しかしこの意見では、俳句は、「点景を写すもの」として見られ、「写すだけのもの」として決定されてしまっている。これは、この批判者だけの見かたではない。明治以来の俳人が、そう規定し、そう信じ、そう実行してきたのである。しかし、俳句は、はたして写すだけのものだろうか。自分はこので、西鶴を思いおこさずにはいられない。なぜなら、「点景を写す」「早取式に写す」ことにおいて、代表的なのが談林時代の西鶴の手法だったからである。一点景を軽口のままに、口拍子にのせて、早取式に写しとった俳諧師であった。そしてその点景の潜むところのものが写されるためには、『一代男』以下の散文に移行せざるをえなかったたのであった。」同前。

「俳句は、はたして写すだけのものだろうか？写すだけが近代文学に許される唯一の方法であるか、どうか？／この疑問に対して、加藤楸邨の用意している答えは、容易に察することが出来る。早取式に写した西鶴と逆に、俳句としての制約や抵抗と「正面から格闘し、内部に無言の世界を発見し

ていった作家としての芭蕉の方法」、つまり、象徴的な方法がこれである。これは実践の結果についての結論ではない。俳句没落の不安を意識しつつ、その不安を手がかりとして、そこから如何に生くべきかを探り求めている上での言だといふのである。加藤楸邨の引用している、『八雲』の座談会における、ぼくの言は、いうまでもなく、その場に応じた発言であって、「まことに要をえた批判」と評されるには値しない一面的なものである。俳句についていうかぎり、たとえ写生的な傾向のものにしても、散文と同列に考えることなどできるものではない。（中略）したがって、それに対して、芭蕉の象徴的手法をもち出した加藤楸邨の解答も、第二芸術的批判に対して、全面的、理論的に答えたものとするわけにいかない。一言でいえば、同じく常識的なものにすぎないが、実作者の決意としては、このほかの答えのありえないのも自然であろう。」同、一八六―一八七頁より引用。

「ぼくは、別に、『第二芸術の問題』（『新俳句』昭和二十二年七月号）というのを書いている。それによれば、「俳句の本質は、俳諧精神が定型もしくは十七音量感のうちに表現されたものにほかならぬ。」しかも、「俳諧精神とは、逃避、傍観、虚無の精神にほかならぬ。俳諧精神を恣意的に解

放して、一般に詩精神、散文精神などと混同することは許されない。「俳句が自由律になり、しかも、詩精神一般の表現の器になるならば、それはすでに俳句の問題ではなく、詩の問題だ」という考えかたによるものであった。つまり、桑原武夫や山本健吉と同じように、宗因の奔放なあそびに還れ、ということにならざるをえない。俳句が、仮に近代詩たりうると思えば、それはすでに詩の問題であって、俳句の問題ではありえないというのが、『第二芸術の問題』における、ぼくの立場であった。」同、一八七—一八八頁より引用。

五〇：「波郷と楸邨—秋桜子の流れ—」平井照敏

「俳句とエッセイ」（特集・虚子から秋桜子へ）昭和五二年（一九七七）十一月号。牧羊社刊。三二—三七頁。

昭和一二年に秋桜子の「馬酔木」発行所につとめはじめた楸邨は、昭和一五年に主宰誌「寒雷」を創刊する。自分の主宰誌を持ちながら、発行所につとめることは「馬酔木」人から不満が出るだろう、そうした無形の圧迫が「鶴」を主宰した石田波郷、楸邨の二人の離脱を招いたかもしれないと平井氏は推量する。だがまた二人が主宰誌を持ったということは二人の追求が「馬酔木」をのみだす句風をひらきはじめたということの意味するだろう、と

もいう。昭和一七年に二人はともに「馬酔木」の編輯を辞退する。波郷は戦後昭和二三年に自身の主宰誌「鶴」の同人四人とともに「馬酔木」へ復帰したが、楸邨は「寒雷」に専念して「馬酔木」に戻ることはなかった。しかし「楸邨がもっとも愛する句集が『寒雷』であることからもそれは（*師水原秋桜子の恩沢に感謝していること）はわかる。師弟の絆は切っても切れぬものなのだ」という

五一：「かく物の見ゆるところ」尾形仿

『加藤楸邨読本』（「俳句」臨時増刊）昭和五四年（一九七九）一〇月、角川書店刊。三九三—三九五頁。

あるとき芭蕉がよそに招かれて夕飯が出たあと、どうかもう蠟燭を取り去って欲しい、と言った。夜の更けるのが目に見えるように、心がせわしないからだ、という。服部土芳はそれを「かく物の見ゆるところ、その目・心の趣、俳諧なり」（三冊子）と書いていることを尾形氏は紹介する。土芳は、芭蕉が右につづけて「命もまたかくのごとし」と洩らしたことを伝えて「無常の観、なほ亡師の心なり」と結んでいるが俳諧は、自己の情感を因習的な風流の鑄型にあてはめることでもなければ、ことばによって対象をありのままに写生することでもない。『三冊子』に「常風雅

に居る者は、思ふ心の色、物となりて、句姿定まる」と説かれて
いる、その作者の「思ふ心の色」が「俳諧」を決定するのだと尾
形氏はいう。

「楸邨はしばしば、みずからの旅に引かれる思いを内省して、
大陸の山野を跋涉してこの国土へ渡って来た民族の、遠い原
始の記憶が旅へのうずきとなつて、わが血を騒がせるのでは
ないかと疑う。その自身への問いかけを検証するために、数
次にわたるシルクロードの旅を試みる。」同、三九四頁より
引用。

「それは芭蕉によつて築かれた『俳諧』の伝統への反逆だと
いつてさしつかえない。新しみを俳諧の花とした芭蕉の精神
の継承は、芭蕉に反逆し、芭蕉を乗り越えることによつて初
めて達成されるのだ。」同、三九四―三九五頁より引用。

「かつて私が楸邨の次男と鯉の道楽を始めたとき、楸邨は「イ
ヤ、よいことをしてくれ。人間、何か一つ道楽を持たない
と、上手に年をとることがむずかしいものだから」と言つて
喜んでくれたが、しかし、夫子自身は、いかほど硯道楽には
まりこもうと、所詮、上手に円熟の晩年を送るといった器用
な生き方のできる俳人ではないと思う。」同、三九五頁より
引用。

五二：「不惑前後」矢島房利

『加藤楸邨全集』第二卷「解説」。昭和五五年（一九八〇）
三月、講談社刊（以下講談社刊は略）。三七八―三八五頁。

「『野哭』は、終戦時から昭和二十二年末までのほぼ二年
半の作品を収める。（中略）作者は昭和四十八年ごろ本集
の改訂を思い立ち、その一部は五十・五十一年の「寒雷」
誌上に発表された。本巻に収めたものはその完全な改訂版
で、定本として見るべきものである。改訂の内容は、作品
の補遺、前書の付加および「原句（原案）」の注記である。
原句の注記は句形の変更を意味するものではないよして、
このような改訂のしかたそのものに、私は作者のこの集に
対する特別な愛着の念をおもわないわけにはゆかない。
「人間としての自分の人間悪、自己の身を置く社会の社会
悪、かういふものの中で、本当の声をどうして生かしてゆ
くか、これが今の私の課題だ。」と作者は「後記」にする
し、（中略）その詩精神の激しい燃焼が敗戦の現実と切り
結んでいるあたり、かつての「都塵抄」の自己革命を髣髴
させるものがある。（中略）『野哭』をもつて楸邨の最高
の句業とする、小西甚一氏の説（「俳句」昭四三・七、「楸

邨さんのこと」）があるゆえんである。」三八一―三八二頁より引用。

「『起伏』は、昭和二十三年一月より六月までの作品を収める。作者は二十三年三月より肋膜炎のため、特にこの時期は絶対安静を強いられていた時期であった。（中略）『野哭』の激情のあと、必然的に一つの沈潜期に入ったのである。しかし、病中の作にもかかわらず、作者の常に生と未来へのよき意志を持する向上型の体質を反映して、句は意外なまでに強靱であり、健康な抒情を読み取ることができる。（中略）この句集の注目すべき新しい傾向としてユーモアをいちはやく指摘したのは山本健吉氏（「現代俳句」・『楸邨自選句集』解説等）であったが、その後の三十年に及ぶ楸邨の歩みを検討すると、このことが極めて重要な指摘であったことがわかる。」同、三八三頁より引用。

「『山脈』は、昭和二十三年から二十七年に至る作品を収める。（中略）『山脈』は楸邨の句集中でも際立って円満具足の相を供え、弾けるような歌声を聞く思いがある。この作者の戦後の歩みの到達した一つの円熟境が見られるというべきであろう。」同、三八四頁より引用。

五三：「国外の俳句に求めたもの」加藤知世子

『加藤楸邨全集』第九卷「解説」。昭和五五年（一九八〇）五月刊。五七〇―五八一頁。

「『沙漠の鶴』（中略）この時の俳句の殆どは物を正面から受けて、正攻法で詠まれている。なるべく自分を抑えて異国の現実をどう詠んだら生かせるかということに気を使ったという。／（句略）炎日や岸を削れる大黄河／（中略）あまり語らず息の太い作の多いことが特徴である。」同、五七〇―五七一頁より引用。

「昭和二十三年六月の急性肋膜炎を発病して以後は、病気の合間を見ては著書を纏めたり、旅に出て月山やその他の山に登ったりして無理を重ねては再発を繰返した。そのたびに病状が悪化し、三十六年には最悪の状態に陥り、手術を二回してようやく病気を克服した。闘病期間は十三年で、その間に、『野哭』から『山脈』まで三冊の句集が生まれた。闘病中は死線を彷徨したことも二、三度あった。そんな体験を繰返している間に、自分の俳句は、どうあるべきかを考え考え詠んでいたのだと思う。（中略）異質なもの媒介によって、睡っていた何かが目覚めてくることもあるのではなからうか。そんなことを時々いつていたが、今までの自分と国外の

異質な物との体当たりを試みるつもりで、ソビエト側の、シルクロードへ出かけたのだった。(中略)アムール川泳げる首に太陽吊り／日本語が消えゆくバイカル湖上の蝶／(句略)／死の塔を渦まきのぼり影の蝶／(中略)『沙漠の鶴』の句よりぐっと複雑になり、深まりも加わったように思う。この旅では異質な物に対する感動が大きかったので、句柄は膨らみを持ち、飛躍することも出来たようだ。俳句を始めて以来、時に強引に、時に執拗に、作品の展開を試みている。そしてある段階に達すると、そこに層をなすような気がするのだが、今度の旅も、一つの層を持つきっかけになったようである。」同、五七三―五七五頁より引用。

「地に耳を近づけると、さわさわとかすかな足音がきこえるほど多くのタマオシコガネがいた。タマオシコガネは俗に糞ころがしと呼ばれているもの。(中略)廃墟に残された四基のミナレを仰いで感動しているさなかに、「寒気がする」といいたした。カブールのホテルに帰りついた時には熱が三十九度を越していた。(中略)熱は一向に下がらなかった。長い間の念願だったカイバル越えの日であった。バスに横たわったままだったが、カイバル越えの時だけやっと降りて峠に立った。ペシャワールでは一泊したが依然として高熱がっ

づき、脈搏がひどく乱れた。だが、ここでは適当な病院がないということで、ラワルピンジまで行くことになった。(中略)沙漠では、生と死が隣り合わせだとよく楸邨はいつていたが、そんな言葉がまざると実感となって迫った。／泉はなきかカイバル越えの弱法師／この旅では、体力の限界を身を以て経験したわけである。だがシルクロードへはまだまだ行くのだと云う。」五七五―五七八頁より引用。

「「鶴と煙突」は「糞ころがしの歌」に次ぐシルクロード俳句紀行である。(中略)この集では珍しい植物や小さな動物に目を向けた作品がかなり見られる。／ヒソップの花に手触れし日本語／この花についてガイドは「キリストは最後の十字架の上で、喉が渴いたといったらこの花を酸漬けにしたものが供えられた」と簡単に説明した。小さなうすいベージュ色の花である。この花の名を楸邨は少年時代に聖書の中で読んでいたが、その実物を思いがけず手にしたのだから、感動が大きかったようだ。この花からクリスチャンだった父の人間的な在り方に話が及び、モーゼとヒソップの伝説のことなどにも触れているが、結局芭蕉の造化ということに筆が及んでいる。」同、五七八―五七九頁より引用。

「蜥蜴うかがふ目には目を齒には齒を／この句は何かを

うかがっているような小さな一匹の蜥蜴を通してハムラビの法典の精神を詠んだと思われる。そして、神がノアに誓った言葉により、四時の推移運行は古い時代から意識されていたことを指摘し、湿潤地帯の自然の運行に成立した俳句も、乾燥地帯特有の自然の運行に根ざした新しい可能性が積みあげられそうだと云う意味のことをもっと詳しく云っている。(中略)若い頃から、人間探求派とか人生派とか云われているが、そうしたことも、すべての研究も体験も、一切を含めて結局自己探求なのだと思っている。」同、五八一頁より引用。

俳人でありシルクロードの旅にも同行する楸邨夫人の視点から、楸邨のすべては「自己探求なのだ」と語られる。

五四：「楸邨断章」中村稔

『加藤楸邨全集』第三卷「解説」。昭和五五年(一九八〇)七月刊。二九二―二九五頁。

「楸邨といえはその作品から、何となく近づきがたく、けわしく、生のかなしみを全身にみなぎらせているような風貌を想像していた。しかし、初対面の印象はまるで違ったものであった。おだやかでやさしく、私だけでなく、その周囲に

おられた金子兜太、原子公平等の諸氏をも、みなその大きな体躯につつまこんでしまうような包容力に圧倒されるような感じであった。安東がすこし身構えたような姿勢でいるかたわらに、楸邨がゆったりと自然で、それでいてこまかな気配りをはらっておられた」同、二九三―二九四頁より引用。また「まぼろしの鹿はしぐるるばかりかな」の句に関して「こうしたこだわりや執着を持続し、ふつふつと心中深くたぎらせ、これにかたちを与えていくことに、楸邨の面目があり、また楸邨句の興趣がある」と述べる。

五五：「旅をする石」外山慈比古

『加藤楸邨全集』第六卷「解説」。昭和五五年(一九八〇)八月刊。四四二―四四六頁。

「その頃の俳人は当然のことながら、いまはみな老いている。(中略)その中であって、楸邨俳句には特異な展開があったと思われる。昭和一〇年代にもっていた魅力は内質を変えながら、昭和五十年代において、いよいよ豊かな大輪の花となっているのである。その不易の秘密はどこにあるのか。」同、四四三―四四四頁より引用。

「体がかならずしも強健ではないのに、そして、もう決て

若いという年でもないのに、西域へ旅行したりする。ひとつとところにじっとしていられない精神がそうさせるのであるのか。新しいものを求める心が小さくこり固まるのを嫌うのに違いない。(中略) 楸邨は「転がる石」だが、一筋を見失うことなく転がっている。そして、いつの間にかひと回りもふた回りも大きくなっている。(中略) 沈滞を知らない。(中略) あえて異質なものを求める。それは転がるというよりも、やはり、旅をすると言った方が当たっている。「旅をする石」だ。」同、四四四―四四五頁より引用。

「楸邨は波郷についてこう書いた。「波郷のこの句(「畦木立ち落穂拾ひがひろひ立つ」)に惹かれたのは、そうした私の持物では量りきれない要素を持っていたからだと言える。(略)」「『達谷往来』「波郷永別」)わからないところがあるから、魅力を感じるといえるのは大きな精神でなくてはできないことだ。(中略) 異質だから心惹かれる、と道破したとき、楸邨は真の俳諧の心を体していることを表明したことになる。(中略) イギリスに形而上詩というのがあり。俳句にいくらか似た詩だ。その特色は「不調和の調和」(デイスコルディア・コンコルス)であると言われている。俳句もまた、不調和を調和させる詩であろう。

楸邨はみずからの生活において、つねに不調和なものを求めて歩んでおり、いつしかそれを同化してよりいっそう大きな調和をつくり上げていく。流行を通じて不易に達する、楸邨は俳諧を生きている俳人である。いつまでも若い秘密もそのあたりにあるような気がする。」同、四四五―四四六頁より引用。

五六：「楸邨の芭蕉評釈」丸山一彦

『加藤楸邨全集』第一〇巻「解説」。昭和五五年(一九八〇)十一月刊。五六四―五七〇頁。

「楸邨における芭蕉研究の特色について一言しておきたい。楸邨は「芭蕉解釈の立場」(『芭蕉句集』序説所収)と文章で、「俳句を自分の表現として、そこに自分の生きを求めているに過ぎぬ。…現代の俳句が人間を生かしかどうか、さういふ立場に立つて現代の俳句を見ると、いろいろの不安が見出されてくるし、あるべき俳句への郷愁が感ぜられてくるのである」と言い、さらに「私は自分をもて現代の俳句への不安から、芭蕉に郷愁を感じ、芭蕉の明らかになりたい念願によつて、自分の要請にもとづくの研究に向かったものなのである」と述べている。楸邨

が芭蕉に立ち向かったのは、研究のための研究ではなく、作家としての内的要請から出発したものであった。つまり、自己の人間的要請を俳句に生かそうとして、その典型を芭蕉に見出し、芭蕉に惹かれたのである。そして、芭蕉の表現手段を追究してゆくうちに、その最も重要な核をなす「発想契機」の問題に着目したのも、やはり実作家らしい視点であった。また、芭蕉への傾倒・共感を通して、「真実感合」の俳句理念が生まれ、それは楸邨の俳句観の根底を支えるものとなっていたことは、疑うまでもない。『芭蕉講座』から『芭蕉句』に至る三十余年の歩みをふり返る時、芭蕉解釈の深まりは、作家楸邨の成熟とみごとに照応しており、そして楸邨俳句もまた、この芭蕉研究を基盤にして豊かさを加えていったと言つてよい。」同、五七〇頁より引用。

五七：「詩歌源流行」島田修二

『加藤楸邨全集』第八卷「解説」。昭和五六年（一九八一）一月刊。五五〇―五五三頁。

「加藤楸邨について、長い間、その全体像が掴めないでいる。部分ばかりを見て来ているのだが、新しく見つけた、途方もない部分が、その都度、全体像の変更を迫つてやまない

のである。詩業としての、ふところの深さには目を瞠るのだが、それらが散漫な広がりを見せるのではなくて、歴史の重さを知る人間の、精神の博大さとして開けているのに感銘し、共感するのである。私にとって、楸邨ほど未知の世界を感じさせる俳人はいない。」同、五五〇頁より引用。

「少しでも全体像に近づきたいと思うので、「加藤楸邨読本」などという、便利な一冊が出ると、むさぼるようにして読むのだが、もう、実際の楸邨は、この種の一冊にも収まりきれなくなっている。（中略）楸邨の場合、なによりもまず全集が必要なのであって、特に従来、公にされることのなかった初期の短歌作品の見^{（*検討）}当が必要である。（中略）私は加藤楸邨の全業績の中で、俳句とともに、紀行文を評価する。楸邨の紀行文はそれ自体、文学として自立しているながら、俳句作品と抜きさしならぬ緊張関係を保っていて、その俳句への重要な鍵になっている。正岡子規の俳句と写生文との関係のごとくである。その両者の関係を説明すれば、作家論が成立するだけでなく、俳句そのものの存立を問う要素を持っているのではないか。」同、五五〇―五五一頁より引用。

「楸邨の旅には、まずその本来の意味である、自らのすみかをはなれる、という意識が濃厚にみられることに注目する

必要がある。まず、すみかをはなれ、そこから長い歴史に培われて来たことばを思う、それが、古人の歩みを追う、ことばの巡礼ともいうべき道行に至るのである。そうした旅を生きることは、何かに到達する手段ではないし、また、旅自体を目的とするでもない。いわば、ことばの世界に生きる、〈詩人の生〉をそのまま自身に重ね合わせている、少なくとも重ねあわせようと願っている、それが楸邨における旅である。(中略)楸邨の句と紀行文の間にびんと張りつめた糸のような緊張関係は、楸邨の句と文の関係を明らかにしながら、現代俳句のありようにも、するどい批判を投げかけているように思う。」同、五五一—五五二頁より引用。

「楸邨の紀行の原点に昭和十六年、三十六歳の時の『隠岐』がある。私がこれを読んだのは戦後であったが、それまでの楸邨の全生涯、全詩業をもって、後鳥羽院終焉の地を訪ね、その心を探っているのに深い感銘をおぼえた。それ以来、ひとつ覚えのように、楸邨と言えば隠岐、隠岐といえれば楸邨を思った。そして、句集『雪後の天』だけで楸邨の隠岐紀行をとらえるとするば、「奥の細道」からその句だけをとり出して鑑賞するような、物足りなさを味わうのではないかと、さえ思う。(中略)たとえば「隠岐へ」という文章は、短歌を

教えてくれた父のを中心に、その生いたちを自伝のように書き、それを讀むだけで、歌から句へ移って行った心境が理解され、隠岐行き必然を讀むことができる。この文章は、俳句作家楸邨の証明である。私の好みから言えば、楸邨の紀行は隠岐の旅に尽きる。」同、五五二—五五三頁より引用。

「私は、楸邨の「奥の細道吟行」をはじめとする、数々の旅を軽視しているわけではない。とくに「芭蕉へのあこがれ」の一途に、その足跡を丹念に辿る執念を讀むことができる。

そして、同行者との心の通い合いなどを讀みながら、楸邨の旅は、あくまでも人間を訪ねる、なつかしい道行であり、そのまま楸邨の俳句に通じていると感じさせる。楸邨が続けて来た北海道、佐渡をはじめとする数々の旅でも、人間が実によく描けている、という印象を受ける。私は、人間探求派のことを言おうとしているのではない。楸邨が、隠岐らしい歩み続けている、日本の詩歌の源流行ともいうべき、細き一すじへの道を語ったのに過ぎない。」同、五五三頁より引用。

五八：「歩きつつ考える」久保田月鈴子

『加藤楸邨全集』第八卷「解説」。昭和五六年(一九八一)一月刊。五五四—五六〇頁。

「何よりも楸邨の旅は「考えるための旅」であり、「歩きつつ考える」ための旅である。」同、五五四頁より引用。

「〔芭蕉へのあこがれ〕（略）ここでは楸邨が「奥の細道」に憑かれて歩き始めた（中略）はじめのかかわりは何であるうかが語られている。芭蕉の研究者であり俳人である楸邨の

「おくの細道」とのかかわりは至極当り前に思われるが、実は駅長である父に従って度々転校のあと、一関中学校に入っ

た。中学生である楸邨が足にまかせて歩きまわったのが、北上川のほとりであり、高館の丘であった。従って、後年の芭蕉研究のための奥の細道探索行の源流は既にこの少年時代のへの原始的疼きに始まっているのである。（中略）もう一見落とすことの出来ないのは「もうひとつのみちのく」とう（中略）文章である。現代人の発想と根本的に違う先ず人の心に入り立って風土のあわれを確かめてから自分の世を発想しようという重層的な方法―連句的なゆき方について芭蕉の心中の「みちのく」を見ていることである。してこの心中の「みちのく」は流れて「万里の長城」へ、るいは西域の沙中の「絹の道」へと通じてゆく。後年の楸邨の遙かな国外の旅の源泉が此の「もうひとつのみちのく」中に見出される。（中略）このようにこの章は楸邨の歩行的

思考というものを芭蕉の歩いた跡を何遍となく辿ることに
よ
って実践し、芭蕉の「生きた時間」を楸邨が自ら再現して
み
せた記録だと言うことができる。」同、五五七―五五八頁
よ
り引用。

五九：「学友楸邨」峯村文人

『加藤楸邨全集』第一一卷「解説」。昭和五六年（一九八
一）四月刊。五四四―五四七頁。

昭和十五年四月、楸邨は小山台の府立八中に就職し、峯村氏は品川の府立第一七高女に第八高女兼任で就職した。府立八中には前年卒業した、楸邨にとっても峯村氏にとっても親友の皆川弓彦氏が教員になっていた。

三人は、目黒や品川の喫茶店でよく語り合った。わたしは歌誌「潮音」に短歌を投じていたが、弓彦は、楸邨のかたわらで俳句にとりつかれるようになった。楸邨主宰の俳誌「寒雷」がその年の十月に創刊されたが、その一つのきっかけは楸邨と弓彦とが府立八中内に作り出した作句熱にあったのではな
い
かと思われる。わたしは、その創刊号に、文理大で能勢朝次先生に提出したレポート「新古今芸術と芭蕉俳諧」という一文を投じた。昭和十七年九月、わたしは小樽高商（現、小

樽商大)に転任した。(中略)第四句集『雪後の天』に佐渡紀行の一連の作があるが、それは、わたしのために、皆川弓彦と当時学生であった沢木欣一君とを誘って、送別の意味を兼ねて計画してくれた旅行の作である。(中略)十八年には皆川弓彦が応召し、広島の消し印で、南方にゆくらしいことを暗示する数行のことばを書きつけたはがきをくれて行方知れずになり、十九年にはわたしも応召し、台湾に渡った。そうして、わたしが敗戦後のはじめな国状のただ中に復員した二十一年の春、生きていたことを知った楸邨がさっそくたよりをくれた。(中略)楸邨は空襲で家を失い、第八高女同窓会の建物で、同じ境遇の同僚たちの家族と雑居生活をしていたのだが、そういう生活の中で(中略)その夏(中略)小樽のわたしをたずねてくれた。ふたりは、眠る時間も惜しんで語り明かした。混迷の極みに落ちていて、どうしていいのかわりに明かした。途方にくれていたわたしであったが、それが、わたしの学究生活を立ち直らせるきっかけとなった。(中略)／小樽、峯村文人を訪ふ／夏の灯をさしよせて顔応といふ 楸邨」同、五四五―五四七頁より引用。

峯村氏は楸邨と同じく教師生活を経て入学したところから楸邨に勇気づけられ親交を結び、その交流を語っている。

六〇：「蕉風中期から「軽み」探求への道」石寒太

『加藤楸邨全集』第一一巻「解説」。昭和五六年(一九八
一)四月刊。五四八―五六一頁。

「加藤楸邨の芭蕉研究の特質は、作り手としての内的要請から出発したもので、この方法は、芭蕉研究をはじめた学生時代から一貫して変っていない。師頼原退蔵の「君はつくりつつ芭蕉を求め道に徹底して自分の道を開け」という言葉はいまも楸邨の耳底に響いているのである。楸邨は、「どこで芭蕉と」(「国語科通信」昭和四十三年)でこんなふうに書いています。

研究それ自体、批評それ自体が目的なのではなくて、自分が作り手として、どうしていったら自分のゆき方を確かめることができるか、そのためには、俳諧文学を確立した芭蕉という作者が、どのように生き、どのように求め、どのように表現したのかということを理解することでした。作り手としての姿勢をはっきり把握することを目的としている以上、最も力を入れて理解しようと試みたのは、作り手の生命である発想ということでありました。作り手にとっては、発想ということは、すべての

じめであってしかも終わりでもありません。

この後文章は（中略）芭蕉の生きている時間を自分の中に流れるようにするためには、発想を通して手探りしてゆくことが何より大切であること（中略）などを説いている。「同、五五九―五六〇頁より引用。

「文理大での卒業論文は「西鶴俳諧の展開―談林俳諧研究」である。西鶴を専攻した楸邨が、芭蕉に惹かれていった経緯は、次の一文に述べられている。

同じ時代、同じように談林風を駆使した西鶴が、ひらかれたことばの世界で、ひらかれた言葉の自由を求めて、

『一代男』や『五人女』の世界を開いていった頃、芭蕉はとぎされたことばの世界で、とぎされた底に無形の自由をひろげて、蕉風俳諧を形成しつつあったのである。

十七音の中にとぎされ、局限されて、一旦ひろがり拒否された心が、どのようにして無限のひろがりを実現にしたか。ここに私どもが、芭蕉の静かな世界そのものに惹かれると同時に、その世界を探索した芭蕉の方法を知りたくなる理由がある。（『松尾芭蕉集・上巻』「芭蕉に惹かれる心」）

楸邨が俳句を作ることと、芭蕉研究は、決して別々のものでないことは、すでにこの二つの文章を読めば明らかである。（中略）尾形竹氏『岩波講座・文学10』「芭蕉」（昭和五十一年十月）の中で、山本健吉、安東次男、加藤楸邨の芭蕉研究の方法に触れ、研究者には評論家的なものと詩人的なものが必要であるが、楸邨は詩人的なものが芯になっていると述べている。楸邨という人の生き方が一貫して変わらないように、この方法もまた終生変わることにはあるまいと思われる。「同、五六〇―五六一頁より引用。

六一：「後鳥羽院、隠岐、楸邨」山本健吉

『加藤楸邨全集』第一巻「解説」。昭和五六年（一九八一）五月刊。四五四―四六五頁。

「結局野晒と新古今を手にして発つことになった。わたしは旅で読むのが好きである。そこに身を置けば、身にひびくものが読みとれるからである。私はたむれに『身読』と呼ぶ。私共平素活字に馴れたものは、よく頭で読む。坐りこんだ姿勢で安定した心で、平然と読む。読み了えてももとの自

分である。(中略) 読むからにはゆり立てらるるまで読みたいのである。」「(「隠岐へ」)」同、四五八頁より引用。

「だが、楸邨が後鳥羽院の中に汲み取った心情の根本は、「ひとりごころ」ということである。これは外在の如何なる動機にもかかわらず、彼の内なる欲求であった。戦局が苛烈化して来たそのころ、彼は俳句界全体からも孤立化し、「馬酔木」の内部でも孤心をかこつようになっていた。その反面に、彼を慕って集まってくる若者も次第にふえ、十五年十月には、彼を主宰者として俳誌「寒雷」が創刊された、言わば、絶対的な孤独者ではありえない、連衆とともに生きること運命づけられた、俳宗匠としての生活がここに始まった。矛盾するようだが、それが日本の古来の詩人の運命ではなかったか。」同、四五九頁より引用。

そして山本氏は、楸邨が後鳥羽院に惹かれるようになった筋道に、芭蕉の「柴門ノ辞」が存在したことはまちがいないことであった」という。さらに楸邨の近詠に触れ「おおらかなユーモア」に加え、「俳世界的ひろがり」を認める、という。

六二：「人間楸邨」田川飛旅子

『加藤楸邨全集』第一巻「解説」。昭和五六年(一九八一)

五月刊。四六六―四七三頁。

「第一句集というものは面白いもので一人の作家の一生の姿を暗示するものがあると云われる。そういう意味で『寒雷』はこの全集に示される峨々たる楸邨山巔のルーツとも云うべき骨格を如実に示していることは論をまたない。」同、四六六頁より引用。

「小西甚一氏は『颱風眼』を指して悪戦苦闘の句集と表現し、この句集が出来上るまで、校正段階で何度も何度も句形の訂正、句のさしかえ等が行われた難産ぶりを指摘しておられる。(「寒雷」昭54・10)(句略)時局の暗雲は暗く、言

論は統制され、軍国主義の色彩は日一日と強くなってゆく。こうした中で楸邨は物言えぬ俳句型式を逆手にとって、あるときは比喩を用い、また飛躍したイメージの衝撃といったモンタージュの手法を駆使して、韜晦した表現の中で、戦争を欲しない一人の生活者の怒りと絶望の声をあげていたと思われる。」同、四七一―四七二頁より引用。

田川氏は第二句集『颱風眼』巻末の楸邨の「略歴自記」を示し、楸邨の個人的苦難と第一句集『寒雷』の誕生が満州事変勃発から太平洋戦争へと日本が戦争に進んでゆく時代を背負っていること

を記す。その中でも『寒雷』には「後年のヒューマニストとして楸邨の人間に向ける温かな目なごしの見える」作品が点在する、と述べる。

六三：「楸邨雑記」木俣修

『加藤楸邨全集』第七卷「解説」。昭和五六年（一九八一）七月刊。三六二―三六五頁。

「学問の黄昏さむく物言はず／翳雲人に告ぐべきことならず（中略）これはある意味で非常に短歌に近い内容をもっている。短歌といったって私の考えによるものであるが、もう少し言語を加えれば短歌の世界になるものであると思われる。」同、三六四頁より引用。

歌人らしい論を示し、楸邨のシルクロードへの旅を青年のようなこころみ、という。

六四：「談林からの出発」尾形仿

『加藤楸邨全集』第一二卷「解説」。昭和五六年（一九八一）八月刊。五八四―五八七頁。

「『俳句研究』の昭和二十三年三月号に載った「伝統と俳句」と題する能勢朝次先生・西島麦南氏との鼎談の中で楸

邨は「（略）俳句自体さういった人間の全要請を負へないのぢやないか。さうすると西鶴なんかのやうにあの途中でべてを生きてしまおうとする散文に行かざるを得ない。さうすると私は西鶴の道が非常に運命的な自分の道を暗示してをるやうな気がして、大学の卒業論文は西鶴を書いたりしたのです」と述べている。また、「作家と研究者の道を僕は別にしてゐるのぢやないのだ。作家であり作家として生き抜くために一つの対決の過程として芭蕉を研究しなければならぬので研究するのです」とも言っている。」同、五八五―五八六頁より引用。

「『寒雷』「都塵抄」の句々にコメントを付した「都塵の中に」（「寒雷」昭和二四・四）という小品の中で、楸邨は、ペン執るや落暉の指がさむくなる／の句に「西鶴はあの談林の渾沌を征服して、好色一代男のやうな散文の世界に歩み入った。同じ談林俳諧から出て、芭蕉はあの深い句の寂寥を開いた。同じところから出て、相反した方向を歩いた二人の道は、相関的に扱はれなくてはならない」という前文を付している。卒業論文の西鶴研究は、後に『芭蕉講座』発句篇から『芭蕉全句』へと展開する芭蕉研究と、もともとワン・セットとして企画されたもので、それをま

ず西鶴のほうから手をつけたところに、ものを言えない詩型でいかにしてものを言うかという問いかけの徹底した徹底さが見てとれる。」同、五八六―五八七頁より引用。

「能勢先生たちとの鼎談が載ったのと同じ年の『俳句研究』一月号に杉浦正一郎氏の「現代俳句の諸問題―談林にかへれ・其他」という時評的文章がおさめられているところからもわかるように、戦後の俳壇は一時期、談林に返ることから再出発せよという声が高まり、私なども昭和二十六年に（中略）学窓へ戻ったとき、まず談林俳諧の研究から始めたのだが、楸邨はそれより十年前に談林俳諧の検討から出発したのである。楸邨が一茶に寄せた共感の中にも、一茶がその自在独自の俳風を拓くのにまず談林の学習から入ったことがかかわっていた。」同、五八七頁より引用。

六五：「表現者にとっての古典」金子兜太

『加藤楸邨全集』第一二巻「解説」。昭和五六年（一九八一）八月刊。五八八―五九四頁。

「『寒雷』後記には、こんなことばまである。「都塵抄が、いかりの相貌をあらはしてゐると評した人があつたが、（中略）自分の本音を吐きたいといふ気持は段々身の皮を

脱ぐやうなことになる。都塵抄を終らうとする今、何か身近の蕭条たるを感じつつある」―そしてその時、一方の手では、「西鶴俳諧の展開」に自己表現と形式詩についての模索を書きつづけていたのだ。」同、五九一頁より引用。

「楸邨はもつと内在的に問題意識を詰めてゆく。そして、西鶴の表現意欲のみだしを前提事実とはしないで、談林風と矢数俳諧の本質から、しだいにそうなっていたことを証明するのである。つまり、「軽口口拍子」が西鶴矢数俳諧の「主要な、中核的手法」となってゆく経緯を跡づけながら、それが、「題材」や「用語」を変え、「心付」をいつそう自由にしてゆく過程を実証する。むろん、その場合に西鶴の「性格」や「歴史・社会的条件」のはたらきを十分に考慮している。しかし、そこに傾きすぎる公式論を極力避けようとして、意識して実証に徹している。（中略）「之が同じ談林より出でて芭蕉と相反する散文的表現へ去った中心的な理由」と結論付けてゆくとき、はやくも、その後に芭蕉の中心的概念となった「発想契機」への思考が、はつきり見えてくるのである。だから『芭蕉全句・上巻』には、次のような明快なことばが記されることともなる。「（略）十七音の中にとぎされ、局限されて、一旦ひ

ろがりを拒否された心が、どのようにして無限のひろがり
を可能にしたか。」（中略）「西鶴俳諧の展開」では、こ
の芭蕉と形式詩の結びつきを「表現なき表現」とも書い
た。」同、五九一―五九二頁より引用。

「人間が何かにめぐりあう。そこで一つの詩的燃焼がお
こる。その燃焼はその人間の『生きてきた時間』の発見で
ある。この『生きていた時間』をもう一度自分の中に再現
してみたい。そして、自分の『生きていた時間』を確かめ
てみたい。これが私の古典に触れてゆくときのねがいであ
る。」この『一茶秀句』は昭和三十九年（一九六四）の上
梓（春秋社）だが、執筆はその二年前の夏だった。二年ち
かい闘病のあと、その病床で練っていたものを、一気に書
いたのである。芭蕉に執する楸邨は、ここでも芭蕉と比較
することが多い。たとえば、芭蕉には高悟帰俗の詩精神が
あったから、談林的市井を「軽み」の世界に生かそうとし
たのだが、一茶の場合は、「高く悟ることのない、俗その
ものの世界」にとどまったから、「その俗の中に、辛うじ
て小さな自足の光を点すほかなかった」といい、「農民気
質に根ざしている生きた息吹」とか、「何故一茶は駄句を
氾濫せしめなければならなかったのであるか」などともい

う。今度読みかえしてみると、一茶の「演技性」や「軽快
な口拍子」といった指摘があることに気付いて、おもしろ
いとおもった。（中略）一茶は「口拍子のための口拍子」
を繰返し、結局、「この定型とのきびしい相剋の中に自分
を結晶させる本来の俳句性を弱めた」と楸邨が指摘すると
き。いかにも楸邨らしいと私はおもったものだ。」同、五
九三―五九四頁より引用。

同書に収録の論は楸邨の卒業論文「西鶴俳諧の展開」を加筆訂
正したものであるが、金子氏はそこに楸邨の「自己の表現と形式
詩との関係―、これへの設問がじつに率直に熱く提示されている。
この熱さ、初初しさは、まぎれもなく表現者のもので解説者のも
のではない」という。自己表現への無限大の欲求と、最短定型詩
の有限性に如何に処置するか、という楸邨の言葉を引き「この初
期論文以降現在まで楸邨はその姿勢を取りつづけている。したが
って、表現者楸邨は、彼の論の原点であって、この原点を見おと
すと楸邨の発言一切を誤解することにもなる」という。

六六：「三句の覚書」安東次男

『加藤楸邨全集』第五卷「解説」。昭和五六年（一九八一）
一〇月刊。四八〇―四八五頁。

「次男仁弟わがまぼろしの鹿を哀れむとて来る。すなはち我亦これを慰めてうたふ、まぼろしの鹿はうつつも時雨かな」。はたと、膝をうちたくなるような、存間の醍醐味の瞬間である。この方は『吹越』に収めたが、気転の骨法には古俳諧のもつ強靱な魅力がある。」同、四八一頁より引用。

「連山之銘／友あり 我に 小なき水滴を／くれぬ／水色の 淡き陶遠めぐりて／蜿蜒とつらなる起伏あり／古き硯

に 添へて 机に置けバ／海をへだつる連山となりぬ／憂ひなき 日は 遠く去りて／見えぬ／近く来りて聳ゆるハ心重き／日 なり／ひとり その 襲に入りて遊ぶに／つぶやかあらず／したたる雪解水／『吹越』の巻頭に収めた。言うのは、

机辺の残暑を凌ぐなぐさみにもと思ひ、古い風鈴と取り合せて私が贈った古伊万里の小さな水滴である。長方形の四つの側面に簡略な筆で翠山を遶らし（中略）李朝水滴とはまた違う楽しさの見えるもの（中略）その間二年以上も経っていた。

これは楸邨さんが（中略）小さな水滴を、与えられた公案のごとく持回って身に馴染ませるまでに要した、ごまかしのないけっこう苛烈な時間である。人を物を通して理解しようとするその根気づよさに、私は感服したことを覚えている。楸邨が墨継の興を作句の興と一躰と見なすようになったのは、

このあたりから始まったようだ。」同、四八四―四八五頁より引用。

安東氏は楸邨との親交を通して作品のエピソードを語り、その上で「つぶやかあらず」の作は記念すべき句、という。

六七：「『吹越』の楸邨」矢島渚男

『加藤楸邨全集』第四卷「解説」。昭和五七年（一九八二）二月刊。四一五―四三一頁。

「これ以上にすぐれた楸邨論はあるまいと思われる詩がある」と、最初に高村光太郎の『道程』の中の「牛」の詩を引き、楸邨の句業をその「牛」の詩句を交えて述べている。

「一九七六（昭五十一）年にほぼ十年の沈黙を破って刊行された第十句集『吹越』は、そうした先を歩いている楸邨を はっきりと知らせてくれた。さきの『まぼろしの鹿』と同様 弟子たちの編纂になる。これらの句集が弟子たちの編纂になるということは楸邨の「馬鹿に大まかで無器用」なあり方と 関連しているが、結果としてはおもしろい効果を生んでいる。『まぼろしの鹿』には森澄雄が、『吹越』には安東次男が関係しており、句の配列や取捨に二人の趣好がそれ知らず出ているのだが、捨てられた句はそれほど多くはなく、無造作に

かなり雑然とした（中略）楸邨の句作りの過程が見てとれるからである。（中略）编者たちは（中略）その「無器用」な歩みを忠実にとどめる行き方を選んだのである。「同、四一 八 頁より引用。

「楸邨の歩みは愚直なまでに反復を重ねて深まり、やがて新しいものを掴んで行く過程である」として「声」に着目する。

「こゑなくて青の極まるいぼむしり 41年／ここで追求

さ れているのは「声」が存在の証しであるという主題であった。しかし既に『野哭』の句にあり、引例の末尾の句に再びあら われてくるような相反する副主題も同時に存在することに注 目しておく必要がある。この二つの主題は『吹越』で次のよ うな変奏となつて展開される。（句略）ものいふかぎり牡丹 の芽には及ばざり 44年／蟻の顔に口ありて声充滿す
リ／ この最後の句から、ものを言うための「口」が新しいテーマ として登場してくる。「同、四二〇頁より引用。

「口といふものあるとき鯉をはなれけり 44年／（中略）

「声」から「口」へ、楸邨はじつにゆっくりと歩いてゆく。

俳句表現として「声」よりも形ある「口」は強い筈だ、ということを味わい、確かめながら。そして同時に「声」を出すことによつて存在する、あるいは主体性をつよめ実在を獲得するという主題を反芻しつつ疑う。沈黙によつて得られるものという第二主題が次第にふくらみつつ、かつての主題と入れかわつてゆくのである。「同、四二〇―四二一頁より引用。

「そして次のような句が生まれる。ひとが来て蝶去る我の

無言界 46年／冬鴟と共有世界もの言ふな 50年／「誰かも

のいへ」から「もの言ふな」に到りつくまで何と三十五年の歳月を要している。これを愚鈍な歩みだと笑える人があるだろうか。（中略）「力一ぱいに地面を頼つて」（中略）楸邨は歩き続け、とうとう新しい一つの地点に達したのである。そしてそこは曾て誰も踏んだことのない表現世界なのだ。「同、四二一―四二二頁より引用。

「「声」の主題から派生していったもう一つの主題が『吹越』にある。それは、初鶏となりそこなひし鶏あるく 43年

／に始まる。初声を上げてこそ初鶏となるのだがこの鶏はそれをしそこなったのである。そこから在るものになりきれな

い、という重要なテーマが生まれてくる。曼珠沙華曼珠沙華

とはなりきれず 4年（句略）／忿りきれず諦めきれず冷え

仏 50年／これらの諸作はいずれも面白くすぐれている。（中

略）われわれにわかるのはこの主題が次の句集に引継がれるにちがいないということだけである。」同、四二二―四二三頁より引用。

「楸邨の―ないしは、ことに『まぼろしの鹿』『吹越』に共通している第二の特質は脱皮しない、ということであろう。

（中略）楸邨は光太郎がうたった「牛」のように、「歩きながら」「大地から生えてゐる草を食」い「大きな体を肥やす」型の作家であり、そのもつとも見事な典型と言えるであろう。

その点盟友波郷が、『鶴の目』から『風切』へ『風切』から『惜命』へ、そして『春嵐』から『酒中花』へと変貌を遂げていったのとよい対照をなしている。楸邨は過去一切の自分を背負って歩く。だから、『吹越』にも、鬼城があり、「馬酔木」風の抒情があり、人間探求派があり、社会性がある。

それらは過去の残滓ではなく現在もなお楸邨のうちに生きて働いている。（中略）過去一切を大切にいつくしみ、時に応

じ機に接してそれらを取り出す。（中略）たとえば鬼城的世界

は、『吹越』においても、流れきし蝗が二つ縋りあふ 42年

（句略）などといった見事な結晶を見せている。／闇の中牡丹の散りし闇のある 46年／花降るやはつと燃えたる夜の蟹

48年／などは秋櫻子から蕪村にもつながる抒情だろう。ま

た、いわゆる人間探求派的発想はいまも楸邨俳句の主流であり、社会性俳句に培われた視点さえも、（句略）／梅雨にひるふ原爆の土ひとかけら 45年／などの句となって出てく

る。『吹越』の末尾に近く、バビロンに生きて糞ころがしは押す 50年／という旅吟に出遭い、これはまったく楸邨だと

思った。（中略）大きな砂の塊をせつせと押して新しい砂を加えつつさらに大きく大きくして行く。（中略）違うところは糞ころがしの塊がつねに内側に畳まれて新しい砂だけを表面にするのに対し、楸邨の塊からはいつでも内部の層が取出せる事だろう。楸邨はゆっくりと歩きつつ、ますます多面体

となつてゆく、そしてますます奥深い光を内蔵してゆく、という方が適切かもしれない。」同、四二三―四二五頁より引用。

「では『吹越』において加わつた新しい砂は何であろう。新しい截面は何か。その多くはやはり『まぼろしの鹿』とのつながりの中に現れているようだ。私はかつて『まぼろしの鹿』の鑑賞の筆をとつたときに、雁仰ぎ政治家のごときもの

歩く 37年／ばりばりと氷りてしかもわが寝巻 38年／繭煮

婆茫たる顔をせねば負け 39年／曼珠沙華もう数へねば花消

えよ 40年／鶴の毛は鳴るか鳴らぬか青あらし 41年／とい

つた傍若無人ともいふべき諸作を上げて死病を経た作者の「強靱な恣意」と呼んだことがある。これの諸作は『吹越』においてどのような展開と完成を見せているだろうか。／恋

あはれ大綿なんど目もくれず 40年／霧にひらいてものは

じめの穴ひとつ 42年／蛇の頭はわれより軽げ太陽よ 43年

／人間をやめるとすれば冬の鴟 〃／梨食ふと目鼻片づけこの乙女 44年／秋草にお頼み申す猫ふたつ 〃／日本にこの

生まじめな蟻の顔 45年／笑顔みな使ひはたしぬこれから河

豚 46年／くすぐつたいぞ円空仏に子猫の手 47年／おぼろ

夜のかたまりとしてものおもふ 48年／寒ざれの仏おもへば

ざらざらす 50年／ぼこぼここと暗渠出てきし茄子の馬 〃／

(中略) これらの中に『吹越』集中の最高傑作の半数以上が含まれてるだろう。各句集から代表作を抜いてきたときに、『吹越』からはこれらの中から選ばなければならないまい。これらがこの句集における新しい側面であり、楸邨の顔に新しく加わつたものなのであるから。私がかりに三句を選ぶとすれば「人間の穴」へおぼろ夜の「へぼこぼこと」。しかし「ものはじめの穴」も「目鼻片づけこの乙女」も「お頼み申す」もみんな捨て難い。これらの諸作には生まじめだった楸邨に漸くにじんできた深い微笑―知世子夫人は「独特の苦笑のよ

うなもの」という―がある。(中略)この全く新しい系列の上に、今後どのような作品が作り出されてゆくのだろうか。」同、四二五―四二八頁より引用。

「弾弦や木の芽日輪蕭々と 49年／澎湃と陽炎わたる沙

の上 〃／泉はなきかカイバル越えの弱法師 〃／一九七二

(昭和四十七)年に、楸邨はシルクロードの旅に出る。やむにやまれぬ「道祖神のまねき」に駆りたてられるように楸邨はまだ見ぬ異境の地に老身を運んだのである。芭蕉の跡を慕うだけならば奥の細道を歩いていけば足りる。しかし「古人の求めたるところを求め」るのならば、異国への旅は現代における必然であった。「旅そのものの上で私を辺土へ誘ふだけではない……俳句といふ自分の表現世界で、どうしても一つところに定着することができないで何かいまだ知らない世界があるような思ひが絶えず私を駆りたててやまないのだ」

(「顔なき仏」寒雷49年7月)。異質の風土の中で新しい表

現の可能性を掘起こすことが楸邨のねがいであった。最初の旅の成果は句文集『死の塔』として上梓された。その後二回にわたる旅吟が『吹越』に収録されている。ここに掲げたの

は、『死の塔』中の／大黒屋光太夫 日本語をはなれし蝶の

ハヒフヘホ 47年／竹削ぎの耳の胡馬なし胡地灼くる 〃／

などとともに私をもっとも佳とするものである。(中略)異質の風土は楸邨をはねかへし、俳句表現をかたく拒んだ。しかし楸邨という「牛」は挫けないだろう。異質の風土の中で日本が見えてくるということを楸邨はくりかえし語っている。」同、四二八―四二九頁より引用。

「『吹越』に顕著なもう一つの截面は編者安東次男の見識によって、存問の句が前書を附して数多く集められ、楸邨の闊達な一側面があらわれていることである。(中略)／流火草堂病臥、杖を贈る 一句 たそがれは阿修羅もつけと藜杖 46年／(中略)ここには孤心からときはなたれた楽しい楸邨像がある。かくく擲揄しあうような調子にふところの広さが見え、あたたかな楸邨そのものである。(中略)俳句が本来挨拶であったという原点を確認するものでもある。」同、四二九―四三一頁より引用。

「以上、『吹越』にあらわれてきた三つの側面について述べてきた。(中略)現実の楸邨はより多面的でもっと深いと

ころにあるのであろう。この『吹越』の時代に楸邨の視野に入り、傾斜の対象となった中国の画人石濤と杜甫にせまる芭蕉をかさねていて、それは芭蕉にせまろうとする楸邨自身の姿とも映って興味深い。ここではただ石濤の画賛詩の一節を楸邨の読下しによって掲げるに留める。

筆ヲ出スヤ渾沌開ケ、拙ニ入リテ聡明死ス。理尽
キテ法尽クル無ク法尽キテ理生ズ。理法本伝無ク、古人
ハ已ムコトヲ得ザルノミ。(『達谷往來』所収「石濤と
芭蕉」)

この石濤の語に感銘する楸邨は、この境地に近くいるのであろう。「理法もと伝なし。古人は已むことを得ざるのみ。」楸邨もやむことを得ない人だ。(中略)つねに自分を円熟から遠いと感じ、進むことを止めないであろう。つねに傷つき隙だらけであろう。しかし後につづく者たちからは、鬱然たる円熟の人として仰がれるにちがいない。」同、四三
一—四三二頁より引用。

六八：「弟子である師匠」小西甚一

『加藤楸邨全集』第一三卷「解説」。昭和五七年(一九八
二)四月刊。五二六—五二九頁。

最初に「楸邨とわたしは上級生にして下級生にして同級生」で、俳句では楸邨が師匠、英語は小西氏が教えるような立場であったことを語る。

「楸邨は(中略)分析的なものごとを説明する能力が生まれつき乏しいのだろう。そのころ、かれは現代俳句の在りかたについて、かずかずの論を発表している。(中略)趣旨はまことに同感の至りだけれど、論理の構成や概念規定があやふやで、まことに無器用だという感じがする。(中略)能勢先生がわたくしに言われた。「こんど加藤君に会ったら、よく言っておいてくれ。俳論などやめて、俳句を作ることに専念しろ」とね。いくら議論しても、俳句はうまくならん」。楸邨が「論」の器にあらざると見抜かれたのだろう。その分だけ、作者としての楸邨に期待されたのにちがいない。(中略)大成するためには、無駄が必要なのである。能勢先生は、多分「論」における楸邨の無器用さを心配し、無器用な「論」のため手垢をおわせたくないとお考えだったのであるまいか。」同、後二六—五二七頁より引用。

「終戦のしばらくあと、戦時中における言動についての批判が花盛りの状態あったころ、中村草田男によって俳人の戦争支持を厳しく指弾する論が発表され、楸邨もその主要な標的

となったときのことである。楸邨は（中略）無器用きわまる論調で、自分の言動がどんな意味をもつものだったかについて、おそろしく誠実に述べた。能勢先生いわく、「こんどの加藤君の文章は良かったよ。あれだけ痛いことを言われると、（中略）知らん顔したがるものだけど、正直に本音を言ったのが良い。（略）」。わたくしも、その文章を見て、楸邨がすこしも言訳をしていないのに共感した。（中略）われわれの共通の師匠である諸橋轍次先生は、わたくしの高等師範のクラスが卒業するすこし前の授業でいわれた。「言訳をするな。言訳をしたので相手が釈然となったという例は、方に一つもない」同、五二七―五二八頁より引用。

七二：「贖るものを」川崎展宏

『加藤楸邨全集』第一三卷「解説」。昭和五七年（一九八二）四月刊。五三〇―五三六頁。

「楸邨は「滲透」について『一茶秀句』（昭和三九・一二刊）で『赤さうし』の言葉を引きながら、以下のようについている。「対象に立ち向かったら、その真実に感合滲透せよというのである。〃物に入る〃というのは、対象と一つになって燃焼することだと思ふ。対象の真実は〃微〃として表に顕れ

ている。そこに作者の詩情が感合するわけである」と。同、五三五頁より引用。

「楸邨は、その子規の「批判」の根底をなし、直接、俳句の価値観を培ったものとして子規が二十四年から着手した『俳句分類』の意義を強調する。子規は各時代の多種多彩の句に接して、自ずと句の可否を判別する審美眼を養ったが「子規という人物の作家的力量を考える上で、私にとつての最大の魅力と驚異とは、この審美眼を自ら培ったという点にある」と「自ら」に傍点をふり「この点こそは他の何を措いても見落してはならない急所なのであって、すでにできあがって基盤に凭れがちな後進の脆弱さを反省する最大の手がかりであろうと考えている」と。この高揚した文体の背後には、楸邨も亦「自ら」培おうとした努力があつたに違いない。事実、楸邨は『芭蕉講座』をはじめとする数々の芭蕉研究を通して「審美眼」というよりもむしろ芭蕉の「発想契機」を縦に深く自らのものにしようとして努めて来たのであつた。」同、五三六頁より引用。

題名の「贖るものを」は「寒雷」の皆川弓彦の句「贖るものを失ひし空松葉灼け 皆川一郎」による。

七〇：「加藤楸邨―人間探求という綜合―」平井照敏

「国文学―解釈と鑑賞」（現代俳句の世界特集）昭和五八年（一九八三）二月号。至文堂刊。九三―九五頁。

平井氏は「近代、現代の俳句が、「詩」と「俳」を二つの作用、反作用の力として、展開してきたと考えている」という。そして「正岡子規のいわゆる俳句革新は、個展は行くの分類を母胎として生まれているので、俳句を文学として独立させ、小説、詩、戯曲などと比肩しうる、おもとして成長させるといふかれの酷評には、「詩」と「俳」の二要素の両立があつた」という。次に「俳」の流れをひいた高浜虚子、「詩」の流れをひいた水原秋櫻子という見方を示す。秋櫻子の流れは新興俳句運動と人間探求派を生み出すことになるが、草田男、波郷、楸邨の三人は「人間を探求する人々という共通項を持ちながら、「詩」と「俳」の視点から見ると」「かなりちがった立場を取っている」というのである。そこから次のことを指摘する。

「戦後の俳句は、昭和二十八、九年頃から、社会性俳句論争、造型俳句、前衛俳句という、詩にむかう若手俳人の活気ある活動によって激しい展開を見せるが、そのリーダーであつた金子兜太は、人間探求派の草田男、楸邨に多くを学んだ俳人であつたし、高柳重信は、新興俳句の若い仲間の一人であつ

た。この俳句を詩に高める運動は昭和三、四十年代の注目すべき現象だったが、昭和四十年代のおわり頃から五十年代にかけて、俳句の「俳」に注目する動きが顕著になり、文学界全体の伝統再見の動きと呼応して、飯田龍太、森澄雄、草間時彦の俳業に関心が集中するようになった。」同、九四頁より引用。

このように「俳」と「詩」の二要素を目印に俳句史を見ていくと楸邨は「俳」と「詩」の中間に位置するといふのである。「楸邨は、兜太を生み出す母胎になつたばかりか、澄雄を生み出す母胎にもなっているのだ。つまり、「俳」と「詩」を綜合した母胎になっている」という。「弟子作りがうまいといい、茫洋とひろい人柄というがその理由は、楸邨における「俳」と「詩」にわたる多様な関心が、人間的眞実を求めるとよい意欲によって綜合されているところに見出されるのではないか」と述べる。

七一：「加藤楸邨」志摩芳次郎

『現代俳人列伝（一）』―明治・大正・昭和の巨匠たち―その生活と芸のすべて／昭和五八年（一九八三）一〇月（「はしがき」の日付。刊行日不詳。）大陸書房刊。二〇八―二三一頁。

「蚊帳^{かやい}出づる地獄^{じごく}の顔に秋の風（中略）およそ俳壇にひと
おおしといえども、かれくらいに善良で誠実な人間はいない。

またかれぐらいの苦労人も珍しい。かれは若いころに、言語
を絶する辛酸をなめた。かれの父は、鉄道官吏であった。市
川潔の『駅長紳士録』に登場する。実にりっぱな人格者で、
陸軍中將というニックネームがつけられていたというから、
風格があり、風采も堂々としていたのであろう。この父は新
発田^{はた}駅長を最後に退職し、一家は金沢にうつり住んだ。（中
略）冒頭にかかげた『蚊帳出づる地獄の顔』時代は、
生活も安定し、かれにとっては比較的平安な時期であった。

（中略）「地獄の顔」の語、千鈞の重みを持つ。（中略）吉
野秀雄氏に『まぐはひははかなきものといはれども七日へぬ
ればわれこひにけり』という歌がある。つきつめてかんがえ
れば、生そのものが、はかなく観じられる。まぐはひは、そ
れ以上になくなく、はかない。（中略）「地獄の顔」もまた、
かなしみの形をかえた表現である。楸邨の誠実、深刻癖はこ
こにもはっきり現れている。「同、二〇八―二一〇頁より引
用。

「『白地着てこの郷愁のどこよりぞ』（中略）この郷愁は
ふるさとに想いを馳せるといった単純なものではなさそう

だ。（この郷愁のどこよりぞ）おいう強いひびきが、それを
ものがたる。知識人の自由にもものいえた時代にたいする郷
愁である。（中略）楸邨のいわゆる難解俳句は、昭和の知識
階級の苦悶を象徴している。山本健吉はこのころの楸邨を「在
来の自分の傾向では満足しきれないものを意欲し、模索して
いる姿を汲み取ることができ」といつている。もちろん、
そのとおりなのだが、だれだって作家（俳人をふくめて）は、
昨日の自分にあきたらず、つねに脱皮をこころみる。当然の
ことである。だが、それだけでは、かれの難解俳句の時代的
意義は見失われる。「同、二二一―二二二頁より引用。

七二：朝日文庫「『加藤楸邨集』「解説」」三橋敏雄

現代俳句の世界8『加藤楸邨集』昭和五九年六月、朝日新
聞社刊。三七二―三八六頁。

「楸邨の「後記」はつづけて次のようにいう。（中略）「由
来、私は」「父に早く離れ、多くの家族弟妹を支持して生
活苦を嘗め身動きの出来ぬ逼迫の中にあつて若い希望をひ
そかに燃やしつづけてゐた。私の中に何か孤独の影があれ
ば、それは此の転々の間に自らを支へんと力めた忍苦の糸
を曳くものであらう」「私にとって最も不幸なのは故郷を

持たぬことであつた。私はいつか故郷を過去に見出さず、之を未来へ未来へと押しやつて未知の世界にのみ故郷を見るやうになつてゐた。私の俳句の動かずにはゐられないのも、かういふところに性格づけられてゐたのかも知れぬ」「俳句のみが平靜であり典雅でありえなくなつた」。同、三七五―三七六頁より引用。

「さらに加藤楸邨のこれまでの全句業に接して、たまたま気付いたことは、一句中の措辞に「何」を置く作品が全制作期間中にわたつてたいへん多いことであつた。自意識にかかわる「鼻」の句も少なくないけれど、それ以上である。たとえば「何かわが急ぎぬたりき顔さむく」「霧の底何か言ひたくあるひ立ち」「何の慍いり身は秋風の底に立ち」「端居して何かを思ひ出さざる」「蹠を蚊に食はれ何か言ひ足らぬ」「何がここにこの孤児を置く秋の風」「朝寒の物置き替へて何を待つ」「昏黒なる枯野に何を見んとする」「はるかなる汗のくらがり何呼ばむ」「朧夜の我を出でゆく何ならむ」「山百合が消えて霧より何かが見る」等々、推して思えば、これら作品に頻出する「何」とはまた、つねに未知の世界を自己の内部に求めてやまぬ証左であろう。」三八五頁より引用。

七三：「楸邨先生一面」大岡信

『現代の俳人―加藤楸邨』。企画・WEP。大崎紀夫編。写真・橋本照嵩。昭和六三年（一九八八）六月、国書刊行会刊。二―三頁。

「句集で言えば『吹越』および『怒濤』、この二冊の最新句集の中から句を選んで、楸邨句の五七五に私が七七の付句をつけるのである。付合つけあひはその一句だけで打ちどめの、最短連句である。私はその付句を持つて達谷山房に出かける。そして先生とともに、お互いの付句を一枚の紙に書き合うのである。たとえば、「子安神」と題する楸邨句／霧にひらいてものはじめの穴ひとつ 楸邨／には、三千世界森閑と鳴る信／という付合をつけたが、この二句を同じ一枚の紙に二人で並べて書くのである。のんのんと馬が魔羅振る霧の中楸邨／差す手引く手も魔羅もまぼろし 信／という付合は、いたく先生を喜ばせたようで、大笑された。私もこの付合を多少自慢したりした。みちのくの月夜の鰻あそびをり 楸邨／藝名を問へば拾徳といふ 信／とか、蜜柑吸ふ目の恍惚をともにせり 楸邨／かくのごときかかの世の桃も 信／など、最初に作ったシリーズ中の二、三の例である。（中略）

おそらく、楸邨句のこの二十年ほどの、力に満ちた凝縮力、
えもいわれぬ弾力に富んだ諧謔は、恐るべき集中力を楸邨先
生に要求するため、先生の日常生活における会話は、微風の
そよぎのような軽やかさと、〃何でもなさ〃を必然的にそな
えるにいたったのであろう。」同、三頁より引用。

七四：「人間の存在の真実」について」今井聖

『現代の俳人―加藤楸邨』（発刊年等は「七三」に同じ。）
七四―七七頁。

「人間としての自分の人間性を、社会によって規定される
社会的存在としての自分というふうに言い換えるなら、まず
社会悪が人間性を規定することになる。「人間の存在の真
実」を定めるものは、存在を取り巻く状況とも言える。棉の
實を摘みあてうたふこともなし『寒雷』／＼の生活実感は、疑
問としてまた憤りとして内側に問返してゆくならば、いわば
必然的に、基地一千汗で讀まずに何で讀む『まぼろしの鹿』
／＼という社会意識の方向へその根本を見出してゆく。「観念
的な真実」から、いわば「科学的真実」の方向へ一歩踏み出
すのである。」同、七六―七七頁より引用。

七五：「陶醉者と生活者のあいだ―加藤楸邨の初期評論を軸に」

夏石番矢

『加藤楸邨初期評論集成』第一卷「解説」。平成三年（一
九九一）一〇月、邑書林刊。（以下、邑書林刊は略。）三七
九
―三九一頁。

「楸邨の（中略）「歩行者の言葉」（一九三九年）が（中略）
加藤楸邨という書き手のリズムを物語っている。

何かに屈託している時は何かを見つめながら歩いて
いるようだ。しかし見るものはつきり意識していない
場 合が多いので、ふと沈潜の割目から冬木が見えたり、
冬 雲が光っていたりする事になるようだ。この反対に暢
や かな気分の方は、来るものがつぎつぎと目に入り、意
識 の中に入ってくる。入ってくるものが移動する反面、
消 えていくことも速いのであった。

（中略）楸邨が「何かに屈託している時」、つまり何らかの
感情に突き動かされているとき、事物の断片が曖昧ながらも
目に心に飛び込んでくる。たとえば、第一句集『寒雷』（一
九三九年）の有名な一句、鰯雲人に告ぐべきことならず／＼は、
発表当時、難解だと批判されたが、一句のリズムは、いささ

かの屈託を伴いながらも、おだやかでなだらかな歩行のリズム以外の何者でもない。「鰯雲」という上五は、それ以降の措辞とあわせ読むと、暗示的暗喩の様相を強く帯びるけれども、「人に告ぐべきことならず」の心境にある人間に対して、突き放してもない救済でもない何がしかの表情を持って、「鰯雲」が「鰯雲」としての存在感を主張すべく出現したと考えればいいのではないか。作者楸邨が少しでも鬱屈しているときの作品は、歩行時にはっと目に入る事物の断片的性格や解のない啓示的性格を読者に印象付ける。(句略)これに対して、俳人楸邨の心が晴朗なるとき、作られる俳句はたしかに嬉々としながらも、その印象はどこか淡く「消え去ることも速い」同、三八三―三八五頁より引用。

「歩行と言えば、二十世紀フランスの詩人ポール・ヴァレリーの詩論「詩と抽象的思考」(一九三九年)があり、楸邨の「歩行者の言葉」とほぼ同時期のもので、しかも歩行についての考え方は大きくへだっている。(中略)楸邨の俳句Ⅱ歩行論には、ヴァレリーの詩Ⅱ舞踏論に見られる強烈なエクスタシーの要素がないということが浮上してくる。楸邨が歩行の気ままだが規則正しい枠を破るとき、決して法悦の舞踏にはならず、佇立したままの慟哭になるのだ。／藁誰かもの

いへ声かぎり 『颱風眼』(一九四〇年)／ひとは征きわれ
隠岐にありつばくらめ 『雪後の天』(句略)かくかそけく
羽蟻死にゆき人飢ゑき 『野哭』(一九四六年)／私は慟哭
する楸邨を愛するが、詩の陶醉を許されない楸邨に、戦時下
や戦後の反映を見るべきだろうし、良識者としての節度を見
るべきだろう。」同、三八五―三八六頁より引用。

「加藤楸邨の俳句を、私は和歌的俳句だと思っている。
(中略)楸邨は俳人として出発してより、自らの和歌的資質
を知り、和歌的言語のなだらかさ、まるさ、おだやかさ、ふ
くよかさを心の底では希求しながらも、和歌の誘惑を必死に
遁れようとしてきた苦闘がわかったことである。(中略)短
い俳句には、流れ去る快さ以上のもの、短さを短さと感じさ
せない残響感が、リズム上そして意味上やはり必要である。
最初期の加藤楸邨は和歌の誘惑に無防備だった。「新興俳句
の将来と表現」(一九三五年)で、「短歌的手法を撰取した
ことが俳句の敗北ではなく、俳句の表現をさらに流動的にし
多方面にした」と述べた楸邨は、「表現における俳句的郷愁」
(一九四〇年)になると、次のような意見を発する。(中略)

「私は現代の主流としての俳句の短歌的表現の上
にこの危険(俳句独特の、者を言わぬ深さが消えること

―夏石注）を感じないではいられない。（中略）私は短歌的なものすべてを否定し排斥しようとするものではない。むしろ、短歌的なものを、あるいは誰よりも重く見ているのではないかとさえ思う。それぬかかわらず、俳句が俳句自身の重さによって立つためには、現代の短歌的表現の中には戒心すべき傾向が多いことを感じないではいられぬのである。

また、「俳句的眞実」（一九四一年）には、俳句の詩的言語としての運動性を明言するくだりがあった。

短歌には、流れ去る調べのどこまでもゆきながれるところに力がある。俳句は、ぷつりと切れてそのしらべはもとへ流れもどるところに力がある。「行ってかえる」と説くことが最も正しいであろう。

近・現代短歌には、古典的和歌の声調を脱したものもあり、楸邨の指摘するようには必ずしも言えないのだが、俳諧の言語のきれ、ぶつきらぼうさ、異物感などに着目したところは興味深い。けれども、晩年の楸邨に俳諧的滑稽味が強く始めた点を除けば、この俳人が一貫して和歌の声調を自戒しな

がらも自作のふくよかな背景にしたのも事実であった。」同、三八六―三八九頁より引用。

「楸邨がつかみ取った「芭蕉俳諧の中核の精神であると共に、その表現方法」（傍点原文のまま。「眞実感合の俳句精神」（一九四四年）は、

あらゆるものの眞実相に成り入ると、そこに眞実相が隠微の間に揺曳してくる、これと私意をはなれた純一の情において感合する―物の眞実相であると共に、心の眞実相なのである

境地、すなわち「眞実感合」であった。ここには、宗教的陶醉が除去された、静的な神秘主義、おだやかなアニミズムがある。ヴァレリーの舞踏の昂奮状態ではなく、かといって、日常生活者の生活論理でもない中庸の地点に、加藤楸邨は芭蕉をそして最高の俳句を見出そうとしたのである。（中略）楸邨が絶賛する芭蕉の、野ざらしを心に風にしむ身哉／荒海や佐渡に横たふ天の河／といった発句にしても、俳諧の既成秩序を破る「俳」よりは、和歌的なしなやかさや優美さにまだまだ引つ張られていた作品だということを書いておきたい。そして、和歌に名残り惜しげな芭

蕉は、楸邨の見つけだした自らの分身であるということも。」同、三八九―三九〇頁より引用。

七五：「ディオニュソスの楸邨の萌芽」今井聖

『加藤楸邨初期評論集成』第三卷「解説」。平成四年（一九九二）二月刊。五三一―五四三頁。

「本集成第二巻に、「『馬酔木』作家の傾向的批判」という論文が載っている。そこで楸邨は、秋櫻子と誓子について、前者をアポロ的、後者をディオニュソス的というふうに語る。アポロ的精神とは、「対象を理性的に整頓し、秩序立てんとする精神」を意味し、ディオニュソスの精神とは、「衝動本能熱情の世界において、行為により自己の力的展開を遂げんとする精神」を意味する。」同、五三五頁より引用。

「楸邨は無季容認か否かということについて、断定的な言い方をしていない。

「無季を生み出そうとする気持ちと口語に拠ろうとする気持ちは同じ根底の上に立っている。つまり自分の生活感情にどこまでも忠実に表現したいというのだ。その場合何より必要なのは俳句としての伝統的な性格を歪め

ないで自分を生かす道を求めることだ」（「問題探求」）

（略）急進派は、季を棄てるべく理論武装する過程で、十七音型にも論及せざるを得なくなる。十七音については無条件容認というのでは辻褄が合わない。「俳句は何故に十七音をもつてうたわねばならぬのか」というところに論議は必然的に辿りつく。ここにも楸邨が「十七音量性」を「俳句性」の第一要件とする所以がある。」同、五三八―五四〇頁より引用。

「当初、清新な青春性を担って登場したアポロ的秋櫻子に「馬酔木」が、やがて反「ホトトギス」陣営の中でのひとつの「権威」となってゆく過程は、歴史的な必然を思わせるが、「寒雷」を創刊したのも、また必然に思われる。新興俳句運動が提示した様々な問題への「抵抗」を通して、楸邨が認識し獲得したものは、極めて簡潔な言葉に纏められ、新たに提起された。即ち、「寒雷」創刊号の巻頭言「俳句の中に人間の生きることを第一に重んずる。生活の真実を地盤としたところ俳句を求め」という言葉である。この言葉を理念として、半世紀の間、楸邨は新しい世界を展いてきた。それはまぎれもなくディオニュソスの精神に拠る展開であった。」同、五四二―五四三頁より引用。

七六：『楸邨365日』二刷 矢島渚男編著 執筆・川内静魚・

加藤穂高・今井聖・八木莊一・小檜山繁子・水上孤城・中
拓夫・加藤瑠璃子・九鬼あきゑ

平成八年（一九九六）三月、梅里書房刊。「初版」平成四
年四月刊。

楸邨作品を一日一句、鑑賞している。

「一月一日初日肅然今も男根りうりうか（中略）」印象に
残る賀状を、と問はれたので、二十年あまり前の金子兜太の
『男根隆々たり』といふのを挙げた。「これに和して」とい
う前書きする句。「俺の男根は隆々だが、先生のはもうダメ
かな」といった賀状を思い出して「あれからお前さんも年を
とつたが、まだ大丈夫か」という諧謔あふれる一句。「初日
肅然」と冠してよく抑えがきている。（一九八四年Ⅱ79歳

『怒濤』渚男）「同、一三頁より引用。

「一月五日姫始め安達多良吾妻雲を置け（中略）」男女の
まぐわいを交わす始めというのは実におもしろい。それが頭
にあったので福島の西に聳える安達太良山と吾妻山を持ち
出して、姫始めというのなら『雲を置け』と呼びかけた風狂

のつもりだった（中略）」（作年不詳「ひめはじめ」『達谷
往来』——一九七八年刊・渚男）「同、一五頁より引用。

行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ（中略）船戸に辿り着き、
船に出会ったときの、なんともいえない開放感がふつと口を
ついて出たのが、この句ではなかるうか。「行きゆきて」に
は、「行きゆきて倒れふすとも萩の花 曾良」が意識されて
いたに違いない。（中略）秋桜子は、この句を「雪舟の描い
た屏風にでもありそうな景色」と評している。（一九三二年
Ⅱ27歳『寒雷』静魚）「同、二〇頁より引用。

「一月二十一日寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃（中略）
「びりりびりり」という擬音は、息をひそめる作者の心と寒
雷が、いつしか一体化した共鳴音でもある。（中略）「寒雷」
という季語はこの句以後一般化された。芭蕉に「季語の一つ
も探したらむは後世によき賜也」（『去来抄』）という言葉
があるが（中略）冬の雷よりも重苦しく強い響きを持つこの
季語に、当時の暗い世相に悶々としていた一俳人が托したも
のは、怒りだろうか希望だろうか。一九三八年Ⅱ33歳『寒雷』
静魚）「同、二三頁より引用。

「一月二十三日寒卵どの曲線もかへりくる「寒卵二つ置きたり相寄らず 綾子」の句のように、そのふくよかで、純白な存在感も注目された。この句は、そうした寒卵の円型の曲線をじつと見つめていると、自分の方へ、そのひたすらな線が帰ってくる、遙か彼方から自分の内部へ清明なひかりを放って入ってくるという観想の句。また同じ句集の中にある句／寒卵の無限同型がふとさびし（中略）るいるいと置かれた様相に一瞬の寂寥を感じながら、そこに永劫につづく静謐感をうたっている。（一九六三年Ⅱ 5 歳『まぼろしの鹿』拓夫）」同、二三頁より引用。

「一月二十三日カフカ去れ一茶は来れおでん酒／カフカは（中略）二十世紀のドイツ文学史上画期的な作家として全世界に強い影響を与えた。しかし（中略）通俗に生きた小林一茶のほうに今の自分は（中略）親しみを感じている。（中略）たしかにこの頃の楸邨は一茶に惹かれ、『一茶秀句』（昭3）を上梓した。芭蕉や蕪村の人生、芸術の面での高遠な境の俳諧と違った一茶の、生きたままの弱者としての複雑な内面を、自分の現実の心に切実に引きつけて鑑賞した名著であ

り、『まぼろしの鹿』から『吹越』への句境に大きな影響を与えている。（一九六五年Ⅱ 6 0 歳『まぼろしの鹿』拓夫）」同、二四頁より引用。

「二月二日火事を見る胸裡に別の声あげて（中略）「別の声」を更に言うならば、自分の深淵をのぞいてしまった驚きの声でもあろう。火災の奥に一瞬空襲罹災の時の句「火の奥に牡丹崩るるさまを見つ」のまぼろしがよぎったのかも知れない。（一九四八年Ⅱ 4 3 歳『起伏』繁子）」三二頁より引用。

「二月四日ばりばりと氷りてしかもわが寝巻（中略）干し物台の寝巻などというものを詠った人はいないだろう。「しかも」が口語をそのまま取りいれて変わっている。そしてこの部分に諧謔がふんだんにこめられた。（中略）同じ句集に、雑巾となるまではわが古浴衣／という句があり、同じ系列にある。（中略）過去にも現在にもこんな句をつくった人はいないだろう。（一九六三年Ⅱ 5 8 歳『まぼろしの鹿』渚男）」

同、三二頁より引用。

「二月五日ふくろふに真紅の手毬つかれをり／さまざまに

解釈がおこなわれてきた作品。「真紅の手毬」を心臓と考えたり、地平線に沈む太陽としたりする解さえなされて来たが、それは「に」の用法が微妙だからであろう。(中略)やはりこの「に」は切字「や」を軽くしたものと考え、フクロウは背景であり、フクロウの鳴いている中で、その聞こえる屋内で、とするのが自然だ。鼻の鳴くさみしい田舎の家。その灯し火も暗い土間で真紅の手毬がつかれている。手毬をつかっている、といえば女の子などの姿が出てくる。手毬がつかれていると言つて(中略)なにか不思議な手がそれを撞いているように思われてくる。遠い記憶、あるいははるかなものへの思いの中で真紅の手毬はいつまでも弾みつづける。(一九八四年〳七歳『怒濤』渚男)一同、三三頁より引用。

「二月二十一日野の起伏ただ春寒き四十代『起伏』一巻の象徴である扉の句。「序にかへて」の前書がある。(中略)健康であれば思う存分に仕事に打ち込める壮年の四十代を「ただ春寒き」と言わざるを得なかった無念の思いは深い。この句の負っている時間は「とにかく病気に素直にならうとする気持と、病気に負けないで生きようとするきおひが相剋して、苦しい期間であつた」が、同時に「自分を静かに凝視

すること」も出来たのである。波郷の句の「鶏頭の澎湃として四十過ぐ」の飄然とした感じとは対照的である。「野の起伏」は内面的な思いを形象化し、実景と重層させた楸邨の俳句的構造の一つである。(一九四八年〳四歳『起伏』繁子)一同、四一頁より引用。

「三月十七日くすぐったいぞ円空仏に子猫の手(中略)「くすぐったいぞ」はあの仏像の笑いの内側に作者が入って掴んだもので、そこに「子猫の手」を配した俳諧味ある着想が絶妙。(中略)「すべての物の中にひそんである声は、こちらが聞きとめる心の耳を持ちさへすれば、かならずきこえてくるはずのものである。俳句はさういふ声を聞きとめていく芸」(昭4)この句は物の内部の声を日常語で生かした(一九七二年〳6歳『吹越』拓夫)一同、五五頁より引用。

「三月十八日おぼる夜のかたまりとしても思ふ(中略)朧^{おぼろ}月夜に次々と思いは広がりながら、その中にある自己を確認し、その存在の「かたまり」が、さらに思いを抱きつづけているといった趣旨だが、そのような分析的な考察をする

よりも、思念そのものの広がり、朦朧たる世界を展開する作者の心の「貌」の大きさを示す句として味わいたい。（中略）この句も、楸邨の暖かく大きな風貌と、人間としての存在のひょうびょう 渺たる世界を知ることができる作。（一九七三年

|| 68 歳『吹越』拓夫）一同、五五頁より引用。

「三月十九日朧にて昨日の前を歩きをり／高齡となられた先生に「朧」の秀句が多い。（中略）おぼる夜の鬼ともなれずやぶれ壺／おぼる夜の鈴か我が鳴りにけり／など『吹越』所収の六十五歳以降の作品で、この時期から集中的にあられてきているのが興味深い。壮年の楸邨はどちらかと言うと明確な輪郭を持つ対象を好んでうたって来られた。それに対し「朧」はぼおつとして線を引き難いもの。そんな季題の中に身をひたす安息の息づかいが仄見えてきたのである。掲出の句は八十一歳の作。解釈としては、昨日の出来事を思いだしながら朧の中を歩いている、となるが、昨日はその昨日につらなり、過ぎ去った月日という象徴でもあろう。過去もおぼる、眼前もおぼる、行末もおぼる、その中を歩くべくして歩いてきた。これからも歩きつづけるだろうという茫洋

たる感慨。（一九八六年|| 81 歳『怒濤』渚男）一同、五六頁より引用。

「三月二十一日日本語をはなれし蝶のハヒフヘホ（中略）あたりを飛び廻っていた蝶はやがて青空に吸い込まれるように消えてしまった。ひらひらと、それが日本語のハヒフヘホという音や形のように思えたのである。シベリア・イルクーツクに日本語学校の跡を訪れたときの作品。句だけで解釈するところなるが、もっと重い感慨がこめられているだろう。一七八二年ロシア領に漂着した大黒屋光太夫らの漁師達はペテルブルクへ行きエカチェリーナ二世に謁見したのち、この地の日本語学校の教官としてとどまるよう説得された。二人の仲間は残ったが、光太夫と磯吉は帰国する。「日本語をはなれし」に異国に抑留された彼らへの思いを滲透させているのである。まるで彼らの日本語をきいたことのある蝶にその記憶がとどまっているかのよう。「日本語が消えゆくバイカル湖上の蝶」とも作っている。（一九七二年|| 67 歳『死の塔』渚男）一同、五七頁より引用。

「五月九日友となり妻となり亡くて牡丹となり／波郷二十

三回忌に先生をお訪ねして（中略）波郷と送った青春時代のことなどいろいろと伺ったとき、最後にぽつりと語られた「私は俳人ではないのですよ」という言葉が深く印象に残った。俳句を作ってきましたから世間ではそういうことになっていきますが、私は俳人ではない―ああ、親鸞のようなことを言われるなと思ひ、弓を忘れてしまったという弓の名人紀昌の話をおもったりした。こんな句はほんとうに「俳人ではない」といわれる人によってしか詠めないのではなからうか。（中略）一人の女性とのかかわりをこのように詠うことはありきたりの俳人には出来ない。（一九九〇年 85歳「寒雷」9

月号・渚男）―同、八七頁より引用。

「五月十二日鶴の毛は鳴るか鳴らぬか青あらし（中略）発表されたとき、句集の代表作として多くの話題を呼んだもの一つで（中略）爽やかに吹きわたる青嵐の中にいる作者が、鶴の純白の毛のそよぎを聞きいる姿を思い、その気品ある風趣を味わいたいと思う。この句についての鑑賞の一例。「もうここでは楸邨的独自性である“存在の逞しき意志”などという意識は青あらしの中へきれいに捨て去られ、飄々とした自然随順の靈気が漂っている」（永田耕衣「琴座」）と述

べ、存在に縛られない自在優遊の世界と鑑賞している。（一九六六年 61歳『まぼろしの鹿』拓夫）―同、八八頁より引用。

「五月二十三日火の奥に牡丹崩るるさまを見つ（中略）上五は初版本の「火の中に」を「火の奥に」と訂正。句のふところが深くなった。楸邨は昭和四十五年四月六日西日本新聞に「家の軒下をしづかに匍ふやうに流れはじめた煙が、ぱつと火になつた刹那、庭が真昼のやうに明るくなつて、その中に牡丹が一輪みごとにひらいてゐた。弟や知世子と共に、燃えあがる家から、からうじて脱出してふりかへると、牡丹は、火の中に崩れてゆくところであつた」と書く。（中略）森澄雄は『火の記憶』の中では「いちばん凄みのある句、と書く。

（一九四五年 40歳『火の記憶』莊一）―同、九四頁より引用。

「五月二十四日明易き櫛にしるす生死かな／句集『野哭』の第一句。前書に「昭和二十年五月二十三日夜、弟を負ひて死を免る、一物も余さず」、注に「この句『火の記憶』の最後にあり、ここに書出して句集の出発としたるもの」。昭和

四十五日三月十九日西日本新聞に「目黒に近い西小山で、空襲のため私の家が焦土となったときの句である。私はあわただしい疎開騒ぎの中で、故郷のない心易さといふのであらう、東京を最後の地と考えてゐたから、どこへも疎開などしなかつた。……夜明がやつときたといふ感じで、若々しい葉をすっかり灼いてしまつたあとの、黒黒とした櫛の膚を、私と知世子とで削つたところへ、焼けた家の柱のまだくすぶつてゐる一片をとつてかう書いた。『加藤一同無事』、『無事』といふ文字をこれほど複雑に、感慨をこめて書いたことは、それまでにもなかつたしこれからもないであらう」と書いてゐる。（一九四五年Ⅱ40歳『野哭』「莊一」）同、九四頁より引用。

「六月一日白地着てこの郷愁の何処よりぞ／戦前の大学生は白地だった。そしてこの句に甘い青春性を嗅ぎとるのはそんなに難しいことではない。白地の着物に腕を通したときの（中略）爽やかな感触に、ふっと、なつかしい、はるかなものが豊かに胸に湧きあがってくる。それを「郷愁」と把握している。（中略）掲出句の「何処」は、過去に過ぎた「何処」かでもあり、まだ見ていない未来の「何処」かでもある。

また語尾に置かれた「ぞ」は、青春性の汚れない気負いを醸しだし、爽快な句となった。（一九三九年Ⅱ34歳『颱風眼』「静魚」）同、一〇一頁より引用。

「六月十三日儼に読みゆきつひにモーゼは荒野に死ぬ（中略）「読みゆきつひに」というところに、どんなにそこに魅きいれられていたかが見事に表現されている。父がクリスチヤンであつた楸邨にとってこの旧約聖書は手垢がつき儼かひのうかぶなじみ深い書物であつただろう。モーゼがどんな死を迎えるかは初めから分かっている。しかし、この執念と敵意に満ちたこの物語を読みついでゆくと新たな感動が蘇り異なつた結末への期待も微かにうまれていたのかも知れぬ。だが、モーゼは「約束の地」を目の前にしながら、そこに足を踏み入れることなく荒野に死んでゆかねばならなかつた。いつか作者はモーゼに自分をかさねているようだ。「つひに：荒野に死ぬ」という調べには、失意ではなくて、そうだろう、当然そうでなくてはならなかつたと納得するころがある。（一九五三年Ⅱ58歳『まぼろしの鹿』「渚男」）同、一〇七頁より引用。

「八月十二日泉はなきカイバル越えの弱法師／第二回のシルクロード行はアフガニスタンを中心にした強行日程であった。カブールからシバル峠を越えてバミアン石仏を訪ねバルフ、ガズニ、カンダハルなどの隊商都市を遍歴したがカブールからパキスタンに向かう途中で高熱を發し「バスの中に横たはりてカイバル峠を越え」、「四十度の熱下がらず」ラワルピンジで入院している。「旅をのみ当分の心あてに、あれこれかさなりし浮世のことども、果たしゆかむと考へをれば」と前書したその時の心境句である。(中略)まるであの謡曲の、杖ついて父を求めてゆく弱法師のように泉を求めてよろよるとカイバル峠を越えてゆく。(中略)私はなんとしても生き続けなければならぬのだ。そんな決意をうたう。泉は生命の象徴。「弱法師」は謡曲を愛した父の記憶と繋がっているようか。(一九七四年Ⅱ 6歳『吹越』渚男)一同、一四二頁より引用。

「八月十六日ぼこぼこと暗渠出てきし茄子の馬／盆の終りの十六日の朝、靈棚を片付けて位牌などを仏壇に返し、花や供物、茄子や胡瓜の馬を河へ流し、墓へ精霊を送って行く。(中略)この句は川が道路の側溝に変わり蓋されて盆供

を流す川もなくなってしまうた都会風景である。暗渠(地下水路)はとところによっては地上に出て大川に注いでいたりする。こうした暗渠から茄子の馬が「ぼこぼこと」出てきたところ。(中略)「ぼこぼこ」が素晴らしい。東京は新暦の盆だから七月のことだが、ここでは旧暦八月の盆として配列した。(一九七五年Ⅱ 70歳『吹越』渚男)一同、一四四頁より引用。

「八月二十一日蝸や硯の奥の青山河／作者は、ひととき硯に凝ったことがある。「硯は生きている」という熱烈な思いは後に『ひぐらし硯』として、その重厚な感動を集めた随想集となった。この句はこの方面の数多い句の中での代表作。前書に「唐末のころ、甘肅省の深谿より出て、戦の世を経てここに生きのこりたる洮河緑石あり」とある。さらに、この随想、「この石には真青のものと黄緑のものがある。私のものは黄緑の方で、黄山谷が蒸し栗のようだといって讚えている種類のものらしい。鋒鋷がこまかくてしかもするどい。水を与えるときとめざめて、どこまでも奥行きができてくる。まるで硯の奥に青い山河がひらかれるようである。外の世界の蝸がいつの間にかこの青山河の中のものになって幻

と現の間をさまよう思いがする」とある。硯の中に遙かな時空を見ている作者の豊かな遊びの句。(一九六六年 11 6 1 歳)

『まぼろしの鹿』拓夫) 同、一四七頁より引用。

「九月十日天の川わたるお多福豆一列／天の川をお多福豆が一列になって渡って行く。楸邨満八十歳。雑誌「俳壇」に今年の自選一句として発表され物議をかもした作品である。賛否両論、わかる分からないと、いまだに議論が絶えない。

私はそうした論議をまき起こす作品を八十歳の作家がつくりだした、ということにまず感銘する。精神のなんとというみずみずしさであろう。解は始めに書いたようように単純にするほかはあるまい。(中略) お多福豆^{たふくまめ}というそれ自体滑稽な言葉がよく働いて、童話のような楽しい句である。「沙漠に病みし日より天の川ものをいふ」という境地において可能になったものだろう。(一九八四年 11 7 9 歳『怒濤』渚男) 同、一五九頁より引用。

「九月二十一日飢せまる日もかぎりなき帰燕かな『野哭』の、特に終戦直後から一年間をまとめた「流離抄」には「飢」を詠んだ句が多い。その中に幾つかを抽くと「かくかそけく

羽蟻死にゆき人飢ゑき」「飢きざす鶏頭の丹を見たるとき」「田螺とり日本の飢深くなりぬ」「幾万の飢つる目ぞ燕」「墓の子に見られてゐしや飢餓地獄」「汗の目のくぼみて子等も飢ゑんとす」「飢うづく日も青竹は真青に」等等である。これらの句から聞こえてくる悲鳴は、作者ひとりの声ではなく、日本全土を揺さぶった暗い時代の軋む悲鳴である。(中略) この句は、目的地を遙かに目指して力強く飛翔する帰燕の群れに放心にちかい感嘆を滲ませている。(一九四五年 11 40 歳 繁子) 同、一六五頁より引用。

「十月一日翮雲人に告ぐべきことならず(中略) いわば「はるかなるもの」と「悩める現実」が、モンタージュ手法で並べられている。具象に欠けるため、当時の(中略) 俳人には、難解にみえたらしい。季語と主観的感懐の、強引といってもいいような取り合わせの句ではあるが、難解とは私にはおもえない。当時の先生は(中略) 自分の感懐を、どう俳句という「物を言えない詩型」のなかに表現していくか、に苦心していた。そして「物を言えない詩型」の自覚もあり、感動を内に静め、省略、象徴化を図っていく詠い方になっていった。人間探求派と一口にいわれるけれども、先生の探求の力点

は、人間を単に題材化することではなく、人間をいかに真実のまま把えるか、ということに置かれている。(一九三八年

|| 3歳『寒雷』静魚) 同、一七三頁より引用。

「十月五日火の中に死なざりしかば野分満つ／句集『野哭』の序句。前書に「この書を今は亡き友に献げる」とある。句集には「述懐 七句」と前書した二句目。(中略) 兜太は「楸邨は感激音痴・詠嘆体質。右も左もかまわず人の好意を受け入れてそれに感動し、その感動で今日まで生きている」。澄雄は「自酔して感動すれば、いい子にみられる危険性がある。述懐は観念的で危険な詠い方である」という。(一九四六年

|| 4歳『野哭』莊一) 同、一七五頁より引用。

「十月七日かなしめば鴟金色の日を負ひ来／夕暮れの金色の逆光世界に現れた鴟を読んで。『日を負ひ』とは、夕日を背景として鴟がクローズアップされた状態であろう。極彩の強烈な美であると同時に主観句の様相もみせている。

「かなしめば」がそれである。「かなしみ」は、『寒雷』の序で秋桜子が述べている次のようなものだったろう。「その苦悩には二つの原因があるに思い到った。その一つは楸邨君

の俳句がある一定の段階に達し、そのまゝどうにも動きのつかぬ状態になっていること、もう一つは学問に熱心な君がその方面の勉強をする上に俳句が邪魔をしていることであつた」。翌年、秋桜子の勧めにより上京、進学したことを考えると、この句の輝き現れた鴟は、かなしみはかなしみとして諾いながらも、また、「勇気をもて、夢を育てよ」と鼓舞するものでもあつたのだろう。K音の清らかな音感も印象的である。(一九三六年 || 3歳『寒雷』静魚) 同、一七六頁より引用。

「十月三十一日霧にひらいてもののはじめに穴一つ／信州坂井村修那羅峠しよならでの群作の一。ここは神仏習合の社殿を中心に庶民のさまざまな願いをこめて奉納された数百の石仏、石像がある。蚕を守護する猫や、鉄砲をかまえた獵師や、癩の神、金を催促する神、幼い姉妹の供養仏……そうした石像の中心をなすのが安産を祈願する子安神で、これだけは小さな祠におさまり、祈願者の名を書いた赤や白の腰巻で幾重にも包まれていて見えない。同行した地元の友人が落葉の上に抱え出し布をといて見せてくれた。大きく股をひろげ、そこに女のしるしである縦線が一筋彫られている。お顔もなかなか

美しかった。私達は感嘆の声を挙げて見入った。(中略)「もののはじめの穴」とはなんと素朴な表現であろう。記紀神話の世界に通じている。季語に霧を用いて山深く原始的な感じを出している。先生が植物の名などを夫人に聞かれて熱心にメモされていた姿が印象的であつた。(一九六七年Ⅱ 62歳

『吹越』渚男)「同、一八八頁より引用。

「十一月二日幾人をこの火鉢より送りけむ「述懐 三句」の前書のあるものの中の一句。「十七年抄」の中の句。開戦の年が改まって、いよいよ戦争は激しさを増し、「寒雷」の人達も続々と応召して行った。「十七年抄」の、この句の前に置かれた四句は、いずれも出征を送る前書(それぞれ、「福家愛征く」「中野弘一征く」「青池秀二征く」「永井皐太郎征く」)がある。風の顔まつたく見えぬまで立ちぬ／立ち掴む冬木の梢の星降り来／貧交や寒鮒の目のいきいきと／冬鴟のしづかなる目を持てりけり／当時、楸邨家には、陶製の大きな火鉢があつて、そのほとりに対坐した後、出征して行った学生達や俳句仲間が少なからずいて、そのうちの多くは再び戻ってこなかった。その思い出深い火鉢も二十年五月二

十三日の夜の空襲で焼失してしまった。(一九四二年Ⅱ 37歳

『雪後の天』聖)「同、一九一頁より引用。

「十一月七日冬日没る金剛力に鴉なけり／金剛力とは、金剛力士のような大力をいう。侵しがたい力なのだ。(中略)観念的なこの句が、強い印象を残像のように残すのは(中略)満身の鴟の「叫び」が、冬日、金剛力、鴉という言葉と感合して、男性的な音響の世界をこの句にもたらしめているためである。この頃「愛禽抄」と題して動く素材へと眼を移している。心にあふれてくる情感を、動的な鳥を通して表現しようとしているのである。静かな植物の観照だけでは満足できなくなってきたのだ。カオスの持主である作者の当然の帰結でもあつた。(一九三六年Ⅱ 31歳『寒雷』静魚)「同、一九四頁より引用。

「十一月二十二日冬帽を脱ぐや蒼茫たる夜空／この句が発表された時、飯田蛇笏は「雲母」誌で絶賛した。「(中略)げにも蒼茫たる夜空、愕然たるうちに何か深い思索をひそませ、哲学を感じさせるほどの句境である」と鑑賞し、「表現が極めていかつく出来てゐる。斯うといふ場合、作者にとり

その形容たる蒼茫といふ感じをどうすることも出来なかつた唯一無二のものだと考へられたであらう。……自然と心がぴつたり一枚になりきつた場合」だと書いた（『続現代俳句の批判と鑑賞』昭29刊）。蛇笏には「夾竹桃しんかんたるに人にくむ」の一句も『現代俳句の批判と鑑賞』の巻初に置かれるほどの絶賛を受けていた。このすぐれた大先輩の励ましは若き楸邨にとって大きな力になったに違いない。蛇笏への敬愛は生涯に「わたって変わる事がなかった。（一九三八年）3歳『寒雷』渚男）」同、二〇一頁より引用。

「十一月二十三日秋の暮波郷燃ゆる火腹にひびく」私は：波郷から大きな影響を受けている。師秋桜子の外最も多くものを受けた一人が波郷であった。……私のゆきかたが波郷と殆ど対向的などころを辿っていることをよく指摘される。それはその通りであろう。それこそ最も大きな影響というものといわなければならない……私は少なくとも波郷の歩いているところを見守り、波郷でなくてはならぬところを見定め、その上で私でなくてはならぬものを見定めて歩いているようである。……波郷の遺骸を火葬するとき、火葬

炉の前に立った私は『秋の暮波郷燃ゆる火腹にひびく』と呟いた。波郷が燃えるのと同時に、私の中のものもまた燃えてゆくような気がしたからである」（『波郷永別』『達谷往来』所収）波郷の死は十一月二十一日。火葬は十一月二十三日。その日、青山斎場で、火葬炉の前に巨木のように終始無言で立ち尽くされていた。（一九六九年）6歳『吹越』渚男）」同、二〇二頁より引用。

「十一月三十日霜夜子は泣く父母よりはるかなもの呼び（中略）従来から「霜夜」「雪夜」の異形があったが、平成三年七、八月号の「寒雷」に楸邨は「心の奥の方でうごめいてみた思ひ」を「雪夜」に定着させる弁を述べ「俳句は自分の本音を吐くもの」と揺ぎ無い執念を示した。（一九四九年）4歳『起伏』繁子）」同、二〇五頁より引用。

「十二月六日まぼろしの鹿はしぐるるばかりかな／第十句集『まぼろしの鹿』の題名となった一句。前書がある。「良寛に旋頭歌ありへやまたづの向かひのをかにさを鹿立てり 神無月 しぐれの雨に濡れつつ立てり」この真蹟巻に出でしが我が金策の間に逃げられたり」と。即ち遂に手に入

らず幻となった良寛の旋頭歌の軸への無念と悲嘆の茫々たる心境の俳諧的吟詠の句。(中略)この句集は第二回蛇笏賞を受賞。楸邨俳句の芸境の豊かさ、幽けさを示す一集として俳壇で多くの反響を呼んだ。その一つ、草間時彦氏の「今までの楸邨独特の苦悩慟哭、重厚という地上的なものが消化されて渾然一体となり、神韻縹渺たる心象の世界を築こうとしている」(「加藤楸邨覚書」「俳句」昭43・6月号)という

鑑賞は(中略)上記の一句にふさわしい。(一九六五年Ⅱ60歳『まぼろしの鹿』拓夫)「同、二二一頁より引用。

「十二月十五日冬の浅間は胸を張れよと父のごと「浅間の麓」二十六句中の一句である。(中略)楸邨の尊父はクリスマスチャンで鉄道員、端巖で怖い人であったという。楸邨十九歳の時その父は亡くなった。陋巷ろうこうに命をはると二月七日父はまなこをひらかざりけり／という短歌はその折のものである。作者はいま病後の体をいとおしみながら冬の浅間山を眺めている。(中略)冬浅間は「引っこみ思案にならないで、いつも胸を張って息なさい」と、亡き父の意志そのものの如くである。独特の倫理的な抒情が冬の浅間と響き合っている。

(一九五〇年Ⅱ4歳『山脈』孤城)「同、二二六頁より引用。

「十二月二十六日鯨鯨の骨まで凍ててぶちきらる(中略)人間の隠された手は、「雉子の眸のかうかうとして売られけり」の句に、すでに感じていたことだが、この句では、詠嘆は姿を消している。「ぶちきらる」の息の太い表現には、鯨鯨の両断の衝撃を全身で耐えている抑制のエネルギーを強く感じる。病臥の受身の生活の中で楸邨が身につけた必然としての精神の練達の所産であろう。「諧謔調があらわに出ている」と評したのは山本健吉氏であったが、駆け出しの私にはこの評も衝撃的であった。(一九四八年Ⅱ4歳『起伏』繁子)「同、二二一頁より引用。

「十二月二十七日雉子の眸のかうかうとして売られけり／戦後の闇市の一風景。(中略)「火の中に牡丹崩るるさまを見つ」の牡丹が比喻でないことを思い併せると、生きているようにかっと思開かれていた眸であると納得できる。「売られけり」には人間への憤りと雉子への哀惜が同時にこめられていることと、この表現の裏に「売る」という裏切りの行為を暗示させる聖書に関する言葉が二重になってひびいてい

る。山本健吉氏は「慟哭の悲歌」と評した。楸邨全句集を通しての代表作。(一九四六年Ⅱ4歳『野哭』繁子)一同、二二二頁より引用。

「十二月三十一日吹越に大きな耳の兔かな(中略)句集の「あとがき」で「『吹越』といふのは、谷川岳あたりの北が吹雪になると、その一部が風に乗って岳越しに南の山麓に飛んでくるもので、私は青天に舞ふ吹越に心を打たれつづけてきた。私の心の中に長く生きてきたのは、吹越のくる岳の彼方の未知のものに惹かれたからであらう」と書かれている。この句は吹越が視覚上のものでありながら、兔の耳をつけたところが面白い。(中略)この兔は大きな耳を立てて吹越の聞こえぬ音を聞こうとしているかのようなようだ。いつか楸邨が兔になり、兔が楸邨になってくる。(一九七五年Ⅱ70歳『吹越』

渚男)一同、二二四頁より引用。

七七：「談論的思考」矢島房利

『加藤楸邨初期評論集成』第四卷「解説」。平成四年(一九九二)四月刊。二八九―二九八頁。

「『馬酔木』座談会」/この座談会の行われたのは、昭和十四年五月一日であったから、楸邨に即していうと、第一句集『寒雷』(昭和十四年三月一日発行)刊行の直後であった。

秋櫻子が自ら進行役を買って出たかたちで話が進められているが、最初に問題として採りあげられたのが「難しい俳句」で、楸邨・波郷の動向に対し、「新しい句境をひらこうと思つた結果だろう」との理解を示しつつも、批判の目が向けられたのであった。翹雲ひとに告ぐべきことならず/についても、「季語の「翹雲」が孤立してその意味で一句全体がわかり難くなる」と指摘したのであった。『寒雷』の「序」で、「都塵抄」に全面的賛同を示さないまでも、「将来への期待」を色濃くうち出していた秋櫻子であったから、この難解さの指摘は、注目すべきであったろう。これに対し、楸邨は「表現上の不備」というよりは、「現在追求している意識が本質的に難解なものである」こと、「日常的なものの深層にあると思われるその気持ち」に忠実たらんことを翼い、「その瞬間の閃きに相応しい氣息を表現したい、既成の俳句的情趣からむしろ思いきり脱したい、との志向を言う。「自分に即する」という点でその事に急になり過ぎると俳句化を忘れ」、「俳句がみだれを見せてくる」。(こういう動機のものだけは、

動機としては許せる)。しかし、(俳句の力は俳句から乗り出して、いそいなものを俳句の性格でぐっとひき緊めたところにある)。少し厳しいもの言いになったのを和らげるためか、秋櫻子が吟行地に水を向けた」同、二九一―二九二頁より引用。

七八：「老大家にして真の前衛―加藤楸邨氏の死を悼む」大岡信

「朝日新聞」平成五年(一九九三)七月三日刊。

「楸邨は晩年にいたってますます端倪(たんげい)すべからざる多面体の俳人になっていた。一つの方向へむけてきれいに仕上がり、枯れてゆくという一般的な俳人の生き方は、氏には全く見られなかった。拙を守って自らを責めるといふ姿勢で一貫した。老大家にして真の前衛だった理由はそこにある。」同誌面より引用。

「楸邨は中村草田男、石田波郷とともに「人間探求派」とよばれ、昭和戦前以来名声をほしのままに生きてきたが、三人の中では最も不器用で狭く苦しげな自我追求の道に固執しつづけた氏が、六十歳代以降に到達した自在さ、いわば、暖かい微光に包まれた闇(やみ)とでもいえそうな、茫洋として大きい時空の把握は、現代俳句のすでに比較を絶している。そ

れは加藤楸邨が、俳句伝統の本質にひそむ謎(なぞ)、すなわち、極小の言葉が極大の秘密を語ることができるといふことの不思議な生命力の源泉に、努力のつきかさねの中でいつしか到達していたことを意味するであろう。」同前。

七九：「加藤楸邨」項・執筆沢木欣一

『新潮文学辞典』増補改訂版六版 新潮社辞典編集部編。

平成五年(一九九三)八月、新潮社刊。二七三頁。

「加藤楸邨かとうあゆうそん明治三八・五・二六―平成五

・七・三(一) 九〇五―九三) 俳人。本名健雄(たけお) 東京生れ。出生届は山梨県 北都留郡大月町。(中略) 「馬酔木」の唯美的自然諷(ふう)詠(えい)より 出発したが、次第に生活に密着した人間臭の濃い句風に転換 し、自己の人間的要請を全面的に俳句に生かそうとした。昭和 和一四年ころ中村草田男、波郷とともに「難解派」または「人間探求派」と称せられた。やや観念的傾向と詠嘆調をまぬが れないが、庶民的感情を骨格強く表現している。主宰する「寒雷」よりは戦時中に学生層の新人を育て、いわゆる戦後三〇 代とよばれる俳人たちを輩出させた功も大きい。松尾芭蕉(ばしやう)の研究に作家的立場より傾倒し、成果にはみるべきものがある。(中略) 「隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤(どたう)

かな」「火の奥に 牡丹崩るるさまを見つ」「鮫鰯の骨まで凍てぶちきらる」。同、二七三頁より引用。

八〇：『真実感合の軌跡―加藤楸邨序論』岡崎佳子

平成一三年（二〇〇一）九月、角川書店刊。

「私はこの楸邨の生き方は父健吉の影響を受けているのではないかと思っている。楸邨が一九歳のとき病死した父は、駅長をしていた時に「陸軍中将」とあだ名をつけられていた。

（中略）クリスチャンになり、家族を連れて教会へ通ったこともあった。口数の少ない人であり潔癖すぎる面も持っていたという。また酒が入ると、謡曲「羽衣」の「いや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものを」とくりかえし謡う人でもあった。楸邨にはこの血が受けつがれているのである。自分の存在を諸手をあげて肯定できず（中略）それが表面的には含羞となっていたのではないかと思う。（中略）「含羞は一般的に恥ずかしさ、はにかみの意味で使われるが、含羞のよってくる内面はもっと潔癖で自恃の念を含んでいるのである。／鰯雲人に告ぐべきことならず『寒雷』／楸邨の句の中で含羞を含んだ作品を一つ挙げよと言われたら、私はためらわずこの句を選ぶ。」同、一四七―一五二頁より引用。

八一：「加藤楸邨」項・執筆今井聖

『現代俳句大事典』。監修・稲畑汀子ほか 山下一海ほか 編。平成一七年（二〇〇五）十一月、三省堂刊。一四六―一四七頁。

「『作風』俳句初学の頃は、秋桜子に師事したこともあって、「馬酔木」の傾向である抒情的、印象絵画的な風景句が多かったが、自らの苦学の経験と、赴任した粕壁（現、春日部市）での農苦の実態を目の当たりにしたのを契機に、次第に求心的な内容を求めるようになり、秋桜子からは、「難解」と指摘を受け（中略）同じ頃、座談会の発言を機に、山本健吉の発案で、波郷、中村草田男らとともに、「人間探求派」の呼称で呼ばれる。東京文理科大学時代に能勢朝次の指導を受けて以来、芭蕉研究は楸邨の生涯を通じての探求対象となった。芭蕉を学ぶ中から、後鳥羽院に傾倒。繊細優美な言葉の調べから離れて、実感と内面の両者を作品の中で拮抗させる方法を学び、それを「真実感合」と名づける。（中略）のちに胸部疾患による戦後数度にわたる手術と長期入院を経験して、六〇年代には安定回復。「寒雷」同人安東次男との交流、影響もあって、古美術や骨董への興味が深まり、作風にさら

に幅が加わる。金子兜太、次男、沢木欣一、森澄雄、古沢太穂、和知喜八、田川旅旅子等、楸邨門下の作風の幅はそのまま楸邨自身の作風の幅を表している。混沌という言葉で呼ばれる作風の多彩さを律するものは、「俳句の中に人間を生かす」という主宰誌「寒雷」の巻頭言がその根幹にあるのみである。「同、一四六―一四七頁より引用。

《代表句鑑賞》≧隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな（『雪後の天』）◆遠流後の後鳥羽院の境地を尋ねて隠岐に渡った折りの代表句。木の芽という小さな対象から一気に怒濤へ、ダイナミックな遠近法で「隠岐」に対する思いを詠い上げている。「木の芽・春」／雉子の眸のかうかうとして売られけり（『野哭』）◆終戦後の日本の闇市の風景。売られていく雉子はそれでもなお矜持を失わないかのごとく眼光を光らせている。雉子は日本の象徴であり、当時、戦争責任を問われていた楸邨自身の象徴でもある。「雉子・春」／雪夜子は泣く父母よりはるかなものを呼び（『起伏』）◆句集では「霜夜」であったものを四〇年近く経ってから「雪夜」に改めた。定型の枠をはみだしてもポエジーをつかもうとする楸邨の姿勢がよく出ている。形式がまずあって内容を既定するという順序とは逆の考え方である。「雪夜・冬」／落葉松はいつめ

ざめても雪降りをり（『山脈』）◆結核による胸部手術のあとの回復期、夢うつつの状態の中で、楸邨は窓の外の落葉松に雪が降るのを見ている。静かな風景の中に透徹した命の在りようが感じられる。（中略）「雪・冬」同前。

八二：「加藤楸邨」矢島房利

『俳文学大辞典』【普及版】。監修加藤楸邨ほか。尾形仿ほか編。平成二〇年（二〇〇八）一月、角川学芸出版刊。一六五―一六六頁。

「加藤楸邨（中略）八八歳。山梨県生れ。父健吉、母千佳の長男として出生。鉄道の駅長であった父の転勤により、小学校は東京府国分寺・静岡県御殿場・福島県原町、中学校は岩手県一関・新潟県新発田・石川県金沢と転校を重ね、故郷をもたぬ思いは、人間形成に翳を落した。父からの影響は絶大で、終生敬慕してやまなかった。大正一二年（一九二三）、金沢一中を卒業、父が病臥中だったため進学を断念し、石川県松任小学校の代用教員になる。中学時代から石川啄木・島木赤彦・斎藤茂吉らに親しみ、ひそかに作歌をした。（中略）（*昭和）一四年、第一句集『寒雷』を刊行。同一五年に大学を卒業、一〇月には俳誌「寒雷」

を創刊して主宰となる。同誌は戦時下の学生層作家の拠点となり、田川飛旅子・沢木欣一・金子兜太・森澄雄・和知喜八らが結集した。同一六年、「隠岐紀行」の大作が成り、このころから「発想契機」により芭蕉の表現研究に没頭、『芭蕉講座・発句篇』三巻を完成、真実感合の美学を樹立した。同一七年、「馬酔木」を離脱。(中略)空襲下の作品は『火の記憶』(昭24)に、戦後の飢餓生活は『野哭』

(昭23)にまとめられている。都立八中・八潮高校を経て、昭和二九年には青山学院女子短大教授となり、二度の大患を克服して健康を回復、振幅の大きい晩年の多彩な文学活動に入った。(中略)硯の蒐集に熱中し、『ひぐらし硯』(昭49)を上梓、筆墨集『火下牡丹』(昭53)がある。書

句集『雪起し』(昭63)は作句と揮毫を一体化した独自の試みであった。(中略)「隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな」「落葉松はいつめざめても雪降りをり」「百代の過客しんがりに猫の子も」同、一六五―一六六頁より引用。

八三：「加藤楸邨という小宇宙」中村稔

岩波文庫『加藤楸邨句集』森澄雄・矢島房利編。「解説」。
平成二二年(二〇一二)五月、岩波書店刊。四九三―五一
六頁。

「昭和二十四年刊の加藤楸邨の第七句集『起伏』に次の句が収められている。／鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる／著名な詩人村野四郎が昭和二十五年に刊行した詩集『抽象の城』に「さんたんたる鮫鱧」という詩が収められている。戦後詩の代表作の一と評価する方が多い作品である。「へんな運命が私をみつめている　リルケ」というエピグラフを付された、この詩は次のとおりである。／顎をむざんに引っかけられ／逆さに吊りさげられた／うすい膜の中のくったりした死／これは　いかなるものものなれの果だ／見なれない手が寄ってきて／切りさいなみ　削りとり／だんだん希薄になっていくこの実在／しまいには　うすい膜も切りさられ／もう鮫鱧はどこにも無い／惨劇は終わっている／なんにも残らない廂から／まだ　ぶら下がっているのは／大きく曲った鉄鉤だけだ／(中略)楸邨は、鮫鱧が「骨まで凍て」ていること、「ぶちきらるる鮫鱧」という物体を、忠実に再現し、読者に呈示し

たにとどまり、いかなる説明も加えない。いかなる解釈も示さない。あるがままを、あるがままに、描いている。おそらく楸邨が見ていたものは、「物の見えたる光」の一瞬であり、鮫鯨のあわれであり、もっといえば物のあわれであろう。」同、四九七―四九九頁より引用。

中村氏は楸邨の句「雉子の眸のかうかうとして売られけり」「凧や焦土の金庫吹き鳴らす」「朝の柿潮のごとく朱が満ち来」をあげてこう云う。

「私は楸邨の業績に一つの宇宙を見ている。一つの軸として感情の振幅の大きさを見る。雄勁、剛毅から繊細、優雅、幽玄まで、また、その間の諧謔をふくむ、表現される感情の多様性である。もう一つの軸として、素材、主題、対象の広さを見る。自然の囁目も卓上の果物も、人事の軋轢も、自己自身も、楸邨においては素材となる。さらに第三の軸として時間の豊かさをみる。鮫鯨の句にしても、雉子の眸の句にしても、捕えられ、吊るされるに至る時間、解体されるまでの時間、やがてそれらが辿る時間が豊かに流れている。柿のばあいでも、朝、柿を見出す時間、潮がさすように朱が満ちてくる時間、それが食べられるに至る時間が予期されている。焦土の金庫に流れていた苛烈な時間はいうまでもない。そうし

た三つの軸から発想される心情を表現する天分に恵まれていることはいうまでもない。その表現に赴かせるのは楸邨の内心の衝迫である。私はほぼこれらから成り立つ楸邨の世界に一つの小宇宙を見ている。」同、四九九―五〇二頁より引用。

「昭和十六年、楸邨は隠岐に旅行した。芭蕉の言葉に学んで、「実ありて悲しびをそふる」ことを求めた旅から百五十余句が生まれた。／隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな／右を楸邨生涯の秀句としてあげる識者も多い。風景を鳥瞰的にとらえながら、観察はこまやかであり、何より調べが雄勁である。／さえざえと雪後の天の怒濤かな／荒東風の濤は没日にかぶさり落つ／炎だつ木の芽相喚ぶごとくなり／水温むとも動くものなかるべし／「炎だつ」「水温む」は「後鳥羽院御火葬塚 三十三句」中の句である。これらの句において楸邨は風景を内的衝迫から見ている。そのダイナミズムと力強さが心をうつ。この内的衝迫に由来するダイナミズムは鮫鯨の句にも雉子の眸の句にもすでにみとめられるところであり、楸邨の生涯を貫く個性といってよい。」同、五〇四―五〇六頁より引用。

「戦後の作を収めた第六句集『野哭』については「凧や」の句に関連して、すでにふれたが、以下、私にとって感銘

ふかい作の若干を示す。／火の中に死なざりしかば野分満つ／羽蟻たつ非運は一人のみならず／大鷲の爪あげて貌かきむしる／かくかそけく羽蟻死にゆく人飢ゑき／死ねば野分生きてゐしかば争へり／冬鷗生に家なし死に墓なし／死や霜の六尺の土あれば足る／右の作中、大鷲は楸邨の自画像とみてよいのではない。戦後、飢餓にさいなまれた人々の抑制できない欲望はあらわで正視にたえないものがあつた。楸邨が死を身辺に感じたのも当然といつてよい。」同、五〇七―五〇八頁より引用。

「第十句集『吹越』は楸邨の到達した句境とみてよいのではないか。白魚の目が見しものを思ひをり／葱の香のまつすぐにきて立ちにけり／おぼる夜のかたまりとしてものおもふ／の如き囁目の佳句から／顔の火を消さねば時雨また時雨／あきかぜやわが胸中のさるをがせ／人間をやめるとすれば冬の鴟／わが魔羅の日暮の色の菜種梅雨／など自己観照の句に至るまで、楸邨の人格、人間性がさらに成熟したことを感じさせる。」同、五一―五二頁より引用。

「第十一句集『怒濤』は昭和六十一年刊、楸邨八十一歳であつた。晩年の作というべきだが内的衝迫の衰えはみられない。／蟻地獄眼下寂寥と殺戮と／（句略）牡丹の奥に

怒濤怒濤の奥に牡丹／（句略）／冬木立入りて出でくるものなし／どの句にも説明はない。主題、対象は自在である。繊細な感情から雄勁な感情まで、あらゆる感情の吐露がある。どの句にも豊かな時間が流れている。そしてすべての句が加藤楸邨という人間の存在を感じさせる。」同、五一―五三頁より引用。

「『雪起し』は昭和六十二年刊行された書句集である。この冒頭の句／百代の過客しんがりに猫の子も／の書が、楸邨の葬儀にさいして掲げられていたことを思いだす。百代の過客のしんがりに歩む猫の子に楸邨が自己をなぞらえていたことは疑いない。その謙虚さに私は心をうたれる。それにしても比喻の卓抜さは驚異という他ない。／『雪起し』は楸邨が好んだ墨書の興趣の所産だが、「百代の過客」以外にも佳句が多い。楸邨は以後句集を編まなかつたので生前最後の句集である。／掃初の掃きのこされぬわれひとり／（句略）／雪起ししんのいかりは一度かぎり／没後、大岡信の選による遺句集『望岳』から若干引用する。／墓あるく一団の闇揺れうごき／（句略）／過去といふもの雪夜となればふくらみ来／目ひらけば母胎はみどり雪解谿／「目ひらけば」には「母、我を孕りし時、山梨県猿橋を越

えしといふ」という前書がある。前書がなくても鑑賞できるが、あわせ読めば、母恋いの情切々たる佳作であることが理解できるだろう。」同、五一三―五一四頁より引用。

「ところで、楸邨には知世子夫人をうたった作が多い。夫人こそ自らを持すこと固く、内心の衝迫につき動かされていた楸邨をささえた、かけがえのない女性であった。楸邨はそのことをよく知っていたので、次のような作を残した。(中略)／冬の蝶とはのさざなみ渡りをり(＊『怒濤』)／友となり妻となり亡くて牡丹となり(『望岳』)／寒雷や在りし日のこゑうしろから(リ)／「冬の蝶」の句は悼句として読む必要はないが、私は冬の蝶に知世子夫人を仮託した、美しく、哀しく、切ない句と解している。」同、五一四―五一六頁より引用。

『寒雷』から遺句集『望岳』、紀行集『沙漠の鶴』『死の塔』、『糞ころがしの歌』『鶴と煙突』、書句集『雪起し』までを視野に入れた楸邨論である。

第二節 楸邨作品の時代区分

以上の先行研究史をまとめてみる。

- ①楸邨はその句業の出発時から、俳句作家として注目され評価を得ていたこと
- ②次に、戦中の俳句活動に対して戦後は批判を受け、戦前と戦後にその評価の違いがあったこと
- ③その後は、現代俳句の大家と目され、晩年の多彩で独自の句境は再評価されていること

先行研究から右のような楸邨評価の変遷を見ることができた。加藤楸邨の没後二〇年が過ぎ、その句業の全貌が見渡せる時になった。しかし楸邨の生前最後の句集『怒濤』や最晩年の筆墨による作品集『雪起し』、遺句集『望岳』までを視野に入れた先行論文はまだ僅かである。本論では③の、楸邨の最晩年の多彩で独自の句境に焦点を当てて、そこに至る楸邨の句業を検討し、その作品の生成と最終的な俳句観を追究する。

「序章第一節」で認められた楸邨に対する評価の変遷、①②③

を土台にして楸邨作品の時代区分を行う。各句集ごとの先行研究は見る事ができたが、時代区分に関する先行論は数少なく、句業全体の時代区分はまだ行われていない現状である。そうした中で参考になったのは『加藤楸邨全集』における句集の配分であった。この全集は、刊行当時までの楸邨の第一句集『寒雷』から第一〇句集『吹越』までを時代順に四巻の中に次のように配分している。第一巻には

「俳句一」として、第一句集から第四句集までを収めた。昭和六（一九三二）年二十六歳から、昭和十八（一九四三）年三十八歳に至る間の作品である。いわゆる十五年戦争にすっぽりと収まる時期で、各句集の刊行はいずれも戦時下でのことであった。著者に関していえば、同僚の強引なすすめによって俳句に手を染め水原秋桜子に師事、粕壁中学校教師を辞して上京し、東京文理科大学国文科に入学、〈人間探求派〉と目され俳壇に新進作家としての地位を確立、主宰誌「寒雷」創刊、芭蕉全発句評釈執筆、等々、青壮年の充実した時期であった⁽¹⁾。

としている。第一巻「俳句一」として『寒雷』『颱風眼』『穂高』『雪後の天』の四句集が収められている。全集の第二巻「俳句二」には

加藤楸邨の戦中の句集『火の記憶』と、戦後の『野哭』『起伏』『山脈』の四句集を収録した。昭和十八年から二十七年末までの約九年間の作品である。句集の配列としては、第四句集『雪後の天』（中略）にこの『火の記憶』の前半「大陸行以前」の部分が続き、次に大陸俳句紀行『沙漠の鶴』（中略）がその間に位置し、これに『火の記憶』の後半「火の記憶」の部分、次いで『野哭』『起伏』『山脈』の順序になるのが正しい配列であるが、本全集では『沙漠の鶴』は都合により紀行の巻に移した⁽²⁾。

として『火の記憶』から『山脈』までの四句集が収録されている。『沙漠の鶴』はその「後記」に楸邨が「句が主であって、文は寧ろ従である。（中略）句集としてはこの集は（中略）『火の記憶』に続いて第六句集にあたり、終戦後の句集『野哭』の前に該当する部分であり、随筆紀行としては隠岐に続く第二の集にあたる⁽³⁾」と書いているものである。句集・紀行のどちらに配列してもよいようになっていいる。刊行日はそれぞれ昭和二三年の『野哭』（二月一日）、『沙漠の鶴』（二月一五日）『火の記憶』（五月二五日）という順序であり、楸邨が『沙漠の鶴』を第六句集というのは刊行順に従った言い方である。しかし実際に俳句が作られた時期は『沙漠の鶴』（昭和一九年七月—一〇月）、『火の記憶』（昭

和一八年秋―二二年秋）、『野哭』（昭和二〇年五月―二二年一月）という順序になり、『沙漠の鶴』を句集としてみるなら、第五句集ということになるのである。次に全集の第三卷「俳句三」は

『まぼろしの鹿』を収録した。同集はもともと、昭和二十八年から同四十一年に至る十四年間の作品を一冊の句集として纏めあげるといふ要請のもとに、森澄雄・矢島房利両人が編集を一任されて、既発表作品の中から紙幅の許すぎりぎりの句数を選出したものであった。そのため、刊行当初から（裏句集）編纂の要が痛感されていたもので（中略）今回本巻に収録するに当たり、初版本で割愛された句の大半が著者の手によって復活された。すなわち、本巻所収の『まぼろしの鹿』もまた定本と称すべきものである⁽⁴⁾。

というもので『まぼろしの鹿』のみの収載である。全集第四卷「俳句四」は

加藤楸邨の最新句集『吹越』と未発表の短歌・連句を収録した。（中略）『吹越』は（中略）昭和四十一年から同五十年に至る十年間の俳句をまとめたものである（中略）著者はこの間に、昭和四十七年にシベリヤからサマルカンド、ブハラに、四十九年にパキスタンからアフガニスタン方面、五十年

にレバノン、トルコ、イラン、イラク等のシルクロードに、旅している。シルクロードの句は、この句集には新聞・雑誌に発表したもののみにとどめている（中略）『吹越』は（中略）ようやく六十代を迎えた楸邨の十年間の収穫期の作品集ということができ⁽⁵⁾る。

と、句集としては第一〇句集『吹越』のみが収められている。『吹越』は昭和五十一年楸邨七一歳の時に刊行されたものである。これ以後も楸邨は句集を刊行しているので、時代区分も未完成といえよう。この全集第四卷の「解題」を担当した石寒太氏は右の文に加えて「『寒雷』『颱風眼』『穂高』時代の晩学を通しての貧苦、『雪後の天』『沙漠の鶴』『火の記憶』『野哭』時代の戦争、また、『起伏』『山脈』『まぼろしの鹿』時代の大患・病臥・療養などの句に対して（中略）この『吹越』時代は、表面的にはめずらしく平穏な時であった」と時代区分に近い解釈を述べていて示唆を受けた。その後楸邨は昭和六一年八一歳の時に生前最後の第一句集『怒濤』を刊行している。

次に『楸邨俳句365日』の編著者矢島渚男氏の時代区分を引く。

加藤楸邨の句業は六十年にも及ぶ。これを句集によって便宜

上三つに分けて、

初期……『寒雷』、『颱風眼』、『穂高』、『雪後の天』、

『沙 漠の鶴』

中期……『火の記憶』、『野哭』、『起伏』、『山脈』、

『まぼ ろしの鹿』(人間抄・老牛抄)

後期……『まぼろしの鹿』(冬芽抄)、『吹越』、『怒濤』、

句集以後

としてみると、初期は一九三一(昭和六)年・二六歳から一

九四四(昭和一九)年・三九歳までのおよそ十四年間。中期は

一九六二(昭和三七)年・五七歳までのおよそ十八年間。後期

はそれ以後今日にいたる三十年になんなんとする期間にな
る⁽⁶⁾。

この矢島渚男氏の区分の特徴は第九句集『まぼろしの鹿』を前半後半に区切り、集中の「人間抄」「老牛抄」を中期に、「冬芽抄」以降を後期に分類し、『沙漠の鶴』を第五句集の位置に配置していることである。

矢島渚男氏が『まぼろしの鹿』を二分したのは、全集の第三巻の解題にあつたように、二冊分の句集に匹敵する句数であつたからであろうか。

稿者は、『まぼろしの鹿』の「冬芽抄」以降の「重い土」抄に鶴の毛は鳴るか鳴らぬか青あらし 『まぼろしの鹿』

という句があり、この作品にこれまでの楸邨の句風と異なるものを覚えた。この句が分かるか分からぬかという他者への顧慮を振り払った句と感じられたのである。こうした句風の違いによつて二分されたのかとも推測してみた。しかし稿者には、一句集を二分するまでの理由にはならなかった。

『沙漠の鶴』については、稿者は句集としては文が多く、随筆集としては、その中にほかの句集に収録されていない重要な句が収められているので、句集に準ずる句文集として扱いたいと思つている。その意味で昭和四八年に刊行された西域俳句紀行『死の塔』も句文集として見たい。矢島渚男氏の「初期」「中期」「後期」と三期に分けることには、賛成であつた。

次に楸邨没後の、「俳句」「特集・人間探求派加藤楸邨」における時代区分の例を検討してみる。この「句集研究」の、ここに区分された各句集についての執筆者は前出の『楸邨俳句365日』

の構成とほぼ同じであり、『まぼろしの鹿』を中期に一括している点を除けば、〈初期〉〈中期〉〈後期〉という三期の区分の仕方でも、『沙漠の鶴』の配置も同じであるので、この時代区分には前著の編者矢島渚男氏の意向が働いていると思われる。

句集研究

〈初期〉

『寒雷』昭 1 4 『颱風眼』昭 1 5
……河内静魚

『穂高』昭 1 5 『雪後の天』昭 1 8 『沙漠の鶴』昭 2 3 ……今井 聖

〈中期〉

『火の記憶』昭 2 3 『野哭』昭 2 3 『起伏』昭 2 4
……八木荘一

『山脈』昭 3 0 『まぼろしの鹿』昭 4 2
……中 拓夫

〈後期〉

『吹越』昭 5 1 『怒濤』昭 6 1 句集以後
……加藤瑠璃子⁽⁷⁾

右の「句集研究」の時代区分には『雪起し』という書句集や没後三年目に刊行された遺句集『望岳』はまだ「句集」として扱われていない。

書句集というのは楸邨が晩年に試みた「自分の作風を安定させないための一つの方法として、書句一体の作句法（紙をひろげて墨をすり、筆で一気に書きながら作る⁽⁸⁾）」という方法で書かれた句集である。これらを参考にして句集を中心に楸邨の全句業の時代区分を行う。先ず楸邨の句作開始の時期について検討する。句作開始時期は昭和六年とした。昭和五年「馬酔木」一二月号に遠筑波早稲は穂をあげたるもあり 粕壁 加藤柊村

として一句入選しており、これは昭和五年九月に「秋櫻子歓迎句会⁽⁹⁾」に 筑波晴れて早稲は穂をあげゐるもあり 柊村

という句が原形と思われる、昭和五年秋にはすでに句作を開始していることが判明している。しかしまだ「柊村」号であった。「楸邨」の名で「馬酔木」に入選するのは昭和六年五月号の

鴨鳴いてどこかに月のありにけり 加藤楸邨

鴨落ちてやゝありて波の光りけり 同

の二句入選の時点から本格的に楸邨の句作が始まったとする。「楸邨」号であること、「どこかに」という楸邨が以後よくつかう語が使用されている点や「波の光りけり」と楸邨らしい字余りの語調となっていることを考慮したものである。

①初期（二六歳―四〇歳）

昭和六年（一九三一）―昭和二〇年（一九四五）

第一句集『寒雷』昭和一四年三月一日、交蘭社刊。

第二句集『颱風眼』昭和一五年三月二五日、三省堂刊。

第三句集『穂高』昭和一五年一二月二五日、甲鳥書林刊。

第四句集『雪後の天』昭和一八年一二月二〇日、交蘭社刊。

②中期（四一歳―六〇歳）

昭和二十一年（一九四六）―昭和四〇年（一九六五）

句文集『沙漠の鶴』昭和二十三年二月一五日、大日本雄辯講談社（現・講談社）刊。

第五句集『火の記憶』昭和二十三年五月二五日、七洋社刊。

第六句集『野哭』昭和二十三年二月一日、松尾書房刊。

第七句集『起伏』昭和二十四年七月二五日、榛の木書房刊。

第八句集『山脈』昭和三〇年一〇月一日、書肆ユリイカ刊。

③後期（六一歳―八八歳）

昭和四十一年（一九六六）―平成五年（一九九三）

第九句集『まぼろしの鹿』昭和四十二年一月一日、思潮社刊。

句文集『死の塔』昭和四十八年九月三〇日、毎日新聞社刊。

第一〇句集『吹越』昭和五十一年六月二四日、卯辰山文庫刊。

第一一句集『怒濤』昭和六十一年一月一〇日、花神社刊。

書句集『雪起し』（乾・坤）昭和六十二年五月二六日、求龍堂刊。

遺句集『望岳』（大岡信編）平成八年七月三日、花神社刊。

このように三期に分けてみると「序章第一節」に見たように、初期・中期作品に対する先行論文に比べて、後期の『雪起し』『望岳』までを視野に入れて纏めた先行研究は多くはない。後期の句集『吹越』発刊当時、楸邨の「寒雷」に入会して稿者は俳句を学びはじめた。そのことは加藤楸邨研究に取り組む動機の一つになっている。本論では初期・中期及び、稿者が接した後期の楸邨の多彩で独自の句境について追究していきたい。

〈注〉

（1）矢島房利「『第一巻』解題」（『加藤楸邨全集』（以下、

『全集』と略。)第一巻。昭和五六年(一九八一)五月、講談社刊。(以下、講談社刊は略。)(四七四頁より引用。

(2) 矢島房利「『第二巻』解題」(『全集』第二巻。昭和五五年(一九八〇)三月刊。)(三八六頁より引用。

(3) 加藤楸邨著「『沙漠の鶴』後記」(『全集』第九巻。昭和五年(一九八〇)五月刊。)(二二二―二二三頁より引用。

(4) 矢島房利「『第三巻』解題」(『全集』第三巻。昭和五五年(一九八〇)七月刊。)(三一〇頁より引用。

(5) 石寒太「『第四巻』解題」(『全集』第四巻。昭和五七年(一九八二)二月二五日。)(四三五―四三八頁より引用。

(6) 矢島渚男「あとがき」(矢島渚男編著・名句鑑賞読本3『楸邨俳句365日』二版。平成八年(一九九六)三月、梅里書房刊。)(二二六頁より引用。「初版」平成四年(一九九二)四月刊。

(7) 矢島渚男ほか「句集研究」(「俳句」特集・人間探求派加藤楸邨」。平成八年(一九九六)三月号。角川書店刊。)(目次頁より引用。

(8) 加藤瑠璃子「『吹越』『怒濤』句集以後」(「俳句」特集・人間探求派加藤楸邨」。発刊年等は注(7)に同じ。)(一四二頁より引用。

(9) この「秋櫻子歓迎句会」と「柗村」の句については、松本旭著『村上鬼城新研究』(平成一三年(二〇〇一)四月、本阿弥書店刊。)(第八章「加藤楸邨と「山鳩」」にて確認。

一四二頁より引用。

第一章

初期作品の考察

第一章 初期作品の考察

第一句集『寒雷』の研究

―「鱗雲人に告ぐべきことならず」を軸に―

はじめに

「序章第一節 加藤楸邨先行研究史」に確認したように、楸邨がどのように句業後期の独自の境地に至ったかについて考究したいと考えている。その際にも、楸邨の句業初期・中期への理解は必要である。そしてどんな作家にとっても重要な意義を持つ最初の作品集については検討しておかなければならないと考え、楸邨の第一句集『寒雷⁽¹⁾』を中心に、その中の一句

鱗雲人に告ぐべきことならず

『寒雷』

をとりあげ、『寒雷』の内容を確認し、掲句の解釈について、私見を述べたい。稿中の俳句作品とその前書及び句集名は『加藤楸邨全句集⁽²⁾』より引く。引用文中の「／」は改行箇所、(*)は稿者の補足である。

(一) 俳句への出発

昭和四年三月に、東京高等師範学校に併設されていた第一臨時教員養成所の国漢科を二三歳で卒業した楸邨は、埼玉県立粕壁中学校（現、春日部高校）の教員となった。同中学校の教員菊地鳥江（鬼城門）などに誘われて、楸邨は俳句を始める。その当時のことを楸邨は次のように述べている。

私が俳句と出会ったのは一応粕壁（春日部）で中学教師をしていたときということになる。その頃村上鬼城翁の次のような句が胸を打った。

残雪やごう／＼と吹く松の風

ゆさゆさと大枝揺るる桜かな

木菟のほうと追はれて逃げにけり

それまでひとりで和歌を作っており、啄木から茂吉へと進んでいたが、自然の勢いであろう、万葉集の山上憶良に強く惹かれるようになっていた。（中略）始めは歌への未練で本腰が入らなかったが、鬼城句集を読んでいる中に次第に惹き

つけられてゆくようになった⁽³⁾。

楸邨を最初に俳句に惹きつけたのは村上鬼城であった。次に楸邨を本格的に俳句に引き込んだのは、生涯の俳句の師となる水原秋櫻子との邂逅であった。楸邨はこう記す。

その中に粕壁の安孫子医院に、水原秋櫻子先生が医術の方の応援に来ているらしいという噂を聞いた。そこで私を俳句に引きこんだ菊地鳥江や後に万葉集の英訳をやった石井白村等と医院の前で先生の見えられるのを待ち受けたのであった⁽⁴⁾。

他方、この頃のことを師の秋櫻子はこう記している。

それからといふものは、私の粕壁行は医用のためか俳句用のためかわからなくなってしまうた。私は楸邨君、鳥江君、白村君などと、古利根川の岸を散歩したり、新川といふ小川の岸にある鰻屋でおそくまで俳句を論じ合ったり、ある時はまた閑宿の方まで出かけて行ったりした。（中略）恰も馬酔木は独立することになり「中略」その後二三年の間は内憂外患常に絶えず、私は独り苦しまねばならぬ状態にあった。私は

粕壁にゆくと、楸邨君をつかまへてはその苦痛に就て語った。

(中略) 楸邨君はさういふ時、必ず私を励まし力づけてくれた⁽⁵⁾。

楸邨を最初に俳句の世界にひきつけたのは村上鬼城であった。

次に楸邨を本格的に俳句作家としての道へ導いたのは、当時すでに第一句集『葛飾』(昭和四年刊)を出版し「ホトトギス」の四S(阿波野青畝・山口誓子・高野素十)と称えられていたこの水原秋櫻子であった。楸邨の俳句の師は鬼城と秋櫻子の二人といつてよい。

三番目に楸邨を捕らえたのはこの短い俳句という詩型の不思議な魅力であった。楸邨が見出した俳句の特質はこうである。

私の場合には俳句は自分の感じたことを盛り込むのに楽々とききというものはなかったようである。さらつと詠めとよく教えられたものだが、そういう感じで詠んだときは鍵のかかっているはずの戸が何の手ごたえもなく開いてしまったよ
うなもの足らなさを感じるのが常であった。これは私の気質の問題かもしれないが、一面俳句というものの性格にかかっているところが多いような気がする。俳句というものが五七

五という詩型の限定を持ち、自然感覚と滲透したところに感動を生かすという伝統は、言い換えてみるとそうした制約の抵抗を持つということであろう。この抵抗感が私を捉えて離さないのだと考える。この抵抗感が句に奇妙な陰翳を与える。この陰翳こそ俳句が他のあらゆる表現と区別される源泉なのではないかと思っている⁽⁶⁾。

と記している。楸邨にとって俳句は「楽々ときき」というものはなかったのである。それは「五七五という詩型の限定」や「自然感覚と滲透したところに感動を生かすという伝統」の「制約の抵抗」から生まれる「奇妙な陰翳」がある詩型であった。楸邨にとってこの「陰翳」こそが「他のあらゆる表現」から区別される俳句の魅力であると思われたのである。

そして俳句をつくり始めて約八年後に、加藤楸邨の第一句集『寒雷』は総句数五四〇句を収載して昭和一四年に刊行された。

(二) 師秋櫻子と第一句集『寒雷』

第一句集『寒雷』について田川飛旅子氏は次のようにいう。

第一句集というものは面白いもので一人の作家の一生の姿を暗示するものがあると云われる。そういう意味で『寒雷』は（中略）岷々たる楸邨山巔のルーツとも云うべき骨格を如実に示していることは論をまたない⁽⁷⁾。

第一句集には原初的な形でその俳人の資質が表れるものなのであろう。『寒雷』にも楸邨のさまざまな特質が表れていると考え、その内容を探ってみる。『寒雷』は「古利根抄」、⁽⁸⁾「愛林抄」、⁽⁹⁾「都塵抄」の三章から構成されている。その各章から一句づつを取り上げて、作品に表れた楸邨の傾向を先行論を引いて検証する。はじめに「古利根抄」中の次の一句を例に引く。

船戸

行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ 「古利根抄」『寒雷』

この句についての山本健吉氏の先行論は次のようである。

「行きゆきて」とはおそらく蕪村の「行々てこゝに行々夏野かな」に出てゐる。（中略）蕪村が「行きゆく」を重ねることによって一種の漢詩的な佶屈調を打出してゐるのに対し

て、楸邨のこの句は「深雪の船に逢ふ」となだらかに続けて、むしろ和歌的な詠嘆調に近づいてゐる。句集『寒雷』の作品は昭和六年から始まつてゐるが、その前は彼はむしろ短歌に心惹かれてゐたのであつて、そのやうな素地が、やはり短歌から出て新風を開いた秋櫻子の「馬酔木」の作風に自然に近づけ、その抒情風・詠嘆風を完全に自分のものとするところできたのだ。「行きゆきて」といひ「逢ふ」と結んだところ、若い作家の感傷と心のたかまりがおのづから表現されてゐる⁽⁸⁾。

次に田川飛旅子氏の論を読むと、氏はこの句を「昭和七年作」と記し、

大きくたゆとうリズムの中で、若い日の楸邨が啄木の歌などから学んだ生をあわれむ感傷が息づいている。（中略）このころの句は水原秋桜子の膝下にあつて従順にその作風に学んだ時代の作品である。こうした楸邨の揺籃時代ともいふべき古利根抄の時期は昭和六年から九年に及んでいる⁽⁹⁾。

と述べ、山本氏と同じく句中に楸邨が若い日に「啄木の歌など

から学んだ生をあわれむ感傷」が息づく、と見ている。そしてこの句の含まれた「古利根抄」を、「秋桜子の膝下」の「揺籃時代」の作品と位置づけている。またこの「行くゆきて」の句について河内静魚氏は、

「行きゆきて」には、「行きゆきて倒れふすとも萩の花 曾良」が意識されていたに違いない。秋桜子流の短歌的な声調を身につけようとしていたこの時期の作品は、「古利根抄」としてまとめられている。秋桜子は、この句を「雪舟の描いた屏風にでもありそうな景色」と評している⁽¹⁰⁾。

といい、「古利根抄」の作品は「秋桜子流の短歌調を身につけようとしていた」時期と述べている。

楸邨自身は、

「古利根抄」は馬酔木新樹集に投句して先生の選を仰いでゐた頃のものである。(中略)古利根川を始めとして、元荒川、関宿・船戸の運河等、ここにある一句一句に私はその時の先生の教へて倦まぬ姿と、自分の長身恭敬の影とを見出すことが出来る。私はどうかすると、先生の目を通して物を見てゐ

たのではないかとさへ思ふ⁽¹¹⁾。

と述べている。山本・田川・河内の三氏のいうように「古利根抄」の作品は、師の秋桜子流の和歌的な、なだらかでやや感傷的な作風であると言えよう。

次に「愛林抄」の作品の特徴を探ってみる。「愛林抄」には、楸邨が昭和一〇年「馬酔木」同人になって自選句を発表する頃から上京するまでの時期の作品が収められ、後半には鴉や鷹や鷺などを詠んだ「愛禽抄」と名づけられた句群がある。その中の一句を検討する。

かなしめば鴉金色の日を負ひ来^く 「愛林抄」『寒雷』

この句について山本健吉氏はいう。

鴉・鴉・鷹・笹鳴・鷺・鳩・雉子などが、彼の作句の対象となつてゐる。鴉の句としては外に「目をほそめ没^{いり}ひ日の鴉をしかと見たり」「ひとの目に鴉群青の空を翔く」「冬日没る金剛力に鴉鳴けり」等がある。(中略)この句「金色の日を負

ひ来」と言つたのは、何もかも茜色に染出すやうな秋の入日の景に相応しい。「かなしめば」は直截且つ大胆な主観表出であり、また一羽の鴟の姿・動作にも滲透する主観である。豪華な色彩と強烈な主観とに彩られ、音律も大きく躍動して重々しい^(1,2)。

鴟を対象にした楸邨のこの「かなしめば」の句に対して山本氏は「強烈な主観」と「音律も大きく躍動して重々しい」側面を指摘している。

鴟などが詠む対象になり、「愛林抄」の中に「愛禽抄」を設けた楸邨に注視して田川飛旅子氏は

林から禽^{とり}へという素材の転換は、林のような静的な対象から、禽のように動く素材へと眼を移したことを物語っている^(1,3)。

という。また田川氏は、楸邨は、

意志的に自分の作風を進展させることに努力した作家であるが、こうした処にもその一端がうかがわれる^(同前)。

と述べて「古利根抄」から「愛林抄」への楸邨の句風の推移を説く。そして田川氏は「かなしめば」の句について次のようにいう。

「かなしめば」という言葉には日本語の複雑なニュアンスが含まれていて、必ずしも単純に「悲しめば」と解してよいかどうか分らない。この辺から楸邨の短歌調は全くぬけて、俳句のリズムを身につけている^(同前)。

確かに田川氏のいうように「鴟金色の」以下の調べは「俳句のリズム」以外のなものでもないと思う。

本稿の「(一) 俳句への出発」に引いた、楸邨が考える俳句の魅力は季語や詩型という「制約」が持つ「抵抗感」であった。「かなしめば」の句の中七下五はそうした「制約」をぎりぎりのところで打ち破って表出した表現であると感じられる。これが楸邨の「俳句のリズム」のこの時期の到達点であったろう。

この「かなしめば」が単純な「悲しめば」かどうかという点について、河内静魚氏は述べる。

この「かなしみ」は、『寒雷』の序で秋桜子が述べている次

のようなものだったろう。「その苦悩には二つの原因があるのに思い到った。その一つは楸邨君の俳句がある一定の段階に達し、そのまゝどうにも動きのつかぬ状態になっていること、もう一つは学問に熱心な君がその方面の勉強をする上に俳句が邪魔をしていることであつた」。翌年、秋桜子の勧めにより上京、進学したことを考えると、この句の輝き現れた鴟は、かなしみはかなしみとして諾いながらも、また、「勇氣をもて、夢を育てよ」と鼓舞するものでもあつたのだらう⁽¹⁴⁾。

この「かなしめば」の句の底には楸邨が自分自身を「鼓舞するもの」があると私にも思われる。それは鴟が負い来るものが耀く「金色の日」であるからだ。楸邨はこの句に次の短文を付している。

林が多いので小禽も多い。私は禽が好きだ。自分の心に何か動こうとして動きえないものがあるとき、私は一層小禽に心を惹かれた⁽¹⁵⁾。

楸邨の「動こうとして動きえないものがあるとき」禽に心惹かれた、というこの一文を読むと、この句は「自然感覚と滲透した

ところに感動を生かす」という楸邨の望んだ俳句の性格が示された句という見方ができる。それは「古利根抄」の「行きゆきて」に師の秋桜子が「雪舟の描いた」ような景色という句風とは違っていると思う。

楸邨の第一句集『寒雷』の最後の章は「都塵抄」である。この章は楸邨が秋桜子の勧めによつて上京し東京文理科大学国文科に進学しその傍、石田波郷とともに「馬酔木」の編集に従事するようになった、昭和一二年から一三年にかけての作品の抄名である。この「都塵抄」について師の秋桜子はこう記している。

上京後の楸邨君は、非常な熱意と勤勉を以て学問に没頭すると共に、馬酔木の編輯にも参加してくれることになつた。波郷、楸邨―この二人のよき編輯者を得ることによつて、私は安心して発行所の事を托し、自分の勉強に専心することが出来るやうになつた。一方、都会の繁忙な生活は、自然の勢として楸邨君に新しい俳句の詩因を与へた。(中略)私は愛林抄から都塵抄への推移をもつとよく研究して見たいと思ふが、とにかくこの変化によつて、楸邨君の将来への期待は今までよりも一層大きくなつたことは確かで、大体見透しのついでに底が、今や深碧の波を濺はせて見透しがたくなつた

感がある⁽¹⁶⁾。

「愛林抄から都塵抄への推移」をもつと「よく研究して見たい」と言うところに師の秋櫻子の戸惑いが窺える。それほど楸邨の「都塵抄」の作品は変化しているのであった。このことに対して楸邨は句集『寒雷』の「後記」にこう述べている。

思ふに「古利根抄」は自分の外に俳句の世界を見ようとする態度であつた。「愛林抄」は静坐し諦聴する態度のものであつた。私の生活が形の上で田園より都会へと変化したことは、勿論素材の上の変化を来したが、もつと私にとつて根本的なことは、今までの眺める生活から動き出す生活に入つたことであつた。(中略)「都塵抄」は都塵の中を歩いてゐる自分の生活を基礎としてゐる(中略)私にとつて俳句の問題のもう一つ奥に、自分が何を求め、如何に生きるかといふことが出京の目的であり、それが今にして学窓を叩かせた動機である。凡愚にして未だに渾沌たる摸索の状態であるが(中略)人間といふものをみつめつつ、逢ひがたき純粹なる精神を見出さんと執して来てゐる(中略)「都塵抄」では(中略)自分と俳句を一枚にしてしまはうと力めた。自分の外に美の世

界を築くことを止めて、自分の中に、自分と共なる姿の俳句を見ようとした。(中略)かういふ考へ方から、私は自分分の生活―日常生活に取材した。そして日常生活の執拗な凝視の中から、その殻が破れた瞬間、そこに閃く光を射とめようとした。日常生活の裏には、一度眞実を求めて揺りたてると、思ひがけない深淵が口を開いてゐることを感ずる。私はかうした深淵の中から眞に自分が見出したものを掘り出した。日常の常識と平安の底に、常に黙々と動いてゐる自分の眞の姿を掘り出した。それを鬱たる氣息の如く、俳句に充填した。かつた。(中略)「都塵抄」がいかりの相貌をあらはしてゐると評した人があつたが(中略)然し、私はそれでもせめて俳句の中では本音を吐かせてほしいと言ひたいのである⁽¹⁷⁾。

楸邨は「俳句の問題のもう一つ奥に」「如何に生きるか」という問題をかかえて「都塵の中を歩いて」いた。そしてそういう自分の生活と「俳句とを一枚にし」ようとしていたのである。「日常の常識と平安の底に」「黙々と動いてゐる自分の姿を掘り出して」「俳句に充填した。かつた」のである。それはこれまでのどんな俳人も考えなかつた俳句の道である。その思いで試みられた作

品が難解と言われるは当然であったかもしれない。しかし楸邨は「俳句の中では本音を吐かせてほしい」のであった。

矢島房利氏は「都塵抄」の時期は、

而立を過ぎ、妻子をかかえての（老書生）としての生活を選
択したのに応じて、句風は一変し、いわゆる楸邨調がうちだ
されてくることになる。俳壇的には（人間探求派）の名が与
えられるに至る⁽¹⁸⁾。

と要約する。

本稿において、楸邨の初期の句として取り上げる「翺雲人に告
ぐべきことならず」はこの「都塵抄」の中の一句である。

(三) 「翺雲」の句の先行論

翺雲人に告ぐべきことならず

「都塵抄」『寒雷』

右の句についての先行論を検討していく。掲句が大きく取り上
げられた最初は昭和一四年「馬酔木」七月号掲載の「馬酔木」
座談会」の席上であった。出席者は司会の水原秋櫻子、加藤楸邨、

篠田悌二郎、瀧春一、木津柳芽、石田波郷である。以下、その座
談会の中の楸邨と掲句に関係する箇所を引く。

水原 同人の作品のうちに難しく分らないものが沢山あ
るといふ説が出た。ことに加藤君、石田君の句の中に難し
いものがある。これは両作者が新しい句境をひらこうと思
った結果だろうと話し合った（中略）難しい句は例をあげ
ていうと、

海越ゆる一心セルの街は知らず

楸邨

月蝕の謀るしづかさや椎若葉

波郷

などです。こういう句のできた時の気持ちを両者に（中略）
話して貰いたいと言っていたんですよ。

加藤 自分ではそんなにわかり難いとは思っていません。その分
で、そんな筈がないと言っていたのですが（中略）その分
かりにくいという事は、表現上の不備からくるものである
か、それとも自分が現在追求している意識が本質的に難解
なものであるか、その熟^いれかであるかが問題であると思
います。（中略）自分が何か探り当てたいと思っている、日
常的なものの深層にあると思われるその気持ち、わかり
よいというだけの表現をとるとどうも自分に危険だと思っ

ている。(中略)そのためにそういう性質の表現は一見わかり難くなるということも考えられますが、この意味のわかり難さなら、私としては今のところどうにもこうやるより外に方法がないように思えます⁽¹⁹⁾。

楸邨の句が「難しくて分からない」という師の秋櫻子の指摘に楸邨は「表現上の不備」というよりは「現在追求している意識が本質的に難解なものである」こと、「日常的なものの深層にあると思われるその気持ち」の表現のために「一見わかり難く」とも「今のところ」この方向で「やるより外に方法がない」と応える。

水原 その気持ちはよくわかるのだが、今の加藤君の句のよ
うな心境を主として表そうとする場合、その方だけに力が
入ってしまったって季語が孤立してしまうような、換言すると
季語と心境と融け合わぬようなことが出て来ると僕は思う
が、そういう心配はないのかしら、たとえば、

翹雲ひとに次ぐべきことならず 楸邨

など、季語の「翹雲」が孤立していてその意味で一句全体
がわかり難くなることあるんじゃないかしら。尤も翹雲
を仰ぎつと、読む方で補足すれば大分明瞭にはなるけれ

ども、この例のように五音の名詞で始めが止まっていると
きなど一層季語孤立の感が深い。

加藤 私は自分の現在の生活にできるだけ直截な、自分から
離れないものを取り出したいと考えておりますので、季語
の季感をあらわに句の表面に出さないで(中略)意義のど
こかで内部のものと響かせて行こうとする場合がかなり今
の表現の仕方にあります。私は自分の中に醸された(中略)
心の動きを捉える場合、単なる言葉の意味の上だけではは
つきりと言い現せないのが多いと感じています。俳句はこ
の短詩型で語の意味以外のものに寄せなければならぬこ
とが多く、それがまた却って俳句の表現上他の文学と異な
った陰翳づけをしていて、俳句としては伝統的な武器にな
っているのではないかと考えるのですが^(同前)。

「翹雲」の句について師の①秋櫻子の懸念は「季語の孤立」と
そのために「一句全体がわかり難く」なっている、つまり「季語
と心境とが溶け合わぬ」ことであつた。これに対して楸邨は「季
語の季感をあらわに句の表面には出さない」で「意義のどこかに
内部のものと響かせて」いこうとしていると答えている。楸邨は
俳句に「心の動きを捉える場合」、「他の文学と異なつた」「伝

統的な武器」としての「陰翳」の問題があると楸邨は考えているのであった。これに対して出席者からの発言がある。

瀧 「翳雲」の句の表現については、季語の孤立という感じはありませんでした。翳雲の下に「や」という切字があれば問題ではありませんが、この句でここに「や」がなくてもかまわぬと考えます。これは無理な表現とは思えな

い、加藤さんが只今おっしゃったことは俳句の伝統的な表現手法であります。元禄の昔から行われている表現手法で特に新しい方法ではないと思います。(略)

木津 楸邨さんの俳句方法が(中略)表そうとする内容が季感から出発していかないように私にはききとれるのだけでも、そういう風な作句方法の是非という点を有季定型俳句の一般から言って、皆さんで極めて戴きたいと思いません。(略)

水原 何か新しい仕事を一途にやろうとしている時、熱意が籠れば籠るほど、万事に気を配ることができないという場合も起こって来るんですね。楸邨君はこの「翳雲」を後に続く表現と息が通っているものと思っただけではないのだけれど、どうも僕には離れているように思える。(略)

加藤 私は自分の本当の気持ちを出したいということが第一で新しいなどは考えていません。今では真実が出せぬか出せないかということの前にはそんなことはどうでもよいことだったので。(略)

石田 僕は楸邨俳句がわからないということが少々ふしぎにさえ思うのです。(中略)難しいとか難しくないというよりも、求め方が今までのものとどうちがっているか、そしてそれがどう発展してゆくかの方が重大だろうと思います。(中略)楸邨氏の俳句はむずかしいむずかしいという者が非常に多くいながら、しかも追隨する者もまた多いとすれば、それは、何か日常生活の意識の層で共通するところがあるからだろうと思います。つまり内容的に共感する(中略)楸邨俳句は非常に現代的な追求であるが、古典の性質を十分に抱き込んでいるなどと思うのです。⁽²⁰⁾

「翳雲」の句について②瀧春一氏は「無理な表現とは思えない」と言い、楸邨の「語の意味以外のものに寄せる」という方法は「俳句の伝統的表現」と述べる。

一方、楸邨の方法を③木津柳芽氏は「内容が季感から出発していない」ようだ、という。

④ 石田波郷氏は「楸邨俳句がわからないということが少々ふしぎ」と述べ、楸邨の句は「現代人的な追求」でありながら「古典の性質を十分に抱き込んで」と解析する。そして難解ということより、俳句が「どう発展してゆくかの方が重大」な問題という。

楸邨はこれらの意見に対して俳句に「自分の本当の気持ちが出したい」だけだと答えている。

この「馬酔木」の座談会の約一ヵ月後、難解句を作るといわれる俳句作家を集めて、「俳句研究」誌の「新しい俳句の課題」という座談会が開かれた。司会は同誌の編集記者山本健吉、出席者は石田波郷、加藤楸邨、中村草田男、篠原梵であった。

記者 偶然時期を同じうして「馬酔木」の座談会でも波郷さんや楸邨さんは非常に難解の句が多いということの問題になっていました。(中略) 解らない理由について(中略) 所謂解らない句を作っていられる貴方がたから何か 言って戴きたいと思うのです。(略)

加藤 これを読む人がわかるかわからないかという顧慮よりも、言いたいという、衝動の方が先に立ってしまうのですね。(中略) 言いたいことを失ってしまうことはどうしてもでき

ない⁽²¹⁾。

と楸邨は前の月の座談会と同じ趣旨の発言をしている。この「新しい俳句の課題」座談会が広く知られるようになったのは、この座談会の後半に

記者 貴方がたの試みは結局人間の探究ということになりますね。

楸邨 新しいか否かは人の見るところによつてちがいます。ようが、四人共通の傾向をいえば「俳句における人間の探究」ということになりました⁽²²⁾。

という問答があるからである。

この山本健吉氏の問いかけは楸邨の『寒雷』の「後記」の「私の俳句の問題のもう一つ奥に、自分が何を求め、如何に生きるかといふこと」があると記した楸邨を理解した上のものであろう。「俳句における人間の探究」、それは俳句の奥に、如何に生きるかという課題を負っていた楸邨の返答であったが、ここから「人間探求派」という名称が誕生したのである。楸邨の「鱗雲」の句は難解句という評を生み、そして「人間探求派」という呼称を導

いた作であった。

その⑤山本健吉氏に「鰯雲」に関連した論がある。

昭和十三・四年ごろは、彼の作風の転期をなし、草田男・波郷とともに、難解派或は人間探求派と言はれた時代である。

「鰯雲ひとに告ぐべきことならず」「外套の襟立てて世に容れられず」「海越ゆる一心セルの街は知らず」「墓誰かものいへ声かぎり」「白地着てこの郷愁のどこよりぞ」「灯を消すやこころ崖なす月の前」等は問題となつた句である。季語と主観的感懐との強引な衝撃がこれらの句の特色をなしてゐる。和歌的・抒情的把握から出発した楸邨が、俳句固有の方法と目的とに目覚めて必死の苦闘がこゝに展開されてゐる。和歌的なものが先天的にも後天的にも身にしみこんでゐて一つの完成した世界を形成してゐただけに、この時代の楸邨の脱皮の苦しみは草田男・波郷の比ではなつたであらう。「俳句は物が言へないところから出発する」とは彼のその頃の偽らざる告白であつた。そしてこれらの句が概して不熟の作品であり、過渡期のもつ欠陥は誰の目にも明らかであつたので、難解派に対する攻撃も楸邨の一身に集中した感があつた。だがこのやうな過渡期も、楸邨の内的発展に取つては必然と言

ふべきであつたのだ。少なくともこの時期に、彼が自己の内
部への沈潜を深めてゐるのは確かなことである^(2,3)。

山本氏は⑤「鰯雲」などの句には「季語と主観的感懐との強引な衝撃」と「和歌的・抒情的把握から出発した楸邨」の「俳句固有の方法」を求めた苦闘が展開されていると見るのである。この「過渡期」の作品によつて「難解派に対する攻撃は楸邨」に「集中」したが楸邨はこの時期に「沈潜を深め」たと山本氏はいふ。

⑥前田普羅氏はこの「鰯雲」の句について

少しも難解ではない（中略）（*これが）難解なら人心の
深き所に根ざす文芸の理解が無いいふべきである。又この人
のひかへ目そのものを現はした句^(2,4)

という。⑦川崎展宏氏は、

自分の心に起こってきたこと、それは人にいつてはならぬ
ことである。人にはいふまい。（中略）「人に告ぐべきこと」
の内容がいかなるものであつたか、それを具体的に読みとる
ことはできない。（中略）時代に対する批判の声をぐつと抑

えざるを得なかったときの作とみられないこともないが想像の域を出ないだろう。この句はもつと楸邨個人の内面に關わりのあるものであったかもしれない。(中略) 草田男・波郷とともに難解派とよばれた当時の作である⁽²⁵⁾。

という。⑦川崎氏は掲句の句意を「自分の心に起こってきたこと」を「人にはいうまい」と取る。

⑧木俣修氏は他一句と共に掲句をあげて

学問の黄昏さむく物言はず

翳雲人に告ぐべきことならず

(中略) これはある意味で非常に短歌に近い内容をもっている。短歌といったって私の考えによるものであるが、もう少し言語を加えれば短歌の世界になるものであると思われる⁽²⁶⁾。

と、⑧「翳雲」の作品も「短歌に近い内容」という。

⑨田川飛旅子氏は、

中村草田男、石田波郷、加藤楸邨が並んで人間探求派と呼ばれ、難解派とも称えられた当時の、この句は楸邨の難解句の代表作のように云われた作品である。(中略) この思考の内容が何であるか勿論わかりはしない。(中略) このころの句には、どの句にもどの句にもはつきりと表現できない口ごもりのような表白が見える。難解派といわれた一つの原因である⁽²⁷⁾。

と述べる。⑨「はつきりと表現」できていないこの「表白」が「難解派といわれた」原因の一つというのである。

⑩河内静魚氏は

具象性に欠けるため、当時の「ホトトギス」流の詠み方に慣れた俳人には、難解にみえたらしい。季語と主観的感懐の、強引といってもいいような取り合わせの句ではあるが、難解とは私には思えない。当時の(*楸邨)先生は、軍国主義と思想統制の世相のなかにあって、自分の感懐を、どう俳句という「物を言えない詩型」のなかに表現していくか、に苦心していた。そして「物を言えない詩型」の自覚もあり、感動を内に沈め、省略化を図っていく詠い方になっていった。人

間探求派と一口にいわれるけれども、先生の探求の力点は、人間を単に題材化することではなく、人間をいかに真実のまま把えるか、ということに置かれている⁽²⁸⁾。

と述べる。河内氏は⑩掲句は「具体性に欠け」る「強引な取り合わせの句」であるが当時の「世相の中にあつて」「にんげんをいかに真実のまま把えるか」ということに「苦心」している作品と評する。

⑩夏石番矢氏の解釈は次のとおりである。

楸邨が「何かに屈託している時」、つまり何らかの感情に突き動かされているとき、事物の断片が曖昧ながらも目に心に飛び込んでくる。たとえば、第一句集『寒雷』（一九三九）の有名な一句、鰯雲人に告ぐべきことならず／は、発表当時、難解だと批判されたが、一句のリズムは、いささかの屈託を伴いながらも、おだやかでなだらかな歩行のリズム以外の何者でもない。「鰯雲」という上五は、それ以降の措辞とあわせ読むと、暗示的暗喩の様相を強く帯びるけれども、「人に告ぐべきことならず」の心境にある人間に対して、突き放してもない救済でもない何がしかの表情を持って、「鰯雲」が

「鰯雲」としての存在感を主張すべく出現したと考えればいいのではないか。作者楸邨が少しでも鬱屈しているときの作品は、歩行時にはつと目に入る事物の断片的性格や解のない啓示的性格を読者に印象付ける⁽²⁹⁾。

掲句は⑪「おだやかな歩行のリズム」で詠われ「鰯雲」は「突き放しても救済でもない」表情を持って出現しているという。このように鬱屈している作者の歩行時の作品は「事物の断片的性格や解のない啓示的性格を読者に印象付ける」とする。同様に⑫夏石氏は

加藤楸邨の俳句を、私は和歌的俳句だと思っている。この先輩俳人の初期評論に目を通してこの考えに少しのゆらぎもない。ただいくぶん変わったのは、楸邨は俳人として出発してより、自らの和歌的資質を知り、和歌的言語のなだらかさ、まるさ、おだやかさ、ふくよかさを心の底では希求しながらも、和歌の誘惑を必死に遁れようとしてきた苦闘がわかったことである。(中略)晩年の楸邨に俳諧的滑稽味が強く出始めた点を除けば。この俳人が一貫して和歌的声調を自戒しながらも自作のふくよかな背景にしたのも事実であった⁽³⁰⁾。

と楸邨作品を⑩「和歌的俳句」とし、「一貫して和歌的声調を」
「自作のふくよかな背景にした」と言及する。

⑫岡崎佳子氏は掲句について

楸邨が十九歳の時病死した父は、駅長をしていた時「陸軍中
将」とあだ名をつけられていた。(中略)クリスチャンにな
り、家族を連れて教会へ通ったこともあった。口数の少ない
人であり、潔癖すぎる面も持っていたという。また酒が入る
と、謡曲「羽衣」の「いや疑ひは人間にあり、天に偽りなき
ものを」をくりかえし謡う人もあった。楸邨にはこの血が
受けつがれているのである。自分の存在を諸手をあげて肯定
できず(中略)それが表面的には含羞となっていたのではな
いかと思う。(中略)含羞は一般的に恥ずかしさ、はにかみ
の意味で使われるが、含羞のよってくる内面はもつと潔癖で
自恃の念を含んでいるのである。

鰯雲人に告ぐべきことならず 『寒雷』

楸邨の句の中で含羞を含んだ作品を一つ挙げよと言われた

ら、私はためらわずこの句を選ぶ⁽³¹⁾。

と掲句を⑫「潔癖で自恃の念を含」む「含羞」の作という見解
を述べる。⑬中村稔氏はこういう。

かなしめば鴟金色の日を負ひ来
鰯雲人に告ぐべきことならず

右二句を『寒雷』の代表句としてあげるのも一般的であり、
私にも異存はない。作者が何をかなしみ、何を告げたいのか、
語られていない。だが、誰にしても他人に語りえない、かな
しみがあがり、告げることのできないものがある。言ってしま
えば愚痴としか聞かれないかもしれない。「人に告ぐべきこ
とならず」と言いきった覚悟に楸邨の生き方があった⁽³²⁾。

掲句に⑬「楸邨の生き方」の「覚悟」を発見している。⑭石寒
太氏はこう記している。

「鰯雲」とまず大きく切り、具体的な季語の下に添えられた
中七・下五は抽象的。自分の鬱々とした感慨を、どう俳句と

という短い詩型で訴えていくのか、楸邨の苦心が、中七のこのような表現となった。感動を内に沈め、象徴化していく、そんな詠い方になったのだ。(中略) いまもう一度よく見てみると、必ずしも今日ではそれほど難解ではない。が、当時の「ホトトギス」の写生ひとすじの人々にとつては、かなり挑戦的で、新しい世界に映ったのかもしれない。(中略) この句が詠まれた翌年、つまり昭和十四年八月「俳句研究」により、「新しい俳句の課題」という座談会(七月一日夜、於日比谷山水楼、編集長山本健吉企画)が、中村草田男、石田波郷、加藤楸邨、篠原梵^{ぼん}の四氏によって行われた。これは、この人たちの共通の作風を「人間探求派」という点に置き、この傾向を、新興俳句以後の新しい運動と認め合せて、併せて新興俳句運動の功罪を鋭く追求した座談会である。その中で楸邨は、「現在俳壇に動いている一つの形をとった人々の傾向に比較すれば、少なくとも私の求めようとしているものなど、丁度カオスの状態だ、すでに出来あがった俳句的なものの中から一句にまとめるのではなく、今まですてられていた俳句になっていないところから切りとりたい」と、自分たちの作風の、新しい立脚点を明らかにした。(中略) 以後、この四人を中心として「人間探求派」という呼称が公にされた。

(中略) この人たちの作風のひとつの特色として、作品の難解さも指摘され、「難解派」とも名づけられた。(中略) その後、人間や社会は、現代俳句の中心的主題になった。過去の趣味的な俳句と、現代俳句とを分かつところは、この人間を志向するか否かにかかっていた、と言つてもいい⁽³³⁾。

掲句を⑭「それほど難解ではない」とする。そして「過去の趣味的な俳句と現代俳句とを分かつ」のは「人間を志向するか否かにかかつて」いると結ぶ。

以上の先行論を整理してみる。

1、難解句

- ① 「季語と心境と溶け合わぬ」(水原)
- ③ 「内容が季語から出発していない」(木津)
- ⑤ 「強引な衝撃」の「不熟の作品」(山本)
- ⑦ 「「難解派」の作」(川崎)
- ⑨ 「口ごもりの」「表白」(田川)

2、難解ではない

- ② 「無理な表現とは思えない」(瀧)
- ④ 「わからないということが」「不思議」(石田)

⑥ 「少しも難解ではない」「ひかへ目そのもの」（前田）

⑩ 「難解とは私には思えない」（河内）

⑫ 「含羞を含んだ作品」（岡崎）

⑬ 「言いきった覚悟に楸邨の生き方」がある（中村）

⑭ 「今日ではそれほど難解ではない」（石）

3、短歌的

⑧ 「非常に短歌に近い」（木俣）

⑪ 「おだやかな歩行のリズム」「和歌的声調」（夏石）

この「翺雲」の句についての私見を次に述べたいと思う。

（四）人に告ぐべきことならず

先行論の中で「3、短歌的」という⑧木俣氏と⑪夏石氏の見解は「2、難解ではない」に加えてもよいものである。また「1、難解句」という⑤山本氏はこの時期の句には「和歌的・抒情的把握から出発した楸邨」の「俳句固有の方法と目的とに目覚め」た「必死の苦闘」が展開されているという指摘もあつたので、「翺雲」の句が難解かそうでないかの検討の前に、短歌と俳句についての楸邨の見解を明らかにしておきたい。

俳句を始める前の短歌を詠んでいた楸邨が自身の大きな転機としてあげているのは、「萬葉集」に取り組んだことであつた。

島木赤彦の『歌道小見』や『万葉集の鑑賞及び其批評』を読んだり、斎藤茂吉の『赤光』『あらたま』『朝の螢』などに親しんだ^(3,4)

赤彦の短歌にも親しんだようで、第四句集『雪後の天』には次のような句が収録されている。

赤彦が往きたりし径凍てにけり 「十七年抄」 『雪後の天』

吹雪きつつ夕焼くるらし諏訪の湖 同

人中に諏訪湖は遠し赤彦忌 「十八年抄」 『雪後の天』

春鮒の手につめたしや赤彦忌 同

ひねもすを大槻をらび赤彦忌 同

槻の芽に槻のひかりや赤彦忌 同

そして楸邨は自分の親しんだ短歌と、今取り組んでいる俳句との表現の上での相違をこう記述している。（引用文中の傍点は楸邨）

ものなのである。たとえば、

人にいいふふべきべきかなかなしみしみならずならず秋草あきくさに息いきをししろろじじろろと吐つき
にけるかも

という島木赤彦の歌があるが、私にも、

鰯雲人に告ぐべきことならず

という句がある。これを語として同質であるとみるなら、それは和歌と俳句のあり方を全く混同したものとして、私は従うことが出来ないと思っている。要するに俳句の言葉は（中略）詩としての俳句に生かされるにあたっては（中略）沈黙する、沈潜する、象徴的表現として生み直されなければならぬ（^{3.5}）。

伝達を主とする散文と、象徴的表現を主とする俳句との中間に、自由詩、韻律詩、和歌のそれぞれの立場がある。和歌は俳句に比較すれば、かなり意味伝達の範囲がひろいのであるが（中略）それでも（中略）詩型の制約にあつて言いつくせない。俳句に至っては、「物の言えない文学」という姿になる。（中略）然し、これは俳句を散文と同列に置いて、描写による伝達のみを考えたところからくる錯覚であつて、俳句は「物の言えぬ」ところに、別の物の言い方がうまれるのである。詩型の制約が内部衝迫に一つの抵抗となると（中略）感動は内部に圧縮せられ（中略）沈潜して深奥から反響のごとく（中略）声調の上の一つの象徴的な力を加えてうまれかわるのである。氷山が水面上に出ている部分は少なくとも、水面下にはあるのと同様に、俳句の、表面にかたすることはすくなくとも、それはないのでなく、たしかにあるのである。（中略）こういう俳句の（中略）象徴的表現の性格に応じて（中略）ことばも（中略）沈潜し、圧縮されて、非常に弾力を帯びてくる。（中略）だから、ここに一つの同一の語が使われていたとしても、散文の場合と、詩の場合、和歌の場合のそれは、俳句の場合のそれとはちがった性格を帯びている

楸邨がここで強調しているのは、短歌と俳句は定型詩として似ているようであるが「語として」同質ではないということである。詩の言葉として同じような在り方をしていないということである。「俳句の、表面にかた」られているのはその氷山の一角のよ

うな語である。その「水面下に」は「象徴的表現として生み直され」たものがあると理解しなければならぬであろう。そういう意味で楸邨には俳句と短歌の性格について厳密な区別があり、この「鰯雲」の句に「短歌的俳句」という意識を持ってはいなかったであろう。

「鰯雲人に告ぐべきことならず」の句意を探ってみる。私は掲句を「2、難解ではない」とする立場である。楸邨にはもつと難解な句が後期にはある。

鶴の毛は鳴るか鳴らぬか青あらし 『まぼろしの鹿』

おぼろ夜のかたまりとしてものおもふ 『吹越』

天の川わたるお多福豆一列 『怒濤』

右の句に比べたら「鰯雲」の句は解釈の手がかりがある作品である。

先行論には「告ぐべきこと」の内容は⑦「自分の心に起こってきたこと」（川崎）、⑬「他人に語りえない」「言ってしまったば愚痴としか聞かれない」もの（中村）という解釈があった。しかし楸邨は自分の心に起きたことなら表現しようとするのではないかと思う。「(二) 師秋櫻子と第一句集『寒雷』」で引いたよう

に楸邨は「私はそれでもせめて俳句の中では本音を吐かせてほしい」（『寒雷』後記）といているのである。同様に「馬酔木」の座談会でも「私は自分の本当の気持ちを出したい」と発言している。「俳句研究」の「新しい俳句の課題」の座談会席上においても「言いたいことを失ってしまうことはどうしてもできない」とう。自分の内面に起きた感情なら、負と見なされるものでも楸邨は次のように作品化している。

蟻殺すわれを三人の子に見られぬ 「都塵抄」 『寒雷』

蚊帳出づる地獄の顔に秋の風 『颱風眼』

夾竹桃しんかんたるに人にくむ 『野哭』

サタン生る汗の片目をつむるとき 同

火事を見る胸裡に別の声あげて 『起伏』

抽出した句の「蟻殺すわれ」「蚊帳出づる地獄の顔」人にくむ「サタン生る」などは隠しておきたい自分の姿である。「火事を見る」の句も普通は人に言わないことである。楸邨は自身の胸中に起こった感情であるならばこのように表出し、打ち消すことはないと考えるのである。楸邨の「告ぐ」を使った作例を見てみる。短歌は「「傷痕より」とした短歌ノート⁽³⁶⁾」より引く。

怒濤なす火中に立ちて名を呼びし妻の必死はいつか子に告げむ

蝮姑なくと告ぐべき顔にあらざりき

『まぼろしの鹿』

妻の背の百合の花粉は告げざりき

『吹越』

右の短歌の「妻の必死」をいつか「子に」伝えたい、教えてあげようというのが「告げむ」の意味であろう。次の句の「告ぐべき」は、その人のこの「顔」の様子から「蝮姑」が鳴いていることを今知らせないほうがよさそうだと作者が感じている句である。また「妻の背」に「百合の花粉」がついていることを教えな

いでおこう、妻自身がそれに気づいたときの様子などを想像しながら見ている作者の態度が窺われる句である。楸邨が「告ぐ」というとき、それは或る人に起こった事実、あるいは起こっている事実を知らせるとか教えるとかという意味があるように思う。その点で「告ぐべきこと」という語は、「言ふべきこと」という語の代替にはならないと推察される。

次に「告」の語について諸橋轍次著の『大漢和辞典』に探ってみる。(用例等は省略)

一三四 一つげる。イふれる。布告する。ロ示す。ハ教へる。ニ知らせる。ホさとす。へ申す。ト語る。チ言ふ。いひあらはす。リ謂ふ。ヌうったへる。二問ふ。存問する。三休暇を請ふ。三をり。四姓。五問ひただす。解字會意。牛と口の合字。本義は、牛の角に着けて、其の觸れ突くのを人に警め告げる横木。故に牛と口とを合せて其の義を表す(三七)。

楸邨はこの『大漢和辞典』の著者諸橋先生の講義を第一臨時教員養成所国漢科時代と東京文理科大の国文科時代の二度に渡って受けており、この辞書を正統的に用いるはずである。

「告ぐ」はこの『大漢和辞典』中の「告」、「一つげる」の「ロ示す」「ハ教へる」「ニ知らせる」「ホさとす」のどれかの意味で用いられているであろう。「イふれる。布告する」の意ではないし、「へ申す」「ト語る」「リ謂ふ」「ヌうったへる」でもない。「チ言ふ。いひあらはす」でもない。例にあげた短歌の「告げむ」は「いつか子に教えたい」「知らせよう」と解釈して意味が通る。例句もそれぞれ「蝮姑が」鳴いていることを知らせるべき「顔」ではない、「妻の背の」「花粉」は妻に今知らせないでおこう、という意味で使われていると考えられる。従って「鬪雲人に告ぐべきことならず」の「告ぐ」には「ハ教へる」「ニ知ら

せる」の意がこめられていると解釈する。

また「告ぐべきこと」の「こと」は例にも見たように或る人に起こっている事実と考えられ、それは今、当人や或る人に知らせない方がいいと楸邨が判断した「こと」であると推量される。ここに稿者は楸邨の人に対する慎みの念を感じずる。⑥前田氏がこの「鰯雲」の句について「少しも難解ではない」これが「難解なら人心の深き所に根ざす文芸の理解が無いといふべきである」という見解や「又この人のひかへ目そのものを現はした句⁽³⁵⁾」という解釈にも賛同する。この解釈は⑫岡崎氏の「潔癖で自恃の念を含まむ「含羞」の作という見解にも賛成する。楸邨はこの「鰯雲」の句に次のような短文を付している。

この世に人の棲むかぎり、与へられた人としての心の動きのさまざまの可能性に従つて心は動くはずだ。海のさなかにも日は昇り、日は沈み、夕焼は立ち、人知れず、その夕焼も消え去る⁽³⁸⁾。

「鰯雲」はよく海に近い河口附近の空に現れるので、「海のさなかにも日は昇り」とあるこの短文は確かに掲句の生成に関したものである。この文章から掲句は、今知らせなくとも「与へら

れた人としての心の動きのさまざまの可能性に」まかせよう、鰯雲が広がり動きつつある空の下に、人や自然や時間という人智の及ばないものに対して慎み深くあろうとする作者がいるのではあるまいか。

その意味で師の①秋櫻子が「尤も鰯雲を仰ぎつと、読む方で補足すれば大分明瞭になる」（「馬酔木」座談会）という指摘は的確である。鰯雲を仰ぐことによつて作者が「さまざまの可能性に従つて心は動くはずだ」という感懐に作者が導かれたとすれば③の「内容が季感から出発していないよう」（木津）という見方はできなくなる。「告ぐべきこと」ではないという思いは「鰯雲」から喚起された感懐であつて、少なくとも楸邨の中では⑤「季語と主観的感懐との強引な衝撃」（山本）というのではない。掲句の作られた頃の楸邨には⑨「難解派といわれた一つの原因」としての「はつきりと表現できない口ごもりのような表白が見える」という田川氏の指摘があつた。その時代の中でこの「鰯雲」の句は「告ぐべきことならず」と強い否定形で止められているので、⑬「言いきった覚悟に楸邨の生き方があつた」（中村）という見方をしていいのではないかと思う。

「鰯雲」の句には楸邨の、詩型の制約に抗して「一見通わざる如くであるが、意義のどこかで内部のものとひびかせて行こうと

する」挑戦が見られる。それは②「俳句の伝統的表現」（瀧）への努力でもある。石田波郷は④「難しいとか難しくくない」という論より作品が「どう発展してゆくかの方が重大だ」（「馬酔木」座談会）と本質論を示していた。楸邨は⑩「自分の感懐を、どう俳句という「物の言えない詩型」のなかに表現していくか、に苦心していた」（河内）という見解と、⑭「自分の鬱々とした感慨を、どう短い詩型で訴えていくのか」（石）という見方は、楸邨の表現に対する苦心を掲句から見出しているものである。

そして「鰯雲」の句は楸邨の⑥「ひかへ目そのものを現はした句」（前田）、⑫「潔癖で自恃の念を含んだ」「含羞」（岡崎）の作という解はその父の影響を掘りおこしての意見であった。それは「人に告ぐべきことならず」と⑬「言いきった覚悟に楸邨の生き方」（中村）がこめられているという視点は共に楸邨の俳句に楸邨の人間性の表れを見るところという立場を同じくしているものであった。

一方、掲句は⑧「もう少し言語を加えれば短歌の世界になる」（木俣）という説は詩型の制約というものの重大さを再認識させる見解であった。楸邨が⑪「和歌の誘惑を必死に遁れようとしてきた苦闘がわかった」とし「一貫して和歌的声調を自戒しながらも自作のふくよかな背景にした」（夏石）という洞察には賛同せ

ざるを得ない。それは楸邨の没年に発表された

不満いつばいに生きてゐるなら虹に告げよ 遺句集『望岳』
という、「鰯雲」の句に対する応答のような句が遺されていることから、考えられることである。晩年の楸邨の、おおらかで不思議な作品の底に、歌人楸邨の存在があったといわねばならぬであろう。

おわりに

加藤楸邨の第一句集『寒雷』を中心に述べてきた。そして『寒雷』中の

鰯雲人に告ぐべきことならず

一句を先行論を上げて検討し私見を加えた。掲句を私は「鰯雲を仰いでいると、自分が見聞きした事実を人に今知らせるよりはこの鰯雲のような自然や時の流れにまかせた方がいいと思われくる」と解釈したい。「鰯雲」の句は楸邨の俳句観や句中に表れ

ている語は氷山の一角であるという考え、「俳句の中では本音を吐かせてほしい」という要請、これらと切り離しての句意は成立しなのではないか。そういう意味で「翺雲」の句は、その後の楸邨の独自の俳句活動の出発点に立つ作品といえると思う。

〈注〉

(1) 加藤楸邨著『寒雷』昭和一四年(一九三九)三月、交蘭社刊。

(2) 加藤楸邨著『加藤楸邨全句集』平成二二年(二〇一〇)一月、寒雷俳句会発行。

(3) 加藤楸邨著「俳句との出会い」(『加藤楸邨全集』(以下、『全集』と略。)第六卷。昭和五五年(一九八〇)八月、講談社刊。(以下、講談社刊は略。)六一―六二頁より引用。「初出」(原題「私の場合」)井本農一・川崎展宏・掘信夫編『俳句のすすめ』昭和五一年一月、有斐閣刊。

(4) 注(3)に同じ。但し、六二―六三頁より引用。

(5) 水原秋櫻子「『寒雷』序」(『全集』第一卷。昭和五六年

(一 九八一)五月刊。)一一―一三頁より引用。「初出」『寒雷』。 発刊年等は注(1)に同じ。

(6) 注(3)に同じ。但し、六三頁より引用。

(7) 田川飛旅子「人間楸邨」(『全集』第一卷「解説」。昭和六年(一九八一)五月刊。)四六六頁より引用。

(8) 山本健吉著「加藤楸邨」(『現代俳句』下巻・七版。昭和三〇年(一九五五)四月、角川書店刊。)一八五―一八六頁より引用。「初版」昭和二七年一〇月刊。

(9) 田川飛旅子著「鑑賞篇」(『加藤楸邨』新訂俳句シリーズ・人と作品16・新訂二版。昭和五八年(一九八三)三月、桜楓社刊。)二三三頁より引用。「初版」昭和三八年三月刊。

(10) 河内静魚「一月十六日」(名句鑑賞読本3『楸邨俳句365日』二刷 矢島渚男編 平成八年(一九九六)三月、梅里書房刊。)二〇頁より引用。「初版」平成四年四月刊。

(11) 加藤楸邨著「『寒雷』後記」(『全集』第一卷。発刊年等は注(7)に同じ。)一四二頁より引用。

(12) 注(8)に同じ。但し、一八八頁より引用。

(13) 注(9)に同じ。但し、二三六頁より引用。

(14) 注(10)に同じ。但し、一七六頁より引用。

(15) 加藤楸邨著「古利根河畔吟」(『全集』第八卷。昭和(一九八一)一月刊。)五四一頁より引用。「初出」 「寒雷」昭和二七年二月号・三月号。

(16) 注(5)に同じ。但し、一五一―一六頁より引用。

(17) 注(11)に同じ。但し、一四五―一四八頁より引用。

(18) 矢島房利「解題」(『全集』第一卷。発刊年等は注(7)に同じ。)四七五頁より引用。

(19) 加藤楸邨著「馬酔木」座談会」(『加藤楸邨初期評論集』第四卷。平成四年(一九九二)四月、邑書林刊。以下、邑書 林刊は略。)一四二―一四五頁より引用。「初出」 「馬酔木」 昭和一四年七月号。

(20) 注(19)に同じ。但し、一四五―一四九頁より引用。

(21) 加藤楸邨著「新しい俳句の課題」(『加藤楸邨初期評論集』第四卷。発刊年等は注(17)に同じ。)一五七―一六三頁より引用。

(22) 注(21)に同じ。但し、一八八頁より引用。

(23) 注(8)に同じ。但し、一九三―一九四頁より引用。

(24) 前田普羅「気軽な感想」(「俳句研究」 「中堅作家自選句集」 評」昭和一六年(一九四一)五月号。改造社刊。)一〇七―一一三頁より引用。

(25) 川崎展宏「加藤楸邨」(『現代俳句評釈』六刷。吉田精一・楠本憲吉編 昭和四二年(一九六七)二月、学燈社刊。)三二四―三二五頁より引用。

(26) 木俣修「楸邨雑感」(『全集』第七卷「解説」。昭和五六年(一九八一)七月刊。)三六四頁より引用。

(27) 注(9)に同じ。但し、二四四頁より引用。

(28) 河内静魚「十月一日」(『楸邨俳句365日』発刊年等は

注(10)に同じ。)一七三頁より引用。

(29) 夏石番矢「陶醉者と生活者のあいだ―加藤楸邨の初期評論を軸に」(『加藤楸邨初期評論集成』第一巻「解説」。平成三年(一九九一)一〇月刊。)三八三―三八五頁より引用。

(30) 注(29)に同じ。但し、三八六―三八九頁より引用。

(31) 岡崎佳子著『真実感合の軌跡―加藤楸邨序論』(平成一三年(二〇〇一)九月、角川書店刊。)一四七―一五二頁より引用。

(32) 中村稔「加藤楸邨という小宇宙」(岩波文庫『加藤楸邨句

集』森澄雄・矢島房利編「解説」。平成二二年(二〇一二)五月、岩波書店刊。)五〇三―五〇四頁より引用。

(33) 石寒太著『加藤楸邨の一〇〇句を読む―俳句と生涯』(平成二二年(二〇一二)一二月、飯塚書店刊。)二八―三一頁より引用。

(34) 加藤楸邨著「俳句遠近」(『全集』第六巻。発刊年等は注(3)に同じ。)三三頁より引用。「初出」『読売新聞』昭和五三年二月二二日(三月一〇日刊)。

(35) 加藤楸邨著「俳句覚え書」「五、言葉に就て」(『全集』別巻。昭和五七年(一九八二)一月刊。)七七―七九頁より引用。「初出」『寒雷』昭和二三年九月号。

(36) 加藤楸邨著「ノート(一)識域遠近」(『全集』第四巻「傷痕より」とした短歌ノート」。昭和五七年(一九八二)二月刊。)三一五頁より引用。(※同書の「解題」によれば「傷痕より」と題した楸邨の短歌ノートは三冊あり、末尾に「あとがき」が付され、それによると一冊の歌集として刊行の用意があったとされる。以上は同書「解題」四四一頁より要録。)

(37) 諸橋轍次著『大漢和辞典』卷二。(修訂第二版第三刷。平

成六年(一九九四)五月、大修館書店刊。)九〇七―九〇八
頁より引用。「初版」昭和三十一年五月刊。

(38) 加藤楸邨著「都塵の中に」(『現代俳句文学全集・加藤楸
邨集』。昭和三二年(一九五七)七月、角川書店刊。)三四
三頁より引用。

第二章

中期作品の考察

第二章 中期作品の考察

楸邨における「父」の存在

―「冬の浅間は胸を張れよと父のごと」をめぐって―

はじめに

加藤楸邨の中期（四一歳―六〇歳）作品は本論「序章第二節 楸邨作品の時代区分」において、句文集『沙漠の鶴』、第五句集『火

の記憶』、第六句集『野哭』、第七句集『起伏』、第八句集『山脈』の五つの作品集を含むものとした。

この中で『野哭』は戦後の名句集との評が定まっている。その他『火の記憶』『起伏』等の戦中戦後の中期の句集には、同時代の人達の先行論がすでに存在している。

楸邨の中期の作品集の中で『山脈』は、楸邨の後期の句業に隣接し、その後の句業を進展させる役目を果たした句集と考え、本稿に取り上げる。『山脈』中の掲句は、楸邨の人間形成に大きく与ったといわれる父を詠んだものである。

冬の浅間は胸を張れよと父のごと

『山脈』

本稿では掲句の生成の背景と解釈、そして楸邨にとってこの「父」はどのような存在であったのか、またクリスチャンであったというその父の影響について考察してゆく。

(一) 父について

楸邨とその父について先行の論があるので引いてみる。（引用文中の旧漢字は大略、現行の漢字に改める。）矢島房利氏は『俳

文学辞典』「加藤楸邨」の項に、楸邨への父の影響は「絶大」と次のように記している。

父からの影響は絶大で、終生敬慕してやまなかつた⁽¹⁾。

また、山本健吉氏は次のようにいう。

志賀直哉はこれまでに出会った三人のすぐれた人物として、内村鑑三と武者小路実篤と祖父の志賀直道とを挙げている。もし加藤楸邨（かとう しゅうそん）が同様にして三人を挙げるとすれば、師の水原秋桜子と能勢朝次を挙げるかどうかは別として、少なくとも父の加藤健吉だけは、絶対に挙げるにちがいないと思うのである。（中略）かくれた求道者であった父の姿は、またそのまま楸邨の姿であった⁽²⁾。

山本氏はこのように俳句の師秋桜子、学問の師能勢朝次先生より楸邨は父を尊敬し、「父の姿は、そのまま楸邨の姿」という指摘をしている。楸邨は父の加藤健吉についてこう語っている。父は、

鉄道生活をつづけて駅長をながくやった。退職したのは、私が中学三年の頃であった。その頃の父の日常は端厳極まるもので、子供にはちよつと近づきがたい感じの人であった。

新茶淹れ父はおはしきその遠さ

これは、ずっと後になって、そう言う父の姿を思い出して詠んだ私の句である。（中略）父は日曜日になると、家族全部をつれて教会へ行った。私は頗るこれが不平だった。ヤソ、ミソ、ヤツツケロ、こういって近所の子にいじめられた。おまけに大切な休みが半分だけ縮められてしまう。日曜になると、よく偽病をつかったものである。こんな風で、父は端厳で、怖くて、煙たかったが、私は実に好きだった。私は父は偉いという強固な信頼感を根づよく持っていた⁽³⁾。

このように楸邨は父を「実に好き」だったという。またこうも述べている。

よく考えてみると、もう少し前に父の前に坐らされて漢文を読まされた記憶がある。祖父は酒田の人で漢学畑の人だった

から、父も十歳そこそこで漢籍になじんだらしいが、十四歳の時祖父が死んで、明治初年の没落組に入った父は、十六歳でもう北海道に渡りアイヌの中に立ちまじって荒い生活を続けていた。アイヌの言葉を集めてこれに日本語を対照させたものを作ったりしたそうだけれども祖父の血を亨けていたためかもしれない。(中略)私の物心ついてからの父は鉄道の駅長だったのだが、しきりに漢学に近づけたかったようだ。一方父はクリスチャンでもあった。『内村鑑三全集』には丹念な書入れがしてあったのを覚えている。(中略)中学の終り頃になると父が病臥してしまったので進学の望が断たれた。(中略)十六の頃、父に勧められて洗礼を受けたりしたが、中学を出る頃は、すっかり神を見失った人間になっていた⁽⁴⁾。

楸邨は父の勧めで洗礼を受けたが「中学を出る頃」には「神を見失っ」ていたという。この「父」については、こうした楸邨の回想文の外には具体的な資料を見ることができない状態であった。しかし稿者の楸邨(本名・加藤健雄)の洗礼の記録を確認する作業中に、父加藤健吉の履歴も明らかになってきた。

(二) 父健吉と楸邨の受洗

洗礼を受けることを「受洗」という。教会関係の資料の中で、最初に楸邨・加藤健雄の名が確認されたのは、岩手県一関教会の次の記載⁽⁵⁾からである。

年号	受洗者	転入者	転出者
一九一八年 (大正7)			・ 加藤健吉 ・ 加藤千佳
一九一九年 (大正8)		・ 加藤健雄	
一九二〇年 (大正9)			
一九二一年 (大正9)			

一九二一年

・加藤健雄

(大正10)

・加藤健吉

・加藤千佳

右の記載の中で「一九一八年(大正7)」の転入者「加藤健吉」が楸邨の父、「加藤千佳」が母である。

「一九一九年(大正8)」の受洗者「加藤健雄」が楸邨で、「一九二一年(大正10)」の転出者「加藤健雄・加藤健吉・加藤千佳」が楸邨・父・母である。

教会のこの記載が正しいということが確認できれば、次の『世界日本キリスト教文学事典』「加藤楸邨」の項の次の記載(原文は横書き)の

1912(明治45)年に父は御殿場駅長。この頃から父母に

連れられて日本基督教会に通った。20(大正9)年(15歳)

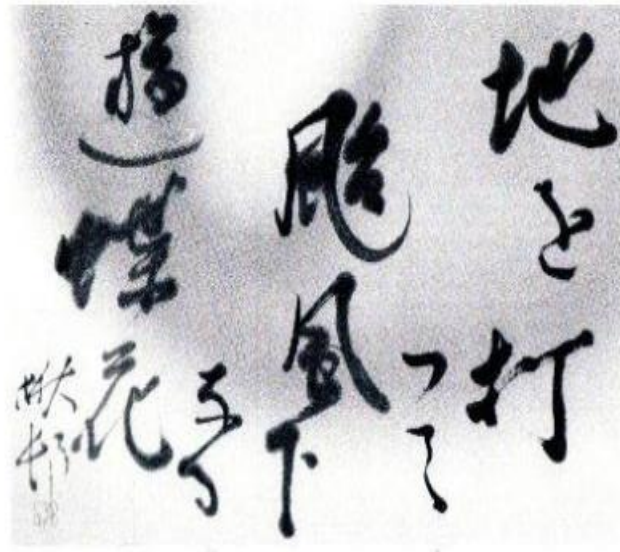
受洗⁽⁶⁾。

「20(大正9)年(15歳)受洗」という記載の正誤を確かめることができる。また年譜類に楸邨の受洗時期を(傍線・稿者)

①大正七年(一九一五)一三歳 福島県原町小学校を卒業、父の岩手県一関駅長への転任に従って、岩手県一関中学校に入学。このころから愛書家であった父の蔵書によって、読書に耽り、石川啄木に心酔。(中略)中学時代、柔道、剣道、相撲をやった。このころキリスト教の洗礼をうけた⁽⁷⁾。

②大正九年(一九二〇)一五歳 父が新潟県新発田の駅長になり、新潟県立新発田中学に転校。ポート部に入る。この頃、キリスト教の洗礼を受けた⁽⁸⁾。

と記載されている①②の傍線部分の時期が明瞭になる。



右今回洗禮志願ニ付キ
 授洗上入會許可被下度
 履歷書相添へ此段願上候也
 加藤健雄

大正八年十二月三日

一期日本基督教會御中

ここに示したのは、一関教会に「履歷書」と共に残されていた加藤健雄の「受洗願」である。右側の書は書句集『雪起し』『坤』卷中、楸邨が七四歳頃の「地を打つて颯風下なる遊蝶花⁽⁹⁾」という自句の墨書である。

左側の書が大正八年一二月三日、楸邨一四歳の時の「受洗願」である。この受洗願の後半部分「授洗ノ上入會許可下被度」の「下」という字と、自句の書中の「颯風下」の「下」という書体が同じであることを始めとし、「履歷書」の書体と「受洗願」の書体が同じであることを確認した。代筆は考えられない。「履歷書」には、「尋常一年ノ頃ヨリ」「静岡縣駿東郡御殿場日本基督教會」へ通った旨が書いてあり、その「駿東郡」の「下」の下部のふくらみの出した方が『雪起し』中の「楸邨」の「邨」の「下」の特徴が一致していた。これらのことを考慮してこの「受洗願」は楸邨の一四歳の自筆と判断した。一四歳の書体を七四歳まで保つという楸邨の一貫性には注目させられる。

「履歷書」には他に楸邨の誕生日と父母弟妹達が信者であることが書かれていた。

また「受洗願」には

授洗願

東京市傳馬町

三丁目十一番地

岩手縣一關町

鐵道院官舎

父 加藤健吉

長男 加藤健雄

と記されていた。

大正七年の「東京市全圖⁽¹⁰⁾」を見ると「傳馬町三」は四谷区（現・新宿区）と赤坂区（現・港区）の両方に存在していた。楸邨のかつての本籍地については矢島房利氏が、次のように述べている。

「東京市赤坂区伝馬町三丁目十一」であつたらう。これは大正末水戸で代用教員をしていた折の履歴書が発見され、最近判明した⁽¹¹⁾

このことを参考に「東京市十五區全圖⁽¹²⁾」を調べてみると「赤坂区伝馬町三丁目十一」は「赤坂裏町三丁目」にあたり、現在の「元赤坂一丁目」の一部になることが分かった。楸邨の「受洗願」に「赤坂区」が省かれていたのは当時「多くの区名・広域地名と

しての冠名を省いた⁽¹³⁾」という書き方を踏襲したものであろう。このように調べていって、楸邨が洗礼を受けたのは大正八年の一二月であることはほぼ間違いないさそうであることが判った。一関教会の宮部先生の紹介で、日本基督教団金沢教会に残る楸邨の記録を閲覧させて頂いた⁽¹⁴⁾。そこには父健吉、母千佳、楸邨・健雄、楸邨弟・清雄氏に関する次のような記載が認められた。「洗領」は「洗礼」と解釈する。

洗領 明治三十二年七月二十七日

横浜第二美普教會ニテ

畑純三郎教師ヨリ

姓名 加藤健吉

入會 大正十年十一月十九日

生年月 明治二年十一月八日

記事 永眠

洗領 大正三年二月十八日

御殿場教會ニテ

園部丑之助氏ヨリ

姓名 加藤千佳
入會 同前
生年月 明治十八年十一月二日
記事 水戸市

洗領 大正八年十二月七日
デー、ビー、シュネーダ氏ヨリ

姓名 加藤健雄
入會 同前
生年月 明治三十八年五月二十六日
記事 同

洗領 大正十年十二月二十五日

鈴木牧師ヨリ
姓名 加藤清雄
入會

生年月 明治四十年十一月二十八日
記事 同

この記載から楸邨は大正八年十二月七日、一四歳のとき一関教会において洗礼を受けたことが判断された。

楸邨に洗礼を受けた「デー、ビー、シュネーダ氏」は次のように記されている宣教師である。(原文は横書、ラビア数字である)

Schneider, David Bowman 1857・3・23—1938・1

0・5 アメリカ・ドイツ改革派教会、福音改革教会宣教師。
東北学院長。米国ペンシルヴェニア州出身。

一八八七(明治二〇)年、宣教師として仙台に派遣され、前年に創設されたばかりの仙台神学校(のちの東北学院)教授として押川方義、ホーイ、W・Eと協力、九一年には第二大院長に就任、在職三五年に及んだ。

東北各地の教会形成に尽力し、その信仰と人格により多くの人の敬愛を集めた。また頻繁に日米を往復、両国の相互理解を深める努力を怠らず、殊に日系移民排斥問題では繰返し国際正義を訴え、日米開戦の危機が迫った時には、その回避に力を注いだ⁽¹⁵⁾。

『キリスト教人名辞典』「シュネーダー、デイヴィド・ボウマン⁽¹⁶⁾」の項にも同様の記載がある。楸邨にはシュネーダ氏につい

ての言葉は何もないが、若い頃渡米を志した父健吉にとっては、「頻繁に日米を往復、両国の相互理解を深める努力」を怠らなかつたという宣教師から、子に洗礼が授けられたことに感慨があつたと推測される。楸邨はクリスチャンである父についてこう記している。

明治二年生れの父は、十四歳の頃漢学者だった祖父を喪つた。

(中略)二十代の終りに上京した父が、その頃の欧化の風潮に促されて、まず、渡米を志し、英語を学ぶために、外人宣教師についたのが、キリスト教への機縁になったのだと思う。

この辺のことは、私には、今からみて、父の上に典型的な明治初期の日本人の姿を見出すことができている⁽¹⁷⁾。

金沢教会に残っている記録の、加藤健吉の生年「明治二年」、受洗年月日の「明治三十二年」と、楸邨が記す「明治二年生まれの父」が「二十代の終りに上京した」というところは時代的に符合している。

またこの資料は加藤健吉が永眠まで金沢教会にクリスチャンとして在籍したことを記録している。

本稿「(一)父について」に引いた山本氏の論に、楸邨の父は

「かくれた求道者であった」という見解が記されていたが、金沢教会の記録を見るかぎり、楸邨の父は明らかにクリスチャンという立場であった。同じく「(一)父について」の中で、楸邨が「中学を出る頃」には「神を見失った人間になっていた」という記述を引いたが、楸邨に関しては山本氏のように「かくれた求道者」という見解があてはまるであろう。

健吉が洗礼を受けた「日本美普教会」は日本メソジスト・プロテスタント教会のメソジストの「メ」を「美」に、プロテスタントの「プ」を「普」に当てたもので、その母体をアメリカに持っている。この教会に「渡米を志した」健吉が近づいたのは自然である。

そしてこの美普教会はその付属小学校に有島武郎が通い「一房の葡萄」の舞台となったブリテン女学校(現・横浜英和学院)を明治一三年に起こし、明治一八年には横浜に男子夜間英語学校を開設するなど伝道と教育事業に熱心な教会であった。父健吉が明治三二年に受洗した横浜第二美普教会は明治二八年に誕生している。この美普教会が起こした横浜英和学院(旧・成美学園)の「成美学園百年史年表」の

明治三一年(一九九八)六月 横浜美普教会日ノ出町に横浜

英語専修学校を設立（夜間英語学校生徒数約百名⁽¹⁸⁾）

という、「夜間英語学校生徒」の「百名」の中の一人が、働きながら英語を学んだという加藤健吉ではないか。当時の横浜第二普教会は現在の桜木町駅の近くにあり、鉄道に勤務する健吉にとっては至便の教会であり、その美普教会の関係で英語を学ぶとすればここが考えられるからである。

楸邨は、父に惹かれる点についてこう述べている。

私が最も父に惹かれる一つは在京時代どうしても国外に出たくてかなりな年になってから英語を学び始めたということである。それを学んだ師は、自分が出札だった時接した宣教師達だったので、父はその機縁でキリスト教に入信したわけである。（中略）殊に私は父の古い日記の中で、どうしても海外に出て未知の世界を知りたいという切々とした願いと、そのために勤めのかたわら英語を学びはじめた情熱とを読みとって強く惹かれざるを得なかった。（中略）私の中にある未知のものへのひそかなうずきは、私の中に流れている父の血の疼きなのではなからうか⁽¹⁹⁾。

「かなりの年になってから」父が「英語を学び始めた」と楸邨は父に尊敬の念を持つのである。楸邨の父に英語を教え、キリスト教へ導いたと推測されるアメリカ人宣教師について記す。

『日本美普教会・宣教師のはたらき』によると、横浜英語専修学校創立者T・A・ケアンズ博士は「明治30年10月5日来日」「こ

の夜学校の校長に就任」明治33年5月、神癒を強調するダーウ

エー派に共鳴し、美普教会より脱退した⁽²⁰⁾。」とある。ケアンズ師については別に、明治三四年「一九〇一年七月二六日ついに離日⁽²¹⁾」とも記されている。

横浜のこの「夜間英語学校」の校長であったケアンズ師は明治三〇年来日し、明治三四年に信仰上の一大変化によって帰国したのであるが、明治三二年七月に横浜第二美普教会で洗礼を受けた健吉はこの出来事の渦中にあつたはずであり、このケアンズ師が、楸邨の記している「改札だった時」健吉が「接した宣教師達」の一人であった可能性があると思う。

楸邨の母千佳も洗礼を受けている。そのことは静岡県の御殿場教会の『八十八年の歩み』に、次のように記載されている。

大正3年―☆加藤千佳(2・8)

この「☆」は洗礼を受けた印、(2・8)は、二月八日に洗礼を受けたことを示す。この日付けは金沢教会の受洗日(二月十八日)の記載と少し異なるが、大正三年二月に御殿場教会初代牧師園部丑之助師から洗礼を授けられたことは間違いなさそうである。

この御殿場教会の『八十八年の歩み』には園部師の回顧録が掲載され、その中に父健吉について触れている。

大正のごく初期御殿場駅長に転じてこられたものに加藤健吉氏がいる。同氏は明治二年東京に生まれ、横浜第二美普教会で受洗、大正三年御殿場教会に転籍された。駅内外に注意深く眼を向け、その生活は光っていた。駅員の教養に力を注ぎ、余また招かれて、普通学の学習に協力し、一年後に駅員登録試験に応じ、パスしたものの多数あった。部下のために意を用いることかくの如し、実に名駅長であった。のち金沢で召された^(2・2)。

楸邨の弟は、金沢教会で一四歳の時に洗礼を受けている。父健吉がその父を失ったのは一四歳の時、と楸邨は書いていた。そして楸邨も一四歳の時に一関教会で洗礼を受けている。一四歳での受洗は父健吉の意志が働いていると解釈していいであろう。

以上が稿者の知り得た加藤楸邨の父の履歴である。これまで楸邨の洗礼体験等は「神を見失った人間」になったという楸邨の言葉どおりに受けとられて、関心が向けられていなかった。しかし父健吉を中心に加藤家が一家をあげて教会生活を送っていたこと、楸邨も小学校に入学するころから日曜礼拝に通っていたことを考えると、クリスチャンであった父を通しての楸邨のへ世界観の影響は注意をしてよいことと思う。

(三) 戦後の批判に対して

このような父から受けた影響について探ってみる。楸邨はクリスチャンであった父の聖書を読んだときのことをこう記している。

父が死んだ後、父の枕頭にあった大型の革表紙のバイブルを開けた私はそこに引かれた朱線を辿っていった。欄外に「内

村鑑三曰」として書きこまれたものが非常に多かった。書架には『内村鑑三全集』の水浅黄の色がもう手ずれして並んでいた。私はそれをポツポツ読み始めた。これも朱線と朱の書入れが充満していた。ところどころに父の偶感らしいものが見つかった。たとえば、「我は祈りは声に発せざるを好むも如何」というような類である。そうかとひとり肯くような思いであった⁽²³⁾。

楸邨は父の朱線をたよりに聖書を読んだであろう。聖書を開いてみると、そこには、例えば「マタイの福音書」⁽²⁴⁾「第一章二三節には「見よ、処女がみごもっている」、同第二章九節に「見よ、東方で見た星が」、同章一九節に「ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが」、同第八章三四節に「すると、見よ、町中の者が」というように「見る」ことに関する言葉に満ちている。「見よ」とは注意して見なさい、ということである。

一方楸邨は「見る」人と言ってよい。第一句集『寒雷』の「後記」に自らこう記している。「日常生活の執拗な凝視の中から、その殻が破れた瞬間、そこに閃く光を射とめ」ようとした俳人である。楸邨の「見る」に関する句を抽出してみる。(以下、俳句作品は『加藤楸邨全句集』⁽²⁵⁾より引く。)

山茶花のこぼれつぐなり夜も見ゆ 『寒雷』

見つつあれば吾子の鼻より汗噴き出づ 『穂高』

五月二十三日(夜大編隊侵入、母を金沢に疎開せしめ、

上州に楚秋と訣れ、帰宅せし直後なり、)わが家罹災

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ 『火の記憶』

(十一月某日)信楽

月あびてゐたるわが手を見出しき 『野哭』

蝌蚪みるや十字架を負ふ額なし 同

浅間の麓 『山脈』

胡桃焼けば灯ともるごとく中が見ゆ 『山脈』

秋の風鶏の見るもの我に見えぬ 『まぼろしの鹿』

霧ははれゆくもう見えるものしか見えぬ 同

兜虫見てをりいつか趾^{ゆび}うごき 同

魚市場

氷もたげしひらめの尾鱗また見えぬ 同

簾越しなればつくづくと見つつあり 同

山繭の見えては消ゆる黄のひとすぢ 同

名は未だ明らかならねど、青空のごとき硯あり、妻に贈る

硯の中にちちはは見ゆる合歡の花

同

戦の世を経て生き残りたるこの万曆風の硯「日の記憶」

と名を与へむ 一句

暗き火の奥も火が見ゆ天の川

『吹越』

白魚の目がみしものを思ひをり

同

赤城さかえ追悼会にて 一句

目ほそめゐて蒲公英の見れば見ゆ

同

長良川のほとりにて

見つつをり鶉の喉とほる鮎のうごき

同

見てゐるところから雪降りはじめ

『怒濤』

万里の長城にて

日傘一つ長城にひらきしが見ゆ

同

墓鳴くとうなづきあひて闇を見る

『雪起し』

楸邨はこのように句業の初期中期後期にわたって「見る」ことについての句が多い。楸邨の場合は、自然が真の姿を現す瞬間を射とめたい、「日常生活」の「殻が破れた瞬間」を目撃するため「凝視」で、そこから俳句作品の生成が始まるのであるが、「見る」を多用する楸邨の意識の底に「聖書」に満ちている「見よ」という言葉がヒントになっているのではないかと考える。

また、楸邨は俳人として戦後大きな試練にあっている。その代表的な試練は、同じ人間探求派と呼称された中村草田男氏によって「楸邨氏への手紙」の中で批難されたことである。一点目の批難は「大東亜戦争に入つての当初は時代の受難者であつた筈の貴君が、その後半期に入つてからは、当時隆盛を極めた或る勢力層の専らな利用者に豹変したかの如く私の眼には映つた⁽²⁶⁾」こと、「寒雷」復刊後、以前の幅を少しも変はることなく、嘗ての或る勢力層内にあつた人を結社員として厚遇しつゞけ⁽²⁷⁾と見えることであつた。これに対して楸邨は「私が「豹変」出来るような性質なら、今までこんなままずい世わたりはしなかつたらうし、俳人としていつも叩かれどうしに困りつづけることもなかつた筈である」といい、「この戦を通じ傷つき、恥多く、如何にして新しく起ちあがり生きぬこうかとあがき求める人々と共に、少しずつでも歩みを進めたい。よし、過去に於て軍人であろうと、傷つき苦しみ真実を希んでやまぬ人なら、今までと同様に親しみ、力を協せて生きてゆきたい⁽²⁷⁾」と答える。草田男氏の二点目は、新しい時代の「俳人といふ立場」を問うものであつた。楸邨は自分には人間としての要請がある、この要請を生かす表現として「始めて俳句が考えられる」として俳人という立場があつて俳句があるのではないという考えをしめす。三点目は斎藤茂吉の「実相観入」

には「眼」があるが楸邨の俳論「真実感合」には「眼」がない、という批難である。これについて楸邨は自分の俳句態度は「客観写生」とは違う、「物我一如の感動に入りたいためには、対象の真実と自我の真実が一体になる」こと、「私意やはからい」を排除するのが「真実感合」であるという。草田男氏の四点目の質問は楸邨の「俳句は十分にもの言へない文芸である」といった言葉をとらえ、「俳句に於ては十分に物が言へなかつたとしても致方がない」という錯覚を楸邨に与えてはしないかというものである。これについて楸邨は「むしろこの点では、自分の全力を尽くしてそうした結果にならないように努めているつもりである」といい、言外の重量感となって返照してくる「物言はぬ表現」を求めると述べる。五点目の問題として草田男氏は楸邨が「巧緻を排す」として「美」をも排除しているのではないかと問う。楸邨は「私の意図は決してあるべき美を排しているのではない。附け加えられた美を美として見たくないというまでのこと」と答える。そしてこう応えている。

責任は私の聡明ならざること、弱いことにある(同前)

また、楸邨は

今私は単に一返答を以て直にすべてが終るとは絶対に考えない。私は何年或いは終生にわたる自分の生涯を以て実証する外はないところに立っているのである(28)

という。そして

私の句にいつか私自身の人間的根柢から生まれ出る光をあせらずに待ちたい(29)

と応えている。この楸邨の応えの根柢を支えているのはクリスチャンであった父が楸邨に育んだ世界観ではなかるうか。

一つは、自分の「弱さ」を認めているところである。人間を超える存在が念頭にあっての「弱さ」という語と考える。そのような存在の前には誰もが聡明ではあり得ない。「弱い」ということを認めざるを得ない。

二つには、「一返答を以て直にすべてが終るとは絶対に考えない」という楸邨のこの言葉である。人間の区々たる存在の時間内にすべてが終わるのではない、という思考が窺える。「自分の生涯を以て実証する外はないところに立っている」という言葉は草

田男氏や俳壇へ向けた返事である以上に、永遠の時間の前に立っている自分に向けた言葉と考える。「立つ」という言葉は審判の日の「神の前に立つ」という意味の中から使われていると感じられてくる。

そして「私自身の人間的根柢から生まれ出る光を」待ちたいという楸邨の態度は、自分の内部にある遙かな生命の存在を信じている人のものである。過失を誰のせいにもしていないこれらの言葉の底に、クリスチャンであった父の世界観が息づいていると考えるのである。

俳人楸邨に、クリスチャンの側面は見いだせないといつてよい。けれども、青山学院創設者の本多庸一氏は青森県の漢学の家から進んで英語を学び、父健吉の受洗した美普教会と同じメソジスト派のクリスチャンであり、楸邨が小学校の頃に通った御殿場教会を起こしたアメリカ人のバラ宣教師より、東北学院（楸邨に洗礼を受けたデー・ビー・シュネーダー氏は第二代学院長）を起こした押川方義氏らとともに洗礼を受け、アメリカの神学校へ留学した楸邨のいう「典型的な明治初期の日本人」であった。楸邨が教員としての最後の職場に青山学院女子短大を選んだ背景にそうしたことも考えられてくる。

（四）旅と本棚

クリスチャンであった父が楸邨に与えたその世界観の他に、次の二つの影響を考える。

一つは本稿「（三）父健吉と楸邨の受洗」の中の年譜①の引用の中にあつた、楸邨は「愛書家であつた父の蔵書によって、読書に耽」つたという「父の蔵書」による読書の影響である。

その「父の蔵書」について楸邨は「私の読書遍歴」という、二十代に入る頃までの読書についての文に、こう述べている。

父の書架の本がまず私の飢を満たしてくれた最初のものであつた。『菜根譚』や『碧巖録』のような禅関係の本も多かったことからみて随分精神的な遍歴を繰返したものらしく、自分がそういうことを考えるようになって父が改めてかえりみられたのであつた。私は、だから、生前の父は端巖でどこか怖い感じの人として煙たく思っていたが、私の三十代になって初めて生きた父というものを、読書を通して感じとることができたのだと思う。この外北村透谷、島崎藤村のものなどを、わからないままに父の書架からぬきだして読んだ。「文芸倶楽部」が押入に束ねてあつたが、これも雨の日など入り

こんで読み耽った。(中略)また堺枯川とか幸徳秋水という名に触れたのも父の書架であった。『通俗二十一史』という中国の興亡を通俗に書いた十冊程の本があつて、『漢楚軍談』とか、『三国志』とかに惹かれた。同じ体裁のものに世界史の二十冊近いものがあつて、中学時代の始めは専らそれが面白かつた。立川文庫は父が読むのを厭がつたので、かくれて読んだ。同じ型のもので袖珍文庫というのがあつて、『田舎源氏』『梅暦』等を始め随分多彩なものが書架にあつたが、これもいけない中に入つていた⁽³⁰⁾。

父の蔵書についてはこうも記している。

気をつけて父の数千にのぼる雑然たる蔵書を、心おぼえの古い順に置きかえてみた。すると、思い設けぬことに、これが父の人間形成の過程を物語るものであることがわかつた。(中略)父の書架は、今からみて、明治の歩みの代表的なもので埋められていった。福翁自伝・中江兆民(中略)などという名がおもいだされる。イプセン、バイロン、シェクスピアなどの古風な訳書もあつた⁽³¹⁾。

こうした広範囲の読書は楸邨の俳句や短歌、俳論、随筆や紀行文、また芭蕉の作品解釈などの際に、いろいろな視野からの見方ができる点で効果があつたであろう。また読書の経験は人間の種々の側面の理解に役立つ。楸邨の門下から金子兜太氏や森澄雄氏らのような句風の違う多くの俳人が育つたのも、そのような広範囲の読書によつて養われた楸邨の人間観の影響ではなからうか。楸邨は最晩年にこう語っている。

今でもときどき自分の短歌や俳句に凝集した思いの遠い源泉は、この父の本棚の本の読みかじりではなかつたかと思ふことがある。もちろん往事の私には、完全にはとても理解できないことだったのは確かだが、あのころ私の中にいつしらず滲みこんでいたものが、後年になつて芽吹いてくれる土壤となつたのではなからうか⁽³²⁾。

楸邨は「父の本棚の本の読みかじり」が「自分の短歌や俳句に凝集し」て「芽吹いてくる土壤」になつたというのである。

もう一つは父から与えられた旅の体験である。

楸邨の父は旅人の送迎を業とする駅長の職にあつた。楸邨が三歳のときに「父が楸邨を旅に出してくれた。家族パスと幾らか

の金を貰って夏休みの四十日間旅をしつづけた⁽³⁾」一関から「仙台、東京、東海道線から母の郷里金沢まで北陸線を」「廻って好きな処へ下車して、名所や史跡を見て歩い」て「丁度名古屋では米騒動に会った^(同前)」という。この米騒動を目撃したときのことに関連して楸邨はこう語っている。

このとき私は新聞で見たり、人から聞いたりした米騒動のときの米屋の襲撃とか、焼き打ちとかいうものが現実のもので、世間は決してなまぬるいものではないことを知ったのであった。(中略)今思うと、父はこうした社会不安を知らなかったのではないと思う。(中略)生^{なま}の社会を、中学に入ったのを契機に感じさせようとする思いが動いていたのだろうと考えられる。この旅で私の身に沁みこんだものは、その後、私が俳句に打ちこむようになった時期になって、いろいろの体験を通して、「父の本棚」の、一つという思いを新たにしてくれるのである。殊に戦時から戦後にかけての『火の記憶』や『野哭』の作をまとめるたびに私を鞭打ってくれたのであった^(3, 4)。

この旅は楸邨にとって大きな体験であった。このような旅の体

験も父が与えてくれた「父の本棚」の一つととらえている。

世の中を見てみよという父の考えは、第五句集の『火の記憶』の空襲の克明な記録を記すときや句を詠むとき、飢餓に苦しみ戦争責任を追及して争う自分の身に起こったことを詠んだ第六句集『野哭』を纏める場合にも、父に問いかけつつ進めたというのである。

現実に触れることの大切さは楸邨が本の上からだけでなく実際に芭蕉の「奥の細道」をくまなく踏査していることや、日本だけではなく異質の風土での旅吟を試み、シルクロードでの句作の挑戦を繰り返しているところにも現れているように。

「父」はこのように楸邨を前進させる存在であったと思う。

(五) 冬の浅間は

冬の浅間は胸を張れよと父のごと

『山脈』^{やまなみ}

掲句は昭和二五年、楸邨が四五歳のときに重い肋膜炎の回復期に信州に旅して詠んだものである。「浅間の麓 二十六句」中の一句として第八句集『山脈』に収録されている。この『山脈』の「あとがき」に楸邨はこう書いている。

『山脈』は昭和二十三年から二十七年までの作を収めた。(中略)『起伏』は二十三年病臥中のものが主だったが、『山脈』は恢復期に入り、漸く外出し始めた頃から、旅に出るやうになつた時期の作品である。案じながら浅間の麓に宿つた時の心のと きめきは忘れがたい。(中略)戦後始めてまとめたのは『野哭』であつたが、戦争の傷痕の中、詠むことで辛うじて自らを支へた感じがあつたし、『起伏』は病中の昏迷の中にあつた。『山脈』から私(は)もう一度振出しに戻つて歩き始めてゐる感じだ^(3.5)。

楸邨のこの文は「冬の浅間」の句と、この『山脈』句集のもつ意義を明らかにしている。掲句を昭和二五年の作として、田川飛旅子氏の次のような鑑賞がある。

漸く健康を恢復して、この年十二月矢島房利に誘われて、知世子と共に信濃に遊んだときの作品である。若いころ死別した父加藤健吉は楸邨の尊敬措く能わぬ人物の一人である。父の若い楸邨に与えた感化というものは、楸邨の一生を貫いて消すことが出来ない。負けずぎらいの、やや非妥協的性格

も、正義感で真正面から人生と取組む態度も、やや清教徒的な潔癖も(中略)多くを父に受けていると思う。病臥から立ち上がって久しぶりに見る信濃の山河は楸邨に非常に大きな興奮を与えたやうで、「浅間の麓」数十句は素晴らしい傑作であつた。この句の浅間は「いつも胸を張つて毅然として生きなさい」と教えてくれた父のような威容をもつて自分に迫つたという句意であるが、父をなつかしむ心が旅情と溶け合つて、この作者らしい張つた抒情を奏でてゐる^(3.6)。

その父が「若い楸邨に与えた感化」は「一生を貫いて消すことが出来ない」もので、楸邨の「やや清教徒的な潔癖も」「多くを父に受けている」という田川氏の見解や句解に共感する。しかし「この作者らしい張つた抒情」の「張つた」という点について考えてみたい。父を懐かしむ抒情のほかに浅間山が「父のような威容をもつて」迫つてきたというところに「張つた」響きが感じられるというのではなからうか。楸邨が終生研究していた芭蕉に、浅間山に関して「更級紀行」中の「吹き飛ばす石は浅間の野分かな」の句が思い起こされる。楸邨の著書『芭蕉全句・上巻』に「吹き飛ばす」についての芭蕉の推敲過程を

「秋風や石吹き風す浅間山」↓「吹き風す浅間は石の野分かな」↓「吹き落とす浅間は石の野分かな」↓「吹き落とす石を浅間の野分かな」↓「吹き落とす石は浅間の野分かな」↓「吹き飛ばす石は浅間の野分かな」。

楸邨は右のように詳しく記し、「秋風や」の形では「浅間の草一本ない山腹を吹きおろす野分のはげしい勢いが出ていない」、最終的な芭蕉の句の形には「野分はその勢いを浅間の石とのかかわりで生かされて、単なる寂しさに終らず、烈しさの中の寂寥になっている」と述べているのである。

楸邨は戦後直ぐの、戦争責任追及の非難のさなかの苦悩を句集『野哭』の中に

述懐 七句（中三句）

吹きめぐる野分に向けし喉仏 『野哭』

火の中に死なざりしかば野分満つ 同

死ねば野分生きてあしかば争へり 同

と烈しい「野分」にたとえて詠んでいる。芭蕉が詠んだ烈しい「野分」のような非難に満ちた時期や病の日々を我ながらよく耐

えたと、父に胸を張って言いたい思いが「胸を張れよ」の語に籠められているのではなからうか。「そうだ、そうやって生きてゆくん」だと父が肯いてくれるように楸邨は感じて詠んでいるように思う。冬の浅間の山容は厳しくはあるが人を拒絶するような姿ではなからう。掲句はあくまで肯定的であり、懐かしさが漂っているからである。

おわりに

楸邨にその父が遺したものについて本稿「(三)戦後批判に對して」、「(四)旅と本棚」に述べてきたことを纏めてみる。

- 1、クリスチャンであった父の世界観
- 2、父の本棚の多彩な蔵書による読書体験
- 3、もう一つの「父の本棚」である旅の経験

ここで注目するのはこの三つのどれもが目に見ることのできない無形のものだということである。この無形のもの及ぼす力を考えるとき、次の楸邨の文が参考になる。

今思い出しても、この十代の終わりまでに私の記憶の中に生きた父は、私の印象の中に力強いものであった。代用教員をしているときも、何かという目をつむるような切ない思いが胸を苦しめることがあったが、そんなときも目をつむると父がいた。父ならこういうことにぶつかつたらこうしただろうという思いを幾度したかわからない⁽³⁸⁾。

この「代用教員をしているとき」というのは、楸邨は父の病臥とその病死のために、中学を卒業するとすぐ母と弟妹との五人の生活を維持するために代用教員として働かねばならなかった時代をさす。そのような時に「父なら」「こうしただろう」と記憶の父に問いかけていたのである。父が楸邨に残したものはこの無形の遺産である。失われることのない財産である。常に楸邨と共にいることのできる豊かな力である。

父の影響は無形という形をとって楸邨の中に残されているゆえに、「(一)父について」に矢島氏が指摘するように「絶大」なのである。楸邨の内部にいつも楸邨と共にある「父」の大きな影を認めざるを得ない。

〈注〉

(1) 「加藤楸邨」(項・執筆矢島房利)(普及版『俳文学大典』平成二〇年(二〇〇八)一月、角川学芸出版刊。)一六五頁より引用。

(2) 山本健吉「人間的大らかさへー加藤楸邨」(「朝日新聞」コラム「人さまさま」。昭和二八年(一九五三)十一月五日刊。)

(3) 加藤楸邨著「父の本」(『加藤楸邨全集』(以下、『全集』と略。)第六卷。昭和五五年(一九八〇)八月、講談社刊。

以下、講談社刊は略。)七八―八〇頁より引用。「初出」(原題「内村鑑三全集と父」)『内村鑑三全集・月報1』。昭和二

九年一月(第六卷付録)、岩波書店刊。

(4) 加藤楸邨著「私の読書遍歴」(『全集』第六卷。発刊年等は注(3)に同じ。)七六―七八頁より引用。「初出」『日本読書新聞』昭和二八年十一月三日刊。

(5) 一関教会百年史編集委員会編『日本基督教団一関教会百年史』。(平成一七年(二〇〇五)一〇月刊。)五四―五六頁より引用。本資料は日本基督教団一関教会牧師であった宮部望先生のご教示による。

(6) 遠藤祐ほか責任編集「加藤楸邨」(『世界日本キリスト教

文学事典』平成六年（一九九四）三月、教文館刊。）一三九頁より引用。

(7) 田川飛旅子編「年譜」（『全集』別巻。昭和五七年（一九八二）十一月刊。）三四七頁より引用。

(8) 加藤瑠璃子編「加藤楸邨略年譜」（「俳句」平成八年（一九九六）三月号。）一五〇頁より引用。

(9) 加藤楸邨著「秋」（『雪起し』坤巻。昭和六二年（一九八七）五月、求龍堂刊。）図版番号一〇二の作品複写。

(10) 「東京市全圖」（『明治大正昭和東京近代地圖集成』。昭和

五六年（一九八一）四月、人文社刊。）より確認。

(11) 矢島房利「俳人の謎・加藤楸邨細説三題」（「國文學―解釈と教材の研究」。平成八年（一九九六）二月臨時増刊号。學燈社刊。）七八―七九頁より引用。

(12) 「東京市十五區全圖」（『明治大正昭和東京近代地圖集成』。

発刊年等は注(10)に同じ。）より確認。

(13) 角川日本地名大辞典編纂委員会・竹内理三編「東京都行政

変遷年表」（『角川地名大辞典・13東京都』。昭和五三年（一九七八）一〇月、角川書店刊。）より確認。

(14) 石川県日本基督教団金沢教会牧師横井伸夫先生のご教示による。

(15) 「シュネーダー」項（執筆・出村彰）（中村義治編『日本キリスト教歴史大事典』。昭和六三年（一九八八）二月、教文館刊。）一〇七四頁より引用。

(16) 「シュネーダー，デイヴィド・ボウマン」項（『キリスト教人名辞典』。昭和六一年（一九八六）二月、日本基督教団出版局刊。）より確認。

(17) 注(3)に同じ。但し八一頁より引用。

(18) 成美学園百年史編纂委員会・永井輝男編「成美学園百年史

年表」(『成美学園百年史』。昭和五五年(一九八〇)一〇月刊。)四六四頁より引用。本資料は横浜英和学院(旧、成美学園)院長であつた森山みね子先生のご教示による。

(19) 加藤楸邨著「レバノン山を越えて」(『全集』第九卷「鶴こづと煙突」。昭和五五年(一九八〇)五月刊。)五二七頁より引用。「初出」『月刊シルクロード』昭和五〇年七月号・八月号。

(20) 松永徳次郎編著「ケアンズ師」(『日本美普教会・宣教師のはたらき』。昭和五三年(一九七八)降誕節。)二八頁より引用。

(21) ジャン・W・克蘭メル編『来日メソジスト宣教師事典一九七三―一九九三』(平成八年(一九九六)二月、教文館刊。)より確認。

(22) 園部丑之助「御殿場伝道十年・恩寵無限」(御殿場教会『八十八年の歩み』。昭和四七年(一九七二)九月。)二七頁より引用。本資料は日本基督教団御殿場教会牧師中島善子先生

のご教示による。

(23) 注(3)に同じ。但し、八〇頁より引用。

(24) 新改訳英語対照『新約聖書』(昭和六四年(一九八九)二月、日本聖書刊行会刊。)二―二二頁より引用。「初版」昭和六三年四月刊。

(25) 加藤楸邨著『加藤楸邨全句集』。(平成二二年(二〇一〇)一〇月、寒雷俳句会発行。)

(26) 中村草田男「楸邨氏への手紙」(「俳句研究」昭和二二年(一九四六)七・八月合併号、俳句研究社・目黒書店刊。)二〇―二三頁より引用。

(27) 加藤楸邨著「俳句と人間に就いて(一)―草田男氏への返事―」(『全集』第五卷。昭和五六年(一九八一)一〇月刊。)三六四―三六九頁より引用。「初出」『現代俳句』昭和二二年一月号。

(28) 注(27)に同じ。但し、三六一頁より引用。

(29) 加藤楸邨著「俳句と人間に就いて(二)―草田男氏への返

事―」(『全集』第五卷。発刊年等は注(27)に同じ。)三七

九―三八〇頁より引用。「初出」 「現代俳句」昭和二二年二月号。

(30) 注(4)に同じ。但し、七七頁より引用。

(31) 注(3)に同じ。但し、八一頁より引用。

(32) 加藤楸邨著「父の本棚」(随筆集『遙かなる声』。平成二年(一九九〇)十一月、読売新聞社刊。)八六頁より引用。

(33) 田川飛旅子著 新訂俳句シリーズ人と作品16『加藤楸邨』

新訂二版。(昭和五八年(一九八三)三月、桜楓社刊。)一七頁より引用。「初版」昭和三八年三月刊。

(34) 注(32)に同じ。但し、八八―八九頁より引用。

(35) 加藤楸邨著「『山脈』あとがき」(『全集』第二卷。昭和

五 五年(一九八〇)三月刊。)三七二頁より引用。「初出」
『山脈』昭和三〇年一〇月、書肆ユリイカ刊。

(36) 注(33)に同じ。但し、三〇四頁より引用。

(37) 加藤楸邨著「貞享年代」(『全集』第一〇卷「芭蕉全句上
巻―その発想を中心として」。昭和五五年(一九八〇)一
月刊。)五三五―五三六頁より引用。「初出」『芭蕉全句』上
巻。昭和四四年三月、筑摩書房刊。

(38) 注(32)に同じ。但し、八三―八四頁より引用。

第三章

後期作品の考察

―「灯の寒きこのしら骨が波郷かな」との関連―

第二節 楸邨と正岡子規

―「ぼこぼこと暗渠出てきし茄子の馬」の背景―

第三節 楸邨における幻想的作品の解釈

―「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の句意―

第一節 楸邨の「真実感合」と北村透谷の「内部生命論」

―「灯の寒きこのしら骨が波郷かな」との関連―

はじめに

「序章第二節 楸邨作品の時代区分」において、加藤楸邨の句業後期（六一歳―八八歳）は第九句集『まぼろしの鹿』、句文集『死の塔』、第一〇句集『吹越』、第一一句集『怒濤』、書句集『雪起し』、遺句集『望岳』の六つの作品集を含むものとした。この句業後期の『まぼろしの鹿』は俳壇の最高の賞である蛇笏賞を受賞した句集である。また『吹越』は楸邨の「到達した句境」⁽¹⁾における作品が収められている。こうした句境に楸邨を進めたのは、楸邨自身が提唱した「真実感合」の句作態度であると思う。

この楸邨の「真実感合」論に、北村透谷（一八六八—一八九四）の「内部生命論」の撰取が考えられるという私見を述べてみたい。

灯の寒きこのしら骨が波郷かな

『吹越』

この句は楸邨の親友石田波郷が亡くなった際に詠まれたものである。（以下、句及び作品集の題名は『加藤楸邨全句集』⁽²⁾より引く。）掲句は

十一月二十一日、波郷永眠、その夜通夜

柿を過ぎゆく縷のごときもの亡波郷

『吹越』

十一月二十三日、火葬

秋の暮波郷燃ゆる火腹にひびく

同

とともに『吹越』に収められている。この「灯の寒き」の句と北村透谷の俳句作品との関連を探り、楸邨の「真実感合」と透谷の「内部生命論」との近接を考察する。

（一）「北方型」の楸邨

これら一連の句が収録されている句集名の、「吹越」というのは「谷川岳あたりの北が吹雪になると、その一部が風の乗つて岳越しに南の山麓に飛んでくるもの」⁽³⁾（以下、引用文中の旧漢字は現行のものに置換）をいい、一般に「風花」といわれる雪のことである。楸邨は雪が好きなのである。第四句集の名は『雪後の天』という。晩年に出した筆墨の句集の題名も『雪起し』とい、これが鳴ると曇や雪が降り出すという雷のことである。

楸邨は山梨県生まれであるが父は山形県酒田の出身で、その父の駅長としての転勤に従って東北や北陸地方で少年時代を送っている。そうしたことからか、楸邨は自身を

私は紛れもなく北方型だ。南方の外光に感じ易い敏感さ。北方の無愛想な沈黙⁽⁴⁾。

と述べている。この視点から見ると生涯の発表句八千余りの句の中で

落葉松⁽⁵⁾はいつめざめても雪降りをり

『山脈』

この句に代表される楸邨の「雪」の句は二八五句を数える⁽⁵⁾。生

涯で最も多く詠んだのは、雪の句と言えるのである。このことから楸邨は「北方型」の俳人といって良いであろう。

また楸邨はその父の転勤によって国分寺小学校（東京）、御殿場小学校（静岡）、原ノ町小学校（福島）と転校し、中学校は一関中学（岩手）、新発田中学（新潟）、金沢一中（石川）と度々の転校を経験し、「何度も転校してあるいた関係で、郷里という感じの土地を持っていない」「私は安住する故郷を未来にだけしか描けない。」と述べている。

楸邨は、この明治二年生まれのクリスチャンであった父の生涯について

維新の雄藩出の人々の絢爛たる動きとはちがって、東北の日の当たらない庶民の辿った歩みであり、そこからキリスト教というものをとおして近代の夜明けを感じとろうとしていたようである⁽⁷⁾。

とも記している。楸邨が自分を「北方型」というとき、そこには「雄藩出の人々の絢爛たる動き」に対する「東北の」「庶民」の子という思いが心底にあると思われる。その父がそこから「夜明けを感じとろうと」してキリスト教へ接近して行ったように楸邨

も「安住する故郷を」「未来へ未来へ押しやつて未知の世界にのみ故郷を見るやうになつてゐた⁽⁸⁾」、「私の俳句の動かずにゐられないのも、かういふところに性格づけられていたかも知れぬ^(同前)」というのである。

(二) 藤村と透谷と一関

楸邨が岩手県一関中学二年生の時に、洗礼を授けたデー・ビー・シュネーダ師が教員であった東北学院には、島崎藤村（一八七二—一九四三）が明治二九年九月に作文教師として赴任している。藤村は「三十年に入つて（中略）前に、親友北村透谷の世話で、英語の家庭教師となつて行つたことのある」一関の酒造家熊谷太郎から大金を「借り⁽⁹⁾」ている。

この熊谷家は東北有数の酒造家「熊文」のことであり、この家は楸邨が洗礼を受けた一関教会とは目睫の間にあつた。北村透谷が明治二六年に東北伝道の途次、この「熊文」に滞在したこと、教え子との問題で藤村も同じ年の秋、この「熊文」に身を寄せていた。それは楸邨が一関に住む二〇年ほど前のことであるが、透谷は翌明治二七年に自死し、藤村のそうしたこともまだ忘れられてはいなかったであろう。これらのことが判ると楸邨が二十代ま

での読書体験を振り返った、次の文中の

この外北村透谷、島崎藤村のものなど、よくわからないままに父の書架からぬきだして読んだ⁽¹⁰⁾。

という箇所が見逃せない一節となる。

楸邨は島崎藤村への敬愛を隠していない。

昭和一四年に東京文理科大の同級生茂木楚秋と親友の石田波郷と三人で、楸邨は藤村の『夜明け前』を買って車中に読み、『夜明け前』の舞台となった馬籠や妻籠を歩いた。藤村の長男楠雄氏を訪ねて楠雄氏、楚秋、波郷と「寄せ書きした」⁽¹¹⁾『夜明け前』を今も持っている、という。

また楸邨が父を回想した「私が父母の子であったのは、十八までであった。そして、その後はいつでも、私の中に父がいるようである」⁽¹²⁾という隠岐への船中で書いた文は、藤村が「私の前には幼少の頃に御別れしたまゝのあなたがあつて、私はまたあなたの前に子供の時の心で居ります。私はいつまでもあなたの子供です」⁽¹³⁾とヨーロッパへ向かう船旅の中で書いた文章には、どちらも旅の船中で綴られた父への思慕という点でも通じ合っている。

志城柏（＝目崎徳衛）氏は「一漂泊者の像―加藤楸邨論―」の

中で、藤村が木曾の馬籠の本陣の子として生まれ、楸邨が駅長の子として生まれ二人の父がともに旅人の送迎を業にしていたことは偶然の一致と言うべきであろう、と述べている。

そして志城氏は

楸邨というのも始めからの号ではない。その前が柗村といい、更にその前が冬村であった⁽¹⁴⁾

という楸邨の文章を引き、この楸邨の最初の俳号「冬村」は「ひどく藤村に似てゐるが、これは無論トウソンといふ語感に対する好みが、藤、楸二家に共通してゐたといふことはいへるにせよ、先づ」これも「一つの偶然にすぎなからう」⁽¹⁵⁾としている。志城氏の説くように、「冬村」をすぐ「藤村」に結びつけるのは早計であると私も思う。けれども楸邨と藤村の関連を考える上では注目せざるを得ない事実の一つではある。

このように島崎藤村と楸邨の関連は明らかにされているが一方、透谷について楸邨は「北村透谷」のものなど、よくわからないままに「ぬきだして読んだ」というのみである。「(一)「北方型」の楸邨」で引いたように、ここには楸邨の「北方型」の「無愛想な沈黙」によって隠れている部分があると思われ、楸

邨の透谷への関心を探ってみる。

(三) 透谷への関心

楸邨の透谷への関心として次の四点を取りあげる。

一点目について述べる。

楸邨の俳人としての出発は同時に師水原秋櫻子の「馬酔木」の論客としての出発であった。それは第一句集『寒雷⁽¹⁶⁾』(昭和一四年刊)より先に、楸邨の俳論を纏めた『俳句表現の道⁽¹⁷⁾』(昭和一三年刊)の単行本が刊行されていることから判る。

また、楸邨の初めて活字になった俳論「調べ」に関する研究の一例⁽¹⁸⁾。という論文は師の秋櫻子の「自然の真と文芸上の真」という、「ホトトギス」離脱のきっかけとなった高名な論文と同時に、昭和六年「馬酔木」一〇月号に掲載されている。そうした楸邨は、「馬酔木」の同人となった昭和一〇年の「俳句研究」二月号に次のような論文を載せている。(以下、引用文中の傍点と○印は楸邨、傍線は稿者。)

いふまでもなく、作品には陰翳があつてほしい。然し、陰翳はあくまで陰翳であり、内部生命の反映であつて、決して表

現の曖昧であつてはならぬ。(中略)新興俳句の人々が各々新精神新題材新表現に努力することは尊い。然しながら不完全な表現に終始し、未完成の美を、完成を希求することなしに肯定するとしたなら、私は新興俳句のためにとらない。どこまでも芸を重んずる精神を失ひたくないものである。芸と高い技巧と内部生命との渾一無碍に融合した表現をいふのである⁽¹⁹⁾。

楸邨がこの文を発表した前年の、昭和九年は北村透谷研究における画期的な年であった。神崎清氏らの明治文学談話会による「明治文学研究」誌が一月に創刊され、その創刊号には、木下尚江氏の「福沢諭吉と北村透谷―思想上の二恩人―」や神崎氏の「北村透谷著作年表」などが掲載された。その「明治文学研究」四月号は北村透谷特集であった。ここに詩人で評論家で劇作家という透谷の多彩な側面が明らかにされたのである。

楸邨が「内部生命」という言葉を透谷研究画期の年の翌年、「俳句研究」の二月号の文中に二度使っているという時期的一致を、北村透谷への関心の第一の表れと見る。

第二の関心は、「(二)藤村と透谷と一関」で述べたように、楸邨が洗礼を受けた一関教会の直ぐ傍に酒造家「熊文」の屋敷が

あった。そこに明治二六年秋に藤村が身を寄せ、透谷もまた一閑に足跡を残している地に楸邨が住んでいたという地理的関連である。

第三の関心は、透谷が漢学の家から進んで英語を学びキリスト教に入信したという、楸邨の父と似た経歴を持っていたことである。楸邨の祖父は漢学畑の人であり、明治二年生まれの父は英語を学びその機縁でキリスト教に入信している。明治元年生まれの透谷を父と同世代の人と考え、透谷の本を通して父を追体験しようとしていたところがあるのではなからうか。「父の書架からぬきだして読んだ」というところから、そう考えられるのである。第四の関心は透谷が散文のほかに、次のような本格的な俳句や付け句を詠んでいることを知ったからであろうと思う。

コーサンド氏より愈々免職の相談あり、

帰途歩上作

ぬら／＼とからをはなれた蝸牛

島崎兄の「夏草」を読みて

夏草のしげみに蛇の目の光り

「三日幻境」五句（うち一句）

日ぐらしの声の底から岩清水

透谷^(2,0)

透谷^(2,1)

透谷^(2,2)

骨二つならべて埋まれ花の塚

透谷^(2,3)

〔鎌倉にて〕

〔塵塚をくづすひゞきか松の風

天知〕

一本／＼骨の白さよ

透谷^(2,4)

俳句作家として俳壇時評を行ったりして、俳論の論客として歩みはじめていた楸邨は、透谷の著作を改めてこの時期読み直したと考えるのである。

(四) 「内部生命論」と「真実感合」

ここで透谷の「内部生命論」と楸邨の俳句理念を比べてみる。(以下、引用文中の振り仮名は透谷、傍点は楸邨、傍線は稿者)

透谷「内部生命論」

文芸上にて之を論ずれば、所謂写真派なるものは、客観的に内部の生命を觀察すべきものなり。(中略) 所謂理想派なるものは、主観的に内部の生命を觀察すべきものなり。主観的に内部の生命の百般の頭象を觀察すべき者なり。(中略) 文芸上にて理想派と謂ふところのものは、人間の生命を觀察す

るの途に於て、極致を事^{リアリチ}実の上に具体の形となすものなり⁽²⁵⁾。

楸邨

一つの詩があるためには、どうしても、主観があり、同時に客観があるべきものであつて、引きはなすことが出来ぬものなのであります。このように心の深いところから生まれて来たある芸術的衝動が、我々の見たり聞いたりすることの出来る感覚的事象を通じて具象的にあらわれることを、象徴的表現と呼びます⁽²⁶⁾。(「主観と客観」)

透谷がいう「文芸上にて之を論ずれば」は、楸邨の「一つの詩があるためには」というところにあたるといえる。透谷が「内部生命」と呼ぶものは、楸邨の「心の深いところから生まれて来たある芸術的衝動」に相当すると思う。透谷の「内部生命を観察するの途に於て」は、楸邨の「我々の見たり聞いたりすることの出来る感覚的事象を通じて」と同様のことを指している。透谷の「極致を事^{リアリチ}実の上に具体の形となす」とは、楸邨が「具象的にあらわれることを、象徴的表現と呼びます」という、表現の上で「具象的にあらわす」ということと異なつてはいない。表現に関

する二つの論のこのところは類似している。また両論とも「主観」と「客観」を対置させて論じていることも興味深い。

透谷「内部生命論」

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは云ふなり、而して吾人は、真正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には、之なきを信ぜんとする者なり⁽²⁷⁾。

楸邨

自然も、人間も、その真実において立たせようとするなら、ある場合ある人によつて、一回きりの、去つてはふたたびかえらぬはつとする瞬間、これだと胸にとどろく瞬間があると思うのである⁽²⁸⁾。(「俳句的真實」)

「内部生命論」中の「瞬間の冥契とは何ぞ」は、楸邨の「去つてはふたたびかえらぬはつとする瞬間、これだと胸にとどろく瞬間」という言葉に近似している。「瞬間の冥契」が「インスパイアドされたる詩人の外には」信じないという透谷、自然や人間を「真実において立たせようとする」楸邨、両者には詩に対する潔癖な態度が共通する。

透谷「内部生命論」

インスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり⁽²⁹⁾。

楸邨

自分そのもので立ち向かうのである。そして、そこにあらわれる、自然そのものの真実に感合しなくてはならない。とんでもない思いがけない自然が立ちあらわれるかもしれない。しかし、それが真実感合である⁽³⁰⁾。(「真実感合」)

北村透谷の「内部生命論」の根幹の精神は「内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり⁽³¹⁾」、つまり内部生命には神以外のものは絶対に触れることができない、というキリスト教受容の精神から成り立っている。「インスピレーション」とは「宇宙の精神」であり、大いなるものからの「人間の精神即ち内部の生命」の「感応」に過ぎないものというのである。

小学校にあがる頃から父に連れられて、日曜ごとに教会の礼拝に通い、神についての教えをきき、聖書に親しみ、中学生の時に

は洗礼を受けた楸邨にとってこれは難しい考えではなかったはずで、むしろ直感的に理解できる理念であったかもしれない。楸邨はこの「自分そのもの」即ち「内部の生命」によって、「自然そのものの真実」(透谷のいう宇宙の精神)に「感合」(透谷のいう、インスパイアドされること)、把握するということが理論的に結びついたのであろう。透谷の「感応」と楸邨の「感合」は言葉の上からもよく似たひびきを持つ。

透谷「内部生命論」

この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の経験と内部の自覚とを再造する者なり。(中略)再造せられた生命の眼を以て観る時に、造化万物何れか極致なきものあらんや⁽³²⁾。

楸邨「俳句と人間的要請」

俳句の特性を通して人間の要請が生かされるところに、そのままでない人間の新生がある。死んで生きるという方途である⁽³³⁾。(「俳句と人間的要請」)

透谷のいう「感応」とは「人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する」ことである。楸邨のいう「真実感合」とは「把握と表

現一枚^(3,4)」になることである。それは「感合」によって「把握」したものを俳句に「表現」として「新生」させることでもある。

透谷の「感応」は楸邨の「感合」に近く、把握した経験と自覚とが表現として「死んで生きる」という楸邨の「新生」は、透谷の「この感応は人間の経験と内部の自覚とを再造する者なり」という「再造」に相当すると考えられる。楸邨は透谷の「内部生命論」を自らの表現論として読み解いたといえるのではなからうか。

再造された生命の眼に「造化万物何れか極致なきものあらんや」とした透谷へ、楸邨には「われわれの中には、数かぎりない未知の感動がねむっているようである^(3,5)。」と呼応するかのごとき一文もある。一七文字という小さな詩型に、自然や時の流れを表そうとした楸邨俳句の秘密を、透谷の「内部生命論」は垣間見せてくれる。

先に挙げた透谷の俳句

島崎兄の「夏草」を読み

夏草のしげみに蛇の目の光り

透谷

から稿者は楸邨の

紫陽花の蔭に目があり見ればなし 『山脈』

の不安感のある句を思い出す。透谷の「日ぐらし」の句からは楸邨の

ああ 蝸^{ひぐらし} わが念^{おも}ふときこゑおこる 『寒雷』

蝸や水底に畦澄むが見ゆ 『野哭』

蝸や水底に貝口ひらく 『山脈』

これらの句の「こゑ」や「水底」を生かしている感覚は透谷の「日ぐらし」の「声」の「底」から「岩清水」が湧いてくるという句意と通うところがあるのは否定できないと思う。また石田波郷が亡くなったとき楸邨が詠んだ

十一月二十三日、火葬

秋の暮波郷燃ゆる火腹にひびく 『吹越』

灯の寒きこのしら骨が波郷かな 同

この句の「波郷燃ゆる火腹にひびく」の「ひびく」は、星野天知が詠んだ「鎌倉にて」「塵塚をくづすひゞきか」の「ひゞき」に、

また楸邨の「このしら骨が波郷かな」の「しら骨」は、透谷の句の「骨二つならべて」の「骨」、「一本／＼骨の白さよ」の「骨の白さ」を詠んだ付句を思い起こさせる。透谷と藤村が親友であったというこの句の先例を知ると、楸邨と波郷が親友であったことが一層如実に感じられてくる句となってくる。

おわりに

楸邨は歳晩年になって第一句集『寒雷』「後記」の「深淵の中から真に自分が見出したものを掴み出したかった。日常の常識と平安の底に、黙々と動いてゐる自分の真の姿を掘り出したかった。そしてそれらを鬱たる氣息の如く、俳句に充填したかった」という自身の文を引き

それから今日まで私の俳句を作ってきた道は、この平凡な一筋を辿ることに尽きたといつてよい⁽³⁶⁾。

と記している。「日常の常識と平安の底に、黙々と動いてゐる自分の真の姿」とは透谷の「内部生命」といつてもよいものなのではなからうか。「深淵の中から真に自分が見出したものを」句

に掴み出すことに「尽きた」という楸邨の「一筋」の道の終始に、明治期のキリスト教文学者北村透谷の「内部生命論」の痕跡が認められると考える。

〈注〉

(1) 中村稔「加藤楸邨という小宇宙」(『加藤楸邨句集』「解説」)。昭和二四年(二〇二四)五月、岩波書店刊。(五一頁より引用)。

(2) 加藤楸邨著『加藤楸邨全句集』。平成二二年(二〇一〇)一〇月、寒雷俳句会刊。

(3) 加藤楸邨著「『吹越』あとがき」(『加藤楸邨全句集』。発刊年等は注(2)に同じ。)四四六頁より引用。

(4) 加藤楸邨「達谷私語」。「1南方型と北方型」(「寒雷」昭和二三年(一九四八)五月号。)一七頁より引用。

(5) 加藤楸邨著「季語別索引」(『加藤楸邨全句集』。(発刊年等は注(2)に同じ。)八八一―八八四頁より確認)。

(6) 加藤楸邨著「冬櫛」(『加藤楸邨全集』(以下、『全集』と略。)第六卷。昭和五五年(一九八〇)八月、講談社刊。(以下、講談社刊は略。))「初出」「寒雷」昭和三八年二

月号。

(7) 加藤楸邨著「レバノン山を越えて」(『全集』第九卷。昭和五五年(一九八〇)五月。)五二七頁より引用。「初出」月刊シルクロード」昭和五〇年六月号、七月号、大修館書店刊。

(8) 加藤楸邨著「『寒雷』後記」(『加藤楸邨全句集』。発刊等は注(2)に同じ。)五八頁より引用。

(9) 東北学院創立七十年史編纂委員会・花輪庄三郎編『東北学院創立七十年史』。(昭和三四年(一九五七)七月刊。)一八三―一八四頁より引用。

(10) 加藤楸邨著「私の読書遍歴」(『全集』第六卷。昭和五五年(一九八〇)八月刊。)七七頁より引用。「初出」『日本読書新聞』昭和二三年一月三日刊。

(11) 加藤楸邨著「秩父の夜」(『全集』第八卷。昭和五六年(一九八一)一月刊。)五二四頁より引用。「初出」『寒雷』昭和一八年一月号。

(12) 加藤楸邨著「隠岐への旅」(『全集』第八卷。発刊年等は

注(11)に同じ。)三二頁より引用。「初出」『隠岐』昭和一七年一〇月、交蘭社刊。

(13) 島崎藤村著「地中海の旅(父を追想して書いた船旅の手紙)」(『島崎藤村全集』第一二卷。昭和二四年(一九四九)六月、新潮社刊。)三一〇頁より引用。「初出」『海へ』大正七年七月、実業之日本社刊。

(14) 加藤楸邨「楸について」(『全集』第六卷「遠近」。発刊等は注(10)に同じ。)六九頁より引用。「初出」『寒雷』昭和二六年九月号。

(15) 志城柏「一漂泊者の像―加藤楸邨論―」(「俳句」昭和三年(一九五八)三月号。角川書店。)一〇五―一〇七頁より引用。

(16) 加藤楸邨著『寒雷』昭和一四年(一九三九)三月、交蘭社刊。

(17) 加藤楸邨著 旧版『俳句表現の道』昭和十三年(一九三八年)七月、交蘭社刊。

(18) 加藤楸邨著「調べ」に関する研究の一例」(『加藤楸邨初期評論集成』第一巻。平成三年(一九九一年)一〇月、邑書林刊。以下、邑書林刊は略。)一一―一四頁にて確認。「初出」 「馬酔木」昭和六年一〇月号。

(19) 加藤楸邨「新興俳句批判―定型陣より―」(「俳句研究」昭和一〇年(一九三五年)二月号。改造社刊。)一一七頁より引用。

(20) 北村透谷著「俳句」(『透谷全集』第三巻。昭和三〇年(一九五五年)九月、岩波書店刊。以下、岩波書店刊は略。)一一二―一三〇頁より引用。透谷はコーサンド氏の東北伝道の通訳であった。

(21) 注(20)に同じ。「島崎兄」は島崎藤村のこと。

(22) 注(20)に同じ。「三日幻境」は透谷の紀行文。

(23) 注(20)に同じ。関西放浪中の藤村を尋ねて吉野へ登つ星野天知に透谷が托した句。天知は傷心の藤村に奥千本へ登る路傍で出逢い「一夜、二人は山中で激語した」と『透谷全集』第三巻「解題」(執筆・勝本清一郎、六四四―六四五頁)にある。

(24) 注(20)に同じ。但し、透谷の星野天知の句に対する付句。「文學界」明治二十七年(一九一四年)六月号(透谷没後)の天知の「旅寝の露」所収の付句。

(25) 北村透谷著「内部生命論」(『透谷全集』第二巻。昭和三五年(一九六〇)六月刊。)二四六―二四七頁より引用。「初版」昭和二五年一〇月刊。

(26) 加藤楸邨著「主観と客観」(『全集』第五巻。新稿「俳句表現の道」。昭和五六年(一九八一)一〇月刊。)五三頁より引用。「初版」昭和二五年四月、作品社刊。

(27) 注(25)に同じ。但し、二四八頁より引用。

(28) 加藤楸邨著「俳句的眞実」(『加藤楸邨初期評論集成』第一卷。平成三年(一九九一)一〇月刊。)三三六頁より引用。

〔初出〕「文星情報」(未確認)

(29) 注(25)に同じ。

(30) 加藤楸邨著「眞実感合」(『全集』第五卷。発刊年等は注

(26)に同じ。)三五五頁より引用。〔初出〕「寒雷」昭和一

六年八月号。

(31) 注(25)に同じ。但し、二四五頁より引用。

(32) 注(25)に同じ。但し二四八―二四九頁より引用。

(33) 加藤楸邨著「俳句と人間的要請」(『全集』第五卷。発刊

年等は注(26)に同じ。)三八五頁より引用。〔初出〕「俳句

研究」昭和二二年一月号。目黒書店刊。

(34) 注(30)に同じ。但し、三〇三頁より引用。

(35) 加藤楸邨著「俳句への橋」(『全集』第五卷。発刊年等は

注(26)に同じ。)四六五頁より引用。〔初出〕「寒雷」(「自

然とのかかわり」)昭和五四年五月号。

(36) 加藤楸邨著「古利根川のほとり」(『遙かなる声』平成二年(一九九〇)十一月、読売新聞社刊。)一六七頁より引用。

加藤楸邨が正岡子規（一八六七—一九〇二）をどのように把握し、その影響を受けたかを

ぼこぼこ暗渠出てきし茄子の馬

『吹越』

このような楸邨句と子規の作品との対比を背景に探っていく。

（一）楸邨の子規句再吟味

楸邨は昭和一四年に「今の俳句を正当に認識するためにはどうしても、子規の再吟味から始まらなくてはならない」と述べている。それは「俳句表現の日本的性格は子規によって変貌せしめられて、大略その線に沿うて今日に流れて来ているからである。私は子規の再吟味ということがやがて芭蕉の現代作家の目による再認識の第一段階であると信じている」という思いからであった。それは楸邨が『俳句往来—鑑賞俳句史—』に「実際に作句にあたってしていると、今こうして詠んでいる俳句というものが、どういう流れを辿ってきたものであるかということに必ず逢着するはずである。それは自分の歴史的な立場がはっきり自覚されないと、何

第二節 楸邨と正岡子規

—「ぼこぼこ暗渠出てきし茄子の馬」の背景—

はじめに

か徒勞を繰返しているような不安に脅かされる⁽²⁾」からと述べているとおりの思いでもあった。そして「子規の再吟味」として、次のような子規句鑑賞を行っている。

子規の有名な

鶏頭の十四五本もありぬべし

(明治三三年)

この句について楸邨はこう鑑賞する。

これは鶏頭が十四、五本立っているというだけの句ではない。

「ありぬべし」というところを見据えると、一群の鶏頭の心を惹く感じに、きつとあれば十四、五本あるにちがいないと感じている点が中心なのである。鶏頭を見てきた来し方の、いろいろの場合、たとえば一本だけの場合とか、十本ほどの場合とか、あるいは数えきれない場合とか、そんな体験の上立って、「十四五本もありぬべし」と、頃合の一群を肯定している態度なのである。たとえば三十二年には「鶏頭の十本ばかり百姓家」、三十三年には「鶏頭の四五本秋の日和哉」というのがあり(中略)種々の視角からの体験が、こういうところに達しているのだと思う。(中略)私は一つ一つの句

は過去の把握の集積の上に生きてくるものだと考えている⁽³⁾。

また、楸邨は子規の絶筆の次の三句についてこう述べる。

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

(明治三五年)

をとゝひの糸瓜の水も取らざりき

同

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

同

糸瓜は蔓の根元から(中略)糸瓜の水が採れ(中略)痰を切る効能があるといわれている。水を採るには陰曆の八月十五日がよいという。「をとゝひの」はそのところを心に置いて解すべきであろう。この重態にあつて、自分を客観して、「痰のつまりし仏」と言ひ切っているところに、並々ならぬ子規の強靱さが出ているように思う。「をとゝひの」は、淡々たる表現の中に、死に直面して動じない平常心の力強さがあらわれているようで、私の最も惹きつけられる一句である。「痰一斗」には、漢詩的に誇張した表現があるようにいわれるが、それは、むしろ一種の余裕を感じさせる効果をあげている。(中略)この年の糸瓜の句には(中略)「牡丹にも死なず瓜にも糸瓜にも」「病閑に糸瓜の花の落つる昼」「草木

国土悉^し皆^{かい}成^い仏 糸瓜^きさへ仏になるぞ後^ごるゝな」(中略)など
があつて、深く心を寄せていたことが窺^うわれる。なかでも「草
木国土悉皆成仏」とした二句は、夢想の上で、辞世の「仏」
の句と一脈つながるものがあつて、注意を要する⁽⁴⁾

楸^{きゅう}邨^{そん}のこのような子規句の吟味は子規の生活全体を視野に入れ
たもので、その点で他の多くの子規句鑑賞には見られない特色を
持っている。

例えば、「鶏頭の」の一句の成立のためには多くの鶏頭の句が
あつたこと、絶筆の糸瓜の句の背後にも無数の糸瓜への観察があ
り、名句は突然に出現するというよりは、作者の過去のたくさん
の把握の集積の上にあるのだと、具体的に句例をあげて示してい
るところである。

楸邨は鑑賞ということを「自分の中に知らず識らずのうちに生
れてきていた歪みを直すよすがとなる⁽⁵⁾。」と考えて行っている。
楸邨のこうした鑑賞は自身の創作に直結する創造的行為といつて
よいものであるう。

(二) その感興の共通

吉野弘氏は「門外漢の(中略)推測だが、子規の平凡な句を、
のちに俳人が意想を変えて秀句に仕立てたと感じるものはかなり
ある」と述べ「『牛の子や売られて遊ぶ小六月』は、たとえば楸
邨の『雉子の眸^めのかうかうとして売られけり』に、また、『風や
海へ吹かるゝ人の声』は、誓子の『海に出て木枯帰るところなし』
にというふう⁽⁶⁾に。」、また「子規の句には、時代に一足先んじた
ために、はっきりと定着しなかつた変な新しさがあつて、それが
のちの人々に、無数の、感性の種子をまいたと思われる⁽⁷⁾」
吉野氏のいう、楸邨の「雉子の眸^めのかうかうとして売られけり」
が子規の「牛の子や売られて遊ぶ子六月」の「意想を変えて」い
る句、という見解の当否はまず置いてこの視点から句を読み直し
てみると、両者の間には感興の相通ずる作品を数えることができ
る。その中から共通項が二点以上ある例を、子規句の制作年代順
に抽出して比較してみた。子規句は『子規全集』第一巻―第三巻
より⁽⁸⁾、楸邨句は『加藤楸邨全句集』⁽⁹⁾より句と句集名を引く。

①

子規 ふつくりと七面鳥のたつ秋や

明治二四年

楸邨 驚けば秋の鳥なる鳥骨^{うこっけい}鶏

第四句集『雪後の天』

「七面鳥」「鳥骨鶏」という特殊な鳥を素材とし、共に「秋」

を詠む。「七面鳥」が立ったその姿が一瞬「ふつくりと」見えたという子規と、「烏骨鶏」の一種異様な姿に驚き「秋」を感じるという楸邨の興趣は一脈通ずるものがある。山本健吉氏は「烏骨鶏」の奇怪さ、滑稽さに驚いたのであると、楸邨のこの句に「滑稽なものへの一種の愛情が、そこにおのづからにじみ出てゐる」と評している。そのことは子規が「七面鳥」に対して「ふつくりと」表現している言葉からも感じられる。「ふつくりと」の語から、奇怪な「七面鳥」への子規の「一種の愛情」が思われてくるのである。

②

子規 夕立や橋の下なる笑ひ聲 明治二五年

楸邨 マンホールの底より声す秋の暮 第八句集『山脈』

両方とも「橋の下」と「マンホール」という足下からの「声」「声」に注目した句である。

③

松嶋一見せんとして上野の瀛車にのりて

子規 みちのくへ涼みに行くや下駄はいて 明治二六年

楸邨 心ふと下駄を履きたく夕焼けぬ 句文集『沙漠の鶴』

「下駄」という同素材、「涼み」「夕焼け」は共に夏の季語である。子規は松島への旅立ち、楸邨は掲句を旅先の上海で詠んだ旅の句である。素材、季語、旅情が共通している。

④

子規 曲り／＼突きあたる家の^{あさがお}薺 ぞ 明治二七年

楸邨 冬嶺に縋りあきらめざる径曲り曲る 『山脈』

「曲り／＼」と「曲り曲る」の繰り返しの語を双方とも、径について使用している。子規は他にも「畦道の曲り／＼や蓼の花」「池上松葉館 廻廊の曲り／＼の芭蕉哉」など好んでこの「曲り／＼」の語を使っている。楸邨は第八句集『山脈』の表紙の全面に「冬嶺に縋りあきらめざる径」のこの句を墨書して、掲句への愛着を示している。異なるのは子規の「曲り／＼」は口ずさみや、楸邨の「曲り曲る」はごつごつと口調が重いことであろう。

⑤

子規 萬歳の踊りかけたり町はづれ 明治二八年

楸邨 チンドン屋枯野といへど足をどる 『山脈』

「萬歳」と「チンドン屋」という大道で賑やかに人目を引く芸人が共に句材である。「踊り」と「足をどる」の語も相通ずる。

またその仕草が「町はづれ」「枯野」という人気のない場所で表れた様子を詠んでいる。子規と楸邨の間に人間のうちにひそむ、哀しいおかしみを発見する視点があるといえよう。

⑥

金州

子規 戦ひのあとに少き燕哉

明治二八年

楸邨 み仏に燕に戦いつやまむ

『沙漠の鶴』

「戦ひ」「戦」の語、「燕」の季語も同じである。子規は掲句を日清戦争に従軍中の中国大陸で、楸邨は太平洋戦争中の中国の大同の石窟でこの句を詠むという点も同じである。子規は燕が少ないという現実のみを、楸邨は「み仏」や「いつやまむ」という願いを詠んでいる。

⑦

子規 冲膾潑刺として口の中

明治二八年

楸邨 葱切つて潑刺たる香悪の中 第九句集『まぼろしの鹿』

「冲膾」と「葱切つて」という料理の共通性、「潑刺として」

「潑刺たる」という語の一致、「口の中」「悪の中」の「中」の

結語の位置も同じである。「冲膾」は夏の季語で子規は南国松山

の出身、「葱」は冬の季語で楸邨は東北で少年時代を送ったというその「潑刺」の背景の違いも見えてくる。

⑧

子規 くるり／＼と丸木の舟の雪もなし

明治二八年

楸邨 交る蜥蜴くるりくるりと音もなし 第七句集『起伏』

「くるり／＼」「くるりくるり」と音もなし、結語の「……もなし」は同語、同位置の両句である。しかし子規句の「くるり／＼」には歌うような屈託のなさがある。楸邨句には生命の繰り返しの無音の時の重さを感じられてくる。楸邨には「炎天やくるりくるりと跳鬼ちやむの舞」（『沙漠の鶴』）という中国大陸紀行中の句もある。

⑨

子規 風引く肌寒頃の臍の穴

明治二八年

楸邨 髪膚みなさむし臍のみぬくぬくと 『まぼろしの鹿』

「肌寒」と「髪膚みなさむし」という皮膚感覚を通しての寒さ、「臍の穴」「臍のみ」の「臍」の語が通じあう。

⑩

子規 土ともに崩るゝ崖の霜柱

明治二八年

楸邨 崖の霜がさりとうごき茂吉病む 第六句集『野哭』

「崖の霜」の共通、「崩るゝ」と「がさりとうごき」という崖の霜が剥がれていくところに両者の目が注がれている点が同じである。子規には掲句の前に「中野逍遙を弔う 世の中を恨みつくして土の霜」という句があり、楸邨には掲句の後に「死や霜の六尺の土あれば足る」の句がある。「土」や「霜」への両者の共通の感受が窺える。

⑪

子規 ごぼ／＼と海鳴る音や五月闇 明治二九年

楸邨 原爆日ごぼりごぼりと泉の穂 『まぼろしの鹿』

「ごぼ／＼」「ごぼりごぼり」の擬態語、「海」と「泉」の水の景が共通である。子規句は「陰曆五月五日三陸に大海嘯あり」に関連して詠んだもの、楸邨句は「原爆日」を悼んだもの、ともに不安な心境が通底している。擬態語に関しては子規句の「ごぼ／＼」より、楸邨句の「ごぼりごぼり」の方に不気味さを感じる。

⑫

子規 洪水や下駄も真桑もほか／＼と 明治二九年

楸邨 ぽこぽここと暗渠出てきし茄子の馬 第一〇句集『吹越』

「洪水」「暗渠」の水のイメージ、「真桑」と「茄子」の丸い実の近似、「ほか／＼」「ぽこぽこ」の音韻上の似通い、漂うユーモアの感覚が共通である。子規には他に「冷瓜浪のかしらにはほかん／＼」、「馬ほく／＼吹くともなしに春の風」という句もある。楸邨の中期以降の作品にはユーモアの漂う作品が現れてくるが、とくにこの後期句集『吹越』の「ぽこぽここと」の句にはそれが表れていると思う。

⑬

子規 仰向に我臍見せん女七夕 明治二九年

楸邨 月明りさしゐる臍は見飽かぬかな 『起伏』

「女七夕」は織女星のことで「月明り」、共に天空のこと、子規は「臍見せん」、楸邨は「臍は見飽かぬ」と二句とも夜空との対照として「臍」を詠んだものである。

⑭

子規 鮫鱈の口あけて居る霰かな 明治三五年

楸邨 口あけて鮫鱈の真似はたのしけれ 『まぼろしの鹿』

「鮫鱈」と「口あけて」が同じ、共通しているのはその諧謔的な詠み方と思う。この年に子規は鮫鱈一〇句を詠んでおり掲句は

その五句目である。楸邨にも代表作である「鮫鯨の骨まで凍てぶちきらる」（『起伏』）をはじめとし、後期の第九句集『まぼろしの鹿』には「鮫鯨の髭もて持たれ値ぎらるる」「鮫鯨の凍て解けつと滑り出す」「友の顔少し凍てけるこの鮫鯨」「みつめんには鮫鯨の顎短すぎる」の句がある。更に後期の第一〇、第一句集の『吹越』『怒濤』にも、それぞれ「腹の底に入りし鮫鯨髭ふりぬ」、「鮫鯨を見つつわが顎撫でてをり」があり、どれもおどけや洒落や滑稽、ユーモアのある諧謔的な傾向の句である。

楸邨のこの「諧謔調」について山本健吉氏は「これは楸邨の人間味がいつそう豊かに、陰翳深く浮彫されてくるやうになったもの⁽¹⁰⁾。」という。「諧謔調」には楸邨の「人間味がいつそう豊かに、陰翳深く」示されているという見方には同意できる。楸邨は戦中に軍の斡旋を得て中国大陸へ俳句を作りに出かけたことなどが戦後、戦争協力であったと見なされて批判にさらされたのち、病臥に至った。楸邨にこれらの「鮫鯨」の句のような「諧謔調」の作品が増えたのはそのようなことを経験してからであった。

⑮

子規 朧灯ヲ見ナガラ歩行ク疲レ足
楸邨 朧にて昨日の前を歩きをり

明治三五年

『怒濤』

掲句は最晩年の子規が「朧十七句」に取り組んだ一句である。楸邨の掲句も最晩年に「朧」を四〇句詠んだもの一つである。「歩行ク」「歩き」の語の使用にも相似を見る。子規の「朧十七句」の最後は「遠クトモ近クトモ見エテ灯朧」という句で、楸邨の「朧にて昨日の前」の幻想的な句境に通う句である。このように両者の句を対比して見ると両者の作品の共通性は次のようにまとめられる。（傍線は稿者）

1、奇怪な生き物への愛情の句

① 「ふつくりと七面鳥のたつ秋や」（子規）「驚けば秋の鳥なる烏骨鶏」（楸邨）

② 「鮫鯨の口あけて居る霰かな」（子規）「口あけて鮫鯨の真似はたのしけれ」（楸邨）

2、旅情の句

③ 「みちのくへ涼みに行くや下駄はいて」（子規）「心ふと下駄を履きたく夕焼けぬ」（楸邨）

④ 「戦ひのあとに少なき燕哉」（子規）「み仏に燕に戦いつやまむ」（楸邨）。

3、ユーモアの漂う句

⑤ 「夕立や橋の下なる笑ひ聲」（子規）「マンホールの底より

声す秋の暮れ」(楸邨)

④ 「萬歳の踊りかけたり町はづれ」(子規) 「チンドン屋枯野といへど足をどる」(楸邨)

⑨ 「風引く肌寒頃の臍の穴」(子規) 「髪膚みなさむし臍のみぬくぬくと」(楸邨)

⑫ 「洪水や下駄も真桑もほか／＼と」(子規) 「ぽこぽこと暗渠出てきし茄子の馬」(楸邨)

⑬ 「仰向に我臍見せん女七夕」(子規) 「月明りさしゐる臍は見飽かぬかな」(楸邨)

4、言葉の幹旋に親近性を持つ句

④ 「曲り／＼突きあたる家の葬ぞ」(子規) 「冬嶺に縋りあきらめざる径曲り曲る」(楸邨)

⑦ 「沖膾潑刺として口の中」(子規) 「葱切つて潑刺たる香悪の中」(楸邨)

⑧ 「くるり／＼と丸木の舟の雪もなし」(子規) 「交る蜥蜴くるりくるりと音もなし」(楸邨)

⑩ 「土ともに崩るゝ崖の霜柱」(子規) 「崖の霜がさりとうゝき茂吉病む」(楸邨)

⑪ 「こぼ／＼と海鳴る音や五月闇」(子規) 「原爆日こぼりこぼりと泉の穂」(楸邨)

⑮ 「臙灯ヲ見ナガラ歩行ク疲レ足」(子規) 「臙にて昨日の前を歩きをり」(楸邨)

正岡子規は加藤楸邨にとって俳句の上でも時代的な意味でも先人であることは間違いない。両者の比較の句例からいうと「3、ユーモアの漂う句」と「4、言葉の幹旋に親近性を持つ句」の数が多し。先人の影響を受けるということに関して楸邨は子規句と芭蕉句との比較をして「子規は古句に対して始めて始めは芭蕉に傾倒していたことが、二十六年の「はてしらずの記」などを読むと実にほほえましいくらいはつきりと出ているのである。この奥羽旅行中の句を見ると次のような類似が見られる⁽¹⁾」として、次の一二の例をあげている。その中から一部を引いてみる。

芭蕉 神垣やかかるところに涅槃像

子規 ずしきや神と仏の隣同志

芭蕉 寺に寝てまこと顔なる月見かな

子規 寺に寝る身の尊さよ涼しさよ

芭蕉 死にもせぬ旅寝の果や秋の暮

子規 人くづの身は死にもせで夏寒し

芭蕉 むざんやな甲の下のきりぎりす

子規 箴ふせておけば昼鳴くきりぎりす

また子規の

馬ほく／＼吹くともなしの春の風

明治二四年

この句をあげて楸邨は子規が「この年あたりから『俳句分類』に着手しているが、芭蕉の句が外から作句に影がさしているようである。この句も「馬ほく／＼我を絵に見る夏野かな」の口調がひびいているようである」として「いずれも、初期に先人の影響を受ける場合の例に洩れず、外から、主として口調・措辞の上でひびいてきている性質のものである⁽¹²⁾」と述べている。

この楸邨の言を考慮に入れて楸邨句と子規句の比較を振り返ってみると、「4、言葉の幹旋に親近性を持つ句」とした楸邨の作品は「口調・措辞の上」での、外形としての相似に過ぎず、真の意味において子規句の影響を受けた楸邨句は「3、ユーモアの漂う句」にあるのだと考えられてくる。

そこで気づくのは「3、ユーモアの漂う句」の②「マンホール
の……」（『山脈』）、⑤「チンドン屋……」（『山脈』）、⑨
「髪膚みな……」（『まぼろしの鹿』）、⑫「ぼこぼこ……」

（『吹越』）、⑬「月明り……」（『起伏』）のこれらはすべて戦後楸邨が肋膜炎による病臥（昭和二三年から二七年）を体験した以降の作品ということである。

楸邨はこの四年間の病床生活の体験をし、闘病しつつ文学革新の運動を続けた子規をその体験から理解することができたのである。そして中期の第七句集『起伏』、第八句集『山脈』、また後期の第九句集『まぼろしの鹿』、第一〇句集『吹越』に、子規の真の影響を受けたユーモア漂う秀句が収録されることになったと思う。

おわりに

本稿の「（一）楸邨の子規への関心と子規句鑑賞」の最初に、楸邨が「私は子規の再吟味ということがやがて芭蕉の現代作家の目による再認識の第一段階であると信じている」といっていることを引いた。俳句史の流れを自覚しないで俳句を作っていると「徒勞を繰返しているような不安に脅かされる」から、だとも楸邨は述べていた。

「子規の再吟味」は楸邨が「俳句鑑賞史」として昭和三二年二月号から三四年七月号にかけて「國文学―解釈と鑑賞」誌に連載

して追究したものである。

次に楸邨は「芭蕉の現代作家の目による再認識」というべき研究成果を昭和五〇年に『芭蕉全句¹⁾』として発刊した。楸邨の後期作品

ぼこぼこ暗渠出てきし茄子の馬

『吹越』

には子規の

洪水や下駄も真桑もほか／＼と

冷瓜浪のかしらにほかん／＼

そして

馬ほく／＼吹くともなしに春の風

この句の影響が考えられることを私見として述べた。そしてこの子規の「馬ほく／＼」の句には芭蕉の

馬ほく／＼我を絵に見る夏野かな

この句がひびいていることは楸邨が指摘していた。こうして楸邨の「ぼこぼこ」のこの句の上に芭蕉や子規という先人たちの影響が重なりあっていることが認められる。楸邨の子規の再吟味、芭蕉への再認識というものがこの一句に表れているとも言えるのである。楸邨が子規句鑑賞の際に述べていた「一つ一つの句は過去の把握の集積の上に生きてくるものだ」という言葉が符合してくる「ぼこぼこ」の一句の生成であった。

「(二)その感興の共通」に吉野氏の「子規の平凡な句を、のちの俳人が意想を変えて秀句に仕立てた」という指摘を引いた。子規の「牛の子や売られて遊ぶ小六月」と「雉子の眸のかうかうとして売られけり」の間には楸邨の多くの経験と努力の跡が認められる。先人の作品の「意想を変えて秀句に仕立て」ることもそう簡単なことではないといえよう。しかし、子規が「のちの人々に、無数の、感性の種をまいた」ということは吉野氏のいわれる通りである。もし子規の俳句革新の運動がなかったら今日の俳句の隆盛は見られなかったであろうからである。楸邨は子規の革新運動について

俳句の世界だけに限ってみても、あの月並派が氾濫していた

時代に出ているが、その中に文学の根本的な要請を徹底して追求した態度は（中略）結局芭蕉の再発見となり、蕪村の近代的発見となる⁽¹⁴⁾。

と述べている。そして子規の一步一步刻苦して進むという「できあがったものに倚存してしまわず、徹底して自分の足で歩いてみる」という「その事の故に私は子規にかぎりなく惹きつけられている^(同前)」と述べ子規への親愛を示している。

正岡子規の俳句革新運動の中から生み出されたその作品や芭蕉の再発見という句業は、加藤楸邨の俳句に少なからぬ影響を及ぼしているのは確かなことである。

〈注〉

(1) 加藤楸邨著「『明治俳句史論』と『土の饗宴』」（『加藤楸邨初期評論集成』第三卷。平成四年（一九九二）二月、邑書林刊。）二二六頁より引用。「初出」「新潮」（「俳壇展望」欄）昭和一四年一〇月号。

(2) 加藤楸邨著『俳句往来—鑑賞俳句史—』（昭和六三年（一九八八）三月、求龍堂刊。）七頁より引用。この『俳句往来』は昭和三二年二月から三四年七月にかけて『國文學—解釈と

鑑賞—』（至文堂刊。）に連載した「鑑賞俳句史（近代の部

(1) — (22)」を中心にまとめたもの。

(3) 注(2)に同じ。但し、八九—九〇頁より引用。

(4) 注(2)に同じ。但し、九八—九九頁より引用。

(5) 注(2)に同じ。但し、八頁より引用。

(6) 吉野弘「いくつかの好ましい句」（『子規全集』第三卷『月

報22』。昭和五二年（一九七七）十一月、講談社刊。）八頁

より引用。

(7) 正岡子規著『子規全集』第一卷—第三卷。昭和五〇年（一九七五）二月—昭和五二年（一九七七）十一月、講談社刊。

(8) 『加藤楸邨全句集』平成二二年（二〇一〇）一〇月、寒雷俳句会刊。

(9) 山本健吉著「加藤楸邨」（『現代俳句』下巻。昭和三〇年（一九五五）四月、角川書店刊。）二〇一頁より引用。

(10) 注(9)に同じ。但し、二一一—二一二頁より引用。

(11) 注(2)と同じ。但し、六三—六四頁より引用。

(12) 注(2)に同じ。但し四〇頁より引用。

(13) 加藤楸邨著『芭蕉全句』上巻。昭和四四年(一九六九)三月、筑摩書房刊。下巻。昭和五〇年(一九七五)三月、筑摩書房刊。

(14) 加藤楸邨「子規の訝」(「寒雷」)、「人間雑記」218)

昭 和五九年(一九八四)一二月号。

第三節 楸邨における幻想的作品の解釈

―「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の句意―

はじめに

加藤楸邨の後期の句集『怒濤⁽¹⁾』は七一歳から八一歳までの一年間の作品を楸邨自身が「句の配列にまで気を配⁽²⁾」って自選した生前最後の句集である。楸邨の最終的な俳句観が表れた重要な句集と思われるのだが、この句集について論じられることは少ない。ことに集中の句

ふくろふに真紅の手毬つかれをり

楸邨

は発表当時から注目を集めた作品であったが、その評価は分かれ句解も一定していない。そこでこの楸邨歳晩年の『怒濤』中の、賛否両論に分かれた「ふくろふに」の句の解釈について、先行の解釈を検討した上で私見を述べる。

(一) 先行解釈の検討

例えば①大岡信氏は「これは分かるかといえれば分からない句だね。けどぼくは、楸邨の持つているある種の幻想的なものへの好みがある、この句の中に出ていると見たい」「フクロウが真紅の手毬についている情景、それは無条件に承認する立場」「あ、楸邨は面白いことをやった」フクロウの「運命を見つめているような眼(中略)そういうものに楸邨は真紅の手毬になってつかれてる」という解釈をする人が出てきても、ちっともおかしくはない」という⁽³⁾。

これに対して②川崎展宏氏は「一貫してただかない立場」「『真紅の手毬』とは何かって思わざるを得ないから、例えば心臓を思い描いたりしてみたけれど(中略)腑に落ちてこない」「はるかに『天の川わたるお多福豆一列』のほうが好き」という⁽⁴⁾。また掲句中の「どこかに死の影も感じられ」て、そうした「パツシブなものでなければ、『つかれ』の『れ』が生きない」と発言⁽⁵⁾している。

③飯田龍太氏は楸邨は「磊^{らい}塊^{かい}を胸の中にしっかりと蔵しているひとだ。そして酒のかわりに、磊塊に詩心をそそいで俳句を

生み出すように見える⁽⁶⁾」と述べ、「昭和五十九年十一月発表の作品であるから、すでに若干の歳月を経たが、私にはいまもつて初見の折の強烈な印象が消えない。(中略)なんとも不思議な作品だが、これぞまさしく磊塊の化身にちがいないというのが目下の結論である。(中略)事実、この句が発表されたとき、多くの俳人が注目し、賛否両論に分かれたように見受けられた。安東次男氏などは不賛成の側であったようであるが、賛否いずれの側からも句解はなかつたように思う。／そこで私の見解だがこの手毬は、冬の落日をとらえたものと即断した。冬というのは、もとより鼻の季別から来たものであるが、地平に春^{うすづ}く冬の落日が脳裏にあつて、夜闇に聞きとめた不気味な鼻のこえと重層して生まれた作品ではないかと。それを『つかれをり』と進行形にしたところがどうやら磊塊のなせるわざのように思われる」と記している。(文中の斜線は改行箇所。)⁽⁷⁾「磊塊」は『大漢和辞典』に「一、石のかたまり(陸遊、蔬圃詩)剪關荆榛盡、鉏犁磊塊無。二、胸中の平かでない喩。壘塊。(世説新語、任誕)阮籍胸中磊塊、故須レ酒澆レ之。」とあるが、「酒のかわりに、磊塊に詩心をそそいで」(飯田)という言葉があるので、論中の「磊塊」はここでは「二、胸中の平らかでない喩」の意に当てはめられよう。

④矢島渚男氏は、この「真紅の手毬」が心臓と考えられたり、

地平線に沈む太陽とされたりするのは「ふくろふに」の「に」の用法が微妙なせいであろう、と述べ「この『に』は切字『や』を軽くしたものと考え、フクロウは背景であり、フクロウの鳴いている中で、その聞こえる屋内で、とするのが自然だ」「遠い記憶、あるいははるかなものへの思いの中で真紅の手毬はいつまでも弾みつづける⁽⁸⁾」と解している。

鈴木太郎氏は先行論として川崎、飯田、大岡の三氏の説に⑤「楸邨の年齢からくる豊かさから浮かんだ幻想」(森澄雄「寒雷」昭26・2)

・4)、⑥「中味はない句だと思えますね。取合わせだもの」(安東次男「寒雷」昭26・4)という二氏の論を加えて紹介し、⑦鈴木

木氏の自説として「『つかれをり』の表現から、昭和九年⁽⁹⁾に病死した次女明子が、ほとんどふいに胸を突くような形でやってきたともいえる。暗闇の中に鳴く鼻の声と、思いの凝った形である真紅の手毬の対比は、楸邨が晩年に思い描いた夭折した娘への切ない思いであったかも知れない」と述べている⁽¹⁰⁾。

⑧中島鬼谷氏は「幻想世界で鼻と一緒に遊び、楸邨の手渡した手毬が、いま鼻によってつかれている」「数年後に、楸邨は(鼻となり天の川わたりけり)という句で、鼻そのものになる」と述

べ掲句は「その前段の境地」という⁽¹¹⁾。

以上の先行研究を整理してみる。掲句を承認する立場としては①「フクロウが深紅の手毬をついている情景」が「面白い」(大岡)、③「磊塊の化身」の作としての「強烈な印象」(飯田)、④「はるかなものへの思いの中」の「手毬」(矢島)、⑤「年齢からくる豊かさから」の「幻想」(森)、⑦「夭折した娘への」思いの凝った形である真紅の手毬」(鈴木)、⑧「幻想世界で」楸邨の手渡した手毬」が「鼻によってつかれ」楸邨が「鼻そのものになる」「その前段の境地」(中島)、という句解があげられる。不承認としては②「手毬」を「心臓」と思っても「腑に落ちない」同時期の他句のほう「はるかに」「好き」(川崎)、⑥「中味はない」「取合わせ」(安東)という立場に分けることができよう。

(二) 幻想の発端

「ふくろふに」の句は楸邨の中の①「幻想的なものへの好み」(大岡)が表れた作品、⑤「年齢からくる豊かさから」の「幻想」(森)の句、⑧「幻想世界」(中島)の中で詠まれたという見方がなされている。楸邨の幻想的なものへの嗜好を作品の上で検討

していくと「雪ゆきはしら柱」という随筆にその端緒を見ることができ
る。楸邨は十代の終わり頃、金沢市郊外松まつと任とうの小学校で代
用教員として働いていて、「雪柱(12)」はその受持の射水いみずとい
う少女の思い出を書いたものである。題名の「雪柱」は雪原に舞
い上がった粉雪が柱のように立って走る現象をさす。風邪で休ん
でいた少女が登校して作文の朗読をするが、体調が優れず早退す
る。夜、宿直室にいる楸邨の耳に「雪が唯々頭の上に降っていた」
と少女が作文を読む声が聞こえ、教室に近づいて見ると窓際の少
女の机にしろじろと雪が積もり窓ガラスの破れ目から月光がさし
ていた。その頃少女は家で「雪が：雪が：」と讒言を言って亡く
なっていた。疲れて眠気を感じながら夜の雪原を歩く楸邨の耳に、
悲鳴のような雪柱の駆けてくる音がする。

その柱は真白に私の方へ向いて走るのであった。(中略)直
に雪柱は私とすれちがった。その時である。私は一つの声を
聞いたと思った。いな、たしかに聞いたのである。／「雪が
：：雪が：：」／はっとした私の目に、月光にかがやいた真
白な衣がはためいた。雪柱は崩れ伏した。／昭和十七年八月
三日(中略)二十年ぶりで松任を訪うた。(中略)射水の家
を訪ねてみたがすでに行方も知れぬまでに古いことになっ

た。(中略)あの頃の、あの不思議な夢のかけらはもうどこ
にも見あたらぬ。／然し、私はなお呟いた。／「雪が降った
ら：：、雪柱が立ったら：：」／何もかも瓜まで小さく夢失
せき／昨日わが夢のかけらの小向日葵

そこにいない少女が作文を読む声が聞こえ、二十年前に亡くな
った少女の作文を楸邨は「なお呟い」ている。「瓜まで小さく」
の「瓜」や「夢のかけらの小向日葵」の「小向日葵」は亡くなっ
た少女をさしているであろう。「ふくろふに」の句について②「ど
こかに死の影も感じられ」(川崎)という見解と同じように、楸
邨の中では若い頃から「死」と幻想とが結びつくと考えられた。
後年にも楸邨は

私は目を開いていても、物も見えていない感じのときがある。
目をつぶってもいろいろのもののはつきりと往来するときが
ある。自分だけの時間というものは、こんなものか、こんな
しずかなものか、こんなに自由なものかといった気がするの
である(13)。

と自身の幻想を肯定している。①「分からない句」(大岡)、③

「何とも不思議な作品」（飯田）という先行論も掲句の中の楸邨の幻想的なものへの傾きを認めたものといえる。

(三) 経験その儘を詠む

次にその幻想と句作品とが楸邨の中でどのような関係にあるのかを考察する。「雪柱」には現実としての夢も記されている。宿直の晩に楸邨は同僚の先生と本を読む⁽¹⁴⁾。

一緒に『善の研究』を読み進めるのであった。四高に入るつもりで勉強していたのだが、父の病臥でその夢も消えてしまっていた。(中略) 代用教員をしながら私は何とか心をたてなおし、消えた夢のかわりに新しい夢を打ち樹てようとしていたのである。『善の研究』は私にそういう心の張をつけてくれる唯一のものであった。

楸邨は父のすすめで小学校にあがる頃からキリスト教の教会に通い、岩手県一関中学二年の時に、プロテスタントの洗礼を受けた。金沢一中を卒業する頃にはもう教会に通うことはなかった。楸邨であるが、楸邨一家が一関教会から転じた石川県の金沢教

会には『善の研究』の著者西田幾多郎と関わり深い教会であった。西田は明治三三年に金沢第四高等学校の第一学科(倫理・哲学など)の教授で、学生の人格形成のために発足した「三々塾」の主たる指導者であった。金沢教会の第五代の牧師はしばしばこの「三々塾」において西田と同席し、西田も宗教哲学からキリスト教に深い関心を持ち、神秘主義の本を読んだりしている。『善の研究』は四高の講義録をもとに著された本であり、四高への進学を熱望していた楸邨がこの本を読み解こうとするのは自然なことであった。楸邨は『善の研究』を読む中で

ぶつかったのが「純粹経験」ということばであった。(中略) とにかく今の私の中に生きつづけている作句にあたっての物の観方のはじめは、その本がきっかけであったようである。⁽¹⁵⁾

という。西田はその思想の根柢である「純粹経験」について、「純粹」といふのは、普通に経験といつて居る者も其実は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態をいふのである。⁽¹⁶⁾」と記している。(原文の旧漢字は現行のものに置換。) 青年の頃「心の張をつけてくれる唯一のもの」

として読んだ『善の研究』中の「毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態」、「純粹経験」という言葉は楸邨にとって、「今の私の中に生きつづけている作句にあたっての物の観方のはじめ」であった。自分の目に映り、耳に聞こえること、感じられたことを、分別を加えずそのまま俳句に詠もうという楸邨の俳句観の「はじめ」に『善の研究』があったというのである。楸邨は『善の研究』の中の言葉を「極めて自己流の受けとり方だった」としながらも、この書を読んだことが「これから後の私の内からものを生み出す推進力になったことはまちがいない⁽¹⁷⁾」と述べている。こうした取り組みの延長上に「ふくろふに」の句は生まれたと考える。従ってただ⑤「年齢からくる豊かさから浮かんだ幻想」（森）を詠んだという作品ではなく「純粹経験」、「経験その儘」を詠もうと積極的に幻想を作品化してきた結果の句と考える。

(四) 受身の形

ふくろふに真紅の手毬つかれをり

『怒濤』

この句の「つかれをり」という受身の形、受動態という②「パツ

シブな」（川崎）側面を追究してみる。「れ」に注目して受身形の楸邨句を抽出する。以下、句と句集名等は『加藤楸邨全句集⁽¹⁸⁾』より引く。

蟻殺すわれを三人の子に見られぬ

『寒^{かん}雷^{らい}』

岩波書店にて

菊の前行き来のさむさ人に見られ

『颱^{たい}風^{ふう}眼^{がん}』

金足らぬとき蝸に鳴かれたり

同

人は来ず炎天の影踏まれ踏まれ

『穂高』

転校の子に泣かれある雪の中

『雪^{せつ}後^ごの天^{てん}』

燕の子仰いで子等に瘦せられぬ

『野^や哭^く』

「見られぬ」「泣かれある」「瘦せられぬ」は自身と子を詠んだものである。例えば「転校の子」は昭和一六年二月に東京の坂下町から下代田に転居した際の作品で、父である楸邨が我が子に雪の中で泣かれているのである。「人に見られ」「鳴かれ」「踏まれ踏まれ」たりしているのはどれも或る時の楸邨自身の経験である。「れ」が使われた受身の句は作者自身かその子が詠まれた場合が多い。次に、掲句のように鳥や或いは動物を受身形で詠んだ句を引いてみる。

動物園

梟の憤りし貌ぞ観られぬ

青蜥蜴昂り視たる目に見られぬ

天の川鷹は飼はれて眠りをり

雉子の眸めのかうかうとして売られけり

鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる

狐を見てゐていつか狐に見られてをり

『寒雷』

『颱風眼』

『沙漠の鶴』

『野哭やこく』

『起伏』

『山脈やまなみ』

この「梟」の句について楸邨は

動物園にゆくたびに、梟の檻の前に佇んだのは、あるいは、自分の分身を見ているような気になったからではなからうかと思う。梟を観る顔もまた、何かに観られているという気持ち、その後、私の中から拭いさることができなかつた⁽¹⁹⁾。

という。「梟」を「自分の分身」と見ているのである。「青蜥蜴」は昂ぶって視ている自分がいつかその「青蜥蜴」に見られていたという対象と自分とが接近し反転した句である。「狐見てゐて」も同系統の作品で、作者と対象とが不可分の存在となる句である。

「鷹」の句についての楸邨の自句自註⁽²⁰⁾を引く。

昼は寂として動かぬ姿であるが、夜になるとはげしく鳴く。野生がこの天の川の下で呼びさまされるのであらう。私は日常のいとなみの中に封鎖されてゐる人間の気持にも、かういふものがあることを感じてゐる。時あつて世俗の絆を断つて、存分に叫びだしたいものがあるのである。

はげしく鳴く「鷹」に「人間の気持にも、かういふものがある」という自解である。「雉子」の句について山本健吉氏はその眸めの「輝きに満腔の恨みを感じ取った作者の強い主観に嘘はないはずである。『かうかうとして売られけり』は、裏をかえせば作者の憤りの情がこめられているはずである⁽²¹⁾。」と解説している。

また「この時代、楸邨が、いわれなき戦争責任の追及の矢面に立たされていたことを思うと、この雉子は、楸邨そのものにも思えてくる⁽²²⁾。」(石寒太)という解もある。両者とも楸邨は句中の生き物に自身を投影することがあるというのである。「鮫鱧」の句にもその傾向がある。田川飛旅子氏は「案外、鮫鱧の中に自分を入れ込んで、ぶちきられる処を空想しているような節もある。『ぶちきらる』という受身のぶつきらばうな表現の中に、ふとそ

う感じさせるものがあると思う⁽²³⁾」と述べる。
中村稔氏はこの「鮫鯨」の句と

あきらめて鯨のごとくに横たはる

『起伏』

木の葉ふりやまざいそぐないそぐなよ

同

の作品をあげ「楸邨はただ凝視しているのではない。鮫鯨と、鯨と、さらにまた木の葉と、一体化している。生の無残、無常を、非情な歩行者の眼でわが身にうけとめているのである⁽²⁴⁾」という。受身形で詠まれた生き物はその時々、楸邨と切り離せない存在と考えられてくる。掲句の「ふくろふ」も半ば実際の鼻であり半ば意識の上の楸邨といえるのではなからうか。

(五) 真紅の手毬

昭和八年八月八日、二八歳の楸邨は幼子を急病で亡くし、そのことを短歌四首に詠んでいる⁽²⁵⁾。

次女明子二歳にて死す

吾子が名をかなしみ呼べり短夜の障子白みて堪へがてなくに

鼓動のただにかそけくなりゆくにいまは堪へかねて頼よせに
けり

消毒剤のほひのこれる室にをれば妻もひそかに来て坐りた
り

ひとの親のかなしみごととも知りにけりうつつに萩のこぼる
は見つ

「うつつに萩のこぼるるは見つ」の措辞は、その早世の子を詠んだ次の最初の句の背景に重なる。

明子二歳なりしが俄に病みて死す

荔^{れい}枝^{いし}熟れ萩咲き時は過ぎゆくも

『寒雷』

明子死す 二句

末^{うらがれ}枯^{かれ}に乗りて小さきは吾子^{あこぼ}菩薩^{さつ}

『穂高』

虫鳴くや大いなる手にすがらまく

同

亡児明子

夏帽の笑顔臉にありて亡き

同

雪夜の門夢のごとくに亡き子あそぶ

『山脈』

初鶏のはるかなひとつ亡き子あそぶ

『まぼろしの鹿』

今は亡き子よ嘯めば数の子音のして

同

柳田国男先生逝く、この日また次女明子の日

青箸や乏しけれども庭芒

同

西瓜割る亡き児いつでも駈けてをり

同

笹鳴に亡き子は遠くぬかりき

『吹越』

ふゆかげるふのひとまばたきに亡き子をり

『雪起し』

幼くして喪ひし次女

わが下駄を履きたがりし子かうもり 蝠とぶ 句集未収録

句(26)

吾子の忌や立ちて稚なき雲の峰

『望岳』

昭和八年から没年近くまで楸邨は「亡き子」を詠んでいる。作品は忌日の頃と「雪夜」「笹鳴」「ふゆかげるふ」の冬の句、「初鶏」や「数の子」という新年の季語の句であるが、この「亡き子」が一月一日生まれであったのを考えると「ふくろふに」の句は、冬の季題の「臯」にかかわるより「手毬つく」の新年の季の句として読んだ方がいいように思う。その意味で「ふくろふに」の句は⑦「病死した次女明子が、ほとんどふいに胸を突くような形でやってきた」「夭折した娘への切ない思い」（鈴木）という見解に賛成である。①「フクロウが真紅の手毬をついでいる情景」（大岡）の方が面白いし、そうであってもよいのだが「手毬」をつい

ているのはこの愛嬢の佛とするのが自然ではなからうか。「手毬」を②「心臓」（川崎）や③「冬の落日」（飯田）と読み換える必要もなくなる。今も幻想の中で亡き子に毬をつかれていると考えたと③「『つかれをり』と進行形にした」（飯田）理由も頷ける。「ふくろふ」と「手毬」との単なる⑥「取合わせ」（安東）の句というのでもなくなる。また

外套の腕振り戻る吾子のため

『穂高』

子がよろこぶ父の体操露の瑠璃

同

子の前に冬シャツ脱ぐとおどけをり

『野哭』

という楸邨が「吾子のため」に「ふくろふ」の真似をして「おどけ」たりするのは考えられないことではない。

手毬の「真紅」については、掲句発表の三年程前に書かれた楸邨の「徐々に私の目が『赤』に惹きつけられてゆく(27)」とい

う文を土台に推考してみる。この文は少年の頃から短歌に親しんできた楸邨が斉藤茂吉に書いてもらった「あかあかと一本の道とほりたりたまきはるわが命なりけり」の色紙の思い出と、青木米の描いた涅槃図中の釈迦が赤い衣を纏っていることに触れ

「死」という絶対のかなしみを通して、いつかなげきかなし

む衆生を雲中の仏の世界に導いてゆくような感じに誘いこまれる。「死」と共にある「赤」というものの奇妙さに、私はいつも打たれざるを得ないのだ。／弥生式土器の持っている生まれくるものの讃歌ともいうべき素樸な「赤」の存在と、この木米の涅槃図の死と共にある「赤」の存在とは、もの始めと終りの、不思議な在り方を示すものとして、心を惹かれざるをえない（中略）私は何か心中に動いてはつきりとかみきれないときは、目をつぶってみる。そうすると渾沌たる中に一脈の赤い火の色を感じることがある。これは何であるかということ、はつきりということがむつかしい。しかし、私の中にひそみ、うずき、生まれてこようとする何かであることは確かである。こうしたものの色が一つの「赤」であることは、私の意識の底にかくれているものを暗示している⁽²⁷⁾。

と、生死に関わる色としての「赤」を「意識の底にかくれているもの」の暗示として発見したことを楸邨は述べている。

この「手毬」が「真紅」でなければならぬ理由の一つとして、楸邨のこの「赤」の発見が考えられてよいであろう。

おわりに

「(一) 先行解釈の検討」中に上げた論の中では、⑦「夭折した娘への」(鈴木) 思いの句という説に私は賛同する。

しかし鈴木氏の説く「梟の声」と「思いの凝った形である真紅の手毬」との「対比」、という点については意見が同じではない。「ふくろふ」を私はほぼ楸邨自身であろうと推測しているので、「梟の声」と「手毬」が「対比」関係にあるとは想像できなかったのである。その点では中島氏のいう、句中の楸邨は⑧「梟そのものになる」「その前段の境地」という論に私は近い立場にある。中島氏と違うのは私は「手毬」は夭折の子によってつかれているとする点である。亡き子がつく手毬の紅の切なさがこの句の発想の核と私は考えるのである。この側面においては②「『つかれをり』と進行形にしたところが「楸邨の胸中の「磊塊のなせるわざ」(飯田) という指摘の通りである。

以上、楸邨の幻想は死のイメージと結びついていること(「(一) 幻想の発端」、幻想を意識的に楸邨は作品化してきたこと(「(三) 経験その儘を詠む」、楸邨の受身形の句の殆どは自身や我が子を詠んだものであること、中でも鳥獸を詠んだ句はその鳥獸に楸

萩は一体化していること（「（四）受身の形」）、二歳になるかならぬかの次女を亡くした無念を最晩年まで萩萩は句に詠み、その命の始まりと終わりの色としての「赤」が「手毬」の「真紅」に反映していると考えられること（「（五）真紅の手毬」）を論じてきた。

さまざまな解釈がなされる「ふくろふに」の句であるがこの幻想的な作品は、萩萩の亡き子への挽歌と推定することができよう。

ふくろふに真紅の手毬つかれをり

萩萩

最晩年の萩萩のこの句を「いまも亡き子に、真紅の手毬をつかれてはいる私は、老いた鼻のようであるよ」と私は解釈したいのである。

〈注〉

（1）加藤萩萩著『怒濤』昭和六一年（一九八六）一二月、花神社刊。

（2）江中真弓「編集後記」（「寒雷」平成二六年（二〇一四）二月号。）奥付の頁より引用。

（3）大岡信・川崎展宏対談「俳句の円熟」―誓子・萩萩の近業

―（「俳句研究」昭和六二年（一九八七）八月号。富士見書房刊。）八一―八二頁より引用。

（4）注（3）に同じ。但し、八一頁より引用。

（5）特別座談会「近代俳句を見なおす」15「土の句いのする

俳人加藤萩萩」（「俳句」平成八年（一九九六）三月号。角川書店刊。）二二八―二二九頁より引用。

（6）飯田龍太「近作寸感―磊塊というもの」（「寒雷」創刊五十周年記念号。平成二年（一九九〇）一〇月号。）六一―八頁より引用。

（7）諸橋轍次著『大漢和辞典』巻八。（平成一三年（二〇〇一）一〇月、大修館書店刊。）三九二―三九三頁より引用。

（8）矢島渚男編『萩萩俳句365日』（名句鑑賞読本3、一刷、平成八年（一九九六）六月、梅里書房刊。）三三頁より引用。

（9）田川飛旅子編「年譜」に「昭和八年（一九三三）二八歳」「次女明子疫病にて急死」と記載あり。（『加藤萩萩全集』（以下、『全集』と略。）別巻。昭和五七年（一九八二）十一月、講談社刊。以下、講談社刊は略。）三四九頁より確認。

（10）鈴木太郎「加藤萩萩・ふくろふに真紅の手毬つかれをり」

(『國文學』—解釈と教材の研究—(平成八年(一九九六)二月臨時増刊号。學燈社刊。)—一四四頁より引用。

(11) 中島鬼谷著『加藤楸邨』(蝸牛俳句文庫³⁴、平成十一年(一九九九)九月、蝸牛社刊。)—一二六頁より引用。

(12) 加藤楸邨著「雪柱」(『全集』第六卷。昭和五五年(一九八〇)八月。)—三三六—三三七頁より引用。「初出」昭和八年「寒雷」四月号。

(13) 加藤楸邨著「私の初座敷」(『遙かなる声』平成二年(一九九〇)十一月、読売新聞社刊。)—二八—二九頁より引用。

(14) 注(12)に同じ。但し、三二七—三二八頁より引用。

(15) 加藤楸邨著「俳句遠近」(『全集』第六卷。発刊年等は注

(12)に同じ。)—一五頁より引用。「初出」『読売新聞』昭和

五三年二月二二日—三月一六日刊。

(16) 西田幾多郎著『善の研究』(大正一五年(一九二六)九月、岩波書店刊。)—一頁より引用。「初版」大正一〇年三月刊。

(17) 注(12)に同じ。但し、一六頁より引用。

(18) 加藤楸邨著『加藤楸邨全句集』平成二二年(二〇一〇)一〇月、寒雷俳句会刊。

(19) 加藤楸邨著「鼻」(『達谷往来』昭和五三年(一九七八)六月、花神社刊。)—八八頁より引用。

(20) 加藤楸邨「自句自註」(「俳句研究」昭和二五年(一九五〇)七月号。目黒書店刊。)—二二頁より引用。

(21) 山本健吉著「加藤楸邨」(角川文庫『現代俳句』昭和五九年(一九八四)一二月刊。)—三七五頁より引用。「初版」昭和三九年五月、角川書店刊。

(22) 石寒太著『加藤楸邨の一〇〇句を読む』—俳句と生涯—

(平成二四年(二〇一二)一二月、飯塚書店刊。) 七八頁より引用。

(23) 田川飛旅子著『加藤楸邨』(新訂俳句シリーズ・人と作品

16、昭和五八年(一九八三)三月、桜楓社刊。) 二九七頁よ

り引用。「初版」昭和三八年三月刊。

(24) 中村稔「歩行者の眼」―楸邨小感―(「寒雷」加藤楸邨生

誕百年記念号。平成一七年(二〇〇五)五月号。) 三五頁より引用。

(25) 加藤楸邨著「戦前歌層」(『全集』第四卷。昭和五七年(一

九八二)二月刊。) 二六一頁より引用。「初出」埼玉県立粕

壁中学校校友会会報」昭和九年九月一日号。

(26) 加藤楸邨「蝶の目」(連載作品12句③、「俳句」平成二年

(一九九〇)八月号。角川書店刊。) 三一頁より引用。

(27) 加藤楸邨著「赤」の発見」(『全集』第七卷。昭和五六

年(一九八一)七月。) 三五五頁より引用。「初出」小原

流挿「花」昭和五六年四月刊。

*本論は平成二六年「解釈」七・八月号(解釈学会発行)の稿者の「加藤楸邨の句「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の解釈をめぐって」を改題、補筆したものである。

終章

加藤楸邨の俳句作品の生成と俳句観の推移

終章 加藤楸邨の俳句作品の生成と俳句観の推移

はじめに

本論の「序章第一節 加藤楸邨先行研究史」において、①楸邨の句業の出発時の評価、②戦中戦後の評価の相違、③晩年の多彩で独自の句境への再評価、という変遷を見てきた。その中で楸邨の最晩年及び没後の先行研究の少ないことから、③の楸邨の晩年の多彩で独自の句境について、作品や俳句観を追究することを主目的とすることを述べた。

次いで「序章第二節 楸邨作品の時代区分」において、楸邨の

六二年の句業を句集を軸に初期・中期・後期の三つの時代に区分を行った。それはまた「序章第一節 加藤楸邨先行研究史」における①②③の時期に相当するものであった。

加藤楸邨の俳句作品やその俳句観を吟味し、多彩で独自の境地に至る加藤楸邨という俳人の特色を探っていく。

句業の初期・中期・後期にはその時期の代表的句集の名を章名に用いた。

(一) 『寒雷』の時代

加藤楸邨の後期の句業の考察の前にその初期・中期の作品や俳句観を理解しておきたいと思う。初期(二六歳—四〇歳)の楸邨のその出発時の俳句環境や作品については、楸邨の俳句の師である水原秋櫻子によって第一句集『寒雷』(昭和一四年刊)「序」に「向学への苦悩、秋櫻子の慇懃による上京と進学、上京後の生活の激変と作風の転換など⁽¹⁾」が詳述されている。以下、作品集における楸邨の言葉や作品を引き、作品の生成、俳句観の推移、晩年の多彩な作風に至った楸邨の特色などを考察していく。引用句及び楸邨の「後記」や「自序」等は『加藤楸邨全句集』⁽²⁾より引く。引用文中の旧漢字は大略、現行のものに置換、(*)は稿

者の補足、「／」は改行箇所を示す。(傍点は楸邨、傍線は稿者)

『寒雷』

「後記」「『寒雷』を出す決心をしたのは(中略)都塵抄(※

昭和一二年四月―一三年までの二一四句の抄名)で追ひつめて来たものを、次に動かすためには、どうしても都塵抄を打ちきつてみるのがよいと思つた。打ちきれば苦しい中から求めてゐるものの姿がはつきり出て来るだらうし、道も開かれるに相違あるまいと感じたのである。(中略)自分の歩みを全体として見透す為には、自分の欠点を明瞭に示してゐるものも遺さなくてはならないやうに感じて、さういふものは、敢て天日に曝した。だからこの句集は我ながら傷だらけの句集と感じてゐる。私の批判を受けたい点は、傷だらけの句を留めながら辿つて来た歩き方そのものについてであり、その歩き方の今後への見透しについてである。「古利根抄」は馬酔木新樹集に投句して先生(※水原秋櫻子)の選を仰いでゐた頃のものである。(中略)私はどうかすると、先生の目を通して物を見てゐたのではないかとさへ思う。／「愛林抄」は年代的には自選句を発表するやうになつてから上京するまでのものである。(中略)私としては古利根抄の頃得たところ

のものをして、行けるところまで歩かうといふ考だつたのである。(中略)出京以来の句は「都塵抄」の名の下に発表した。(中略)「都塵抄」では俳句を自分の呟きの如く、氣息の如きものに引きつけようと力めた。自分と俳句を一枚にしてしまはうと力めた。(中略)かうすることによつて自分の追ひつめてゐるものと俳句とを一枚にし、自己の追求がそのまま俳句の追求となり、自分だけにはとにかく信ずることの出来る自己の道が通ずるかと思ひがけない深淵が口を開いて考へ方から、私は自ら自分の生活―日常生活に取材した。そして日常生活の執拗な凝視の中から、その殻が破れた瞬間、そこに閃く光を射とめようとした。／日常生活の裏には、一度真実を求めて揺りたてると、思ひがけない深淵が口を開いてゐることを感ずる。私はかうした深淵の中から真に自分が見出したものを掴み出したかつた。日常の常識と平安との底に、常に黙々と動いてゐる自分の真の姿を掘り出したかつた。そして、それらを鬱たる氣息の如く、俳句に充填したかつた。巧いとか拙いとかを離れて、さういふ射とめうる目を欲した。(中略)「都塵抄」がいかりの相貌をあらはしてゐると評した人があつた(中略)然し、私はそれでもせめて俳句の中では本音を吐かせてほしいと言ひたいのである。(以下、略)

棉の実を摘みゐてうたふこともなし 『寒雷』

「古利根抄」 はしりきて二つの畦火相搏てる

同

船戸

行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ

同

争後

対ひゐて言葉なければ雪を言ふ

同

動物園

鼻の憤りし貌ぞ見られゐる

同

『寒雷』 「後記」には「追ひつめて来たものを、次に動かすために」という言葉があつて、楸邨という俳人の一つの特色を表している。それは自分の俳句を自分で動かしていくという点である。またこの「後記」に書かれた「日常生活の執拗な凝視の中から、その殻が破れた瞬間、そこに閃く光を射とめようとした」「深淵の中から真に自分が見出したものを掴み出し」たいとする句作志向は楸邨独特の視点のように思われる。

ここにあげたのは俳句を始めて、師の水原秋櫻子の選を受けて

いた頃のもので「棉の実」の句は第一句集『寒雷』の巻頭句である。「どうかすると、先生（*秋櫻子）の目を通して物を見てゐたのではないか」（『寒雷』「後記」）という時期の作である。中でも「行きゆきて」の句は、師秋櫻子と一緒に古利根川の堤を歩き「常に他の人々からおくれ勝ちになつた。楸邨君はさういふ時私を励まし力づけてくれた」という時代のものである。

「はしりきて二つの畦火」はそうした静かな水辺の光景とは違つて激しい火の色を感じさせる句である。この激しい火の色や、「争後」という前書の語は「穏和な伝統尊重者」であつて「自然賛歌の円満境」をゆく師秋櫻子の句風からは異なる語感を持つ。そしてこの「古利根抄」最後の「鼻の憤りし貌」の「憤り」という言葉もやはり師風との違和感があり、それは後年の楸邨が生活派、人間探求派といわれる兆しのように思えるのである。

「古利根抄」の後の「愛林抄」の頃には楸邨は「馬酔木」同人に認められ、秋櫻子選を離れて自由に自作を発表できる立場になつて

かなしめば賜金色の日を負ひ来 『寒雷』「愛林抄」

冬日没る金剛力に賜なけり

同

東京小石川大塚坂下護国寺裏に居を定む

雉子鳴けりほとほと疲れ飯食ふに

同

寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃

同

このような句を作っている。この「かなしめば鴟金色の」句や「冬日没る金剛力に鴟」などの句は、秋の季語「鴟」と自己の内面を衝撃的に合わせ詠んだような作品で、当時の俳壇の注目を浴びた。また「愛林抄」の最後に近い「雉子鳴くや」の句は自身の日常生活に取材した作で、前二句とは傾向の違う作品である。「愛林抄」の中で楸邨に詠む素材や作品の内容にいて変化が見られると言つてよい。

楸邨は「愛林抄」について「私としては古利根抄の頃得たところのものを以て、行けるところまで歩かうといふ考だつた」（『寒雷』「後記」）と述べている。この言葉からこの頃の楸邨は「鴟」などの鳥を詠んで、自然の中へ「行けるところまで」行こうと自身の句風を追求していたと考えられる。その次の「都塵抄」には楸邨が師秋櫻子のすすめによつて、埼玉県立粕壁中学の教師を辞めて上京し、東京文理科大学の国文科に三人の子を持つ三二歳の学生となつて進学してからの句が収録されている。

蟻殺すわれを三人の子に見られぬ

『寒雷』 「都塵抄」

鰯雲人に告ぐべきことならず

同

「蟻殺す」の句は問題句として人々の耳目を集めた。

「鰯雲」の句は師の秋櫻子から「季語と心境と融け合わぬ」、季語の「鰯雲」が「孤立していてその意味で一句全体がわかり難くなる」と指摘される。楸邨のこの「鰯雲」の句や、「馬酔木」同人の石田波郷の句「月蝕の謀るしづかさや椎若葉」などの句はともに「難解派」と呼称されてゆく。「難解派」は、また山本健吉氏の提唱によつて「人間探求派」とこの直後から呼ばれるようになっていく。これらのことは、本論「第一章 第一句集『寒雷』の研究——鰯雲人に告ぐべきことならず」を軸に——において、「鰯雲」の句への私見とともに述べた。

この俳句への出発時の『寒雷』において、楸邨がいちばん望んでいたのは「私はそれでもせめて俳句の中では本音を吐かせてほしい」（『寒雷』「後記」）ということである。

第一句集刊行という俳句の世界への出発に際して、楸邨は自己表現の手段として俳句を選び、その俳句の道を自分で動かして進めようとしていたのであった。

楸邨の①の初期の句集としてこの『寒雷』（昭和一四期刊）以後、第二句集『颯風眼』（昭和一五年三月刊）、第三句集『穂高』

(同年一二月刊)、第四句集『雪後の天』(昭和一八年刊)がある。各句集中の楸邨の作品とその句集に書かれた楸邨の言葉を抽出して、初期の句業を考察していく。

『颱風眼』

「序」 「颱風が如何に荒れ狂はうと、この「颱風の眼」は、動きつつ常に静寂を保つ。自己の身を置く環境がどんなに激動しようとも、その底にあつて自らの激動をみつめてゐる無限に静寂な「颱風眼」、これこそ、私が切に俳句に望んでやまぬ「俳句眼」である。『颱風眼』は(中略)第二の句集になるが、未だすべて暁闇を望むの感がある。寛厚周到の御指導を常に不言の中に示された秋櫻子先生始め(中略)机を並べて相語つた石田波郷君、(中略)その一人一人に感謝の念を新たにすると同時に、この句集の出る頃始まる新しい生活の第一歩が、私の俳句の新しい出発になることをひそかに期してゐる。」

兜虫視野をよこぎる戦死報

『颱風眼』

墓誰かものいへ声かぎり

同

つひに戦死一匹の蟻ゆけどゆけど

同

『颱風眼』 「序」にある「句集の出る頃始まる新しい生活」の一つは東京文理科大を卒業して教職に就くことを指す。

昭和一五年三月、楸邨の卒業論文「西鶴俳諧の展開―談林俳諧研究」(当時の題名は「談林俳諧―西鶴俳諧の展開」)は、能勢朝次教授に提出されている。その論文は(傍点は楸邨)「一、問題を前に」に「俳句を自己の表現とし、之によつて表現意欲を充たそうとしているものにとつて、かならず対決せざるをえない難問がある。それは表現しようとする意欲は時代と人間の複雑化に伴つて、限りなく増大しようとする傾向があるのに反して、表現形式は一定の規制を越えることが許されぬというところに起るものである。」と始まる。

西鶴は俳諧から散文に向かい、芭蕉は韻文に蕉風を打ち立てた。同じ談林の中に在つた二人が、結果的に於ては全く相反したそれぞれの世界を築きあげているが、一体どこからこの差が生み出されたものであるか。これがこの小文で探究しようとする主眼なのである。私は先ず、散文に展開した西鶴に於て、その表現意欲充足の道を探り求めてみたいと思ふ(同前)「という卒業研究であつ

た。『颱風眼』「序」に「私の俳句の新しい出発」というのは、この西鶴研究から芭蕉研究への方向の目途が立ち、自身の作品の進展が期待できる「新しい出発」のもう一つの意味と推測されるものである。このように「表現意欲」と「表現形式」との相剋をテーマに研究を行いつつ、『颱風眼』のここにあげたような「兜虫視野をよこぎる」や「墓^{ひきがえる} 誰かものいへ」や「つひに戦死」の句を楸邨は発表している。これらの句はその「序」にあったように、「自己の身を置く」ところの「自らの激動」の内面が反映された句である。楸邨は周囲の状況が「如何に」戦争のような状況になろうと「颱風眼」のごとき「俳句眼」を望んでこの時期の句を詠んでいたと考える。

『穂高』

「穂高自序」「始の句集『寒雷』（中略）『颱風眼』（中略）以上を表とすれば、句集『穂高』は裏句集とも言へるであらうか。この集と同時に雑誌「寒雷」も出発した。（中略）人間を生かし、自然を生かすことは、自然自身の生き方で生かし、人間自身のあり方で生かさなくてはならぬ。小主観で左右しがたい厳たるものの前に立たねばならぬ。それが最も正しい人間の俳句である、と考へ始めてゐる今から見ると、全

く不満が多いのだが、手をとられて安全なところを渡るよりも、自分の作家的生命を賭けて一々やってみてからでない、納得出来ぬ自分の性質から生れた過程であるから止むを得ない。」

北上川、一関中学生たりし頃常に歩き、啄木を愛誦せし
径あり

柳散る昔啄木のまた我が径
『穂高』

子がよろこぶ父の体操露の瑠璃
同

長き長き春暁の貨車なつかしき
同

「穂高自序」に楸邨は集中の作品は「今から見ると、全く不満が多い」と書いている。確かに『穂高』には「小主観で左右しがたい厳たるもの前に」立っているような句が多いとは言えない。けれども右の「柳散る昔啄木の」や「子がよろこぶ父の体操」、「長き長き春暁の貨車」に見られるような楸邨の素顔が感じられる佳句があり、そこに「裏句集」としての意義が認められよう。

『雪後の天』（傍点は楸邨）

「自序」 「後鳥羽院のかかせ給ひしものにも、これらは歌に実ありて、悲しびをそふるとのたまひ侍りしとかや。さればこの御ことばを力として、その細き一筋をたどりうしなふことなかれ。」と芭蕉が書いてゐる。その芭蕉の悲願を私は今、はるかに思ふ。昭和十六年の初、衝迫のままに、隠岐に旅した時の百九十余句が「隠岐紀行」であるが、その冬大東亜戦争の勃発に際会して、この命運の下にある自分の歩みたき道を思ふとき、「実ありて悲しびそふる」という御言葉が、新たなながやきを以て胸に生きた。(中略)編み了へて感ずるのは、ただ言ひがたい「飢」の感である⁽¹⁰⁾。」

隠岐へ

さえざえと雪後の天の怒濤かな

『雪後の天』

国賀の怒濤

荒東風の濤は没日にかぶさり落つ

同

後鳥羽院御火葬塚

隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな

同

『雪後の天』の「自序」は後鳥羽院を引いた芭蕉の言葉をかか

げて楸邨は芭蕉への傾倒を露わにしている。その衝迫のままに詠んだ「隠岐やいま」は「楸邨生涯の秀句としてあげる識者も多⁽¹¹⁾い」句である。

「さえざえと雪後の天」「荒東風の濤は没日に」そしてこの「隠岐やいま」の句もダイナミックな作品である。「さえざえと」も「隠岐やいま」も古典的に「かな」で止めているのは芭蕉の影響が表れているものであろう。

この楸邨の句業初期の時代は戦争の時代でもあった。当時の多くの日本人と同じように戦争が早く終結してほしいと願いながらも、日本が戦争に負けることは望んでいなかった。こうした状態が「編み了へて感ずるのは、ただ言ひがたい「飢」の感」(『雪後の天』「自序」)という「言ひがたい「飢」」ではなかったか。それはまた『颱風眼』に「つひに戦死一匹の蟻ゆけどゆけど」と厭戦の句を詠んでいた頃の自分と、今の自分との「言ひがたい」距離ではなかったかと思う。

この「初期『寒雷』の時代」を通底しているのは(傍線は稿者)「俳句の中では本音を吐かせてほしい」(『寒雷』「後記」)、「その底にあつて自らの激動をみつめてゐる無限に静寂な「颱風眼」、それこそ、私が切に俳句に望んでやまぬ「俳句眼」である」(『颱風眼』「序」)、「手をとられて安全なところを渡るより

も、自分の作家生命を賭けて一々やつてみてから」（『穂高』「穂高自序」）、「自分の歩みたき道を思ふとき」（『雪後の天』「自序」）という、俳句の上に自己を追求する姿勢である。

ここで取り上げなくてはならないのはこの「『寒雷』の時代」の終わり頃の昭和一七年に、「馬酔木」四月号を最後に楸邨と、同じく人間探求派といわれた石田波郷の作品が同人欄に掲載されなくなったことである。

それ以降も楸邨の師秋櫻子への敬愛は変わることにはなかった。しかし戦後石田波郷は「馬酔木」へ復帰したが楸邨は「馬酔木」へ戻ることはなかった。

楸邨の言い方に倣えば楸邨は「往往見ることを欲しないものをも見ざるを得ない^(1,2)」「夜の眼」を持つ俳人である。それに比して師秋櫻子は「不調和不均整なものには殆ど生理的に耐えがたい潔癖の人^(同前)」、楸邨とは全く対照的な「真昼の目」の俳人であった。そのことが楸邨を師秋櫻子とは別の道を歩む原因の一つになったと思う。

楸邨のこの「馬酔木」離脱を早くから東京三（＝秋元不死男）氏は予感していたと思われる。昭和一三年「俳句研究」「新鋭月旦」に、楸邨が「馬酔木」に毎月、実作として発表している「都塵抄」の句には「直接的な生活のうたがある^(1,3)。」と東氏は述べ、

楸邨の句は「本質的には誓子氏や秋櫻子氏の道をゆく俳句ではないやうに思ふ^(同前)。」と記している。楸邨自身が当時気づいていなかったであろう鋭い指摘である。

(二) 『野哭』の時代

楸邨の句業中期（四一歳―六〇歳）の作品集は句文集『沙漠の鶴』（昭和二三年二月刊）、第五句集『火の記憶』（昭和二三年五月刊）、第六句集『野哭』（昭和二三年二月刊）、第七句集『起伏』（昭和二四年刊）、第八句集『山脈』（昭和三〇年刊）がある。これらの句業を確認するために「(一)『寒雷』の時代」と同じように、句と句集に添えたその時の俳句環境についての言葉を見ていく。作品集の順序は本論「序章第二節 楸邨作品の時代区分」の通りとする。

『沙漠の鶴』

「後記」「私は少年時代から中国には深い関心を持つてゐたので、改造社の依頼を受けて大陸に渡る事になったとき非常に喜んだ。当時戦時であつたために諸般のこと軍の斡旋を受けたが、その交渉のあつた際いささかも拘泥することなく、

存分に俳句を作つてほしい、それが日本人の中国理解の一つになればそれで充分であるとの報道部の秋山邦雄の言葉だったので、私としては全く芸術的意図の下に終始することに決心して出発した。(中略)句が主であつて、文は寧ろ従である。/当時同じ行を共にした土屋文明氏の大陸の作は先年『葦菁集』として刊行されているが、同じ時同じ素材を以てした短歌と俳句の把握・表現の差に、私は頗る興を覚えた。(中略)併せ読んでいただければ比較対照して短歌的形成と俳句的形成の差について一興趣を覚えられることと思ふ。(中略)私はこの集を送り出すにあつて、第一に私の俳句に於ける歩みの一時期を理解賜らんことを祈り、第二に従来俳句に関心のなかつた方々にして俳句といふものに新たなる理解を催さるる人のあらんことを祈り第三に日本人の俳句を通じての中国理解に同情したまふあらんことを祈る⁽¹⁴⁾。(以下、略)

百霊廟

天の川鷹は飼はれて眠りをり

トフミン廟

夕焼の雲より駱駝あふれ来つ

『沙漠の鶴』

同

南京駅頭

大袋負ひたる民に鳥渡る

同

『沙漠の鶴』の「後記」に楸邨はこの旅が土屋文明と石川信雄の二人の歌人との同行であつたことをいい、二人の歌集とこの『沙漠の鶴』の句とは、同じ時に同じ素材を以てしているので「併せ読んで」貰えば「短歌的形成と俳句的形成の差について一興趣」を覚えるであろう、と述べている。楸邨自身も「短歌と俳句の把握・表現の差」に「頗る興を覚えた」ともいつている。楸邨には一冊の歌集ができるほどの短歌作品がある。俳句をつくる以前は短歌を詠んでおり、短歌への嗜好はまた、楸邨の二つ目の特徴といえるものである。俳句一辺倒の俳人と比べて、それは楸邨の多彩な作品の土壌となるものと考えられるからである。この句文集『沙漠の鶴』中の句は現在、高く評価されていない。しかし「天の川鷹は飼はれて」「夕焼の雲より駱駝」「大袋負ひたる民に」の句にはそれぞれの風土の特色が生かされていて、海外詠として水準以上の作品であると思う。また「後記」にあるように「全く芸術的意図の下に終始した」結果の作品ばかりで、中国における戦争に加担したような作品は見当たらない、ということも言つて

おきたい。

『火の記憶』

「跋」 「ただ遺憾なのは昭和二十年四月末から八月にかけての句帳を電車の中で紛失してしまつたので、私としては最も印象の深い作を欠いたことである。（中略）人間の歩みを俳句の歩みとする―さう希ひつづけてずつと作りつづけてきたのであるから、たとへ貧しいものでも私は心の記録として惜しいのである。／＼この集をまとめながら読みかへしてみると、激動の中に却つて静謐なものへ歩み入ろうとした心の動きが感じられるが、これは当時のとどざされた心の動きの必然であつたかと思ふ⁽¹⁵⁾。（以下、略）」

傷つける人に

とこしへに天の川あり起ちたまへ

『火の記憶』

四月一五日、夜九時五十分警報、十時半B二九、二百余機、京浜に入り空襲、我は防衛宿直として一夜学校にあり、四辺火の海、我が家もと思ひしが、終つて徒歩にて帰るや、附近多く焦土なり、弟清雄、他をのがれしめ、単身家を守りとほしぬといふ

火襖にさくらはこぼれやまぬかな

同

五月二十三日、夜大編隊侵入、母を金沢に疎開せしめ、

上州に楚秋と訣れ、帰宅せし直後なり、わが家罹災

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ

同

五月二十四日、一夜病中の弟を負ひ、長女道子、三男明

雄を求めて火中彷徨 二句

雲の峯八方焦土とはなりぬ

同

明易き櫂にしるす生死かな

同

「人間の歩みを俳句の歩みとする」とこの『火の記憶』の「跋」にもあるとおり、戦中の東京空襲の詳細が記録された句集である。「天の川」の句中の語「起ちたまへ」には、どんな困難な時にも絶望してしまわない楸邨の生き方が表れている。「火襖にさくらは」と「火の奥に牡丹」は人間の悲惨さと「さくら」や「牡丹」の自然が対比された句である。この句集の「跋」にある「人間の歩みを俳句の歩みとする」という楸邨の凝視の中に見えた光景であろう。

これらの句の前書とともに「雲の峯八方焦土」「明け易き櫂に」の句は、楸邨にとつて「たとへ貧しいものでも私としては私の心の記録」なのであった。矢島房利氏は「その時その場での記録・

制作であることにおいて、記録文学としてもなお特別な意義をもつものであり、俳句という短詩型文学にしてはじめて可能な創作であつた⁽¹⁶⁾。という。その視点から見ると『火の記憶』は一瞬を言い留めるといふ俳句の機能が楸邨という一人の俳人によつて証明された句集といえる。

『野哭』

献辞「この書を／今は亡き友に献げる／火の中に死なざりしかば野分満つ 楸邨」

「後記」「本当の自分の声を俳句に生かしたいと念じながら、今、私はこの集をまとめてみて、その感なきをえない。だから、本当のものへ歩み入るためには、この集はまだ「未完の道程」に過ぎない。／「野哭」といふのは杜甫の詩にある。戦乱の世に処した嘆きの語であつた。人間としての自分の人間悪、自己の身を置く社会の社会悪、かういふものの中で、本当の自分の声をどうして生かしてゆくか、これが今の私の課題だ⁽¹⁷⁾。(以下、略)」

飢せまる日もかぎりなき帰燕かな

『野哭』

雉子の眸のかうかうとして売られけり

同

仮寓を追はるる愈々切なり、遂に十二月二十七日一家を率て学校の一隅に移らんとす、荷を負うて巷に出づ
飴なめて流離悴むこともなし
述懐（七句中二句）

火の中に死なざりしかば野分満つ

死ねば野分生きてみしかば争へり

大鷲の爪あげて貌かきむしる

同 同 同

「野哭」について楸邨はこう書いている。「杜甫に「野哭」という語がある。唐の乱れに餓殍は道塗に充ちた。訟うべきものを失った民衆は野にあつて天を仰いで哭したのであつた⁽¹⁸⁾」。「飢せまる日」は現実のことであつた。日本国民の大多数は飢餓にさらされ、一千万人以上の失業者が巷にあふれ、配給制の食糧は例え「昭和二十一年六月東京は二十日もの遅配を来した⁽¹⁹⁾」のであつた。二十日間東京都民は公的機関からの食糧なしに過ごしたのである。敗戦直後の日本は杜甫の「野哭」の時代を思わせると楸邨は句集の題にしたのである。

そして戦中の軍の斡旋を受けた中国大陸行のことや主宰誌に立つ職業軍人が在籍していたことから楸邨は、戦後、戦争協力と

して指弾され、これまでの作品も否定されることになる。

「雉子の眸のかうかうとして」はそうした時期の裏切られたと感じている楸邨の自画像である。戦後のこうした批判に対して楸邨は俳句作品だけではなく文章で、例えば「終生にわたる自分の生涯を以て実証する外はないところに立っている」と「俳句と人間について（一）―草田男氏への返事―」の中で応えている。楸邨のこうした対応の仕方にクリスチャンであった父譲りの世界観を見ることができると考え、本論「第二章 楸邨における「父」の存在―「冬の浅間は胸を張れよと父のごと」をめぐる―」の中で論じた。クリスチャンであった父譲りの世界観を楸邨の持つ三つ目の特徴にあげたいと思う。

「大鷲の爪あげて貌かきむしる」も行き場のない作者の自画像と読むことができる。

空襲で家を焼かれた多くの人と同じように楸邨一家も住む所を求めて転々とする。そういうときにも弱音を吐かない楸邨であることは「飴なめて流離悴むこともなし」の句から推量できる。

『野哭』は「戦争協力者として楸邨を見る世間の目への反撥⁽²⁾」
とも「『寒雷』と並んで、楸邨俳句の本領を示す双璧の句集^(同前)」
と評されている。戦後を代表する名句集といってもよい。

「死ねば野分」の句は、死んでしまった人は何も言うことがで

きない、生き残った自分はこうして非難に応答し、争うように生きていくという作である。

「火の中に」は楸邨の句集の中で唯一、献辞として『野哭』の扉に掲げられた句であり、『野哭』「述懐」七句中の一句である。
『寒雷』「後記」に「俳句の中では本音を吐かせてほしい」と記していたように楸邨はこの第六句集『野哭』の「後記」の中でも「自分の本当の声をどうして生かしてゆくか、これが今の私の課題だ」と述べている。こうした課題を負いつつ楸邨は俳句という自己表現の手段を手放さない。

『起伏』

「序に代へて」 「野の起伏ただ春寒き四十年代」

「あとがき」 「『野哭』につづく、昭和二十三年始（め）から二十四年六月までの句をまとめた。この間殆ど病臥してゐたので（中略）この集は病中生活の報告のごときものとなつた。（中略）今は、しづかに体力の恢復を待つ段階に近づいた。この集はある意味で一くぎりなすことにもならう。（中略）とにかく病気に素直にならうとする気持と、病気に負けないで生きようとするきほひとが相剋して、苦しい期間であつた。／『野哭』を出してから、一步踏み出した生き方

をひそかに庶幾してゐたが、はからざる病臥のために果しえないで、世の推移を蒲団の中からのぞいてゐただけに終つた。

(中略) 以前の繁忙な生活の中にあつては、いろいろのことに紛れてゐた自分を、今度は静かに凝視することが出来た⁽²¹⁾

(以下、略)―

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる 『起伏』

火事を見る胸裡に別の声あげて 同

檻の鷺脚ふみかふるほかはなく 同

木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ 同

霜夜子は泣く父母よりはるかなもの呼び 同

「あとがき」にあるように思いがけない病臥によって「静かな凝視」の時にめぐまれて、「檻の鷺」「木の葉ふり」や「霜夜子は泣く」などの作品が生まれている。「霜夜子は」は後に「雪夜子は」に変えられている。「霜」よりも「雪」の方が白い光りがさしてくるようだと思う。「鮫鱈の」句には病床に親しんだゆえの「諧謔調⁽²²⁾」、楸邨の「人間的なおほらかさ^(同前)」の新しい境地が認められるという山本健吉氏の否定できない見方がある

る。この病後の楸邨と、病床にあつた正岡子規の句の間にはユーモアについての共通の感覚がある。このことについて、「第三章第二節 楸邨と正岡子規―「ぼこぼこ暗渠出てきし茄子の馬」の背景―」の中で考察を述べた。

「火事を見る」には楸邨が『野哭』の「後記」に書いていた「人間としての自分の人間悪」の問題意識がある。楸邨は常に「本当の声」を俳句に生かしていきたいのである。

『山脈』

「あとがき」 「『山脈』は昭和二十三年から二十七年までの作を収めた。(中略)戦後始めてまとめたのは『野哭』であつたが、戦争の傷痕の中、詠むことで辛うじて自らを支へた感じがあつたし、『起伏』は病中の昏迷の中にあつた。『山脈』から私(は)もう一度振出しに戻つて歩き始めてゐる感じだ⁽²³⁾。」

鉛筆で指さす露の山脈を 『山脈』

マンホールの底より声す秋の暮 同

浅間の麓(二六中二句)

落葉松はいつめざめてても雪降り 同

しづかなる力満ちゆき蹊蜥とぶ

同

ここにあげた句の中で「マンホールの」は『起伏』の頃から見られる楸邨の哀しいおかしみの漂う句の系統に属する。これらはユーモアの句と評されたり、「諧謔調」と言われたりする。こうしたおらかな物の見方の角度は楸邨が病臥中に身に付けた視座で、楸邨の四つ目の特徴といえる。

「しづかなる力満ちゆき」に楸邨自身の次の自解がある。

戦後私は胸をやられて四年程寝こんでしまった。私どもが病気にやられると、病苦そのものより生活苦の方がひどくなる。

(中略) 急ぐな、あせるなど自分をなだめる日々だった。(中略) 晩秋の庭を歩けるやうになつて蹊蜥を見た。私の気配でちよつと向きをかへる。そしてじつと動かない。明るい朝日がやうやくその羽や足をぬらしはじめる。動かないのは力が抜けてゐるのではない。しづかに全身に力がたまつていくといふ感じだ。私はいつかこの小さな蹊蜥の上に息をひそめて目をこらした。／平凡だが病苦を克服したといふよろこびをえたときの作である⁽²⁴⁾。

これ以上つけ加えることがない句解であるが、この蹊蜥、楸邨の本意では「はたはた」と読みたいのである。この句に「蹊蜥」^{はたはた}とふりがなをしている例⁽²⁵⁾がある。「はたはた」の方が古風な言い方でゆつたりとした滞空時間を予測させて、この句の意味するところにふさわしいのではなからうか。混迷の時期をくぐり抜け「振出しに戻つて歩き始めてゐる」ことを感じさせる句である。

この中期の作品集の中にも楸邨は「第一に私の俳句に於ける歩みの一時期を理解賜らんこと」(『沙漠の鶴』「後記」)、「たとへ貧しいものでも私としては私の心の記録」(『火の記憶』「跋」)、「本当の自分の声を俳句に生かしたい」(『野哭』「後記」)、「いろいろのことに紛れてゐた自分を、今度は静かに凝視すること」(『起伏』「あとがき」)、「傷痕の中、詠むことで辛うじて自らを支へた感じ(*『野哭』)があつた(中略)『山脈』から私(は)もう一度振出しに戻つて歩き始めてゐる」(『山脈』「あとがき」)と、「(一)『寒雷』の時代」に見たと同じように、俳句の上の自己探求の志向を示している。楸邨のこのような自己探求や「自分の本当の声」(『野哭』「後記」)には、明治期のキリスト教文学者北村透谷の「内部生命論」が作用しているかもしれない。この点について、本論「第三章第一節 楸邨

の「真実感合」と北村透谷の「内部生命論」——「灯の寒きこのし
ら骨が波郷かな」との関連——に纏めた。

一方『起伏』の「あとがき」の「自分を、今度は静か凝視する
ことが出来た」という言葉や、『山脈』「あとがき」の「もう一
度振出しに戻つて」という言葉は、この後の句風の変化を予感さ
せるものである。

(三) 『吹越』の時代

加藤楸邨の句業後期(六一歳—八八歳)、この晩年の作品集に
は第九句集『まぼろしの鹿』(昭和四二年刊)、句文集『死の塔』
(昭和四八年刊)、第一〇句集『吹越』(昭和五一年刊)、第一
一句集『怒濤』、書句集『雪起し』(昭和六二年刊)、遺句集『望
岳』(平成八年刊)を含める。その作品集ごとの楸邨の言葉や俳
句作品をとりあげ、多彩で独自の境地に至った晩年の句風及び俳
句観を確認する。

『まぼろしの鹿』

「あとがき」 「私は句を詠むことには執着がつよい方だが、
作り終ると憑きものが落ちたやうになる。だからこの十年あ

まり散佚するにまかせてゐた。(中略) 安東次男・平井照敏
両君、(中略) 前から出せといつてきかなかつた森澄雄君と
矢島房利君に君達がいっさいやつてくれるならといふことで
お願いした。この人達に任せてゐさへすれば、自分でやるよ
りはきつとよい。(中略) 題の『まぼろしの鹿』も四君の合
議。(中略) 題はすこし私には派手のやうだが(中略) 考へ
てみるとまぼろしに終つたのは、鹿だけではないやうだから、
これもなかなかおもしろき題といへるやうである⁽²⁶⁾。」

切妻合掌部落にて

滅びゆくもの生まれゆくものいま蝸 『まぼろしの鹿』

虎河豚のぐにやぐにやとして怒りきれず 同

寒卵どの曲線もかへりくる 同

芭蕉の山河とところどころ

蝶踏んで身の句はずや不破の関 同

良寛に旋頭歌あり「やまたづの／向かひのをかに／さを

鹿立てり／神無月／しぐれの雨に／濡れつつ立てり」こ

の真蹟巷に出でしが我が金策の間に逃げられたり

まぼろしの鹿はしぐるるばかりかな 同

鶴の毛は鳴るか鳴らぬか青あらし 同

唐末のころ、甘肅省の深谿より出で、戦の世を経てここに生きのこりたる洮河緑石あり

蝸や硯の奥の青山河

同

これらの句の中で「滅びゆくもの」「蝶踏んで」は旅をする中で生まれた作である。

「寒卵」は中期『起伏』からの「静かに凝視すること」が結晶した作品と思う。

「虎河豚の」は『起伏』の「鮫鯨の」と同系統の句で楸邨の「人間のおおらかさ」（山本）が現れている作品である。

「まぼろしの鹿は」や「蝸や」は楸邨が書や硯に興味を持ち始めたことが窺われる句である。句業後期になって楸邨は門下の安東次男に啓発され水滴や壺などの骨董へ近づきはじめ、句幅を広げている。この古美術への興味が楸邨の五つ目の特徴である。

「まぼろしの鹿」の句の面白さは良寛の書が幻に終わったことを詠んでいるが、実際楸邨は時雨に濡れている鹿の物寂しげな様子をどこかで目にしたことがあり、その時雨に濡れている鹿に自分を例えているという二重の構造になっていてそこにこの句の重厚性が生まれているのだと思う。

「鶴の毛は鳴るか」は不思議な幻想的な句で、こうした句を詠むようになってくるところが楸邨の六つ目の特徴である。こうした楸邨の幻想句については、本論「第三章第三節 楸邨における幻想的作品の解釈―「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の句意―」の中で論述した。

句集『まぼろしの鹿』から、楸邨は明らかに異なる側面を見せ始める。それが最も明瞭であるのは、あれほど「自分」にこだわった楸邨が一二年ぶりの第九句集の編集・選句のすべてを人にまかせたことである。そしてそれを「自分でやるよりきつとよい」と断言しているのである。このように句集の選句などを人にまかせることができるのは、この句集の「あとがき」に「句を詠むことには執着がつよい」と書いていることと反するようであるが楸邨の「執着」は、自分の俳句の世界を進展させることへの執着であって、自分の過去の作品への「執着」ではないのであろう。

「鶴の毛は」などは分かるか分からないかという顧慮というものを振り切った作品である。

楸邨は中期の『山脈』と後期の『まぼろしの鹿』の間に作品への考え方が変化している。『山脈』の「しづかなる力満ちゆき」の句は楸邨の自画像であって、『まぼろしの鹿』の時期は俳人として成熟し「しづかに力が満ち」てきた実感があったと考えられ

る。

句文集『死の塔』

「俳句作りのつぶやき」 「俳句は日本の風土に即した形成過程を辿ってきたものであるから、これがそのまま異なった風土にすぐ適応できるはずはない。(中略) 国外に旅して佳句が生まれがたいというのは事実である。しかし、だからといって国外の旅は無理だということにはならない。(中略) それまでに身につけていたものが強力なほど、新しい体験との相剋が激しいものだからである。(中略) 相剋が激しいほど生まれてくるものは根気よく待たなければならない。何度もあたって砕け、何人もあたって砕け、いろいろ試みた上ではじめて生まれてくるのだ。(中略) この短い詩型は、充分に手ごわい抵抗をするものだからである⁽²⁷⁾。」

イルクーツク、大黒屋光太夫は漂流してこの地にも住み、
数奇な運命をたどった人

日本語をはなれし蝶のハヒフへホ 『死の塔』

アルマ・アタへの雲上天山を越ゆ

炎日やどこかきらりと沙漠の目

同

妃

ビビ・ハヌイムの廃墟、ビビ・ハヌイムはチムールの愛

まぼろしのごとき崩壊蟻が攀づ

同

アフラシアブの廃墟

熱風や土より湧きし仏陀^{ぶだ}の顔

同

異質の風土での句作りの難しさは、それまでの句作の体験との相剋であると楸邨はいう。そうしたシルクロードの第一回目の旅中に「日本語をはなれし蝶のハヒフへホ」のような大胆な句が生まれているのは楸邨としては収穫だったのではなからうか。このシルクロードの旅などの異質の風土での句作に繰り返し挑戦し続けるところが楸邨の七つ目の特徴である。

『吹越』

「あとがき」 「自ずと旅の句が多くなったが、あながち旅を主としたわけではなく、旅が私の生活の中にあつた結果であつた。(中略) 昭和四十七年にシベリアからサマルカンド、ブハラ等のシルクロードを歩いた旅(中略) 同四十九年にパキスタンからアフガニスタンの乾燥地帯を歩いたシルクロード

ドの旅、五十年にレバノン、トルコ、イラン、イラクを歩いたシルクロード関係の旅（中略）と、日本とは異質の風土に俳句の可能性を試みた旅を繰返した。（中略）矢島房利君が『まぼろしの鹿』にひきつづき集めておいてくれたメモを照合したもの。（中略）「吹越」といふのは、谷川岳あたりの北が吹雪になると、その一部が風に乗って岳越しに南の山麓に飛んでくるもので、私は青天に舞ふ吹越に心を打たれつづけてきた。吹越のくる岳の彼方の未知のものに惹かれたからであらう⁽²⁸⁾。」

信州・修那羅峠は海拔千米あまり、頂に子安神社が祀られ、七百度近い神や仏の石像が並んでゐる、麓の人々の祈りを籠めたもので、神や仏があたかも人間のやうに、すぐ身近に感じられてくる 子安神

霧にひらいてもののはじめの穴ひとつ

『吹越』

石田波郷、茂木楚秋と我と三人、木曾路を歩いたのは藤村の「夜明前」の出た年であつた、今、我一人旅して

石榴見つつ胸中おしあひへしあひぬ

同

奥の細道にて 金沢

母に似し顔の中なるきりぎりす

同

十一月二十一日、波郷永眠、その夜通夜

柿を過ぎゆく縷のごときもの亡波郷

同

山陽山陰の旅から 広島

薔薇のかげまぼろしはみな手を伸べて

同

おぼろ夜のかたまりとしてものおもふ

同

吹越に大きな耳の兎かな

同

ほとんどが旅の句である。楸邨は旅によって自然を別の角度から発見し、自然の豊かさを体験してゆくのであろう。

家にいて生まれたのは「おぼろ夜のかたまりとして」という幻想的な句であると思う。亡き人達と一かたまりとなつてものおもいに揺れる楸邨がうかぶ。家にいても遙かな過去や今日という今への時間の旅を往来しているようだ。「吹越に」の句は「岳の彼方の未知のものに惹かれ」る楸邨の瑞々しさと「大きな耳の兎」の無心さとが生かされた作品といえる。

『吹越』の主題は旅であり、時間の旅人という楸邨の自覚が生かされた句集である。初期・中期の頃の自己を追求してがんじがらめであつた楸邨の句境を大きく広げたのは「奥の細道」やシルクロードの旅中の時間であつたのであろう。『まぼろしの鹿』よ

りは楸邨の意向を容れたせいか、楸邨の意気込みが感じられ、成熟した句が並んでいて、『吹越』は楸邨の句業の頂点の作品集と
思う。

『怒濤』

「あとがき」(＊昭和)五十八年隠岐をふたたび訪れた時、牡丹に打ちよせる怒濤が忘れがたいものだったので、いろいろ考へた末今度の集の題にした。(中略)六十一年一月三日、妻知世子が永眠した。生涯の上でも俳句の上でも大きな伴侶だつたのでこれは手いたい打撃だつた⁽²⁹⁾。(以下、略)

ふたたび隠岐

撼りあがる怒濤眼中に撼るる牡丹

『怒濤』

ふくろふに真紅の手毬つかれをり

同

天の川わたるお多福豆一列

同

朧にて昨日の前を歩きをり

同

永別 十一句(中四句)

豪霜よ誰も居らざる紅梅よ

同

霜柱どの一本も目ざめをり

同

冬木立入りて出でくるものなし

同

冬の蝶とはのさざなみ渡りをり

同

『怒濤』は楸邨が八一歳の時に刊行された生前最後の句集である。「撼りあがる怒濤」という措辞には表現力の衰えが感じられない。また「ふくろふに真紅の手毬」「天の川わたるお多福豆」「朧にて昨日の前」という幻想的な句を発表して当時の俳壇の注目を集めている。最も感動的なのは「冬の蝶」が亡き夫人のように見える「とはのさざなみ渡りをり」の句である。「手いたい打撃だつた」(『怒濤』「あとがき」という夫人との永別の際してこのように真摯で美しい句を楸邨は詠むことができるのである。

難解で無器用に、俳句の上の自己探求、自分が真に見出し把握することを「感合」といい、その「真実感合」の句作態度にこだわりつづけた楸邨が長い努力のすえに最晩年に、物語のような時空を俳句という短い詩型に容れることを可能にしたのである。楸邨の後期の句業はそのことにおいて評価されねばならないと思う。

書句集『雪起し』

「あとがき」 「句を詠むときはペンや鉛筆で手帖に書きつける習慣だった。若い頃からの長い習慣を変えてみようかなと思ひたつたのは、昭和四十年代に入ってからだつたと思ふ。

(中略) そのうちに、いつの間にか硯や墨に心を惹かれはじめてゐる自分に気がついた。(中略) 硯に魅力を感じはじめると(中略) いつとはなしに句を詠むことと字を書くこととが同時になつて、一つ動作として行はれる習慣が出来あがつてきた(中略) 句は心中にひらめいてきた感動を把握するにあたつて、文字を忘れて句と自分が一つになつた世界に入つてゆかなくてはならない。そして句中に入りきつたところで一つの勢が生れてくるのを見のがさずにとらへて(中略) 一気に一句を生み出さなくてはならない。(中略) 私が気がついた時、いつの間にか乗りかけてゐたのは、この硯と筆とを通して一気に句の勢に乗るといふゆき方だつた(中略) 特定の題目のないときは、静かに墨を磨つてゐるうちに自づと心が一つのものに向つて傾いてゆく。これは牡丹のやうな自然のものに向ふときでも、日常生活の中のさまざまのできごとを扱ふ場合でも、紙に向つてゐる間にきらきらと光る核のやうなものが見えてくれればもうしめたものである。(中略) 奇妙なことにかうした核のやうなものが見えはじめると、句の

世界は渦を巻いたり、流動を起したりして、何か勢のやうなものが生れてくる。この勢のやうなものは筆に墨汁を吸はせて凝つと構へてゐると、おのづから言葉を巻きこんでくる(中略) ものの勢の動き出したとき、きらきら光る核の消えてしまはないうちに言ひとることが何より大切なのだ。やりかけて心が他の方向に向ふことが最も危い。もう少し巧い句にしたいとか、もう少し字をよく書きたいとか考へはじめると、これはもう本来勢に乗つてゆかうとするゆき方からいふと、別の事になつてしまふ。(中略) 旅の例をとつてみると、これはどこが感動を誘ふのか予め定めては置かれぬのが常である。どうかすると一つの感興もはつきりしないうちに次から次と目につくものは増えてくる。(中略) さういふときは感動の核になりさうなものを、できるだけ勢に乗つてメモにとる。(中略) 一部分であらうと単語であらうとぐいぐい手帖に書きつけておく。(中略) 次に詠むことと書くことを一つにする場合にあたつて、もう一度その半端の部分を記憶の中から再生して(中略) きらきらとする感動の核、旅のさなかに動いたものの勢を探りあてようとする。これは難しいことだが「生きてゐる時間」として大切にしなければならぬものだと思つてゐる。「生きてゐる時間」は記憶の表面を撫

で廻すこととはちがふ。「生きてゐる時間」の中から何とかしてもう一度その時間を再現してみる努力だと思ふ。私はかうした「生きてゐる時間」の中に入りこんでそこに心を集中することで、ともするとばらばらになつてしまひやすい一句の核のやうなきらきらするものを、見とめたり聴きとめたりしたいと念じてゐる（中略）この集の名を「雪起し」としたのは、雪を呼ぶ雷鳴が好きだつたことによる⁽³⁰⁾。」

百代の過客しんがりに猫の子も

『雪起し』

おぼる夜は母の囁く浅野川

同

海に雪ふるさとのなき大男

同

『雪起し』の長文の「あとがき」には書句という句作の方法や俳句への考え方が詳しく述べられている。書句という新しい方法を試みるのは「昭和四十年代に入つてから」とある。『まぼろしの鹿』の発刊が昭和四二年一二月であるから、この句集の中で句作方法がその方向へ変わったと考えられる。把握した句の核というものの勢いを消さずに文字にしてゆく、対象と自分との間に流れる「生きてゐる時間」を詠む、そのことに徹するための一方法

であつた。

『まぼろしの鹿』『吹越』『怒濤』の成熟した句境はそのことで開かれた一面である。楸邨の八つ目の特徴として書句という方法が加えられる。楸邨は流動する「生きてゐる時間」を求めていた。句風の安定を怖れ常に「吹越のくる岳の彼方の未知のものに惹かれて」いる。

「百代の過客」は芭蕉の「奥の細道」の冒頭部分「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり、舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす」にある言葉を取り入れた句である。芭蕉研究者として「奥の細道」を何度も歩いた楸邨が「老をむかふる」頃になつてふと「月日は百代の過客」の、旅人という意味の「客」という言葉が胸に湧き、俳句にとりつかれて老いを迎えた自分と、柔らかな生まれだての「猫の子」とを対置し、なおかつ「猫の子」に未来を重ねて詠んだものである。「猫の子」の「も」の中に「我也」という楸邨の思いがこめられていよう。

楸邨の最大の特徴として九つ目に芭蕉への傾倒をあげなくてはならない。私達は誰も時間を旅する旅人であり、楸邨は少年時代から駅長の父に従つて東北の各地を転々としたところから「ふるさとのなき大男」という自画像の句が生まれている。

遺句集『望岳』

「後記―句集成立の経緯につき」 「収めるところは、昭和六十一年（知世子夫人歿後）より平成五年（楸邨歿年）までの句である。（中略）楸邨さんと私はざつくばらんに言つて、ウマが合うところがあつたのだと思つている。私の選択にねがわくば大過なからんことを。楸邨はあつぱれ天下第一等の俳人だったと、選後の感想は、それに尽きる。／一九九六年三月 大岡信⁽³¹⁾」

牡丹雪土につくとときふとためらふ

『望岳』

母、我を孕りし時、山梨県猿橋を越えしといふ、一句

目ひらけば母胎はみどり雪解谿

同

友となり妻となり亡くて牡丹となり

同

大出目金やあ楸邨といふらしき

同

不満いつばいに生きてゐるなら虹に告げよ

同

「ふとためらふ」牡丹雪や「目ひらけば母胎はみどり」「友となり妻となり亡くて牡丹」という把握の繊細さはとても八〇歳

を越した俳人の作とは思われない。「大出目金やあ楸邨」もユーモアがある。多彩で独自の境地というに相応しい句が『望岳』に遺されている。「不満いつばいに生きてゐるなら虹に告げよ」は八八歳の没年に発表された句である。初期の『寒雷』の「翺雲人に告ぐべきことならず」の句への応答解説のようにも解釈できる句である。人間探求派の六二年の句業の最後にふさわしい作品と言うことができる。

おわりに

以上の楸邨の全句業における一五の作品集を検討した中から抽出した楸邨の特徴を整理してみる。

- 1、自分の俳句の方向を自分で動かしていくこと
- 2、短歌への嗜好
- 3、クリスチャンであった父譲りの世界観
- 4、子規句鑑賞を通してユーモアや諧謔への理解を深めたこと
- 5、硯や書などの古美術への興味
- 6、幻想的な句を詠む志向
- 7、シルクロード等の異質の風土詠への挑戦

8、書句という発想

9、西鶴研究を経た芭蕉への傾倒

これらの特質が総合的に作用しあつて、楸邨の後期の多彩で独自の境地の作品生成に与つたと考える。

最晩年の楸邨は自身の句業を振り返つて、亡くなる三年前に刊行した随筆集『遙かなる声』に次の一文を記している。

句集『寒雷』の「後記」のなかで、私はこんなことを書いて
いる。

日常生活の裏には、一度真実を求めて揺りたてると、思ひがけない深淵が口を開いてゐることを感ずる。私はかうした深淵の中から真に自分が見出したものを掴みだしたかつた。日常の常識と平安の底に、黙々と動いてゐる自分の真の姿を掘りだしたかつた。そして、それを鬱たる氣息の如く、俳句に充填したかつた。巧いとか拙いとかを離れて、さういふものを射とめうる目を欲した。

それから今日まで私の俳句を作ってきた道は、この平凡な一

筋を辿ることに尽きたといつてよい⁽³²⁾。

単なる「写生」のみでなく、自分が真に見出し把握することを楸邨は「感合」とよんでいた。その「感合」によって「把握」したものを俳句に表現しようとするのが楸邨の、俳句に対する「真実感合」の態度である。「日常の常識と平安の底に、黙々と動いてゐる自分の真の姿」を把握し、それを「俳句に充填したかつた」とは、「真実感合」の句作態度を意味していよう。

『雪起し』の「あとがき」に書かれていた俳句の「きらきら光る核」とは「深淵の中から真に自分が」掴みだした「真実」を指しているであろう。それはまた北村透谷のいう「内部生命」に近いものとも考えられる。

楸邨はこの句作態度を、句業の初期中期後期にかけて深化させ自身の「真実感合」の俳句観として確立していったと考える。最晩年の多彩で独自の句境は、そうした積み重ねの結果であるということを本論の結論としたい。

句業の終始に、「自分の真の姿」を「俳句に充填したかつた」といい、自分の「俳句を作ってきた道」は、この「一筋を辿ること」に尽きた」という最晩年の楸邨の言葉は、「真実感合」の態度を一貫して押し進めてきた自負の言葉として聞くことができるも

のである。

〈注〉

- (1) 小檜山繁子「文献解題」(『加藤楸邨全集』別巻。以下、『全集』と略。昭和五七年(一九八二)十一月、講談社刊。以下、講談社刊は略。)四〇九―四一〇頁より引用。
- (2) 加藤楸邨著『加藤楸邨全句集』平成二二年(二〇一〇)一〇月、寒雷俳句会刊。

(3) 注(2)に同じ。但し、五八―六〇頁より引用。

(4) 水原秋櫻子「『寒雷』序」(『加藤楸邨全集』第一巻。昭和

五六年(一九八一)五月刊。)一三頁より引用。「初出」

『寒雷』昭和一四年三月、交蘭社刊。

(5) 「水原秋櫻子」項(執筆・石田波郷)(増補改訂版六刷『新潮日本文学辞典』。平成五年(一九九三)八月、新潮社刊。)

二三八頁より引用。「初版」昭和六三年一月刊。

(6) 「馬酔木座談会」(『加藤楸邨初期評論集成』第四巻。平成四年(一九九二)四月、邑書林刊。)一四二―一四五頁より引用。「初出」「馬酔木」昭和一四年七月号。

(7) 注(2)に同じ。但し、六九頁より引用。

(8) 加藤楸邨著「西鶴俳諧の展開」(『全集』第一二巻。昭和

五六年(一九八一)八月刊。)四六五―四六九頁より引用。同「解題」(執筆・石寒太)に、これは「昭和一五年三月、東京文理科大学卒業時に書かれた論文で」「当時の題名は「談林俳諧―西鶴俳諧の展開」であったが」全集「所収にあたって」「正した」とある。

(9) 注(2)に同じ。但し、八七頁より引用。

(10) 注(2)に同じ。但し、一一五頁より引用。

(11) 中村稔「加藤楸邨という小宇宙」(岩波文庫『加藤楸邨句集』「解説」。平成二四年(二〇一二)五月、岩波書店刊。)五〇五頁より引用。

(12) 加藤楸邨著「夜の目」と「昼の目」(『達谷往来』昭和三年(一九七八)六月、花神社刊。)一七五―一七六頁より引用。「初出」『水原秋櫻子選集』昭和三〇年七月、近藤書店刊。

(13) 東京三「新鋭月旦」(「俳句研究」。昭和一三年(一九三八年)八月号。改造社刊。)二〇二―二〇五頁より引用。

(14) 注(2)に同じ。但し、六一九頁より引用。

(15) 注(2)に同じ。但し、一八九頁より引用。

(16) 矢島房利「不惑前後」(『全集』第二卷「解説」。昭和五

五年(一九八〇)三月刊。)三八〇頁より引用。

(17) 注(2)に同じ。但し、二三九頁より引用。

(18) 加藤楸邨著「南京旦暮」(『全集』第九卷「沙漠の鶴」。

昭和五五年(一九八〇)五月刊。)一三九頁より引用。「初出」『沙漠の鶴』昭和二三年二月、大日本雄辯講談社(現・

講談社)刊。

用。「初版」昭和二七年一〇月刊。

(23) 注(2)に同じ。但し、二八四頁より引用。

(24) 加藤楸邨著「しづかなる力」(『現代俳句文学全集・加藤

(19) 田川飛旅子著「作家研究篇」(『加藤楸邨』昭和五八年(一

九六五)三月、桜楓社刊。)一四六頁より引用。「初版」昭和三八年三月刊。

(20) 注(19)に同じ。但し一五九頁より引用。

(21) 注(2)に同じ。但し、二五五頁より引用。

(22) 山本健吉著「加藤楸邨」(『現代俳句』下巻。昭和三〇年

(一九五五)四月、角川書店刊。)二一一―二一二頁より引

用。「初出」『寒雷』昭和二九年一月号。二八四頁より引用。

(25) 加藤楸邨著『現代俳句文学全集・加藤楸邨集』。(発刊年等は注(24)に同じ。但し、二七七頁より確認。

(26) 注(2)に同じ。但し、三六九頁より引用。

(27) 加藤楸邨著「俳句作りのつぶやき」(『全集』第九卷。「死の塔」昭和五五年(一九八〇)五月刊。)三四二―三四三頁より引用。「初出」『死の塔』昭和四八年九月、毎日新聞社刊。

(28) 注(2)に同じ。但し、四四六頁より引用。

(29) 注(2)に同じ。但し、四九三頁より引用。

(30) 注(2)に同じ。但し、五一六―五一八頁より引用。

(31) 注(2)に同じ。但し、五四九―五五〇頁より引用。

(32) 加藤楸邨著「古利根川のほとり」(『遙かなる声』平成二年一月、読売新聞社刊。)一六七頁より引用。

付章

年譜と文献

付章 年譜と文献

第一節 加藤楸邨年譜

第二節 文献資料

第一節 加藤楸邨年譜

明治三八年（一九〇五）

〇歳

五月二六日、父健吉、母・千佳の長男として生まれる。出生届は同年五月二八日、父によって山梨県北都留郡広里村（現・大月市）に提出されている。本名、加藤健雄。父の健吉は、明治二年一月八日、山形県酒田の最上川の河口近くの庄屋の子として生まれた。一四歳で漢学者であった父（楸邨の祖父）を失い「維新の瓦解」を経験し、一六歳の時に叔父を頼って北海道に渡る。叔父の交易を手伝いながら、アイヌ語の辞書のようなノートを作っ

ていたという。二十代の終わりに渡米を志し資金を得るために上京して鉄道員になり。宣教師に英語を学びはじめる。その機縁で、健吉は明治三二年七月二七日、横浜第二美普教会において畑純三郎（*Ⅱ純三）師より洗礼を受ける。

亡父健吉、若くして北海道に渡り、日本語、アイヌ語の手引きなどを作る、後、渡米を志して成らず、我の生るるや遂に身を鉄道に投ず、少年の頃、我に漢籍を読ましめき

新茶淹れ父はおはしきその遠さ

『穂高』

楸邨の生まれる前年から日露戦争が起こっていて出生の翌日は日本海海戦の日であった。

明治三十八年五月二十六日、日本海海戦の前日はわが生まれし日なり

苺食ふや日露の遠き誕生日 『雪後の天』

九月、日露戦争終結。健吉は出生を記念して当時配本の始まった三省堂の『大日本百科辞典』を「友となれ」と購入してくれた。

母の（福田）千佳は明治一八年一月二日、金沢に生まれた。

明治三九年（一九〇六） 一歳

父の勤めていた武甲鉄道は鉄道国有法の成立により国有化された。

明治四〇年（一九〇七） 二歳

一月二八日、弟の清雄生まれる。

明治四三年（一九一〇） 五歳

この頃父と対坐して、漢文を読む。獅子舞のあとについて、町はづれまで行ったりして、「いささか放浪癖あり」と言われたりもする。

明治四四年（一九一一） 六歳

九月三〇日、妹の愛が生まれる。

明治四五年・大正元年（一九一二） 七歳

東京の国分寺小学校に入学する。すぐに父の静岡県御殿場駅長転任に従って、御殿場の小学校に転校した。父が帽子の上から楸

郵の頭を掴んで「いい学校だぞ。健雄。これはいい学校だぞ」と励ましてくれたことや、表富士の偉容に打たれた記憶がある。この頃から静岡県駿東郡御殿場教会へ日曜ごとに両親と礼拝に通っている。御殿場教会の園部丑之助の回顧録に父の健吉は「名駅長」であったと記録されている。また内村鑑三はこの御殿場教会の園部丑之助を訪ねている。

少年の日を送った御殿場にて

土筆なつかし一錢玉の生きぬし日 『まぼろしの鹿』

大正三年（一九一四） 九歳

二月一日、母の千佳、御殿場教会の園部丑之助師より洗礼を受ける。

大正四年（一九一五） 一〇歳

福島県相馬郡原ノ町（現・南相馬市）の原ノ町駅長転任の父に従い、原ノ町小学校へ転校する。転校になかなかなじめなかったが「引っ込んでいないで、どっどっ中に飛び込んでやってみるこ」とだ」言う父の言葉と校庭の一本の櫻の木に励まされたという。

相馬郡原ノ町

今も目を空へ空へと冬櫛けやき

『まぼろしの鹿』

校庭には現在、楸邨句を刻んだ腰掛け石がある。

福島県相馬市の中村教会に楸邨の父健吉、母千佳が大正四年七月一日に御殿場教会から転籍した記録が残る。

大正七年（一九一八）

一三歳

父は岩手県一関駅長に転任したが、楸邨は卒業間近であったので知人宅に預かって貰い、原ノ町小学校を卒業する。

野馬追祭

野馬追も少年の日も杳はるかなる

『寒雷』

四月、岩手県立一関中学校に入学する。父の薦めで夏休みに一人旅をする。夏休みに一関から仙台、東京、東海道、北陸道を経て母の郷里金沢までを往復する。途中、米騒動や焼打ち事件を目撃した。愛書家であった父の書架からさまざまな本を取り出して読む。

北上川、一関中学生たりし頃常に歩き、啄木を愛誦せし

径あり

柳散る昔啄木のまた我が径

『穂高』

柔道、剣道、相撲に熱中する。また、近くの平泉から巖美溪に通ずる道の途中に、悪路王が田村麻呂と戦ったときに立て籠つたと伝わる達たつ谷こくの窟いわやがあり、ここにひとり時を過ごすことがあった。楸邨は後に書屋号を「達谷山房」としている。一関教会にはこの年の転入者に加藤健吉（父）、加藤千佳（母）の名がある。

大正八年（一九一九）

一四歳

一関教会で二月七日、デー・ビー・シュネーダー氏より洗礼を受ける。

大正九年（一九二〇）

一五歳

父が新潟県新発田駅長に転任したのに伴い、新潟県新発田中学校に転校した。ボート部へ入る。

大正一〇年（一九二一）

一六歳

父は新発田駅長を最後に国鉄を定年退職。金沢出身の母が郷里

に住みたいと主張し金沢へ転居。石川県立金沢第一中学校へ転校。
島木赤彦、長塚節、北原白秋を愛読。斎藤茂吉の『赤光』を図書館から借りて書写、次第に短歌の実作を開始する。

金沢教会原簿にはこの年の一月一九日に一関日本基督傳道教會より、加藤健吉（父）、加藤千佳（母）、加藤健雄（楸邨）が入會したと記されている。

弟清雄、二月二五日、金沢教会鈴木牧師より洗礼を受ける。
引越して間もなく、父は胸を病んで床に伏すようになり、生活の窮乏が始まった。

大正一二年（一九二三）

一八歳

金沢第一中学校を卒業。夢みていた第四高等学校への進学を生活苦のため断念し、石川県松任小学校の代用教員となる。その後、教会へ通う生活から離れる。一二、三円の月給はすべて母に渡し、宿直代を小遣いとした。同僚に勧められて作った短歌

棄てられた子犬が二匹藪かげで舐めあつてゐた寒い風の日

は、西出朝風の主宰誌に掲載された。任地松任の聖興寺には加賀千代尼の塚があり、よく生徒たちを連れていったが俳句にはま

だ興味がなかった。

松任は十九歳の頃教員たりし地
何もかも瓜まで小さく夢失せき 『雪後の天』

大正一三年（一九二四）

一九歳

松任小学校で図書目録作りを担当し多くの書籍と出会い、楸邨の「第一の濫読時代」といえる中で、西田幾多郎の『善の研究』に最も深い感銘を受ける。同書の「純粹経験」やベルグソンの言葉「飛ぶ生命・エラン・ビタール」などに惹かれた。

松任おかりやの大樹の走り根に坐してあんころ餅を食
ひ、読書に耽りしその思ひ出の大樹伐らると聞きて
残されし枝蛙ども何処へゆく 『怒濤』

大正一四年（一九二五）

二〇歳

二月七日、父・健吉死去。この時楸邨は

陋巷に命をはると二月七日父はまなこをひらかざりけり
父を焼く煙は見つつ満目の雪原に目はつむらざりけり

などの歌を作る。また

雪中榎榎多し、わが父、臨終に痰切によしとてこれを切望し、我雪中を走り求めしが手に入らざり

亡き父の待ちし榎榎ぞ一茶享けよ 『まぼろしの鹿』

父の死後、母と弟妹とともに上京、万世橋あたりの周旋屋に通ったが職が見つからず、父の友人の水戸の機関庫の区長をしている人をたより、弟は機関庫に働きながら水戸高等学校へ通う。楸邨は千波湖近くの小学校の代用教員となる。

大正一五年（一九二六・昭和元年） 二一歳

単身上京し牛込に下宿、小石川にあった東京高等師範学校併設の第一臨時教員養成所国語漢文科に入学、三年間、通いや住み込みの家庭教師をしたりして、苦学する。ドストエフスキー、ツルゲーネフ、芥川龍之介等を愛読する。通学の道すがら歩きながらも、電車の中でも本を読んだので後にいう『歩行的思考』の源流』といえよう。この時期を楸邨は「第二の濫読時代」と回想している。『萬葉集』の山上憶良などに興味を持つ。学校では諸

橋轍次、吉田弥平（水原秋櫻子の岳父）、福原麟太郎などの先生方の講義を受ける。

福原麟太郎先生永逝。二十代に入りし頃、先生よりトマ

ス・ハーデーの講義を受く。多くの短篇の中に『Son's

Veto』^{ヴァイエット}「息子の拒否」ありて深く心にとどむ

“Son's Veto”はひとりかく読めと眼中雪 『怒濤』

昭和二年（一九二七） 二二歳

この頃、矢野チヨセ（後の知世子）と知り合う。チヨセは明治四二年一月二〇日、新潟県東頸城郡安塚の生まれで、この年、浅草で河豚料理店を営む兄・徳三郎を頼って上京していた。勉強熱心で通信教育を受け、その課題について質問、楸邨との交際が始まった。

帰しやらばひとの見む子をさよふけの霜凝る道に見送りにけり

という短歌は、楸邨がチヨセに贈った本の見返しに書かれたものである。

昭和四年（一九二九）

二四歳

三月、第一臨時教員養成所を卒業。多くの借金が残ったという。埼玉県の粕壁中学校（現、春日部高校）に奉職、国語、漢文の担当となる。チヨセとの結婚を決意、チヨセは時折粕壁に出かけて来て、二人で古利根河畔を散策した。この年、粕壁中学校の小林伊三郎校長の媒酌で楸邨はチヨセと結婚した。

古利根川

芹の根も棄てざりし妻と若かりき

『吹越』

小林校長の方針で先生対生徒のスポーツ対抗試合が盛んで陸上、野球、卓球、テニス、剣道、柔道に楸邨も参加し、柔道では大将を務めたりしたという。俳句も盛んで先輩教員の菊地烏江や石井白村らに強引に誘われ、俳句を始めることとなった。初めての作は「病み鶏のひとり歩きや小六月」、この句を同僚に笑われて発奮し「ひびわるる炬燵やぐらを縛りけり」を投句、指導していた飯塚雨村や小島十牛に褒められた。「小六月」の句を楸邨の処女作とすれば、楸邨の作句開始は昭和四年一二月頃といってもよい。俳号は最初「冬村」、次に「柀村」最後に、万葉集の山部

赤人の「烏羽玉の夜の更けゆけば久木生ふる清き河辺に千鳥しば鳴く」の歌の「ひさぎ」から「楸邨」となった。雨村と十牛は共に粕壁中学校の教員で村上鬼城門であったことから、句会稿は鬼城に送られていた。楸邨は『鬼城句集』を購入、鬼城の「残雪やごう／＼と吹く松の風」「ゆさゆさと大枝揺るる桜かな」「木菟のほうと追はれて逃げにけり」「雀の子大きな口をあきにけり」「冬蜂の死にどころなく歩きけり」「闘鶏の眼つむれられて飼はれけり」などの句に心打たれ、句作に力をいれるようになった。後に、楸邨は「師系からいふと、村上鬼城、水原秋櫻子の両先生に師事した」と書いている。

昭和五年（一九三〇）

二五歳

村上鬼城の厳選で知られる俳誌「山鳩」の「山鳩雑詠」欄には昭和五年五月に

春暁やゆたゆたみつる濁り汐

ホカホカと日あたる岩や春の山

の二句が「粕壁 柀村」名で掲載されている。

九月九日、長女・道子誕生。「老子」の冒頭の言葉から命名さ

れた。

「粕壁の安孫子医院に診療に来ている水原先生という人は『ホトトギス』の水原秋櫻子ではないか」と先輩教員の菊池烏江が言い出し、訪問して楸邨もはじめて秋櫻子と出会い「馬酔木」に入門する。秋櫻子の俳誌「馬酔木」一二月号に「粕壁 加藤柗村」の名で

遠筑波早稲は穂をあげたるもあり

が一句初入選している。昭和六年一月号「馬酔木」に

物の葉にいのち終りし蜻蛉かな

が、また同年二月号に

畝つくるあとより麦を蒔きにけり

などの秋の句が認められるので、昭和五年初秋には句作を開始していたと考えられる。

昭和六年（一九三一）

二六歳

古利根川、元荒川の河畔を散策しながら師の秋櫻子は俳句革新に賭ける決意や苦悩を楸邨に語る。この年の「馬酔木」五月号より「楸邨」号を用いた作品

鴨鳴いてどこかに月のありにけり

鴨落ちてやゝありて波の光りけり

の二句が入選している。

粕壁中学では四年生に「早蕨会」を作り俳句指導を始める。「萌え出づる早蕨のやうに瑞々しい青年や青年の心を保持する人々は、自然の中から汲めども尽きぬ生活の喜を謳ひあげることが出来る」とその会報の「付記」を「馬酔木」に載せており、「生活の喜を謳ひあげる」という俳句観が記されている。

夏、生徒を引率して乗鞍から上高地に出て徳本峠を越えた。この後、毎年のように登山をする。

九月、満州事変勃発。二四日、秋櫻子について、教員仲間の菊池烏江らと「馬酔木」両毛支社設立大会に出席する。

楸邨の活字になった最初の俳論「調べ」に関する研究の一例は秋櫻子の俳句革新宣言の「自然の真」と「文芸上の真」と

ともに「馬酔木」一〇月号（第一〇巻第一〇号）に同時掲載されている。「自然の真」と「文芸上の真」も原稿段階で見せられ、返答に困った楸邨は、「読ませていただきます」と家に持ち帰ったという。

昭和七年（一九三二）

二七歳

一月一日、次女明子誕生。

二月、「馬酔木」に

棉の実を摘みみてうたふこともなし

『寒雷』

の句が入選している。後に第一句集『寒雷』の巻頭句となった作である。

夏、奈良に旅し法隆寺へ。この折りの句

斑鳩の塔見ゆる田に藺は伸びぬ

『寒雷』

は、一二月発表の第一回「馬酔木賞」の二次選考に残った。常念岳、槍が岳に登る。

秋、榛名山に登り、火口原を歩く。

昭和八年（一九三三）
五月、「馬酔木」に

二八歳

あはれなる寄生樹さへや芽をかざす

『寒雷』

などの五句で初めて「新樹集」（秋櫻子選句欄）巻頭となる。

六月一一日、長男穂高誕生。

初夏、埼玉県種足の東印寺へ「馬酔木」の先輩、武笠美人蕉を菊池烏江と訪ねる。

八月八日、次女明子を疫痢で失う。一歳七ヶ月の命であった。次女のことを次のような作品に残している。

次女明子二歳にて死す

鼓動のただにかそけくなりゆくにいまは堪へかねて頼よせにけり

消毒剤のにほひのこれる室にをれば妻もひそかに来て坐りたり

明子二歳なりしが俄に病みて死す

荔枝^{れいし} 熟れ萩咲き時は過ぎゆくも 『寒雷』

明子死す

末^{うらがれ}枯^{がれ}に乗りて小さきは吾子菩薩 『穂高』

後にも

柳田国男先生逝く、この日また次女明子の日

青箸や乏しけれども庭芒 『まぼろしの鹿』

と多くの作を残している。

年末に

山茶花のこぼれつぐなり夜も見ゆ 『寒雷』

行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ 『寒雷』

などの五句で第二回「馬酔木賞」を木津柳芽と同時受賞。

この頃「馬酔木」では野球が盛んで、楸邨もしばしば参加している。

一月、師秋櫻子による俳句新興運動は連作俳句という手法を唱道、楸邨もその影響を受け、「馬酔木」のこの号で「新樹集」巻頭を得た作品は

この並木稻刈る音をはなれざる 『寒雷』

など、すべて上五が「この並木」で統一されていた。

三月、改造社より「俳句研究」が創刊された。

八月、「俳句研究」に「俳壇時評」執筆。この昭和九年までの句は第一句集『寒雷』「古利根抄」にまとめられ、師秋櫻子の影響を最も強く受けた頃の句群である。

昭和一〇年（一九三五） 三〇歳

一月、「馬酔木」同人に推挙され、自選句欄「当月作品」に句を発表するようになる。同時推挙は木津柳芽と加藤かけいであった。この頃から人間生活の動きを詠うようになる。中古自転車を手にいれ、教え子の家庭を訪ね

麦を踏む子の悲しみを父は知らず 『寒雷』

などの「農苦」の一連を句作するようになる。

五月、「馬酔木」に山口誓子が同人参加。

六月、「馬酔木」に「秋櫻子と誓子」を執筆し、これを歓迎する。

九月五日、次男冬樹誕生。

一〇月二七日、水原産婆学校での「馬酔木俳句会第百記念会」にて講演。

除雪車に雪降る海がうごきくる

『寒雷』

昭和十一年（一九三六）

三一歳

二月、二・二六事件起こる。教え子が多数、兵として渦中にいることを知り、衝撃を受ける。

憤りわが踏む雪に雪明り

『寒雷』

前年に亡くなった五十崎古郷の遺族後援のための短冊頒布会に「馬酔木」同人として参加。

七月、白馬登山、頂上で台風に遭う。粕壁中学校赴任以来、公私にわたり深く付き合った菊池烏江が北海道釧路へ転任。

古利根の浮葉のみだれおもふべし

『寒雷』

一〇月、「新潮」に以後三年三ヶ月にわたる「俳壇展望」の連載を開始。

かなしめば鴟もす金色の日を負ひ来

『寒雷』

昭和十二年（一九三七）

三二歳

四月、以前からわだかまっていた教員生活と文学の志との間の苦悩を師秋櫻子に見破られる形で上京をうながされる。すでに二男一女を抱える身であったが師秋櫻子の岳父であり臨時教員養成所時代の恩師吉田弥平（太古）、妻知世子らの強い励ましもあって、中学校を辞し、東京文理科大学国文科へ入学、一〇歳近く年少の人々、例えば小西甚一、茂木楚秋、皆川弓彦、峯村文人らと一緒に学ぶことになった。能勢朝次先生の指導を受ける。「馬酔木」発行所の専任であった石田波郷と机を並べ、神保町や銀座界隈を共に歩き俳句談義をした。小石川区大塚坂下町四〇番地（護国寺裏）に転居。大学時代は学生服で押し通す。生活のため秋櫻子家や宮本東野家の家庭教師をする。俳句の中に人間を生かそうとい

う句作の覚悟が固まっていく。楸邨俳句の初期の句群「都塵抄」が「馬酔木」に発表されていく。

七月七日、日中戦争勃発。

一月、「俳句研究」の「新鋭十人集」に、長男穂高を連れ仙台、中尊寺、毛越寺、高館、達谷窟、巖美溪を廻った作「新秋羈旅」一五句を発表。

一二月二三日、三男明雄出生。この一年間「馬酔木」に「俳句表現講座」を連載。日中戦争は次第に激しさを増し、武笠美人蕉、中西香夢らが出征。この年、石田波郷は主宰誌「鶴」を創刊。

学問の黄昏さむく物を言はず

『寒雷』

昭和一三年（一九三八）

三三歳

一月、大野林火を横浜に訪ね、伊勢佐木町や外人墓地、中華街を歩く。

二月二日、湊楊一郎著『俳句文学原論』出版記念会（新宿中村屋）に出席、嶋田青峰、松原地蔵尊らと同席。

四月五日、師秋櫻子の発案により波郷、瀧春一と共に夜桜吟行実施、上野公園、墨田公園を経て赤坂へ。

五月、「馬酔木」にこの夜桜吟行の句を「観桜夜情」として発

表。

夜桜の瓦斯燈の蔭に見しは犬

『寒雷』

七月一日、前年「馬酔木」に連載した「俳句表現講座」をまとめ『俳句表現の道』（交蘭社）を刊行する。楸邨にとって初めての単行本である。

八月、「俳句研究」の「俳壇中堅集」に「都塵抄」一八句を発表。同じく「文藝」に「炎夏・戦争」五句発表。

秋、武笠美人蕉の戦死を知り、波郷、春一と村葬に参列、浅間山の轟く噴火音を聞く。

一〇月、「馬酔木」の同地競詠に参加。
晩秋、同窓の小西甚一、峯村文人らと京都、奈良へ。この頃宰相

山へ誓子を訪う。
一二月、「中央公論」に「都塵秋風」五句発表。

鯛雲人に告ぐべきことならず

『寒雷』

昭和一四年（一九三九）

三四歳

一月、「馬酔木」（通巻二〇〇号）に「都塵抄」四六句発表。

二月、「俳句新聞」に「風霜」五句発表。

三月一日、練りに練った第一句集『寒雷』（交蘭社）刊。「古利根抄」「愛林抄」「都塵抄の三章に分け、師水原秋櫻子の「著者のかゞやかしき詩魂に触れたまへ。」という「序」を開巻に戴く。「新潮」に「寒雷」五句発表。

四月、「俳句研究」に「寒き風塵」三二句発表。下旬、波郷、同窓の茂木楚秋と木曾へ、新宿「モナミ」で出発の乾杯をするうち、話が前年に出版された島崎藤村の『夜明け前』に及び楸邨は夜一〇時過ぎ閉店した紀伊国屋の裏口を叩き起こして『夜明け前』上下二巻を買って車中で読んで行った。

木曾谷の木魂の寒さ相よべり

『颱風眼』

この旅の終わりは木曾から名古屋に入り、加藤かけい・かすみ夫妻を訪ねた。

七月、「馬酔木」の「馬酔木」座談会」で師秋櫻子から

鰯雲ひとに告ぐべきことならず

『寒雷』

などの作を例にあげて、難解ではないかという疑義が出された。

八月、それらを受けた形で「俳句研究」誌で「新しい俳句の課題」の座談会が持たれた。出席者は楸邨の他に中村草田男、石田波郷、篠原梵、司会は山本健吉。この座談会の発言内容から出席者達は「人間探求派」と呼ばれるようになった。

上旬、身内の問題から台風下に仙台の弟を訪い、山寺立石寺、天童温泉、常磐線で原ノ町を通り帰京。その「颱風紀行」の一句。

昼寝覚ひとの嘆息を背にしたり

『颱風眼』

晩夏、長野県南佐久の野辺山高原、松原湖へ。二五日、石田波郷句集『鶴の眼』の出来上がった当日、渋谷円山町石川亭の記念会に出席。

九月、「文藝春秋」に「疑」七句発表。同じく「改造」に「炎巷」一二句発表。

秋、卒業論文をまとめる旅で、鎌倉鶴丘と共に武相国境を歩く。

満山の秋風鷺に吹きわかる

『颱風眼』

十一月、「俳句研究」に「秋風の街」二四句発表。同じく「中央公論」に「晴曇」七句発表。二五日、入隊直前の茂木楚秋壮行

会（渋谷石川亭）に出席、相馬遷子はその日の「楸邨氏の語る言葉は、その一つ一つが楸邨氏自身である」と綴る。

歳晩、新宿での松山高校俳句会に出席、篠原梵、中村草田男、八木絵馬、林原未井、畑耕一らに会う。

寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃

『寒雷』

昭和一五年（一九四〇）

三五歳

一月三日、中村草田男宅を訪ね、中島斌雄と相識る。「馬酔木」に「人間の闇」を、初めて「達谷山房」号にて執筆。

二月二五日、床屋を辞めて会社員になるという石川桂郎「人生壮行会」（渋谷石川亭）に出席。

三月、「文藝」に「寒夜誰彼」五句発表。一〇日、前年一二月まで三年三ヶ月「新潮」に連載の「俳壇展望」をまとめ『現代俳句の中心問題』（交蘭社）刊。その「序」に、現代俳句の問題点は「俳句の詩型が限定されたものであり、之に立ちむかふ私共の表現意欲が無限であるといふアポリアを負ふところにある」と述べる。二五日、第二句集『颱風眼』（三省堂）刊。この月、東京文理科大学を卒業、卒業論文「西鶴俳句の展開―談林の俳諧研究」。

四月、東京府立第八中学校（現、小山台高校）に勤務、同校に

前年卒業していた皆川弓彦が奉職、同じく同窓の峯村文人は府立第八高女に奉職、三人でよく品川や渋谷で飲み語り合った。アンソロジー『現代俳句』（河出書房）第一巻に「加藤楸邨集―心崖なす」を収載。

五月、「文学界」に「狐狸のごとし」五句発表。石田波郷主宰の「鶴」の「漫談つたや雑記」に「楸邨という人物は酒など飲むと非常に人が懐かしくなる好もしい性格の所有者で」「一種怪しげな唸り声を発してとびついてくるのである」と記されている。この頃楸邨は「鶴」の同人会に幾度か出席している。

初夏、「俳句新聞」発売元の交蘭社社主・飯尾謙蔵より同新聞の改題改編の話があった。

六月一二日、それについて有志の話し合いが神田竹むらで持たれ、俳誌創刊の打合せとなった。出席加藤楸邨、宮川道男、和知喜八、飯尾謙蔵、鎌原幹、関冬日子、皆川弓彦、鎌倉鶴丘、青池秀二、荒川曉浪。後日、楸邨は誌名を「寒雷」、表紙絵に婆折羅神将像を用いることを決定。

七月四日、「俳句研究」八月号用の宮本東野、林原未井との鼎談に出席、途中で議論が全く合わなくなった。

我が名楸邨汗の沈黙しじまに呟つぶやかる

『穂高』

一〇月、「俳句新聞」の改編として俳誌「寒雷」を創刊主宰、この巻頭言に楸邨は「俳句の中に人間に生きること」を第一に重んずる。生活の真実を地盤としたところの俳句を求めると述べて作風の向かうところを示した。

一二月一〇日、主宰誌創刊を記念して句集『寒雷』増補版（「達谷抄」四六句増補）を「寒雷叢書第一篇」（交蘭社）として刊行。二五日、第三句集『穂高』（甲鳥書林）刊。この年から芭蕉の全発句評釈という計画をたて、取り組みはじめた。二月から新興俳句弾圧事件がはじまり、翌年にかけて多くの俳人が検挙され俳句を放棄させられた。

臺^{ひきがえる} 誰かものいへ声かぎり

『颱風眼』

昭和一六年（一九四一）

三六歳

一月、「寒雷」に「芭蕉表現の研究―貞門期における芭蕉の表現」を三回連載。

二月、世田谷区下代田二二八（崖下の家）へ転居。

三月、恩師能勢朝次先生を訪い「野晒紀行」に話が及び隠岐の旅を思いつく。

春の地震師弟が黙す湯の沸り

『吹越』

二四日、『野晒紀行』と『新古今和歌集』を持って隠岐へ。芭蕉の俳諧精神が遠く後鳥羽院の「実ありてかなしびをそふる」ひとりごころに通じるといふ思いから、院の「遠島百首」をなした隠岐を体験しようとした旅であった。三一日、帰京途中で小西甚一、皆川弓彦と合流、東海道線車中、連歌「松の芯」（一五韻）を巻く。

四月、「文藝」に「崖下の家」五句発表。「隠岐」の百句を手に斎藤茂吉を訪う。その夜、東京文理科大の小西甚一、峯村文人の開いていた国文研究会「丘光会」に出席。一三日、石川桂郎（當時は桂朗）の発案により波郷と三人で横光利一を訪ねる。「俳句研究」の「中堅作家自選句集」特集に、既刊の三句集から四八句抄録。

五月、「知性」に「雪暗」五句発表。「俳句研究」に「隠岐」百句、掲載予定であったが中止。

六月、「文藝春秋」に「怒濤」五句発表。

八月、京都へ頼原退蔵を訪ねる。去来の墓に参る。

静かなる午前を了へぬ桐一葉

『雪後の天』

この頃から発想契機を中心とした「芭蕉全発句評釈」に没頭してゆく。

一月三〇日、「寒雷」対「高等師範」の野球の試合、一塁四番で出場した楸邨はファインプレー、「ハツと思つた瞬間に、球がグラブに入つてゐた。俳句に於ける真実感合の境地」という。この月より翌年三月にかけて「寒雷」に「俳句的真実」を連載。一二月八日、渋谷白十字にて小西甚一の『梁塵秘抄考』出版記念会出席。太平洋戦争始まる。

十二月八日の霜の屋根幾万

『雪後の天』

昭和一七年（一九四二）

三七歳

一月、「寒雷」に昨年「俳句研究」に発表予定であつた「隠岐」九九句を掲載。三日、『赤彦歌集』を携え上諏訪へ。

吹雪つつ夕焼くるらし諏訪の湖

『雪後の天』

三月、斎藤茂吉を再訪、歌集『白桃』を贈られる。

これぞ茂吉黒外套のうしろ肩

『雪後の天』

四月、波郷は「馬酔木」を離れる。楸邨は「馬酔木」に作品を送り続けるがこの号を最後に、同人として作品が掲載されなくなる。

六月、「文藝春秋」に「爆音下」七句発表。同じく「文学界」に「短歌俳句特集」に「燕」一二九発表。

八月、金沢から沢木欣一らを伴い北陸を歩く。市振、親不知、出雲崎と芭蕉旧跡を訪ね、新潟で皆川弓彦、峯村文人と合流して佐渡へ。来月小樽へ転任する文人との送別を兼ねた旅であつた。

九月、峯村文人が府立第八高等女学校から小樽高等商業学校への転任に伴い、楸邨が第八高女（後の、八潮高校）に転任。

白萩の揺れかはりたる一枝かな

『雪後の天』

初秋、金子兜太と秩父へ。

唐黍の秩父にありし一日かな

『雪後の天』

一〇月一〇日、紀行随筆集『隱岐』（交蘭社）刊。

晩秋、清水清山の凱旋雅会に出席。

一月二〇日、有志による国文学研究会「如丘会」（指導・能勢朝次、会員・三好達治、峯村文人、小西甚一、皆川弓彦、金児祝夫ら）に出席、この日の小西甚一の発表に触発され楸邨は齋藤義光を誘って、福島県の靈山へ。

幾人をこの火鉢より送りけむ

『雪後の天』

昭和一八年（一九四三）

三八歳

一月三十一日、「総説」 穎原退蔵「評釈」 加藤楸邨（寛文・延宝・天和・貞享）『芭蕉講座・発句篇・上』（三省堂）刊。芭蕉の作品の表現契機がいかに内面化されてゆくかを、一句一句について深く追究したものである。

寒木瓜のほりにつもる月日かな

『雪後の天』

三月、母を伴って四万温泉へ。「文藝春秋」に「金冠」七句発表。
五月、多忙のため第三水曜日を面会日にすると「寒雷」に掲載。

六月一七日、一ツ橋講堂の「芭蕉講座」にて「芭蕉の現代的意義」を講演、他に中村草田男、中村俊定、能勢朝次、穎原退蔵、久松潜一らの講師により三夜連続の講座。二六日、清水清山、本多功の帰還を祝う会に出席。

七月、「新潮」に「アツツ島戦報を聴く」五句発表。

八月、渡辺朔と安達太郎山、裏磐梯、酒田、羽黒山へ「蝸紀行」。
九月、石田波郷応召。金子兜太の応召送別会に出席のため奥秩父の二木屋へ。

鴉の舌焰のごとく征かんとす

『雪後の天』

一〇月、一日発行の第八号「文学報国」に「新穀」五句発表。
沢木欣一の応召を送って大洗へ。

十一月、松尾芭蕉二百五十年忌に際し「俳句研究」に「芭蕉復興の精神」、「文学報国」に「芭蕉と現代」を発表。二〇日、第四句集『雪後の天』（交蘭社）刊。

蝸やここより径は南谷

『雪後の天』

昭和一九年（一九四四）

三九歳

一月、肺炎。「知性」に「冬に入る」五句発表。
三月、小西甚一の結婚式のため伊勢へ、京都で秋山牧車と会い、奈良を巡る。

五月、「寒雷」にこの旅「啓蟄紀行」三一句を発表。

六月一〇日、『芭蕉講座・発句篇（貞享・元禄三年）・中』（三省堂）刊。改造社囑託、大本営報道部囑託の形で土屋文明、歌人の石川信雄と共に中国大陸へ渡ることが決定。

雲の峯夢にも湧きてかぎりなし 『火の記憶』 『砂漠の鶴』

七日、東京駅出発。琵琶湖畔に病臥中の茂木楚秋を見舞う。朝鮮半島を北上、一六日、北京着。万里の長城に沿い、八達嶺、張家口、大同、綏遠へ、ここから石川信雄と共に蒙古に入り百靈廟を経てゴビのトフミン・スムに達し活仏に逢う。八月下旬、包頭を経て山西省太原に至り、ついで開封から南京に入った。九月初め、蘇州を経て、九月一〇日、上海に出た。烈しい下痢で病臥。二四日、土屋文明、石川信雄と別れ、単身空路をとって北上、途中済南に不時着。天津に滞在中、鎌原幹、岡勇に会う。一〇月一四日、勇と共に渤海を渡り大連に着き、二二日、ハルビンに入った。二七日、下関帰着。二九日、京都へ迎えに来た知世子と信州に集団

疎開をしていた穂高、冬樹を訪ね、十一月二日、帰宅。
一二日、高幡不動にて帰還祝いの会。

身に沁みて夕映わたる門の石 『火の記憶』 『砂漠の鶴』

一二月、「寒雷」に「渤海航」二三句発表。帰国してみると連日の空襲下、教え子の女子勤労隊と大森の鉄工所に勤める日が続いた。

天の川鷹は飼はれて眠りをり 『砂漠の鶴』

昭和二〇年（一九四四） 四〇歳

一月、元旦にも空襲があった。

霜柱この土をわが墳墓とす 『火の記憶』

この頃の句は空襲日記の様相を呈し、句作によってのみ生きていることを確認していたかのようである。

「寒雷」は二月号より休刊。「文藝春秋」に「ゴビ沙漠行」七〇句を発表。

三月、「新潮」に「黄河」三三句発表。六日、荏原区荏原五ノ二八五へ転居。一〇日、東京大空襲。二八日、学校の卒業式に出席。この頃になると親族知人が疎開を勧めるが楸邨は東京に住み続ける。食糧事情も悪化の一途、知世子の摘む山野草で飢えを凌ぐ。

五月二三日、母を金沢へ送り届けて帰った深夜、空襲に遭う。二四日、空襲によって家を焼失、病臥中の弟を負い、二子を求めて火中を彷徨する。家財、図書一切を焼失、書きためたリュック一杯の「芭蕉表現考」の原稿も灰燼となる。

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ

『火の記憶』

四月末から八月にかけての句帖を電車の中で紛失、楸邨俳句における記録の上で唯一の空白である。

八月一五日、日本無条件降伏、敗戦。米軍占領下に入る。

一本の鶏頭燃えて戦終る

『野哭』

九月二二日、七月一五日に永眠した知世子の父の葬儀に参列のため越後へ。

秋、九十九里浜へ。

十一月、秩父にて金子兜太の父金子伊昔紅に会う、同行、原子公平、菊地卓夫。

一二月二七日、仮寓を追われ、勤務先の第八高女の同窓会館二階に仮寓。

飢なめて流離悴むこともなし

『野哭』

楸邨の戦後が始まった。

昭和二十一年（一九四六）

四一歳

一月、軍国主義者の公職追放始まる。河野正夫らと東京都高等学校教員組合結成に奔走。

五月、メーデー復活。沢木欣一ら同人誌「風」を創刊する。

八月、北海道の阿寒、稚内に向瀬藻汐を訪ねる。函館の斎藤玄宅で皆川弓彦の戦死を知る。中村草田男の「加藤楸邨氏への手紙」（「俳句研究」七・八合併号）にて、戦争協力者と非難され、衝撃を受ける。

九月、休刊中の「寒雷」復刊。

一〇月八日、「寒雷」の故人追悼会を浅川大光寺で営む。

秋、皆川弓彦の遺骨を仮寓に迎える。

十一月、京阪へ。法師温泉へ。桑原武夫「世界」一〇月号に「第二芸術」を發表。

火の中に死なざりしかば野分満つ

『野哭』

昭和二二年（一九四七）

四二歳

前年より引きつづき戦争協力者としての批判の聲が四圍に満ちた。これらに対する答えの形で「俳句と人間に就いて―草田男氏への返事」を「現代俳句」一月号及び二月号に發表。

二月、「寒雷」二月号休刊。

七月、三八人の俳人により現代俳句協会を結成、その一人となる。

夏、北陸へ。「寒雷」は五・六・七・八・九月の合併号となる。

一二月七日、「近代詩討論会」に石橋辰之助、湊楊一郎、幡谷東吾らと参会。

Thou too Brutus!今も冬虹消えやすく

『夜哭』

昭和二三年（一九四八）

四三歳

二月一日、戦争が心に与えた深い傷痕を詠んだ第六句集『野哭』

（松尾書房）刊。一五日、隨筆紀行『沙漠の鶴―大陸俳句紀行』（講談社）刊。二五日、『芭蕉講座発句篇（元禄五―七年）下』（三省堂）刊。大田区北千束の現住所に自宅を造り移る。

三月、飯田龍太、石原八束に誘われ、秋山牧車と共に甲府の飯田蛇笏を訪問。帰宅後病臥。石田波郷、石橋辰之助も病臥。辰之助は急逝。波郷は「馬酔木」同人に復帰。

五月二五日、現代俳句選集の叢書として第五句集『火の記憶』（七洋社）刊。

六月、絶対安静。

九月、小康を得る。

一〇月、四男忍出生。

十一月、病勢、再び悪化、以後四年の療養生活に入る。

おのづからひらく瞼や牡丹雪

『起伏』

昭和二四年（一九四九）

四四歳

七月二〇日、新注国文学叢書『芭蕉句集』（講談社）刊。二五日、第七句集『起伏』限定五百部（榛の木書房）刊。『起伏』の「後記」に次のように記す。「『野哭』を出してから、一步踏み

出した生き方をひそかに庶幾してゐたが、はからざる病臥のために果しえないで、世の推移を蒲団の中からのぞいてゐただけに終つた。その点実に心苦しいものがあるが、以前の繁忙な生活にあつては、いろいろのことに紛れてゐた自分を静かに凝視することが出来たので、さういふ点で、一過程として自ら慰めることは出来る」。

この年、終始病臥。「芭蕉芸術の人的基盤」(未発表)執筆。
一〇月、「寒雷」一〇月号は創刊一〇周年記念号。

木の葉ふりやまづいそぐないそぐなよ

『起伏』

昭和二五年(一九五〇)

四五歳

一月、「寒雷」の句会に出席。

三月、「寒雷」三月号を「楸邨論特集号」とし金子兜太による「楸邨論断片―『野哭』『起伏』を中心として」、青池秀二、松原いはほ、斎藤義光、森澄雄らによる座談会「『起伏』をめぐつて」、「楸邨の横顔」(諸氏)、「師弟図」(丸山一彦)などを掲載。四月三〇日、新稿『俳句表現の道』(作品社)刊。

七月、「寒雷」六・七月合併号

九月、作品社解散のため、「寒雷」休刊。

一二月、矢島房利、知世子と信州の上田、別所、小諸、星野へ行き「浅間の麓」の句群が完成。

落葉松はいつめざめても雪降りをり 『山脈』

昭和二六年(一九五一)

四六歳

四月、「寒雷」復刊。NHKラジオで俳句の歴史について五回にわたり放送。

六月、小西甚一の学士院賞を記念し御嶽へ。

七月、「寒雷」六・七月合併号。

秋、岩手県に高村光太郎を訪ね、続いて秋田の油田帯を見学。

十一月、『俳句教室(俳句表現の道Ⅱ)』(創芸社)刊行。

『芭蕉講座俳文篇』第九卷に「芭蕉年譜」を執筆。前年に引き続き多くの楸邨論が発表された。

しづかなる力満ちゆき蟋蟀とぶ 『山脈』

昭和二七年(一九五二)

四七歳

三月一五日、角川新書『芭蕉秀句・上』(角川書店)刊。

五月二〇日、近代文庫・楸邨校閲『新しい季寄せ』(創芸社)

刊。

六月三〇日、角川文庫『加藤楸邨集（解説・山本健吉）』（角川書店）刊。

七月二五日―八月三日、青森県教育委員会並びに東奥日報の招きで青森で講演、のち恐山、岩木山麓へ。

九月一日、病癒えて都立八潮高校へ復職。

嶺の巖の十戸あまりへ鯖負ひゆく 『山脈』

昭和二八年（一九五三）

四八歳

三月、新潟俳句大会に出席のため越後へ、つづいて静岡の登呂遺跡を訪ね、詩人の村野四郎と伊豆湯ヶ島へ。

五月、知世子の第一句集『冬萌』（書肆ユリイカ）刊。

七月、福島、土湯、裏磐梯へ。

八月、「四国寒雷」大会出席のため、宇多津、阿波、道後へ。

昭和二九年（一九五四）

四九歳

一月、矢島房利、知世子と共に信濃角間温泉へ。

三月、御殿場へ。

四月、青山女子短期大学国文科教授に就任。五日、毎日ライブ

ラリ―『日本の詩歌』（高村光太郎編）担当「近代俳句」（毎日新聞社）刊。

七月二〇日、『芭蕉秀句・下』（角川書店）刊。

八月二九日、楸邨・知世子の銀婚祝賀（若葉荘にて）。

九月、鳳来寺山へ。佐久間ダムへ。

一〇月、上高地へ。関西へ。

人がまねし仏法僧の僧は濁る 『まぼろしの鹿』

この年「風」等にて俳句の社会性に関する議論が活発になり、

その中心をなす論者の多くは楸邨門下であった。

昭和三〇年（一九五五）

五〇歳

二月二五日、恩師能勢朝次先生永眠。

三月、加賀谷一雄追悼句会に出席のため秋田へ。

六月、第四回「寒雷」全国大会出席のため伊香保へ。

七月、吾妻山登山。同行、森澄雄、青池秀二、佐藤善信、知世

子ら。

一〇月一日、第八句集『山脈』（書肆ユリイカ）刊。

十一月、飯野哲二、大類林一らに誘われ鳴子尿前旧関から羽前

赤倉をへて山刀伐峠を越え尾花沢へ。
一二月、砂川基地へ。秩父鉦山へ吟行。

大き枯野に死は一点の朱とんぼ

『まぼろしの鹿』

昭和三一年（一九五六）

五一歳

二月、名古屋猿蓑会の帰途、内藤笈斗を訪ね、共に伊良子岬へ。

五月、尾形仂、大野林火、知世子と尾花沢の芭蕉祭に出席。

六月三―四日、「寒雷」一五〇号記念大会を東京上野博物館にて催し、三浦半島を一周。

七月、吾妻山再登山。二〇日、十和田湖から八甲田山に登る。

同行、秋山牧車、吉田北舟子。

秋、学生を連れて奈良へ。

冬、母と長女病む。この頃シベリウスの音楽に打ちこむ。

昭和三二年（一九五七）

五二歳

一月三一日、母永眠。

二月、歌人の木俣修と浅間温泉へ。

三月、山本修之助に招かれ知世子と佐渡へ。外海府を歩く。

四月五日、俳句文学全集『加藤楸邨集』（角川書店）刊。

六月三〇日、第六回「寒雷」全国大会出席のため熱海伊豆山へ。
八月、御母衣ダム見学。

一〇月、会津へ、田子倉ダム建設現場見学。

一二月、森澄雄と福岡、阿蘇、長崎、桜島に旅。

舟の窓より赤き風船運河のぼる

『まぼろしの鹿』

昭和三三年（一九五八）

五三歳

四月、信夫高湯へ。

七月、福島、山形の「奥の細道」踏査、出羽三山に登る。

八月一日、新潮文庫『楸邨自選句集』（新潮社）刊。

一二月、「寒雷」連載の作品「人間抄」を七二回をもって終了。

昭和三四年（一九五九）

五四歳

一月、「寒雷」に新しく「老牛抄」の題名で作品連載が始まる。

三月、下旬から四月上旬にかけて「奥の細道」実地踏査のため

金沢、北陸へ。

五月、校歌作詞を頼まれ羽前赤倉へ。

七月一一―一三日、第八回「寒雷」全国大会出席のため山形県

赤倉ホテル、羽黒山、月山へ、のち芭蕉の足跡を踏査。

八月一七―二四日、岩木山へ登る、のち下北半島の葉研温泉、恐山、八戸、陸中海岸へ。同行、知世子、冬樹、瑠璃子、森澄雄。

昭和三五年（一九六〇）

五五歳

二月、「寒雷」は二百号を迎えた。紙上に水原秋櫻子、栗林一石路、秋元不死男、村野四郎、佐藤鬼房、殿村菟絲子らや、内部同人の寄稿掲載。

三月一〇日、古典日本文学全集30『松尾芭蕉集・上』（筑摩書

房）執筆刊行。

十一月、胸部疾患のため入院。

庄へきつたる荃石おのれ沈み果てぬ 『まぼろしの鹿』

昭和三六年（一九六一）

五六歳

七月一日、胸郭成形第一回手術。

七月一九日、第二回手術。術後経過良好。

十一月、現代俳句協会の一部会員が分裂して別に親睦の会を設立、楸邨もこの俳人協会は現代俳句協会における親睦組織との誤りの説明を聞いて、その幹事の一人に加わる。

一二月四日、健康を回復し矢島房利と長野県上田浅間山麓へ旅し、その作品を「柚子のほとり」と題してまとめた。

つまみてみる今年最後の最初の蟻

『まぼろしの鹿』

昭和三七年（一九六二）

五七歳

一月、親睦の会の入会時の説明と異なり、俳人協会は現代俳句協会とは違う団体であることを知り、その事情を明らかにして現代俳句協会にとどまる。

三月、退院。

六月二四日、東京の米津風月堂にて楸邨全快祝い。

七月五日、白河の関へ。

八月、知世子第二句集『朱鷺』（雪樸書房）刊。

十一月二〇日、小西甚一・峯村文人・尾形仿・広田二郎との共著『定本芭蕉大成』（三省堂）刊。

とび終りたる蠅螂が鶏の前

『まぼろしの鹿』

昭和三八（一九六三）

五八歳

三月一〇日、田川飛旅子著俳句シリーズ・人と作品『加藤楸邨』

(桜楓社)が出版された。

五月、学生を連れて金沢、敦賀、大垣、伊良子岬へ。

八月一四日、知世子と青森へ、津軽半島を一周。

一〇月、学生と栃木、福島、宮城、山形を研究旅行。新潟の「海峽」の大会にて講演。

昭和三九年(一九六四)

五九歳

四月、「寒雷」は二五〇号記念号。水原秋櫻子、村野四郎、尾島庄太郎、石田波郷、安藤一郎、小西甚一、細見綾子、峯村文人、安藤次男、原子公平、沢木欣一、岸田稚魚、古沢太穂らが誌上に執筆。

一二月一〇日、『一茶秀句』(春秋社)刊。

共に黄河を渡りし石川信雄逝く、その歌集『黄土帯』はわが『砂漠の鶴』と同じあたりを詠めるもの、悼みて二句をささぐ。

黄河見え足見えつくつく法師けぶる

雨を負ふ火蛾のしづかさもて送る

『まぼろしの鹿』

五月、学生と「奥の細道」の踏査。

七月二四―二五日、「寒雷」全国大会出席のため飯坂温泉へ、のち会津、湯野上温泉に泊まり、奥塩原をぬけた。

カフカ去れ一茶は来れおでん酒

『まぼろしの鹿』

昭和四一年(一九六六)

六一歳

二月二〇日、埼玉県小川へ紙漉見学。

五月一日、知世子胆嚢炎手術。二五―三一日、学生を連れて羽黒、石巻などへ研究旅行。

六月五日、大阪の現代俳句協会全国大会(大阪)にて講演。

八月、第一四回「寒雷」全国大会に出席のため京都へ、比叡山から伊賀上野へ。

一〇月、「俳句研究」誌の全国俳句千葉県大会で講演。

十一月一二日、九州の国語教育研究会に招かれ講演、のち唐津を訪ね洮河緑石の名硯に会い、以来硯に興味を持つ。一九日、清水哲と、一茶忌出席のため信州へ、

昭和四二年(一九六八)

六二歳

昭和四〇年(一九六五)

六〇歳

一月六日、伊賀上野、京都、吉野、名古屋、桑名、伊勢など芭

蕉ゆかりの地を訪ねる。

五月、「俳句研究」五月号が「加藤楸邨特集号」を編集、安藤一郎、広田二郎、宮坂斗南、平井照敏、金子兜太、田川飛旅子、桜井博道、知世子らが執筆。二五日、学生を連れて木曾へ研究旅行。

七月一六日、知世子と京都へ。二七―三〇日、岐阜の松井利彦の招きにより岐阜、飛騨高山へ、乗鞍岳へ登山。

九月二五日、木曾。修那羅峠へ。

一〇月二六―二九日、木曾へ。

一二月一日、第九句集『まぼろしの鹿』（思潮社）刊。

霧にひらいてもののはじめの穴ひとつ 『吹越』

昭和四三年（一九六八） 六三歳

一月三日、静岡の三保へ。四日、『日本の歴史』『江戸時代』（世界文化社）に「芭蕉の旅」を執筆のため伊賀上野、奈良、吉野、名古屋へ。

四月二八日、フランスの詩人イヴ・ボンヌフォワ、平井照敏の案内にて北千束の自宅へ来訪。

五月一日、句集『まぼろしの鹿』により第二回蛇笏賞受賞。二

〇―二四日、学生を連れて木曾路を研究旅行。

六月四日、招かれて成東へ。八日、芭蕉来山二八〇年全国大会にて講演のため山形県羽黒へ。一八日、楸邨揮毫の「山刀伐峠の碑」除幕式に出席のため現地へ、出羽三山登山を試み月山へは八合目まで、のち羽前赤倉、銀山温泉、尾花沢へ。

八月一日、「太陽」（平凡社）「奥の細道特集」のため羽田から空路仙台へ、再び月山に登る。「寒雷」三百号記念大会出席のため水上へ、谷川岳一の倉沢出合まで登る。

あきかぜやわが胸中のさるをがせ 『吹越』

昭和四四年（一九六九） 六四歳

一月一日、「寒雷」同人会長清水清山死去。

三月一〇日、『芭蕉全句・上』（筑摩書房）刊。

五月、金沢、敦賀、種の浜へ芭蕉の跡を訪ねる。

六月三〇日、『日本詩人全集31・水原秋櫻子・山口誓子・中村

草田男・加藤楸邨（解説森澄雄）』（新潮社）刊。

七月二六―二七日、山刀伐峠植樹祭に出席。

十一月二一日、石田波郷死去。葬儀に参列。棺を肩になう。

十一月二十二日、火葬

秋の暮れ波郷燃ゆる火腹にひびく

『吹越』

昭和四五年（一九七〇）

六五歳

一月一五日、『日本の詩歌30・俳句集』『鑑賞・島崎千秋』（中

央公論社）に作品一三九句収録。

三月、「寒雷」二・三月合併号。八日、「朝日俳壇」の選者となる。

四月、芭蕉の本2『詩人の生涯』（角川書店）を編む。二六日、那須、白河へ。

一〇月一八日、那須の「寒雷」全国大会に出席。この頃から中国の画家石濤に興味を抱く。二八日―十一月六日、キャンペラ号の横浜―神戸―香港―マカオの洋上俳句講座講師を勤める。

一月二〇日、桑名、伊賀、奈良、京都へ。

渡辺朔を悼む一句

甘藍の巻きても巻きてもこの別れ

『吹越』

昭和四六年（一九七一）

六六歳

三月二日、中野弘一の告別式に参列のため新潟へ、出雲崎に泊まる。九日、知世子胆嚢炎にて二度目の手術、入院。

七月、『書道芸術』第三卷（中央公論社）に、唐太宗、虞西南、欧陽詢、褚遂良について「書人の伝記」執筆。「俳句の世界」（テイチク・レコード）の「加藤楸邨集」に自句についての随想を録音。北海タイムスと寺田京子の招きにより知世子と札幌、稚内へ。八月二八―二九日、平井照敏、知世子と嵐の中、日光男体山に登る。

九月二五―二七日、福井、富山方面へ。

一〇月二四日、福島県原ノ町にて講演。

十一月二一日、サンケイ新聞の招きにより木曾へ。二七日、名古屋国語教育会にて講演。

十二月一二日、春日部に円空仏を見る。

昭和四七年（一九七二）

六七歳

三月、知世子と奈良、京都へ。「寒雷」句会吟行のため春日部、古利根へ。

五月、学生を連れて上諏訪、木曾へ研究旅行。歯痛のため途中帰京。

七月二三―二五日、「寒雷」三五〇号記念大会に出席のため札幌にて講演「石濤論」、のち層雲峡へ。二八日―八月一日、第一回シルクロードの旅。参加者吉田北舟子、知世子ら一五人、ハバロフスク、イルクーツク、バイカル湖、天山山脈の麓の林檎の街アルマ・アタ、タシケントの美術館、サマルカンドの古代遺跡、ブハラへ、再びハバロフスクに行き日本人墓地に墓参、シベリアを経てナホトカへ、一日、船で横浜港帰着。この紀行文を朝日新聞へ、作品五句を毎日新聞へ、「海外旅行と季」の文を西日本新聞に発表。

『現代俳句大系』（角川書店）第三卷に『寒雷』を、第七卷に『火の記憶』を第一〇卷に『山脈』を（「解説」はともに森澄雄）を収録。

九月、「寒雷」創刊三五〇号記念号。紙上に水原秋櫻子、福原麟太郎、安藤一郎、村野四郎、大岡信、宮柊二、西山松之助、尾形仿、那珂太郎、外山慈比古、鍵谷幸信らが寄稿。一六―一七日、寒雷鍛錬会出席のため出雲崎へ。

くすぐつたいぞ円空仏に子猫の手

『吹越』

昭和四八年（一九七三）

六八歳

六月八日、富山県教育委員会に招かれ高岡にて講演。七月二三日、安東次男、石寒太、知世子らと那須へ。八月四日、尿前関、勿来関などへ。二三日、石寒太、知世子、穂高と東北、北陸へ。

九月三〇日、句文集『死の塔』（毎日新聞社）刊行。

おぼろ夜のかたまりとしてものおもふ 『吹越』

昭和四九年（一九七四）

六九歳

二月二〇日、歴史と文学の旅シリーズ『奥の細道吟行・上』（平凡社）刊。

三月二三―四月二日、第二回シルクロードの旅、アフガニスタン、インド、パキスタンをまわる。旅中、急病のため病臥のままカイバル峠を越え現地の病院に四日間入院、休養して帰国。

旅をのみ当分の心あてに、あれこれかさなりし浮世のことども果たしゆかむと考へをれば

泉はなきかカイバル越えの弱法師

『吹越』

四月二二日―六月にかけて「朝日新聞」に「芭蕉の山河」（三

五回)を連載。

五月二五日、随筆『ひぐらし硯』(読売新聞社)刊。

六月、青山学院女子短大教授退任。二〇日、句文集『奥の細道吟行・下』(平凡社)刊。

八月九日、『あさがお百科』の取材のため伊賀上野の小川信太郎を訪問。

たった一つの朝顔にメンデリズム存す 『怒濤』

九月一日より朝日カルチャーセンターにおいて「芭蕉の文学」「俳句作法」の講義を担当。二七―二八日、白河女子高校にて講演のため福島へ。白河、須賀川等「奥の細道」を歩く。

十一月一日、福島俳句作家懇話会発足記念大会にて講演「俳句、その世界性」。一六日、「寒雷」鍛錬会(三井寺円満院)出席のため大津へ。一八日、紫綬褒章を受ける。

昭和五〇年(一九七五) 七〇歳

一月九―一二日、知世子と羽田から空路大分へ、国東半島の石仏探訪、臼杵から両子寺、泉福寺、神宮寺、天念寺などを巡る。

三月一〇日、『芭蕉全句・下』(筑摩書房)刊。

三月一八―四月四日、第三回シルクロードの旅、レバノン、ギリシャ、イラン、イラク、トルコへ。

六月八日、平凡社カラー新書17『あさがお百花』小川信太郎との共著(平凡社)刊。

九月一日、福島県原ノ町へ。

一〇月九日、第一二回現代俳句全国大会にて「俳句私観」(毎日新聞社講堂)を講演。一一―一二日、「寒雷」大和鍛錬会出席のため奈良県吉野竹林院へ。二五―二六日、「東北寒雷人の集い」に出席のため山形県山寺公民館へ。

十二月一日、「寒雷」静岡句会出席のため静岡市医師会館へ。一五日、宇津谷峠に登り蕨の細道を歩く。二六―二七日、奈良、西の京、佐保路へ古仏歴訪。

乾季来る石中の獅子駆けつづけ 『吹越』

昭和五一年(一九七六) 七一歳

一月、風邪をこじらせ病臥。

五月一六日、鹿島吟行に参加、成田・鹿島・潮来を巡る。

六月二四日、第一〇句集『吹越』(卯辰山文庫)刊。三〇日、

講座録「放浪の詩人たち」（朝日ソノラマ）刊。

八月二八―二十九日、「寒雷」北陸鍛錬会のため、金沢市卯辰山へ。三〇日―九月一日、和倉温泉、能登輪島を廻り朝市、輪島塗を見学。同行、齋藤美規、久保田月鈴子、石寒太ら。

能登半島

涼しくて早稲のおくれを皆口に

『怒濤』

九月一八日、「寒雷」四百号記念鍛錬会出席のため群馬県赤城山へ。風邪をひきこじらす。二七日、第四回シルクロードの旅に出発の予定であったが、発熱し、入院。

一〇月三十一日、岐阜の妙照寺に芭蕉顕彰碑「宿りせむ黎の杖になる日まで」を揮毫したが、風邪のため除幕式には欠席。

昭和五二年（一九七七）

七二歳

三月二四日、朝日カルチャーの講義「芭蕉」を終了する。二五―二六日、牧ひでをに誘われ富士山麓の十里木へ。二八―三〇日、大阪へ与謝蕪村ゆかりの淀川の毛馬堤などを訪ねる。岡格子、高須ちゑ、知世子等と丹後半島を廻り浦島伝説の地へ。

大江山を越えて

おぼろ夜の鬼なつかしや大江山

『怒濤』

四月一五―一七日、「寒雷」中部鍛錬会に出席のため飛騨高山へ、野麦峠を越えて帰京。

五月一六日、篠原静林と古河へ、結城などに蕪村の跡を探訪。

二二日、五島美術館の中国名硯展に「人間と硯」を記念講演。

七月一七日、「寒雷」鍛錬会に出席のため那須黒羽へ。

九月一〇―一一日、「寒雷東北人の集い」に出席のため福島県会津喜多方へ。

一〇月八―九日、「寒雷」鍛錬会のため和歌山県串本へ。二三日、中村草田男夫人直子氏の葬儀に参列。

十一月二〇日、NHK主催の句会出席のため埼玉県深谷へ。

昭和五三年（一九七八）

七三歳

二月一日―二八日、「俳句遠近（自伝抄）」を「読売新聞」に連載。

六月二〇日、随筆集『達谷往来』（花神社）刊。

七月二〇日、大阪芸大の山田教授の案内にてベルギーの俳人数人の来訪を受ける。

八月六日、「陸」五周年記念大会にて「伏流のようなもの」を講演。一五日、発熱、ヘルペスに罹る。「寒雷」創刊四百号記念の一つとして『寒雷歳時記』を出版。

一〇月二〇日、筆墨集『火下牡丹』（サンケイ出版）刊。

十一月一日、『自伝抄』刊。（毎日新聞社）刊。

蟻の列のはるかな一端原爆忌

『怒濤』

昭和五四年（一九七九）

七四歳

一月、「蕪村紀行」五〇句を「俳句」に発表。「寒雷」に七氏選出の「楸邨五百句」を特集。

四月一五日、寒雷東京句会吟行に出席のため青梅の川合玉堂記念館へ。

六月三〇日―七月一日、「東北寒雷人の集い」出席のため岩手県花巻へ、高村光太郎の山荘跡を再訪。

七月二八―三〇日知世子と九州へ。長崎に川本泰を訪ひ亡き棲山翁の遺品を拝見す。

石濤を見ては一つ葉を目がさまよふ

『怒濤』

八月一日、子供たちに金婚式を祝われる。（神田エバンタイユ）。二五―二六日、「俳句」臨時増刊号『加藤楸邨読本』（角川書店）の口絵写真撮影のため春日部市から日光・那須・黒羽を歩く。

九月二二日、筑波大学国語文学会で講演、小西甚一と会う。

一〇月一五日、「俳句」臨時増刊『加藤楸邨読本』（角川書店）刊。『季寄せ―草木花・秋（上）』（朝日新聞社）刊。二五日、春日部高等学校にて講演。

十一月『季寄せ―草木花・秋下』刊。

昭和五五年（一九八一）

七五歳

三月、『加藤楸邨全集』全一四卷（講談社）の刊行が始まる。四月一二―一三日、「寒雷」近畿鍛錬会に出席、奈良・生駒山

へ。くらがり峠などを歩き吉野に泊まる。

吉野より躋峠へ

さみどりの象山きよやまゆけば蟹かにさわぐ

『怒濤』

五月、『鑑賞現代俳句全集』第七卷「人間内奥の探求」（立風書房）に作品五百句が収録される。「俳句とエッセイ」五月号は

特集「加藤楸邨の世界」。二四―二六日、九州へ。阿蘇などを廻る。

六月二―二二日、「東北寒雷人の集い」（青森県西津軽深浦不老不死温泉）に出席、十三潟などへ。その時の作品を「花神」に三〇句発表。

九月三〇日、『芭蕉の山河―おくのほそ道私記』（読売新聞社）刊。

一〇月、「寒雷」創刊四〇周年記念号。四―五日、その記念大会出席のため静岡へ、四日は焼津グランドホテル、五日は中嶋屋ホテルにて講演、特別講演は大岡信。その後痔疾にて病臥。
十一月、「琅玕」にエッセイ「波郷の「枯野道」」発表。

昭和五六年（一九八一） 七六歳

一月一三日、永青文庫重要出品を高島屋デパートにて見学、出品の硯について「毎日新聞」に執筆。三十一日、恩師福原麟太郎先生逝去。

四月、「馬酔木」記念号に執筆。

五月、『能勢朝次著作集』の月報に執筆。

七月一―一二日、「東北寒雷人の集い」に出席、山形県天童の芭蕉句碑「まゆはきを俤にして紅粉の花」（楸邨揮毫）の除幕

式に列席。一七日、水原秋櫻子先生逝去、水原家へ。

八月二日、秋櫻子先生の本葬（青山斎場）に参列。

九月、『奥の細道』（暁教育図書）に「俳諧を紀行する」を執筆。

一〇月、「馬酔木」に随筆「春望」の茶碗」を發表。

十一月一五―一六日、大阪朝日新聞の朝日カルチャーセンター談話会に大野林火・山口誓子と共に出席。

七月十七日、水原秋櫻子先生急逝

四囲迫りきつつ音なきいなびかり 『怒濤』

昭和五七年（一九八二） 七七歳

五月二六日、喜寿を迎える。

六月五―六日、「東北寒雷人の集い」に出席のため福島県新甲子温泉（大京ホテル）へ。

八月五―一日、「朝日俳壇歌壇」中国旅行の講師として、歌人の近藤芳美氏と共に上海、蘇州、北京、万里の長城を巡る。

日傘一つ長城にひらきしが見ゆる 『怒濤』

一〇月、「寒雷」に随筆「高村光太郎山荘を再び訪れて」を發表。

一一月六日、ドイツの俳人ギュンター・クリンゲ氏來訪。

一一月、「加藤楸邨全集」(講談社)全一四卷完結。「別巻」に三句索引・年譜・著書解題・文献解題・著述一覽等資料關係を収録。一九日―二月一日、「加藤楸邨・大岡信 書の二人展」を東京堂催場にて開催。

昭和五八年(一九八三)

七八歳

一月、「寒雷」に随筆「歌中遍歴―故大岡博氏の世界を辿って」を發表。三一日―二月三日、NHK教育テレビ「訪問インタビュ―」にて旅・書・俳句について語る。

三月一二―一三日、越後湯沢へ。川端康成が『雪国』を書いた高半旅館「霞の間」に泊まる。農具市・いざり機などを見学。桐蔭学園(楸邨作詞校歌)の応援に全国高校野球大会の甲子園へ。

四月二八日―五月一日、隠岐再訪。

牡丹の奥に怒濤怒濤の奥に牡丹

『怒濤』

六月、「寒雷」に随筆「ゴビ沙漠で見た小さな虫」を發表。

七月、「寒雷」に「塚本邦雄短歌の印象」を發表。九日、伊豆半島一周、井上靖旧居、昭和の森文学館へ。三〇―三一日、「東

北寒雷人の集い」に出席のため秋田県金浦温泉へ。

八月五日、中村草田男逝去、通夜に弔問。樞の草田男と対面、「草田男さんには随分お世話になりました、叱られました」と呟いたという。六日、炎暑の密葬に参列。

八月、悼中村草田男氏

庭にカンナ心にカンナ相対す

『怒濤』

九月、大岡信氏來訪。

一〇月、大阪朝日カルチャーセンターにて講演。

昭和五九年(一九八四)

七九歳

三月二六日―四月一日、「朝日俳壇歌壇中国の旅」の講師として大同の雲崗石窟、北京、万里の長城、明の十三陵等を訪ねる。二〇日、随筆集『飛花落葉』(永田書房)刊、書名は『赤冊子』の「飛花落葉の散りみだるるも、その中にして、見とめ聞きとめざれば、その活きたる物消えて跡なし」による。

五月一四―一六日、上ノ山の齋藤茂吉追慕祭に招かれて講演、

続いて寒太、知世子と尾花沢の芭蕉・清風資料館、山刀伐峠へ。

六月九—一〇日、「東北寒雷人の集い」（八幡平ハイツ）に出席のため岩手県盛岡から八幡平へ。二〇日、現代俳句の世界8朝日文庫『加藤楸邨集』（朝日新聞社）刊。

七月一〇日、胃潰瘍のため以後約一ヵ月入院。間もなく肺炎になり再入院。退院後自宅静養。

ふくろふに真紅の手毬つかれをり 『怒濤』

昭和六〇年（一九八五）

八〇歳

三月、「寒雷」五百号の紙上に井本農一、大原富枝、丸谷才一、竹西寛子、島田修二、西山松之助、塚本邦雄、石塚友二、外山慈比古、能村登四郎、中西進、桂信子、広田二郎、香西照雄、松尾靖秋、森豊、尾形仿、佐佐木幸綱、佐藤鬼房、岸田稚魚、原子公平、丸山一彦等の諸家の寄稿を掲載。

五月二六日、「寒雷」創刊五百号記念大会（上野池の端文化センター）に出席、講演「これからやりたいこと」。

九月二三日、知世子、腹痛を訴え入院、二五日、手術。

十一月一七日、知世子再入院。昭和六一年「寒雷」一月号より知世子主宰を決めていたが延期、現状維持とする。

一二月一五日、日本芸術院会員に推される。

薔薇剪れば夕日と花と別れけり 『怒濤』

昭和六一年（一九八六）

八一歳

一月三日、知世子（七六歳）死去。一三日、六本木の湖雲寺にて本葬。九品仏浄真寺へ葬る。

永別 十一句

『怒濤』

豪霜よ誰も居らざる紅梅よ

持主の失せて手帳の冬鈿

霜柱どの一本も目ざめをり

冬の薔薇すさまじきまで向こうむき

裸木にひたすらな顔残したり

冬木立入りて出てくるものなし

冬の蝶とはのさざなみ渡りをり

虚空雪降る一途なる妻遊べる妻

東京やつくづく遠き冬茜

寒蘭を見てあればそこにゐたりけり

ひとり黙せばひとりきらめく犬ふぐり

二月、日本テレビの「現代の顔」を収録。

五月、「週刊朝日」の「季に寄せる」をまとめる。

六月二五日、加藤知世子遺句集『頰杖』（花神社）刊。

七月六日、九品仏浄真寺に知世子納骨。

一二月一〇日、第一一句集『怒濤』（花神社）刊。「あとがき」に知世子の死を「生活の上でも俳句の上でも大きな伴侶だったのでこれは手いたい打撃だった」と記している。

昭和六二年（一九八七）

八二歳

四月一六日、福岡市美術館において開かれた「加藤楸邨の世界」展に出席。この展覧会は一九日まで開催。五月、高知新聞画廊においても開催。

五月二三日、第二回詩歌文学館賞受賞（句集『怒濤』の作品に對して）。授賞式に出席のため北上市へ。二六日、書句集『雪起し』（求龍堂）刊。三〇日、大妻女子大にて講演。

百代の過客しんがりに猫の子も 『雪起し』

昭和六三年（一九八八）

八三歳

三月一七日、鑑賞俳句史『俳句往来』（求龍堂）刊。二一―二三日、「加藤楸邨筆墨百句展」（那覇市民ギャラリー）に出席のため沖縄へ。

春の雷しばらく海の底近づく 『望岳』

五月一〇日、山本健吉氏の密葬、二五日の本葬にも参列。

六月、土屋文明氏宅訪問、昭和一九年に中国大陸に同行以来の再会。

十一月一五日、秋の叙勲で勲三等瑞宝章受章、皇居へ。一九日、船田蹊史葬儀に参列。

牡丹雪土につくときふとためらふ 『望岳』

昭和六四年（一九八九）平成元年 八四歳

二月一八日、第一回現代俳句大賞受賞式に出席。
『新選俳枕』（朝日新聞社）第二巻の関東を監修。

八月二〇日、新潟県青海町の奥の細道三百年記念遊女句碑全国大会（青海町民会館）にて講演。二六日、千葉県九十九里片貝漁港へ。

一〇月六日、西山松之助氏来宅対談。二二日、第一回黒羽芭蕉まつり全国大会に出席のため栃木県黒羽へ。二九日、「楸邨記念館」起工式のため山梨県小淵沢へ。

一一月三日、共栄学園短大の講演のため埼玉県春日部へ。

母、我を孕りし時、山梨県猿橋を超えしといふ、一句
目ひらけば母胎はみどり雪解谿
『望岳』

平成二年（一九九〇）

八五歳

三月一〇―一四日、「加藤楸邨筆墨展」を東京有楽町マリオン

朝日ギャラリーにて開く。

三月二〇日、達谷山房にて「俳句四季」のインタビュー。

四月二―四日、長年の痔疾の悪化を手術。

五月二二日、達谷山房にて「俳壇」鈴木真砂女と対談。二三日、

「致知」のインタビュー。

六月二五日、奥秩父へ。二六日、句集『猫』文庫版（ふらんす

堂）刊。

七月七―八日、「東北寒雷人の集い」出席のため十和田湖へ。

一〇月六日、県立神奈川近代文学館にて講演。「寒雷」五〇周年記念大会に出席。

年記念大会に出席。

一一月九日、達谷山房にて尾形仂と対談。一日、いわき市へ、小玉ダム見学。一二日、原ノ町の母校の小学校へ。一四日、随筆集『遙かなる声』（読売新聞社）刊。一八日、「寒雷」東京句会吟行で国分寺へ。二一日、ビデオ映像による俳句の世界「加藤楸邨・金子兜太」（ビクター音楽産業）。二三日、飯田龍太宅訪問。二四日、山梨県小淵沢の加藤楸邨記念館上棟式に出席。

流星といふ名のために夜は存す

『望岳』

平成三年（一九九一）

八六歳

一月、「俳句」（角川書店）誌に一一一月号まで、連載作

品一二句。三〇日、春日部市教育委員会の録画撮影。

二月二五日、川崎展宏の読売文学賞授賞式のパーティに出席。

四月六日、朝日カルチャーセンターで講演「俳句随想」。一〇

日、『加藤知世子全句集』（邑書林）刊。二一日、寒雷吟行句会

に参加、野田、船戸、利根川へ。

六月六日、桜井博道告別式へ。

七月二七日、小淵沢の記念館へ。

八月六日、富士を見に三島へ。

九月二―二三日、第二六回子規顕彰全国大会、松山にて講演。

一〇月二二―二四日、NHK「秋季BS吟行俳句会」のため倉敷へ。

埋み火をかきこれが波郷これが楚秋 『望岳』

平成四年（一九九二）

八七歳

一月一日、朝日賞受賞。七―一六日まで浮腫のため入院。二八日、朝日賞授賞式に朝日新聞社へ。

二月、朝日賞受賞記念講演を有楽町マリオン朝日ホールにて大岡信と対談「俳句的対談」。

五月一五―一七日、加藤楸邨記念館開館、開館祝賀寒雷記念俳句大会のため、小淵沢へ。二二―二四日、NHK「春季BS吟行俳句会」のため佐賀県武雄市へ。

六月二九日、「俳句」の対談のため阿波野青畝氏来宅、初対面。

七月四―五日、「東北寒雷人の集い」に出席のため駒止湿原へ。

六日、大岡信氏来宅、記念館へ入れるビデオ撮影。一五―二九日、心不全のため入院。

九月六日、久保田月鈴子告別式に参列。

一〇月一九日、小西甚一の受章祝賀パーティーに出席。二五日、

第三回埼玉県芸術文化祭俳句大会にて講演「旅と俳句」。

十一月八日、東京都教職員文化部句会（玉川会館）に出席。一日、谷川岳を見に。

『加藤楸邨初期評論集成』全五卷（邑書林）完結。

大出目錦やあ楸邨といふらしき 『望岳』

平成五年（一九九三）

八八歳

一月四日、浮腫のため入院。入院中、心不全をおこしたが、車椅子で散歩ができるまでに回復。

六月二七日、突然意識不明になり、意識が戻らなくなる。「寒雷」七月号（六百号記念号）はその前日、二六日に手にする。

七月三日、永眠。戒名「智楸院達谷宙遊居士」。七月一九日、九品仏浄真寺に葬られる。八月二日、従四位に叙せられる。

講談社学術文庫『芭蕉の山河―おくの細道私記』刊。「寒雷集」は一〇月号より加藤瑠璃子選。「寒雷」一二月号は「加藤楸邨追悼特集号」。

不満いつばいに生きてゐるなら虹に告げよ 『望岳』

没後

平成八年（一九九六）七月三日、遺句集『望岳』（四四五句）大岡信編、花神社刊。『怒濤』に続く昭和六一年より平成五年までの句作を収めた。大岡信の「後記」は「楸邨はやはりあつぱれな天下第一等の俳人だったと、選後の感想は、それに尽きる」と結ぶ。

平成一〇年（一九九八）、加藤楸邨回顧展（桐蔭学園）。

平成一三年（二〇〇一）三月、加藤楸邨記念館閉館、楸邨・知世子句碑は春日部高等学校敷地内へ移設。記念館収蔵資料は県立「さいたま文学館」に寄贈。

平成一四年（二〇〇二）、「加藤楸邨と埼玉」展（さいたま文学館）。

平成一五年（二〇〇三）、「加藤楸邨生涯展」（主催・桐蔭学園）。

平成二二年（二〇一〇）、『加藤楸邨全句集』（寒雷俳句会発行）。

平成二五年（二〇一三）、岩波文庫『加藤楸邨句集』（岩波書店）刊。

年譜資料

（一）書籍

①「年譜」加藤楸邨著『現代俳句文学全集・加藤楸邨集』。昭和三二年（一九五七）七月、角川書店刊。

②「加藤楸邨年譜」田川飛旅子編『加藤楸邨読本』（「俳句」別冊）。昭和五四年（一九七九）一〇月、角川書店刊。

③「俳句遠近」（六一頁）、「父の本」（七六―七七頁）、加藤楸邨著『加藤楸邨全集』第六卷。昭和五五年（一九八〇）八月、講談社刊。

④「略歴自記」（『颱風眼』）加藤楸邨著『加藤楸邨全集』第一卷。昭和五六年（一九八一）五月、講談社刊。

⑤「戦前歌屑」（二六一頁）加藤楸邨著『加藤楸邨全集』第四卷。昭和五七年（一九八二）二月、講談社刊。

⑥「年譜」田川飛旅子編 加藤楸邨著『加藤楸邨全集』別巻。昭和五七年（一九八二）十一月、講談社刊。

⑦「年譜」田川飛旅子著『加藤楸邨』。昭和五八年（一九八三）三月、桜楓社刊。「初版」昭和三八年三月刊。

⑧「加藤楸邨略年譜」構成・齋藤慎爾、加藤楸邨著『加藤楸邨集』（朝日文庫）。昭和五九年（一九八四）六月、朝日新聞社刊。

⑨「加藤楸邨略年譜」構成・加藤瑠璃子、『現代の俳人―加藤楸邨』。昭和六三年（一九八八）六月、国書刊行会刊。

⑩「解題」文責・島田牙城、加藤楸邨著『加藤楸邨初期評論集成』

第一卷。平成三年（一九九一）一〇月、邑書林刊。

⑪ 「加藤楸邨初期年譜」文責・島田牙城、加藤楸邨著『加藤楸邨初期評論集成』第五卷。平成四年（一九九二）七月、邑書林刊。

⑫ 「加藤楸邨と「山鳩」」松本旭著『村上鬼城新研究』。平成三年（二〇〇一）四月、本阿弥書店刊。

⑬ 「加藤楸邨略年譜」加藤瑠璃子編「本全句集収録書籍について」（住谷未夫）。加藤楸邨著『加藤楸邨全句集』。平成二二年（二〇一〇）一〇月、寒雷俳句会発行。

(二) 雑誌

① 「寒雷年表（一）昭和一四〜一五年一二月」川崎展宏・桜井博道・矢島房利編「寒雷年表（二）昭和一六年一月〜一九年一月」川崎展宏・桜井博道・矢島房利編「寒雷」二〇〇号記念号。昭和三五年（一九六〇）二月号。

② 「寒雷年譜（昭和二一〜四三年）」銀林晴生・中拓夫・八木荘一・矢島房利編「寒雷」三〇〇号記念号。昭和四三年（一九六八）六月号。

③ 「加藤楸邨略年譜（明治三八〜昭和四七年）」石寒太編「俳句研究」加藤楸邨特集号。昭和四七年（一九七二）一一月号。

④ 「寒雷三十年の歩み（昭和二〇〜五〇年）」星川木葛子・矢島房利・久保田月鈴子・石寒太編「寒雷」四〇〇号記念号。昭和五

一年（一九七六）一一月号。

⑤ 「寒雷年表」矢島房利・平林孝子・浜田のぶ子・須川洋子・正岡雅恵編「寒雷」五〇〇号記念号。昭和六〇年（一九八五）三月号。

⑥ 「寒雷年表（一九八四〜一九八九年）」星川木葛子・矢島房利・平林孝子編「寒雷」創刊五〇周年特別記念号。平成二年（一九九〇）一〇月号。

⑦ 「寒雷年表（一九九〇〜一九九二年）」星川木葛子・矢島房利・平林孝子編「寒雷」六〇〇号記念号。平成五年（一九九三）七月号。

⑧ 「加藤楸邨略年譜」加藤瑠璃子編「寒雷」加藤楸邨追悼号。平成五年（一九九三）一二月号。

⑨ 「加藤楸邨略年譜」監修・星川木葛子 江中真弓編「寒雷」加藤楸邨生誕百年記念特別号。平成一七年（二〇〇五）五月号。

以上の他に「俳句研究」「馬酔木」「寒雷」の雑誌記事など多くの関係文献から多くの恩恵を受けて構成した。キリスト教関連の記載は稿者の調査結果を加えている。皆様のご教示を頂き、より一層正確な年譜にしていきたいと思っている。

第二節 参考文献

書籍名、論題名のあいいうえお順に記す。「序章第一節加藤楸邨
先行研究史」に取り上げたものは省略する。

(一) 書籍

- ① 『青山女子短期大学の歩み』 昭和五〇年（一九七五）十一月、編集兼発行人・青山女子短期大学。
- ② 『隠岐』（句文集）加藤楸邨著 昭和一七年（一九四二）三月、交蘭社刊。
- ③ 『回想の内村鑑三』加藤楸邨ほか著 鈴木俊郎編 昭和三一年（一九五六）三月、岩波書店刊。
- ④ 『加藤楸邨』（蝸牛俳句文庫）中島鬼谷著 平成一一年（一九九九）九月、蝸牛社刊。
- ⑤ 『加藤楸邨』（俳句文庫自選三百句）加藤楸邨著 平成四年（一九九二）四月、春陽堂書店刊。
- ⑥ 『加藤楸邨句集』（角川文庫）加藤楸邨著 昭和二七年（一九五二）六月、角川書店刊。
- ⑦ 『加藤楸邨句集』（朝日文庫）加藤楸邨著 昭和五九年（一九八四）六月、朝日新聞社刊。
- ⑧ 『加藤楸邨全句集』監修矢島房利・加藤穂高 平成二二年（二〇一〇）一月、寒雷俳句会刊。
- ⑨ 『加藤楸邨の一〇〇句を読む―俳句と生涯』石寒太著 平成二四年（二〇一二）一二月、飯塚書店刊。
- ⑩ 『金沢教会百年史』日本基督教団百年史編纂委員会編 昭和五六年（一九八一）五月刊。
- ⑪ 『金沢教会百年史』日本基督教団百年史編纂委員会・深谷松男ほか著 平成九年（一九九七）六月刊。
- ⑫ 『鑑賞日本現代文学・現代俳句』安東次男・大岡信編 平成二一年（一九九〇）八月、角川書店刊。
- ⑬ 『北村透谷』（日本文学研究資料叢書4版）日本文学研究資料刊行会編 昭和五八年（一九八三）四月、有精堂出版刊。
- ⑭ 『キリスト教人名辞典』キリスト教人名辞典編集委員会編 昭和六一年（一九八六）二月、日本基督教団出版局刊。
- ⑮ 『近代俳句』（日本文学研究資料叢書）加藤楸邨ほか著 日本文学研究資料刊行会編 昭和五九年（一九八四）一〇月、有精堂出版刊。
- ⑯ 『近代俳句の遠近』松井幸子著 平成三年（一九九一）九月、本阿弥書店刊。
- ⑰ 『現代俳句文学全集・加藤楸邨集』加藤楸邨著 昭和三三年（一

九五七) 七月、角川書店刊。

⑰ 『作家の自伝42 島崎藤村』監修佐伯彰一・松本健一 瓜生清編 平成九年(一九九九)四月、日本図書センター刊。

⑱ 『子規全集』正岡子規著 全一五卷二版 大正一五年(一九二六)六月―昭和三年(一九二八)二月、アルス刊。(楸邨所持)

⑲ 『楸邨・龍太』大岡信著 昭和六〇年(一九八五)四月、花神社刊。

⑳ 『昭和文学全集』第三五卷 加藤楸邨ほか著 平成二年(一九九〇)四月、小学館刊。

㉑ 『新・折々のうた9』(岩波新書)大岡信編著 平成一九年(二〇〇七)一〇月刊。

㉒ 『新研究資料現代日本文学』第六卷(俳句)松井利彦編 平成一二年(二〇〇〇)二月、明治書院刊。

㉓ 『成美学園百年史』成美学園百年史編纂委員会代表委員・永井輝男編 昭和五五年(一九八〇)一〇月刊。

㉔ 『世界日本キリスト教文学事典』遠藤祐ほか編 平成六年(一九九四)三月、教文館刊。

㉕ 『善の研究』(一四一版)西田幾多郎著 大正一五年(一九二六)九月、岩波書店刊。

㉖ 『達谷往来』加藤楸邨著 昭和五三年(一九七八)六月、花神

社刊。

⑳ 『透谷全集』全三卷 北村透谷著(第一卷第八刷、第二卷第五刷、第三卷第一刷)勝本清一郎編 昭和三〇年(一九五五)九月―昭和三九年(一九六四)一〇月、岩波書店刊。

㉘ 『東北学院創立七十年史』東北学院創立七十年史編纂委員会花輪庄三郎編 昭和三四年(一九五九)七月刊。

㉙ 『怒濤』(句集)加藤楸邨著 昭和六一年(一九八六)一二月、花神社刊。

㉚ 『日本キリスト教歴史大事典』日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 昭和六三年(一九八八)二月、教文館刊。

㉛ 『日本基督教団一関教会百年史』一関教会百年史編集委員会編 平成一七年(二〇〇五)一〇月刊。

㉜ 『日本近代文学大系・島崎藤村』第一三卷 注釈・山田晃 昭和四六年(一九四六)十一月、角川書店刊。

㉝ 『日本の詩歌30・俳句集』新訂版 加藤楸邨ほか著 昭和五四年(一九七九)一二月、中央公論社刊。

㉞ 『日本の名随筆・雪』加藤楸邨編著 平成二年(一九九〇)二月、作品社刊。

㉟ 『日本美普教会宣教師のはたらき』松永徳次郎著 昭和五三年(一九七八)降誕節刊。

③⑥ 『俳句往来―鑑賞俳句史』加藤楸邨著 昭和六三年（一九八八）三月、求龍堂刊。

③⑦ 『俳句表現の道』旧版 加藤楸邨著 昭和一三年（一九三八）七月、交蘭社刊。

③⑧ 『飛花落葉』加藤楸邨著 昭和五九年（一九八四）三月、永田書房刊。

③⑨ 『芭蕉の山河―おくのほそ道私記』（講談社学術文庫）第六刷 加藤楸邨著 平成九年（一九九七）十一月、講談社刊。

④⑩ 『芭蕉の本』第四卷 加藤楸邨ほか著 昭和四五年（一九七〇）六月、角川書店刊。

④⑪ 『八十八年の歩み』園部丑之助ほか著 昭和四七年（一九七二）九月、日本キリスト教団御殿場教会刊。

④⑫ 『遙かなる声』加藤楸邨著 平成二年（一九九〇）十一月、読売新聞社刊。

④⑬ 『望岳』（遺句集）加藤楸邨著 大岡信編 平成八年（一九九六）七月、花神社刊。

④⑭ 『水原秋櫻子全集』第六卷 水原秋櫻子著 昭和五三年（一九七八）八月、講談社刊。

④⑮ 『村上鬼城新研究』松本旭著 平成一三年（二〇〇一）四月、本阿弥書店刊。

④⑯ 『山脈』（句集）加藤楸邨著 昭和三〇年（一九五五）一〇月、書肆ユリイカ刊。

④⑰ 『雪起し』全二卷 加藤楸邨著 昭和六二年（一九八七）五月、求龍堂刊。

④⑱ 『横浜英和学院百三十年史』監修横浜英和学院百三十年史編纂委員会・森山みね子 平成二二年（二〇一〇）一〇月刊。

④⑲ 『来日メソジスト宣教師事典一九七三―一九九三年』ジャン・W・克蘭メル編 平成八年（一九九六）二月、教文館刊。

(二) 雑誌・新聞

① 「イルクーツク紀行―漂流民大黒屋光太夫の足跡を追って」加藤楸邨 「朝日新聞」（夕刊） 昭和四七年（一九七二）八月三一日刊。

② 「加藤楸邨―「まぼろし」と出あう―」竹中宏 「俳句」昭和五七年（一九八二）七月号、角川書店刊。

③ 「加藤楸邨の手紙」草間時彦 「俳句研究」昭和五八年（一九八三）六月号、目黒書店刊。

④ 「加藤楸邨の俳句」（特集・近代俳句を築いた人々）田川飛旅子 「俳句とエッセイ」昭和五二年（一九七七）七月号、牧羊社

刊。

⑤ 「加藤楸邨論」 飯島晴子 「俳句」 昭和四九年（一九七四）五月号。

⑥ 「加藤楸邨論―楸邨、最後の旅（前）（後）」 長谷川權 「俳句」 平成一六年（二〇〇四）一月号―二月号、角川書店刊。

⑦ 「加藤楸邨論―その「傷痕」について―」 友岡子郷 「俳句研究」（特集・加藤楸邨） 昭和四七年一月号、目黒書店刊。

⑧ 「巻頭言」 加藤楸邨 「寒雷」（創刊号） 昭和一五年（一九四〇）一〇月号、交蘭社刊。

⑨ 「「寒雷」星霜」 矢島房利 「俳句」 昭和五〇年（一九七五）三月号、角川書店刊。

⑩ 「「寒雷」に就て」 加藤楸邨 「寒雷」（創刊号） 昭和一五年（一九四〇）一〇月号、交蘭社刊。

⑪ 「現代俳句の性格」 加藤楸邨 「俳句研究」 昭和一二年（一九三七）一〇月号、改造社刊。

⑫ 「現代俳句の諸問題」 対談草間時彦・平井照敏 「国文学―解釈と鑑賞」（特集・現代俳句の世界） 昭和五八年（一九八三）二月号、至文堂刊。

⑬ 「雑詠欄」「馬酔木」 昭和五年（一九三〇）一二月号、昭和六年（一九三一）一月号―五月号。

⑭ 「自句自註」 加藤楸邨 「俳句研究」 昭和二五年（一九五〇）

七月号、目黒書店刊。

⑮ 「楸邨のこと」 加藤瑠璃子 「現代俳句」 平成二〇（二〇〇八）一月号、現代俳句協会刊。

⑯ 「楸邨の横顔」 山内文三 「俳句研究」 昭和二五年（一九五〇）六月号、目黒書店刊。

⑰ 「楸邨芭蕉研究の特色」 広田二郎 「俳句研究」（特集・加藤楸邨） 昭和四二年五月号、目黒書店刊。

⑱ 「新興俳句から見た加藤楸邨」 三谷昭 「俳句研究」（特集・加藤楸邨） 昭和四七年（一九七二）一一月号、目黒書店刊。

⑲ 「新興俳句批判―定型陣より―」 加藤楸邨 「俳句研究」 昭和一〇年（一九三五）二月号、改造社刊。

⑳ 「深夜の花火―楸邨小論―詩人から見た楸邨」 宗左近 「俳句」 平成八年（一九九六）三月号、角川書店刊。

㉑ 「生活を盛った俳句」 古屋樞子 「俳句研究」 昭和一二年（一九三七）六月号、改造社刊。

㉒ 「戦中戦後の楸邨・昭和二十年―昭和二十九年」 秋山牧車 「俳句とエッセイ」（特集・加藤楸邨の世界） 昭和五五年（一九八〇）五月号、牧羊社刊。

㉓ 「戦後の俳論」 島崎千秋 「俳句」 昭和三二年（一九五七）六月（増刊号）、角川書店刊。

②④ 「第二芸術―現代俳句について」 桑原武夫 「世界」 昭和二一年（一九四六）十一月号、岩波書店刊。

②⑤ 「「漂える存在の妄執―プロテストをふくみ異質の風土をゆく」（加藤楸邨『死の塔』西域紀行）金子兜太 「週間読書人」 昭和四八年（一九七三）十一月、日本書籍出版協会刊。

②⑥ 「達谷四時」 矢島房利 「寒雷」 平成二一年（二〇〇九）一月号、寒雷発行所刊。

②⑦ 「達谷私語」 加藤楸邨 「寒雷」 昭和二三年（一九四八）五月号。

②⑨ 「人間探求派加藤楸邨」 石原八束 「俳句」 平成八年（一九九六）三月号、角川書店刊。

③⑩ 「人間探求派と加藤楸邨―写生論の展開の中で―」 平井照敏 「俳句研究」（特集・加藤楸邨） 昭和四七年（一九七二）一月号、目黒書店刊。

③⑪ 「俳句認識における楸邨」 竹中宏 「俳句研究」（特集・加藤楸邨） 昭和四七年（一九七二）十一月号、目黒書店刊。

③⑫ 「白牡丹」 宮終二 「寒雷」 昭和五一年（一九七六）十一月号。

③⑬ 「晩年の楸邨」 大岡信 「寒雷」（楸邨生誕百年記念号） 平成一七年（二〇〇五）五月号。

③⑭ 「一つ一つの驚き」（特集・「俳句」とわたし） 加藤楸邨 「俳

句」 平成四年（一九九二）六月号、角川書店刊。

③⑮ 「『吹越』私抄（一）（二）（三）（四）」 矢島房利 「寒雷」 昭和五二年（一九七七）八月号―一〇月号・昭和五三年二月号。

③⑯ 「まぼろしの鹿と梟」 岡井省二 「俳句」（特集・人間探求派加藤楸邨） 平成八年（一九九六）三月号、角川書店刊。

③⑰ 「もうひとりの楸邨」 矢島房利 「寒雷」 平成一六年（二〇〇四）五月号。

③⑱ 「野哭調」 加藤楸邨 「現代俳句」 昭和二一年（一九四六）九月号。現代俳句社刊。

③⑲ 「『山脈』から『吹越』まで―ごく私的な楸邨論」 （加藤楸邨の近業） 大岡信 「俳句」 昭和五一年（一九七六）十一月号、角川書店刊。

（三）その他

① 「加藤楸邨と埼玉―芹の根も棄てざりし妻と若かりき」（企画展パンフレット） さいたま文学館編集・発行 平成一四年（二〇〇二）四月刊。

以上

学位請求論文要旨

加藤楸邨研究

―作品の生成と俳句観の推移―

神田ひろみ

現代俳句の作家加藤楸邨（一九〇五―一九九三）の俳句作品の生成とその俳句観の推移について、次の五章に分けて論述した。

「序章第一節 加藤楸邨先行研究史」には、昭和十一年から平成二四年までの書籍や雑誌に発表された楸邨についての先行論文から、作品の生成と俳句観に関する論を八三点取り上げた。その結

果、次の三つのことが明らかになった。

- ① 楸邨はその句業の出発時から、注目され評価を得ていたこと
 - ② 次に、戦中の俳句活動に対して戦後は批判を受け、戦前と戦後にその評価の違いがあったこと
 - ③ その後は、現代俳句の大家と目され、晩年の多彩で独自の句境は再評価されていること
- 没後二〇年が過ぎ、楸邨の句業の全体が見通せる時代になったが、最晩年の作品等についての先行研究はまだ僅かであった。本論はこの楸邨の最晩年の多彩で独自の句境に焦点を当てて追究する。「序章第一節」の評価の変遷を参考に「序章第二節 楸邨作品の時代区分」において、これまで行われていなかった句業全体を視野に入れた、楸邨作品の時代区分を次のように行った。

① 初期（二六歳―四〇歳）

昭和六年（一九三一）―昭和二〇年（一九四五）

第一句集『寒雷』昭和一四年三月、交蘭社刊。

第二句集『颯風眼』昭和一五年三月、三省堂刊。

第三句集『穂高』昭和一五年一二月、甲鳥書林刊。

第四句集『雪後の天』昭和一八年一二月、交蘭社刊。

② 中期（四一歳―六〇歳）

昭和二十一年（一九四六）―昭和四〇年（一九六五）

句文集『沙漠の鶴』昭和二三年二月一五日、大日本雄辯講談社刊。

第五句集『火の記憶』昭和二三年五月、七洋社刊。

第六句集『野哭』昭和二三年二月一日、松尾書房刊。

第七句集『起伏』昭和二四年七月、榛の木書房刊。

第八句集『山脈』昭和三〇年一〇月、書肆ユリイカ刊。

③後期（六一歳―八八歳）

昭和四一年（一九六六）―平成五年（一九九三）

第九句集『まぼろしの鹿』昭和四二年一二月、思潮社刊。

句文集『死の塔』昭和四八年九月、毎日新聞社刊。

第一〇句集『吹越』昭和五一年六月、卯辰山文庫刊。

第一一句集『怒濤』昭和六一年一二月、花神社刊。

書句集『雪起し』昭和六二年五月、求龍堂刊。

遺句集『望岳』平成八年七月、花神社刊。

「第一章 初期作品の考察」において「第一句集『寒雷』の研究―「翳雲人に告ぐべきことならず」を軸に―」の中で、時代区分①初期の『寒雷』中の注目句「翳雲」の句について論じた。

三部に分かれた『寒雷』の第一部「古利根抄」から「行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ」、第二部「愛林抄」から「かなしめば鴟金色の日を負ひ来」、の一句づつを上げて考察した。第三部

の「都塵抄」は、「古利根抄」と「愛林抄」とは句風が一変し、この「都塵抄」中の「翳雲」の句が師の水原秋櫻子から「難解」と指摘されたこと、そのことを発端として「人間探求派」という呼称が楸邨に定着した経緯を述べた。「翳雲」の句については「難解」、「難解ではない」、「短歌的な句」という評家の立場を検討して私見を加えた。

「第二章 中期作品の考察」では、「楸邨における「父」の存在―「冬の浅間は胸を張れよと父のごと」をめぐって―」と題して、時代区分②の第八句集『山脈』中の「冬の浅間」の句を取り上げ、楸邨の人間形成に大きな影響を与えた「父」について追究した。クリスチャンであった、その父の経歴を明らかにし、楸邨の洗礼の詳細も初めて明確にした。楸邨への父の影響について

①クリスチャンであった父の世界観

②父の本棚の多彩な蔵書による読書体験

③もう一つの「父の本棚」である旅の経験

が考えられるとした。この三点はいずれも父の無形の遺産であり、それゆえにいつも楸邨とともにあるものといえる。

「第三章 後期作品の考察」として時代区分③の、次の後期の三句を取り上げて追究した。

「第一節 楸邨の「真実感合」と北村透谷の「内部生命論」―

「灯の寒きこのしら骨が波郷かな」との関連―」においては、第一〇句集『吹越』中の、楸邨の親友石田波郷へのこの悼句を取り上げている。楸邨の「真実感合」という句作態度と明治期のキリスト教文学者透谷との親近性を

「インスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるものなり」（透谷「内部生命論」）

「自分そのもので立ちむかうのである。そして、そこにあらわれる、自然そのものの真実に感合しなくてはならない」（楸邨「真実感合」）

という所の「感応」と「感合」の類似等を挙げて検証し、透谷が親友島崎藤村に贈った「一本／＼骨の白さよ」という付句と、前掲悼句との共通性に触れ、楸邨の「真実感合」の俳論形成に透谷の「内部生命論」の摂取があったとの、これまでにない見解を述べた。

「第二節 楸邨と正岡子規―「ぼこぼこ暗渠出てきし茄子の馬」の背景―」には、同じく『吹越』中のこの楸邨句と子規句「洪水や下駄も真桑もほか／＼と」の間にユーモアへの感興の共通などが認められることを、他の例句も上げ、楸邨は戦後の病臥中に子規への理解を深めた等の観点を示した。

「第三節 楸邨における幻想的作品の解釈―「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の句意―」において、生前最後の第一一句集『怒濤』中の、掲句へのさまざまの評家の句解を検討し、二歳で亡くなった愛嬢に楸邨が手毬をつかれていて、つまり「ふくろふ」は楸邨であり、季語は「ふくろふ」（冬）ではなく「手毬」（新年）であり、掲句は挽歌であるという解釈を提示した。

「終章 加藤楸邨の俳句作品の生成と俳句観の推移」では、楸邨の①初期・②中期・③後期の時代区分に取り上げた一五の作品集と集中の作品や楸邨の俳句に対する言葉を考察し、楸邨の特徴を次のように抽出した。

- 1、自分の俳句の方向を自分で動かしていくこと
- 2、短歌への嗜好
- 3、クリスチャンであった父譲りの世界観
- 4、子規句鑑賞を通してユーモアや諧謔への理解を深めたこと
- 5、硯や書などの古美術への興味
- 6、幻想句を詠むことへの志向
- 7、シルクロード等の異質の風土詠への挑戦
- 8、書句という発想
- 9、西鶴研究を経た芭蕉への傾倒

これらの楸邨の特質が総合的に作用しあって、後期の多彩で独

自の句境の作品生成に与ったとの私見を述べた。

楸邨は第一句集『寒雷』の「後記」に「真実を求めて揺りたてると、思ひがけない深淵が口を開いてゐる（中略）かうした深淵の中から真に自分が見出したものを掴みだしたかった。日常の常識と平安の底に、黙々と動いてゐる自分の真の姿を掘りだしたかった。そして、それを（中略）俳句に充填したかった」と記していたが、最晩年に自身の句業を振り返ってこの「後記」をもう一度引き、続けて「それから今日まで私の俳句を作ってきた道は、この平凡な一筋を辿ることに尽きた」と述べている。単なる「写生」のみでなく、自分が真に見出し把握することを楸邨は「感合」とよんでいた。「感合」によって「把握」したものを俳句に表現するのが楸邨の「真実感合」の句作態度である。楸邨の生涯の一五の作品集の句や言葉を検討した結果、楸邨はその句作態度を初期・中期・後期にかけて深化させ続け、自身の「真実感合」の俳句観を確立させていったという結論を得た。句業の終始に楸邨は「自分の真の姿」を「俳句に充填したかった」といい、自分の「俳句を作ってきた道は」この「一筋を辿ることに尽きた」という言葉は「真実感合」の俳句観への自負として聞くことができる。

「付章第一節」は、楸邨没後の回顧展や岩波文庫『加藤楸邨句集』刊行等の動向を加えた詳しい年譜である。